

III (B+B)	五九	三〇	〇	一四〇	〇	一七〇
I (O+B)	二二一	二二三	(二)	三一〇	〇	五三五
II (A+B)	二〇七	七八	一四九	一三四	一〇七	四六八
I (O+AB)	八四	一三	一〇六	九五	二三	二三七
II (A+AB)	六九	六	七四	三二	四七	一五九
III (B+AB)	四〇	六	二二	五三	二九	一一〇
IV (AB+AB)	七	〇	三	三	一〇	一六
計	一五六九	一三八四	一三五〇	七七四	二二二	三七三〇

即チ往々ニシテ全クめんであるノ規則ニ一致セザル血液型ノ子供ヲ生ジ、此應用ニヨル親子鑑別法困難ノ如ク見ユレドモ、しつふハ二三・五五%迄、我日本ニテハ藤原氏ニヨレバ、二五・五五%迄ハ本法ニヨリテ親子鑑別ヲ行フコトヲ得ト云フ。

又時トシテ各血液型數ノ百分率ニテ、 $A = \frac{A\% + AB\%}{B\% + AB\%}$ ヲ計算シテ生物化學的人種係數ト稱シ、之ニヨリテ人種ノ分布狀態等ノ研究ニ應用セリ。今其成績ヲ表示スレバ第十及十一表ニ於ケルガ如シ、

第十表

検査人種及其員數	I (O) %	II (A) %	III (B) %	IV (AB) %	生物化學的人種係數
英吉利人 (五〇〇)	四六・四	四三・四	七・二	三・一	四・五
佛蘭西人 (五〇〇)	四三・二	四二・六	一一・二	三・〇	三・二

第十一表

報告者	地方	検査人員	I (O) %	II (A) %	III (B) %	IV (AB) %	A/B
伊太利人 (五〇〇)			四七・二	三八・〇	一一・〇	三・八	二・八
獨逸人 (約五〇〇)			四〇・〇	四三・〇	一一・〇	五・〇	二・八
埃太利人			四二・〇	四〇・〇	一〇・〇	八・〇	二・六
セルビヤ人 (五〇〇)			三八・〇	四一・八	一五・六	四・六	二・六
希臘人 (五〇〇)			三八・二	四一・六	一六・二	四・〇	二・五
ブルガリヤ人 (五〇〇)			三九・〇	四〇・六	一四・二	六・二	二・五
アラ比亞人 (五〇〇)			四三・六	三二・四	一九・〇	五・〇	一・五
土耳其人 (五〇〇)			三六・八	三八・〇	一八・六	六・六	一・八
露國 (一〇〇〇)			四〇・七	三一・二	二一・八	六・三	一・三
猶太人 (五〇〇)			三八・八	三三・〇	二二・八	五・〇	一・三
マダカスカル人 (四〇〇)			四五・五	二六・二	二二・七	四・五	〇・九
黑人 (五〇〇)			四三・二	二二・六	二九・二	五・〇	〇・八
安南人 (五〇〇)			四二・〇	二二・四	二八・四	七・二	〇・八
印度人 (一〇〇〇)			三一・三	一九・〇	四一・二	八・五	〇・五
古市	熊本 (在任)	一三〇	二三・三	四七・七	一四・六	一五・四	二・一〇
同	佐賀、長崎 (同)	一〇五	二六・四	四五・七	一七・一	一一・四	二・〇〇
同	福岡 (同)	一〇〇	二四・〇	四六・〇	一九・〇	一一・〇	一・九〇

同	同	桐	岸	市	宮	二	三	松	中	白	原	同	河	小	中	阿	桐	古	深	島
同	同	原	原	田	路	宮	友	原	島	井	林	同	石	山	島	部	白	市	町	居
宮	糸	沖	金	富	新	同	同	仙	東	長	飛	名	大	京	吳	中	鹿	同	福	
古	島	本	澤	山	湯			臺	京	野	村	屋	阪	都		國	兒		岡	
一五〇	一三四	二六四	七七五	五五一	一七八六	六四二	四六八	一五一	五〇一	三一七	三五三	一〇〇二	一一六一	五六〇	五〇九	三五三	五〇二	一三〇	一七〇	八七
四二七	二八六	二二七	二六二	二五〇	三〇・二三	二九四	二九一	三二五	三一五	三一五	二四・四	四三・八	二八〇	二八二	二八・七	三〇・三一	二九・四	二四・七	二二〇	二二〇
二六〇	三五七	三七二	三六〇	三九〇	三七・八五	三九三	三九七	三七〇	三八五	三七五	四〇・五	三三・二	三九・八	三九・二	四一・七	三八・二四	四二・二	三八・四	四五〇	四六〇
二四〇	二一九	一九三	二三四	二五〇	二二・四五	二一五	二一六	一九二	二二四	二一五	一六〇	一八・八	二一・六	二二・三	二〇・二	二四・三六	二〇・六	一七・六	二〇・二	二〇〇
七・三	一三八	九・八	一四・四	一〇・九	九・四七	九・八	九・六	一一・三	八・四	一〇・四	二〇・〇	四・二	一〇・六	一〇・一	七〇・八	九・四	七・八	一九・二	一〇・六	一一〇
一〇六	一三八	一六一	一三三	一三九	一四八	一五六	一五八	一五一	一五三	一五〇	一六八	一六二	一五六	一五二	一七三	一四四	一七六	一五六	一八二	一八三

同	石	垣	島	二〇〇	二八・五	三二・〇	三三・五	一一・〇	〇・九六
---	---	---	---	-----	------	------	------	------	------

鑑定書

關○松殺害事件

大正十三年十一月五日札幌地方裁判所小樽支部検事松野嘉七ハ右記
關○松殺害事件ニ關シ第三號女給(被疑者所有)ヲ同體ニ於テ余
ニ示シ同體ニ附著ノ斑點ニ就テ左ノ事項ヲ鑑定スベキ旨ヲ余ニ囑託
セラレタリ。

鑑定事項

- 一、第三號ニ附著セル斑點ハ人血ナリヤ否ヤ
- 一、人血ナリトセバ關○松ノ血液ト同型ナリヤ否ヤ
- 但シ關○松ノ血液ハジヤンスキー氏血液分類ニ依ル第二型ニ屬スルモノトス
- 依テ余ハ同產品ヲ北海道帝國大學醫學部法醫學教室ニ於テ同日ヨリ十二月五日迄ノ間検査ヲ行ヒ其成績ニ依リ此鑑定書ヲ作成シタリ。
- 甲、検査記録
 - 一、第三號ハ附圖第一ニ示スガ如キ古キ女給ニシテ木綿製ナリ左右共ニ袖ヲ缺ク、附圖中(イ)ノ記號ヲ以テ示ス如ク其右ノ襟ノ下方ニ於テ大凡膝ノ當ル邊ニ左ノ斜ニ右ノ走ル所ノ細長キ血痕斑アリ、殆ノ表ニアラテ裏ニ達セズ。
 - 長サハ約欄半巾ハ〇・九欄ナリ、色ハ暗褐色ニシテ之レヲ指觸スルニ周圍ノ布ノ部ヨリモ幾分固シ。
 - 光澤ハ無シ
 - 二、血液検査ノ豫備試験トシテベンチデン法及ビグアヤック、テレベンチン法ヲ試ム、使用セルベンチデン液及ビグアヤック液ハ何レモ新製セルモノニテレベンチン液ハ長ク空氣ニサラサレタルモノナリ。
 - 試験ノ正否ヲ檢スル爲ニ證品検査ニ先ダチアラカジメ約一ヶ月半經過セルガーゼニ附著ノ血痕ヲ以テ青色ノ反應ヲ現ハスヤ否ヤヲ見タル後試験ヲ行ヘリ。

即チ清潔ナル濾過紙ヲ四折シ其折角ニ蒸餾水ヲ浸シテ血痕上ヲ輕ククロスリタル後紙ヲ廣ゲテ其上ニベンチデン液ハグアヤック液一滴宛トオキシフル或ハテレベンチン液一滴宛トヲ落シ忽チ青變スル事ヲ見定メタル後第二號ノ斑點ニ就テ同様ノ操作ヲ行ヒタリ。

試験結果ハ陽性ニシテ對照血液ト同様ニ青色反應ヲ呈ス、尙念ノ爲メ問題ノ斑以外ニ同様ノ反應ヲ現ハス標ノ點無キカヲ知ラント欲シテ諸所ニ之ヲ試ミタレド何處モ陽性成績ヲ表ハス點ヲ發見スル能ハザリキ。

三、血液ノ質性反應ニハヘモクロモゲンノ結晶管ニ吸收線検査法ヲ用ヒタリ。

試験ニ用ヒタル試薬ハ製造後三日ヲ經過セル高山氏液ニシテ一ヶ月半保存シタル血液ヲ以テ定型的ノ赤色結晶ト二條ノ吸收線トヲ表ハス事ヲ確カメタル後證品ノ斑點ノ検査ニ用ヒタリ検査方法トシテハ班中ノ纖維二條ヲ切り取り細切シテ載物硝子板上ニ置キ之ニ高山氏液一滴ヲ落シ微温シテ十數分後ニ顯微鏡下ニ檢シタリ。

試験成績ハ陽性ニシテ纖維ノ間ニハ無數ニ赤色菊花狀紅葉狀顯狀等特異ナルヘモクロモゲンノ結晶ヲ存シ又之ニ顯微光儀鏡ヲ裝置シテ検査スルニ對照血液ト同様ノ二條ノ吸收線ヲ現ハス

四、以上検査ノ結果ハ即チ第三號ニ附著ノ斑點ガ血液ナル事ヲ示スガ故ニ次ニ之ガ人血ナリヤ否ヤヲ檢セリ。

検査方法ニハ沈降反應ヲ用ユ、使用シタル尙對人血家免役血清ハ製造後二ヶ月ヲ經過セルモノナレド尙對人血沈降價一萬四千倍ヲ有シ鼠、鶴、犬、牛、馬、豚、アヒル、等ノ血清ニ對シテハ沈降價六千倍ヲ越エズ。

検査ニハ問題ノ斑點ノ一部ヲ切り取り尙對試驗用トシテ非斑部ノ同大ノ布片ヲ切り取り別々ニ粉狀ニ細切シテ各々蓋アルガラス器中ニ入レ之ニ完全ニウルホシ得ル最少量ノ生理食鹽水ヲ

加へ一夜室温ニ置キテ後浸出液ヲ作り其一部ハ血液型検査ノ材料トシテ残シ他ノ部ヲ用ヒテ沈降反應ヲ試ム(液ハ透明赤褐色ナリ)

即チ浸出液ヲ十、五十、百千倍、等ニウスメニ沈降血清ヲ作用セシムルニ八分後ニ於テ百倍迄陽性也、一夜室温ニ置キテ後再檢スルニ千倍ノモノモ多少沈降物アリ、尙念ノ爲メ浸出液ノ遠心沈降物ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ表皮細胞ト解母細胞ヲシキ細胞トヲ存シ血球其他ノ特別ナル有形物ナシ、又對照浸出液ハ沈降ヲ起サズ。

五、上記試験ニ依テ問題ノ斑點ガ人血ナルコトヲ知りタルヲ以テ次ニ血液型検査ヲ試ミタリ。

先ヅジャンスキー氏分類ニ依ル四ツノ型ノ人血球(第一型ニハ凝集原無ク第二型ニハ凝集原A、第三型ニハB、第四型ニハA、B、ヲ含ム)ヲ夫レ夫レ〇・五アロセント位ノ浮遊液トナシ豫メ其一滴宛ヲ顯微鏡下ニ檢シテ各血球ガ個々ニ分離シ居ル事ヲ確メ次ギニ念ノ爲メ四ツノ型ノ血清ヲ各血球ニ働カセテ定型的ノ凝集ヲ起ス事ヲ見定メタル後前項記載ノ血液浸出液ヲ血型血球ニ作用セシメタリ

即チ毛細ガラス管ヲ用ヒテ極メテ小ナル血球浮遊液滴ヲ載物硝子板上ニ取リ一度其儘鏡檢シテ各血球ガ分離セル事ヲ見定メ次ニ之ニ約五十倍量ノ浸出液ヲ加ヘ數分後テツキ硝子ヲ以テ被ヒ顯微鏡下ニテテツキ硝子ヲ動かシテ血球ヲ時々流動セシメナガ

丁、血量ノ鑑定

Quantitative examination of blood.
Expertise de la quantité du sang,
Quantitative Bluthausweis

流出セル血量ヲ定ムルニハ、血液ノ滲潤セルモノ全部ヲ集メ、之ヲ蒸留水ニテ浸出シ、其一部ヲ取リテ換算スベシ。或ハ乾血ニ於テハ、ソノ重量ヲ計リテ失ヒタル水分ヲ加算シテ原血量ヲ算出シ、ソノ他まるくす氏ハ血痕浸出液ノ比重ノ増加ニヨリ、しゆるつ氏ハ沈降素檢法ヲ應用シ、三田氏ハ血液中ノ鐵分ヲ化

ラ二十分間位検査シ初メ分離シ居リタル血球ガ凝集シ行クヤ否ヤヲ觀察セリ。

此時寒性自家血球凝集、連鎖狀血球連結等ノ如キ同種血球凝集現象ニ類似セル現象ニ注意ヲ拂ヒ之ヲ避ケタル事勿論ナリ。

試験結果ハ第二型第三型並ニ第四型血球ハ何レモ問題ノ血液浸出液ニ依ツテ血球凝集ヲ起シ第一型血球ハ凝集ヲ起サズ、凝集附著スル血球數ハ何レモ數個乃至十數個ニシテ又血液部ヨリ作リタル對照浸出液ハ何レノ型ノ血球ヲモ凝集セシムル事ナシ。

即チ問題ノ血液ハ第一型人血ニ依ルモノナル事ヲ示ス。

以上

乙、說明

以上検査記録ニ記載ノ如ク證第三號ノ前面ニ附著ノ斑點ハ第一型(ジャンスキー)ニ屬スル人ノ血液ニ依リテ生ジタルモノナル事確實ニシテ即チ關〇松ノ血液トハ其型ヲ異ニス。

以上ノ如キ事情ナルニ依リ次ノ如ク鑑定ス。

一、證第三號ニ附著ノ斑點ハ人血ナリ。

一、關〇松(第二型)ノ血液トハ異ナル型ノ血液(第一型)ナリ。

以上

大正十三年十二月五日

北海道大學醫學部
鑑定人 醫師 山上 照 耶

血量ノ鑑定

學的ニ定量シテ、之ヲ流動血量ニ換算スル等ノ方法ヲ取リシト雖、何レモ流出セル原血量ヲ見出スコトハ殆ンド不可能ニシテ、ソノ八五・〇%迄ノ近似値ヲ得レバ、成功ノ方ナリト云フ。

戊、極メテ微量ナル血痕ニ就キ、人血ナルヤ否ヤ證明必要ナル場合ニハ

如何ナル方法ヲ擇ブベキカ。

血痕検査ハ豫備、實性乃至生物學的検査ニ互リ、ソノ検査法數多クシテ實際ノ場合、何レノ方法ヲ取ルベキカ、ソノ選擇ニ苦ムト同時ニ、法醫學的検査ハ材料極メテ少ナキ場合多ク、且ツソノ貧弱ナル材料ノ幾分ハ、更ニ證據品或ハ將來再鑑定ヲ要スル際ノ準備トシテ、往々保留セザルベカラザルコトアルガ故ニ、成ルベク材料ヲ徒費セザル様心懸ケザルベカラズ。

予ハ次ノ如ク血痕検査ヲ施行スルヲ、最モ便利ニシテ材料少クトモ事足り、且正確ナル成績ヲ與フルモノナリト信ズ、即チ茲ニ大豆大平方ノ血痕斑一個アリト假定シ、單ニ其一個ノミヲ以テソガ人血ナルヤ否ヤヲ決定スルノ例ヲ舉ゲムトス。

可檢大豆大平方ノ血痕ヲ、肉眼的ニ叮嚀ニ觀察シ、更ニ一ペヲ以テソノ所見ヲ詳ニシタル後、ソノ約半分ヲ切取シ、(殘餘ノ半分ハ後日ノ爲メ之ヲ保留ス)或ハ時ニ依リ剝離採集シ、更ニ之ヲ三分ニシテ次ノ如ク所置ス。

第一分ヲ純白濾紙間ニ置キ水ヲ以テ濕シ、暫時放置シテソノ軟化スルヲ待チ、硝子棒ノ鈍端ヲ以テ之ヲ輕打シ、僅カニ血色素ノ濾紙上ニ移行スレバ、ソノ濾紙ヲ以テをぞん及べんちん檢法ヲ行フ、此兩檢法陰性ナレバ、ソハ略血痕ニ非ラズト断定シ得ベシ。若シ該検査陽性ナレバ、豫備検査ノ爲メニ濕潤セル小

微量ノ血痕鑑定

血塊ヲ低温ニテ乾燥シ、之ニテへみん結晶ヲ作成シ、ソノ結晶ニ硫酸ビドラヂン等ヲ加ヘ微熱スレバ、結晶ハ直ニ赤變シ、へもくろもげんノ吸収線ヲ現出スルニ至ル、或ハへみん結晶作成ノ代リニ、直ニ高山氏試薬ヲ用ヒテ、へもくろもげん結晶ヲ作成シ、同時ニソノ吸収線ヲ窺フモ可ナリ。之ニ依リテ血痕ナルコトノ確證ヲ得レバ、材料甚ダ少キ場合ニハ之ヲ省略スルモ可ナレドモ、材料多キ時ハ次ノ第二分ノ検査ヲ行フベシ。

第二分ハ之ヲ載物硝子板上ニ取り三二%ノ苛性加里液ヲ加ヘ、布片ニ附着セルモノナレバ纖維ヲ叮嚀ニ分離針ニテ分離シ、覆蓋硝子板ヲ被セ、一夜温室ニ放置シテ後鏡檢スレバ、不正形ナル紅色ノ血球ヲ認メ得ベク、或ハ血球ヲ認ムルコト困難ナル場合ニモ、之ヲ顯微光像鏡ニテ覗ヘバ、へもくろもげんノ吸収線ヲ見ルコトヲ得。

第三分ハ二・三%ノ生理的食鹽水ニ浸漬シテ一夜室温ニ放置シ、ソヲ成ルベク少許ノ生理的食鹽水ヲ浸セテ濾紙ニテ濾過シ、或ハ遠心器ニヨリ透明トナシ、沈降素檢法ヲ行ヒ、如何ニシテモ清明ナル濾液ヲ得ル能ハザレバ不止得、補體結合反應ニヨリテ、ソノ蛋白ノ種屬鑑別ヲナシ、更ニ進ンデ個人鑑別ニ移行スベシ。血痕ノ附着後ノ經過時間ハ、ソガ種々ノ溶媒ニ溶解スル速度ヲ比較シテ検査スルニ在レドモ、今日ニテハ未ダ良法發見サレズ。

肉類 羊水等ノ鑑別

己、肉類、羊水、ソノ他ノ體液ノ種屬鑑別

一定ノ肉類、體液或ハ羊水等ガ、何レノ種屬ヨリ由來セルカヲ判定スルニハ、當該動物血清家兎特殊血清ニヨリ、或ハ尙正確ニハソノ肉類抽出液、體液乃至羊水ヲ對抗元トセル家兎特殊血清ヲ作り、ソレヲ以

テ前記ノ如ク沈降素檢法、或ハ補體結合反應ヲ行フベシ。

二、毛髮検査

Examination of hair, Examen des poils (cheveux) Haaruntersuchung.

毛髮

毛髮ハ遍ク吾人ノ全身ニ分布シ居リ、唯身體中之ヲ見ザルハ、手掌、足趾、指趾ノ裏面、口唇、龜頭、陰核、包皮ノ内面等ナリトス。毛髮ニハ硬毛ト毳毛トアリテ、毳毛ハ長サ一四耗ヲ越ユルモノ少ク、色淡キ細毛ニシテ、全身ニ瀰蔓ス。硬毛ハ長サ〇・五乃至一五米、幅〇・〇〇七乃至〇・一七耗アリ、頭毛、鬚髯、腋毛、陰毛及胸毛等之ニ屬シ、長毛ト云ヒ、眉毛、鼻毛等ハ同ジク硬毛ナレドモ亦短毛ト云フ。硬毛ハ通常一ツノ毛孔ヨリ一本ヲ生ズルヲ常トスレドモ、時トシテ數本發生スルコトアリ、一人ノ頭毛ハ凡ソ十萬本乃至八萬本ニシテ、一平方種ニ百五十本内外ヲ生ズルヲ常トス。一般ニ毛髮ハ胎生第三ヶ月頃ヨリ生エ始メ、初メハ、顔、眉、頭等ニ生ジ、次第二全身ニ及ビ、コハ初毛ト稱スルモノニシテ、生後脱落シテ永久毛ト交代スルモノナリ。

此永久毛モ亦一ケ年内外ニシテ脱落シテ時々新毛ト交代ス、而シテ毛髮ノ一日ニ生長スル長サハ、身體ノ榮養狀態、氣候等ニヨリテ差異アレドモ、頭毛ハ平均一日ニ〇・二乃至〇・三、髯ハ〇・五耗生長シ、夜ニ於テソノ成長力強シ、又一日ニ於ケル脱毛ハ其年齢ニヨリテ異ナレドモ、凡ソ百本内外ヲ通常トス。

イ、検査法 Method, méthode, methode.

検査ノ必要アル毛髮ハ叮嚀ニ白紙ノ間ニ挟ミ、細長キ塚或ハ試験管ニ入レ置キ、決シテ之ヲ急角度ニ折り曲ゲ、或ハびんせつと等ニテ強ク取扱フベカラズ。

毛髮ヲ検査スルニハ、先ヅ之ヲ白紙或ハ白紙板上ニ置キ、肉眼ヲ以テソノ縮レ方、大サ、長サ、及色澤

等ヲ檢シ、次デ顯微鏡ヲ以テソノマ、毛髮ニ附着セルモノ、有無ヲ検査シタル後、ぐりせりん或ハ生理的食鹽水ヲ注加シテソノ構造ヲ鏡檢スベシ。次ニ必要ニ應ジ附着物ヲ除去スルニハ、えーてる或ハあるこはるヲ以テ洗滌スベシ。

毛髮ノ伸張度

毛髮ヲ鏡檢スル際、吾人ノ注意スベキハ毛根ノ性状、毛幹ノ構造、太サ及ソノ末端ノ形態、色素ノ配列及損傷ノ有無、横断面ノ性状等ニシテ尙必要ナル場合ニハ別ニソノ強度、伸張度ヲモ併セ檢スベシ、人毛ノ伸張度ハ通常ソノ長サノ約三分ノ一ナリト云フ、毛髮ノ細胞状態及上皮ヲ檢スル際、一%ノ鹽酸あるこはるカ、五%ノあんもにお溶液ヲ用ユルトキハ、ソノ構造鮮明トナル。非常ニ色素多クシテ不透明ナル毛髮ハ、強硝酸或ハ過酸化水素水ヲ以テ所置シ、適當ナル透明度ニ至レバ、直ニ之ヲ洗滌シ乾カシテ後、かなだばるさむニテ封固シテ検査スベシ。毛髮ノ横断面ニ至リテハ、式ノ如ク之ヲばらふいん或ハちえろいでいんニテ包埋シテ切斷スベシ。

毛髮ノ上皮細胞ハ、ソノ尖端ヲ毛根ト反對ノ方向ニ向クルヲ以テ、毛ノ一片ニ於テモ何レガ毛根端ナルヤヲ判定スルコトヲ得、次ニ毛髮ガ何レノ人ヨリ由來セルカヲ判定スル必要アル際、ソヲはるとなつくノMikropolarimeter ニテ檢スレバ、毛髮ガ光線ヲ重屈折スル状態ニ依リ、ソノ異同ヲ定ムル事ヲ得ト云フ。コハ人毛ノ色深ハ人々ニ依リ種々ノ差異アルヲ以テナリ。

ロ、毛髮ノ色 The Colour of hair, Couleur du poil (ou cheveux) Die Haarfarbe.

毛髮ノ色ハ皮質ニ存在スル色素ト、皮髓兩質ノ氣量ノ多少ニヨリテ決定スルモノニシテ、白毛ハ全ク色素ヲ缺キ、色素ガ多クナリ氣量少クナルホド、ソノ色ハ黒色ニ近ヅキ來ル、陰毛腋毛等ノ赤色ニ傾ケルハ、

毛髮ノ色

ソガ汗及ソノ他ノ分泌液ニヨリ、常ニ化學的作用ヲ被ルニ依ル。發掘セル死體ノ毛髮ガ往々狐色トナリ居ルハ、地中ニ於ケルふみん酸ノ爲、化學的作用ヲ被レルモノナリト云フ。

往々毛髮ガ故意ニ、或ハ職業ノ爲ニ種々ニ着色サル、コトアリ、例ヘバ水車業者ノ毛髮ガ糠ヲ以テ白色トナリ居レルガ如キレナリ、化學的ニ毛髮染色ヲ施スハ故意ニ、或ハ美容ノ目的ニ、或ハ犯行ノ爲メニ之ヲ行フモノニシテ、往々之レガ爲メニ中毒ヲ來スコトアリ、今之ニ用ユル藥品ヲ列舉スレバ左ノ如シ。黒染ニハ硫化あるかり、硝酸蒼鉛、鉛化合物、單寧、沒食子、墨、胡桃液、いんどふえにーる、ばらふえにーるでいあみん。

褐染ニハ重クロム酸加里、硝酸銀、過まんがん酸加里、而シテ、是等ノ着色ヲ除去スルニハ、先ヅあるこはる、えーてるヲ以テ毛髮ヲ洗滌シ、次デ加温セル鹽酸或ハ硝酸ヲ以テ所置スベシ。多クノ白髮染ニハ、近時ばらふえにーるでいあみんヲ用ユル故、往々中毒シテ皮膚炎ヲ生ズ。

尙伊藤及大林氏ノ研究ニヨレバ、毛髮ニ附着スル脂肪類ノ時間的變化ニヨリテ、毛髮ノ紫外線ニ對スル光線ノ反射ニ變化ヲ示スヲ以テ、紫外線下ニ照ラセバ、生毛ト義毛トハ明カニ鑑別スルヲ得、時トシテ毛髮切斷後ノ日數ノ新舊ヲモ知ルコトヲ得ト云フ。

ハ、附着物ノ検査

Investigation of matters covering the hair.
Examen des matieres adherant aux cheveux, Die Untersuchung von den Haaren anhaltender Verunreinigung.

毛髮ニ附着セルモノヲ検査シテ、種々犯罪捜査上ノ利益ヲ得ルコトアリ、例ヘバ附着セル血液、精液、

毛髮ノ附着物

第十二圖



毛脱=汚垢ノ附著セシテ

動物毛、火藥金屬粉等ヲ檢出シテ、月經、強姦、獸姦及銃創ノ有無、或ハソノ職業等ニ付キ検査上ノ便宜ヲ得ルコトアルガ如キコレナリ。第二十圖ヲ参照スベシ。

ニ、毛髮ノ太サ Thickness of hair, le diamètre des cheveux. Die Hardtke.

毛髮ノ太サ

毛髮ノ太サハをくらゐる、みくらめーとるヲ以テ計ルモノニシテ、今人毛ノ太キモノヨリ順次列擧スレバ次ノ如シ。

第十四表 (上) 人毛ノ太サ

頬	ひげ	〇・二五〇—〇・一五〇〇耗徑
陰	毛(女子)	〇・一〇五—〇・一五〇〇同
下顎	ひげ及鼻下ひげ	〇・一二五—〇・一二三〇同
腋	毛	〇・〇七九—〇・一五〇〇同
鼻	毛	〇・〇八〇—〇・一三〇〇同
陰	毛(男)	〇・〇九九—〇・一二〇〇同
眉	毛(男)	〇・一二〇〇耗徑
眉	毛(女)	〇・〇八〇〇同
頭	毛(男女)	〇・〇八〇〇同
鬚	毛	〇・〇〇〇八—〇・〇〇二六耗徑

日本人ノ頭毛ノ太サ(久保武氏)

Grosser Durchmesser(廣徑) Kleiner Durchmesser(狹徑)

Mittel	Min.—Max.	Mittel	Min.—Max.	
♂	0.1343	0.100—0.170	0.0924	0.080—0.120
♀	0.1237	0.110—0.140	0.0879	0.080—0.110



頭毛ニハ〇・〇八耗ヨリ太キモノハ比較的少ク、ひげ、陰毛、腋毛ニハソレヨリ細キモノ稀ナリ、且是等ハ僅カノ距離ニテ急ニ細クナレドモ、頭毛ハ徐々ニ細クナリ居ルヲ以テ、相互ノ鑑別ヲナスコトヲ得。

ホ、毛根及毛幹ノ形状 Form of hair, Forme des cheveux Die Form der Haare.

毛根ガ滑ニシテ萎縮シ、根棒狀トナリ居ルモノハ自然ニ脱落セルモノニシテ、毛囊ヲ附着シ且萎縮ノ狀ナキモノハ無理ニ脱去サレタルモノナリ、ソノ他毛幹ノ形状ヲ注意シテ検査スル時ハ、ソガ何レノ體部ニアリシモノナルカヲ知ルコトヲ得ル場合アリ。

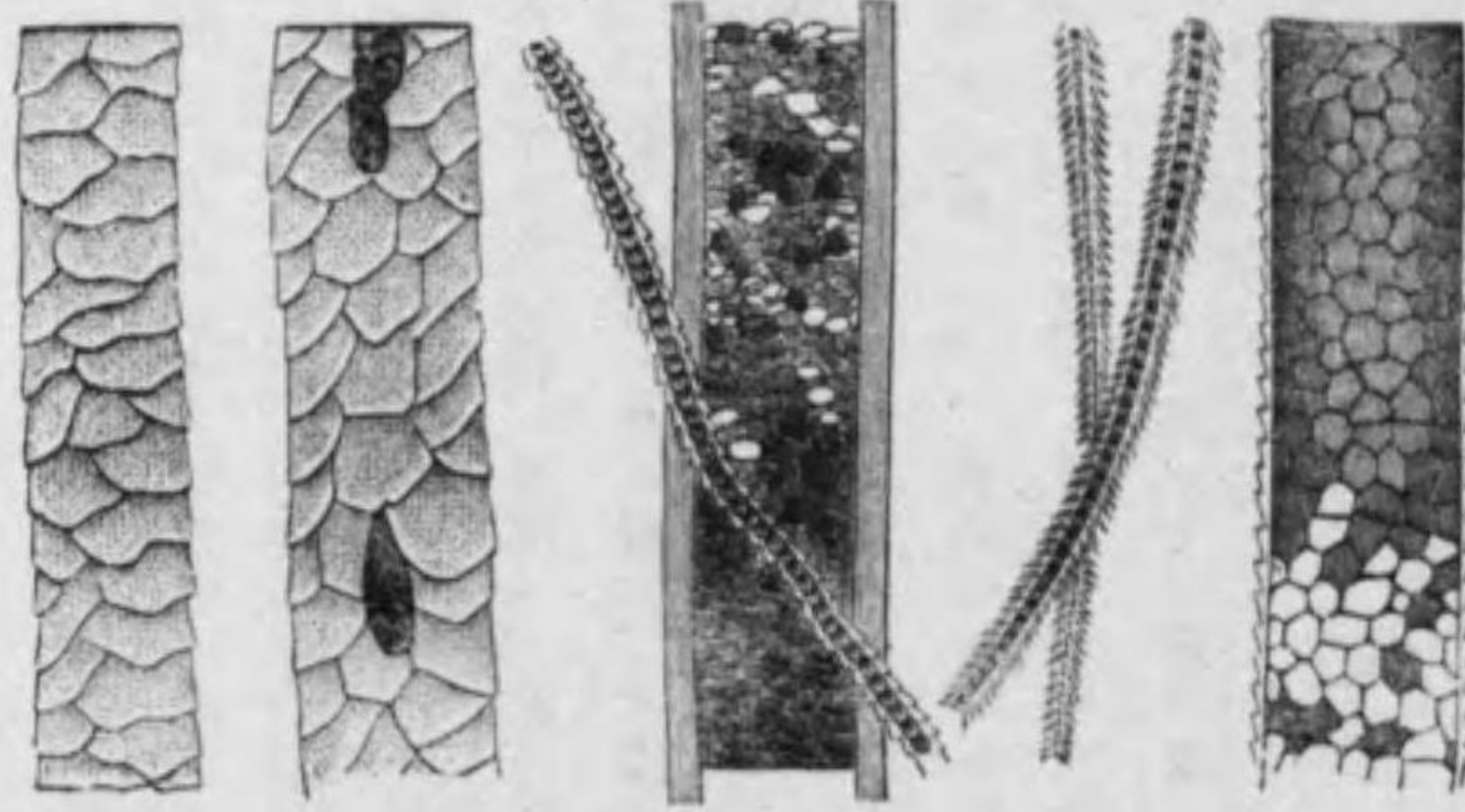
毛幹モ亦發生部位、男女ノ別等ニヨリ種々ノ形状ヲ呈ス、例ヘバ短クシテ、ソノ太サニ變リナク、末端根棒狀トナレルモノハ男子ノ頭毛ニシテ、長クシテソノ末端分裂シ居ルモノハ、女子ノ頭毛、黒褐色ヲ呈シ縮レ、短クシテ且ソノ末端ノ分裂シ居ルモノハ、陰毛或ハ腋毛、細クシテソノ末端尖リオルモノハ鬚毛ナルコトヲ知ルヲ得ルガ如キ之レナリ。

今此等ノ關係ヲ圖示スレバ、第廿一圖ハ抜ケ毛ト無理ニ抜キタル毛、第廿二圖ハ男子ノ頭毛ニ於ケル髓質ノ著明ナルコトヲ、第廿三圖ハ婦人毛髮端ノ分岐ヲ、及第廿四圖ハ下腿毛端ノ磨耗ヲ明ニセリ。

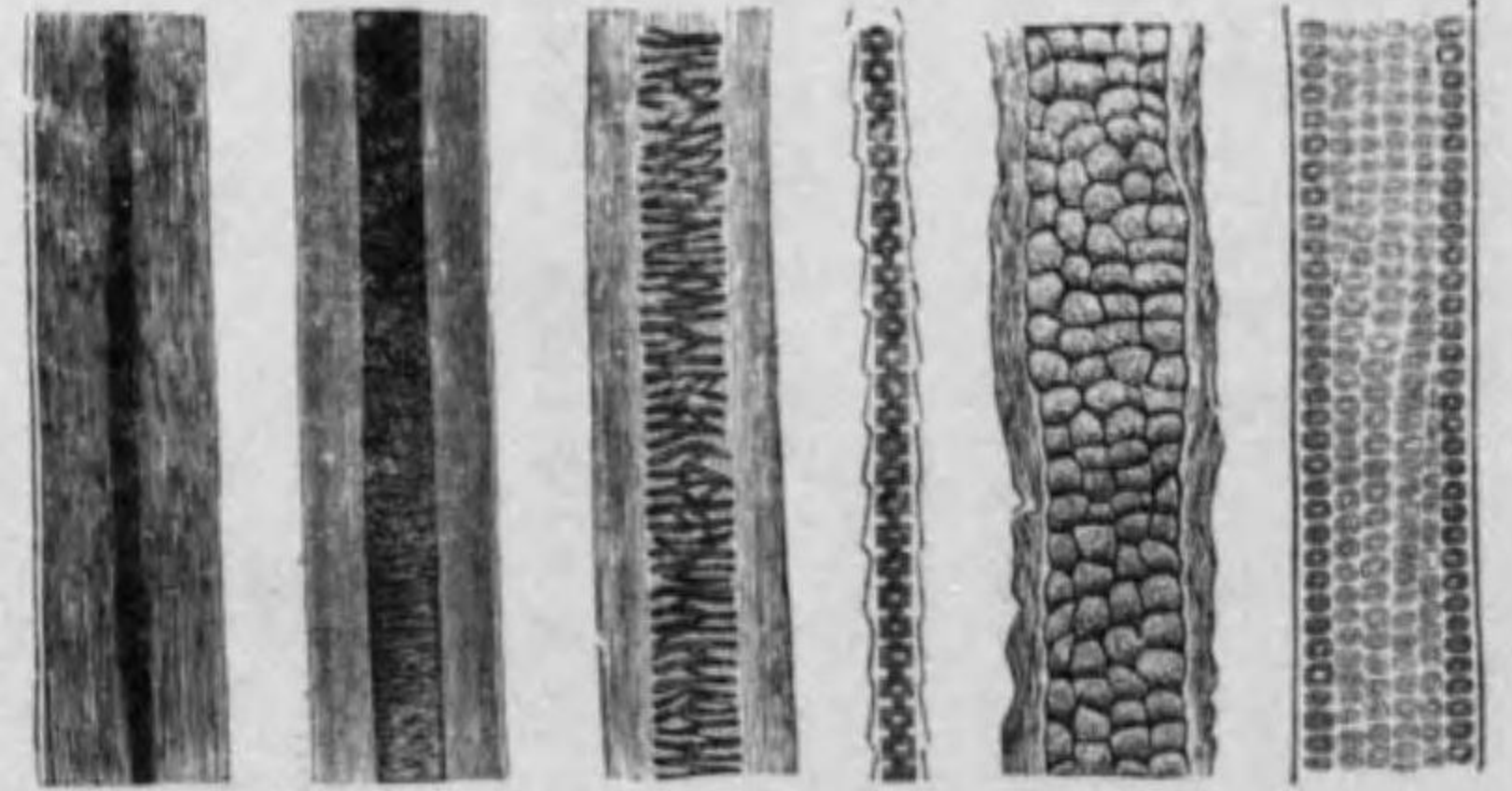
毛根及毛幹

圖五十二第

第一編 物品検査 二、毛髮検査



1 (1) 狸毛
2 (2) 羊毛
3 (3) 狐毛
4 (4) 細毛
5 (5) 羊毛



1 (1) 有ル人毛
2 (2) 牛毛
3 (3) 細毛
4 (4) 細毛
5 (5) 溶鼠シニ太加ト後浸里キ
6 (6) 兔毛

人毛ハ大サ平均〇・一五耗ヲ超過スルコトナク、上皮細胞ハ極メテ微ニ相重疊シ、皮質最モ廣ク、茲ニ多

ハ、人毛ナルヤ獸毛ナルヤノ鑑別

The hair of mankind or of animal, Cheveux d'homme ou poil d'animiaux Menschen-oder Tierhaare.

圖三十二第
端末ノ髮頭人婦



圖四十二第
毛ノ根下ルニ有リテ端末ルニセ粒麿



圖一十二第



毛ルタキ披 毛ケ披

圖二十二第



女 男

第一編 物品検査 二、毛髮検査

少ノ色素粒ヲ有シ、尖端或ハ毛根部ニハ通常色素ヲ缺ク、髓質ハ細クシテ顆粒狀ヲ呈シ、或ハ全ク之ヲ缺キ、或ハ所々ニ斷絶ス、髓質ノ細胞ハ通常非常ニ見惡キモノナリ、色素ハ年齢ニ伴ヒテ一定度迄増加シ、老年ニ至レバ再ビ減少ス、黒毛ハ赤毛ヨリモ早ク白毛トナル。

毳毛ハ細クシテ〇・〇〇一六耗徑ヲ算シ、銳キ尖端ヲ有シ、髓質及色素ヲ缺ク、コハ妊娠五六個月ノ胎兒ニ最多ク、其妊娠月數重ナルニ從ヒ脱落シテ羊水中ニ移行ス。

獸毛ハ通常上皮細胞ハ著明ニ、或ハ時トシテ屋瓦狀ニ相重疊シ、皮質ハ極メテ細ク、色素ハ粗大ナル顆粒ヲナシ、從テ髓質ハ甚ダ廣ク、尖端ニ向フニ從ヒ細クナリ、遂ニ消失ス。髓質ニ於ケル細胞ノ構造ハ極メテ著明、一見シテ人毛ナラザルコトヲ知り、且毛髮検査ニ經驗ヲ有スル人ハ、ソハ如何ナル獸類ノ毛ナルカラ直ニ鑑別スルコトヲ得ルモノナリ。動物ノ毛ノ中ニテ、ソノ大サト云ヒ構造ト云ヒ、最モ人毛ニ近キモノハ牛ノ毛ニシテ、動物中ニテモ近キ種屬間相互ノ毛ハ亦區別困難ナリ。動物ノ毳毛ハ髓質ヲ有スルニヨリ、人毳毛ト明ニ區別スルコトヲ得。今えすてるれん氏ノ記載ニ依レバ獸毛ノ大サハ左ノ如シ。

第十四表 (下) 獸毛ノ太サ

Katzenbarthaar Rückenhaar eines braunen Hundes Rückenhaar einer Katze Rückenhaar eines Pudels Bauchaar einer Katze Bauchaar eines Hundes Weisses Pudelhaar Bauchaar eines Schimmels	0.320 Mm. 0.111 0.078 0.050 0.015 0.074 0.025 0.083	Kaninchenbarthaar Rückenhaar vom Hasen Rückenhaar eines Kaninchens Bauchaar eines Hundes Bauchaar eines Kaninchens Rückenhaar eines Hundes Rückenhaar eines Schimmels	0.198 Mm. 0.108 0.056 0.021 0.012 0.069 0.114 0.088
--	--	---	--

第十五表 (上) 毛幹及ビ髓質ノ幅

Bauchaar eines Rappens Bauchaar einer Kuh Rückenhaar einer Katze Rückenhaar eines Hasen Feines Maulwurthaar	0.057 0.057 0.075 0.053 0.008	Rückenhaar einer Ziege Rückenhaareiner Kuh Bauchaar einer Katze Bauchaar eines Hasen	0.065 0.038 0.075 0.055 "
---	---	---	---------------------------------------

第十五表 (下) 動物毛ノ毛幹及髓質ノ幅

動物ノ種類	發生部位	性		毛髮ノ太サ	
		男	女		
犬	背 腹 部 部	髓質ノ幅	毛髮ノ太サ	髓質ノ幅	毛髮ノ太サ
		〇・〇一〇	〇・〇五三	〇・〇一一	〇・〇八一
	〇・〇一四	〇・〇九六	〇・〇一三	〇・〇六六	
	〇・〇一一	〇・〇九一	〇・〇〇八	〇・〇五四	
	〇・〇〇四	〇・〇四三	〇・〇一一	〇・〇七六	
	〇・〇一〇	〇・〇四二	〇・〇一四	〇・〇六〇	
	〇・〇三二	〇・一一三	—	—	
	〇・〇〇八	〇・〇七九	〇・〇一五	〇・〇八六	
	〇・〇一五	〇・〇九九	〇・〇一一	〇・一〇五	
	陰 腋 鬚 眉 鬚 前 額 額 頂 部 部 部	毛 毛			

山	羊	背	部	〇・〇四五	〇・〇六五
牛	背	部	〇・〇二六	〇・〇五七	〇・〇三八
猫	背	部	〇・〇一〇	〇・〇一五	〇・〇一五
兔	背	部	〇・〇五七	〇・〇七五	〇・〇七五
白馬 (Schimmel)	背	部	〇・〇四六	〇・〇五五	〇・〇五五
黒馬 (Kappen)	背	部	〇・〇四八	〇・〇五三	〇・〇五三
Handmilt (Krausottigen) Haare	背	部	〇・〇三六	〇・〇八三	〇・〇八三
ムク犬 (Krausottigen) Haare	背	部	〇・〇六九	〇・〇一四	〇・〇一四
	背	部	〇・〇三四	〇・〇一四	〇・〇一四
	背	部	〇・〇四〇	〇・〇五七	〇・〇五七
	背	部	〇・〇〇八	〇・〇八八	〇・〇八八
	背	部	〇・〇〇八	〇・〇二五	〇・〇二五

毛髮ノ損傷

ト、毛髮ニ於ケル損傷

Injuries of hair, Messure du poil. Haarverletzungen.

毛髮モ往々裂傷、切傷或ハ鈍創ヲ蒙リ居リ、ソノ状態ヲ検査シテ、法醫學上大ナル利益ヲ得ルコトアリ、鈍器ヲ以テ頭部ニ一撃ヲ加フル時、毛髮ハ長軸ニ沿フテ裂クルコトハ少ク、毛根ノ上部ニ於テ折ル、ヲ通常トス、然ルニ頭部ニ數回ノ打撃ヲ加ヘ、毛髮ガ頭骨ト兇器トノ間ニ在リテ暴力ヲ受クル時ハ、毛幹ノ破裂ヲ來ス、故ニ毛幹ノ破裂ヲ見タル時ハ、暴力ハ單ニ非ラザルコトヲ知ルヲ得、又頭骨ノ裂隙中ニ毛髮ノ挟マリ居レルハ、大暴力ノ加ハレルコトヲ意味ス、毛幹ノ破裂シ居ルコトハ、自然ニ或ハ汚液ノ作

毛髮ノ燃焼

毛髮ノ断面

用ニヨリ來ル事アレバ注意スルヲ要ス、毛幹ガ破裂スルコトナク、平滑ニ斜ニ切レ居ル時ニ銳器ニヨリテ來リシ損傷ナルコトヲ知リ、断面凹凸ヲ呈シ、階段狀トナリ、分裂狀トナリ居レバ、餘リ銳ナラザル兇器ニテ切斷サレタルコトヲ示ス。

毛幹ノ挫カレタル状態ヲ檢シテ、如何ナルモノ、間ニ挟マリテ、斯クナリシモノナルカヲ知ルコトヲ得ルコトアリ、又ハ毛幹ヲ檢シテ内ニ大小不同ノ空胞ヲ形成シ、或ハ膨脹シ萎縮シ居ルニヨリ燃焼シタルモノナルコトヲ知リ、或ハ之ニ附着セル火藥、鉛化合物ヲ證明シテ銃器ヲ以テ害ヲ加ヘラレシヲ發見スルコトアリ。毛髮ヲ百八十度以上ノ水或ハ蒸氣中ニ置ク時ハ變色シ、皮質細胞ノ收縮ニヨリテ長軸ニ沿ヘル皺襞ヲ作ル、モシソノ温度二五〇度以上ナル時ハ、萎縮變色シ脆弱トナリ、光澤ヲ失ヒ、大空胞ヲ作ルト雖、炭化スルコトナシ。

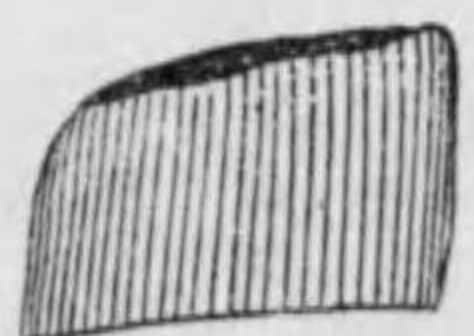
チ、断面ノ検査

Examination of the section of the hair. Examen de la section du poil. Untersuchung der Haarschnitte.

人毛ノ断面ハ發生部位ト人種ニ依リテコトナレリ、例ヘバ頭毛ノ断面ハ歐米人ニテハ楕圓形、鬚ハ多角

第二十六圖

毛髮切斷之狀況
鉗ルニテニ切テニ刀ニテ切テニセ

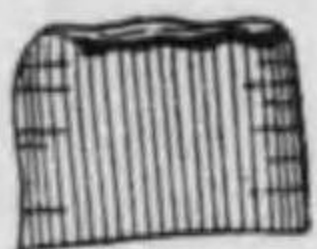


切斷之四十分日ノ狀況

第七十二圖

人毛切斷端

利鈍ナリノ刃ヲテ切テセ



切斷後六十日ノ状況

コトアリ、(吉田氏)第二十六及二十七圖ヲ参照スベシ。

形、陰毛ハ腎臟形ヲ示セルコト多ク、次ニ日本人及支那人ノ頭毛ノ斷面ハ圓形ニシテねーげる、ほつてんとつと等ノハ不正楕圓ニ傾ケルガ如キナリ。時トシテ其斷端ノ狀況ニヨリ、切斷ニ用ヒタルモノ、利鈍、モシクハ切斷後約幾日ヲ經タルモノナルカラ知ルヲ得ル

リ、毛髮類似ノ纖維

Fibre like hair
Fibre qui ressemble aux cheveux
Haar ähnliche Fasern.

第八十二圖

(一) 絹

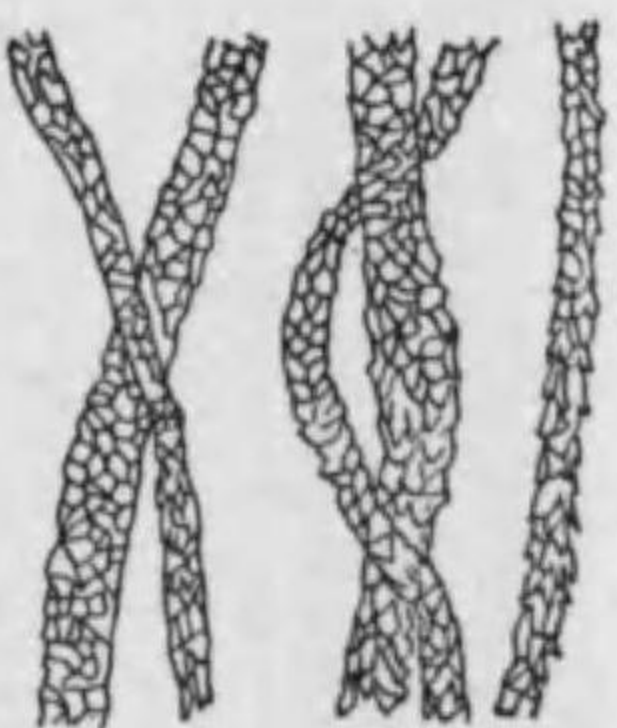


(二) 絹木



羊毛、上皮細胞ノ發育極メテ著明ナルガ故ニ一見人毛ト鑑別スルコトヲ得。木綿纖維、扁平ニシテ紐狀ヲナシ、所々ニ捻轉シ内ニ髓様ノ構造ヲ見ルコトアリ、

(三) 毛羊



(四) 麻



絹纖維、斷面圓クシテ強ク光ヲ屈折ス。

麻纖維、木綿ト相似タレドモ、内ニ何等ノ構造ヲ見ズ。

ソノ他植物ノ纖維及筋纖維等ト區別スベシ。

又、年齢ノ鑑別

Determination of the age by the hair
Expertise de l'age d'apres cheveux
Altersbestimmung mittels Haare.

毛髮ノ太サ或ハ色等ニ依リテ往々其人ノ年齢ヲ知ルヲ得ルコトアリ、例ヘバ頭毛ニ就テ云ヘバ左ノ如シ。

生後十二日
六ヶ月
一年半
十五年
成年

○・〇二四 耗徑
○・〇三七 同
○・〇三八 同
○・〇五三 同
○・〇八八 同

以上ヲ注意シテ検査スレバ、法醫學上毛髮検査ニ必要ナル(1)人毛ナルヤ、獸毛ナルヤ、(2)發生部位、(3)ノ年齢、(4)男女ノ別、(5)脱毛カ、或ハ暴力ヲ以テ引抜キタルモノナルカ、(6)兇器ノ種類、或ハ特別ナル事情ノ下ニハ、(7)如何ナル人ノ毛髮ナルカヲ鑑定スルコトヲ得ル場合アリ。

鳥毛ノ検査

鳥毛ノ検査 Examination of feather. Expertise des plumes. Untersuchung der Federn.

鳥毛ハソノ外見及顯微鏡下ノ所見、全ク人毛及獸毛ト異ナリ樹枝様ニ分岐シ居ルヲ以テ、直ニ是等ト區別スルコトヲ得ルモノナリ、ソノ形態ハ鳥類ノ種類異ナルニ依リテ差異アリ。モシソガ法醫學的問題ニ關スル時ハ、動物學者ノ指導ノ下ニ検査ヲナスベシ、茲ニハ別ニ之ニ付テ述ベズ。

血液及毛髮鑑定書實例

オ、血液及毛髮鑑定書實例

鑑定書

大正〇年〇月〇日〇地方裁判所豫審判事〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇強盜殺人及放火被告事件ニ付同廳豫審廷ニ於テ證據第一號(斧)證據第十號(紺木綿筒袖袴)證據第十一號(紺縞縞袴)證據第十二號(紺木綿股引)及證據第十三號(麻蓑)ヲ交附シ
一、右證據品ニ附着セル血痕ノ斑點ハ果シテ血ナリヤ
二、血ナリトセバ人血ナルヤ否ヤ
三、右證據品ニ附着セル毛ハ人毛ナリヤ
四、血及毛ハ如何ナル機會ニ附着セシモノナリヤ
五、各證據品ニ附着セル血ハ同一ニシテ且ツ同時ニ附着セシモノナリヤ否ヤ
六、附着後鑑定迄ノ經過時間
ヲ鑑定スベキ旨ヲ予ニ命ゼリ依テ予ハ各證據品ヲ同年同月四日乃至十日ニ至ル期間京都帝國大學醫學科大學法醫學教室ニ於テ検査シテ結果ニ依リ此鑑定書ヲ作ル

甲、検査記録

天、一般検査
一、證據第一號ハ古キ斧ニシテ之ヲニルニ金屬部ノ全面及之ニ近キ柄部ニ互リ帶黒赤褐色ノ不... 多数在シ金屬部ニ在ルモノ、多クハ擦過或ハ流下セル如キ形ヲ呈シ、刃部ニ近ク數條ノ毛髮ヲ交ニ(第十四項参照)、柄部ニ在ルモノハ進出或流下附着セルガ如キ狀ヲ呈ス各部ニ小孔ヲ添附シ検査及記載ニ便ス
二、證據第十號ハ古キ紺木綿筒袖袴ニシテ精檢スルニ淡紅赤色乃至帶褐色ノ小豆大乃至大豆大ノ不正形斑點所ニ散在シ肉眼ニテハ血痕ヲシキ觀ヲ呈セズ各斑ニハ「イ」乃至「ト」ノ小孔ヲ附ス
三、證據第十一號ハ木綿縞袴入袴天ニシテ精檢スルニ此袴天ニハ二種ノ血痕斑點アリ一ハ淡褐色赤褐色乃至汚褐色ノ帽針頭大乃至大ナル地圖狀斑點ニシテ多クハ境界不明ニシテ光澤ナシ他ハ暗褐色乃至淡赤褐色ノ小兒手掌大乃至小豆大ノ斑點ニシテ光澤ヲ有シ地質ニ硬性ヲ附加ス各斑ニ「イ」乃至「ウ」ノ小孔ヲ附ス

四、第十二號證據ハ古キ紺木綿股引ニシテ右脚下部外面ニ當ル部ニ小豆大帶黒淡褐色斑點及左脚外面下三分ノ一ノ所ニ同狀斑點一個アリ「イ」及「ロ」ノ小孔ヲ附ス

五、證據第十六號ハ古キ大人用麻蓑ニシテソノ鼻緒及裏ニ小米粒大乃至大豆大ノ暗汚褐色斑點在スソノ位置形狀ハ寫眞ニ示スガ如ク之ニ「イ」乃至「ハ」ノ符號ヲ附ス尙此等諸斑ノ位置形狀ハ次表ニ詳クナリ

地、化學的及顯微鏡的検査

上、豫備検査

其一、をぞん検査
六、本法ヲ行フニハ予ハ可檢斑ノ一小部ヲ切り取り或ハソノ纖維ノ一條ヲ抜キ取り若クハ可檢斑ニ於ケル小塊ヲ割離シ白色ノ濾紙間ニ挾ミ蒸留水ヲ以テ温シ可檢物ノ浸軟スルヲ待テ硝子棒ノ鈍端ヲ以テ輕打シ色素ノ少シク濾紙上ニ移行セバ之ニ新製セル糖蜜木丁幾トをぞん含有ノてれびん油各一滴ヲ注加シ若シ直ニ藍色ヲ呈スレバ本法ノ陽性ナルヲ示シ然ラザレバ陰性ナルヲ示スモノトセリ

其二、べんちん検査

七、本法ヲ行フニハ全クをぞん検査ニ於ケルガ如クシ白色濾紙上ニ移行セシメタルモノニ新製セルべんちんノあるこぼる性飽和溶液ニ一二滴ノ醋酸ヲ加ヘタルモノ及三%ノ過酸化水素水各一滴ヲ注加シ直ニ藍色ヲ呈スレバ本法ノ陽性ナルヲ示シ然ラザレバ陰性ヲ示スモノトセリ
八、抑豫備検査ニ屬スル諸法ハ其ダ鋭敏ナルモノニシテ血液若クハ血色素ノ數萬分ノ一ノ水溶液ニテモ尙血色素ナルコトヲ證明シ得ルモ血液以外ノモノ例ヘバ果實汁ニテモ陽性ヲ呈スルコトアルヲ以テ此法陽性ナレバ血痕ノ疑アルモ必ズシモ血痕ニアラズ反之内眼ヲ以テ見得ル位ノ血痕類似液ニシテ此諸法ヲ行ヒ陰性ヲ呈スレバ血痕ニ非ラズト略決定スルコトヲ得故ニ予ハ可檢斑ニ先ヅ以テ本検査ヲ試ミソノ陽性ヲ呈スルモノヲ擲ビ次ノ實性反應ヲ行ヒ陰性ナレバ血痕ニ對スル他ノ検査法ヲ行フモ到底ソノ功ナク且前記ノ理由ニ依リソノ血痕ニ非ズト決定セリ

四ナリ此毛髮ヲ三〇%ノ硝酸ニテ所置シ鏡檢スルニ最外層ニ薄キ
上皮層ヲ露メ皮質ハ小顆粒狀ヲ呈シ廣ク内ニ軟キ髓質ノ斷續シテ
所々ニ存在スルヲ認ム尙此毛髮ニハ所々球血塊ノ附着スルヲ見
ル
「ロ」ハ七〇〇〇長〇〇七三乃至〇〇七五耗幅黃褐色ニシテ兩端
ハ整銳ニ切斷セラレ所々ニ血球塊附着ス
「ハ」ハ二〇〇〇長〇〇七三耗幅兩端ハ整銳ニ切斷サレ所々ニ血球
塊ノ存在スルヲ見ル

乙、鑑定

上記検査ノ結果ニ依リ左ノ如ク鑑定ス
一、第一號斧及柄ニ於ケル血痕標斑ノ全部、第二號木桶緊結
輸入洋天ノ「チ、リ、ル、ヨ、タ、レ、ツ」ノ小札ヲ有スル部ノ斑、
及第十六號證麻裏鼻緒ニ在ル小赤褐色圓形斑ハ血痕ニシテ人血ヨ
リ由来セルモノナリ而シテ第十號證紺木桶筒袖神天、第十二號證
紺木桶股引ニハ血痕ノ存在ヲ認メズ
二、第一號證斧金屬部ニ附着セル毛ハソノ太サ及顯微鏡所見ニ依レ
バ人毛ニシテ頭毛ナラン而モ「イ」毛ノ一端ハ分岐シ末端鈍圓且
「ロ」毛ノ長サ七種以上アルヲ以テ見レバコハ頭髮ヲ長クシ且屢々
頭毛ニ機械的作用ヲ加フルモノ(例之婦人等ノ如キモノ)頭髮ナラ
ント思惟セラル
三、血痕ノ形状ヨリ考フルニ第一號斧金屬部ニ附着セル血痕ハ血

液ノ流下竝ニ擦過附着セルモノ柄部ニアル血痕ハ流下及進出飛散
シテ附着セルモノナリ(寫眞略ス)
第十一號證 木桶緊結輸入洋天ニアル「テ」斑ハ靜ニ血液ノ附着セ
ルモノ、「リ」ヨタル「ツ」斑ハ小豆大乃至大豆大ニシテ多クハ類
圓形ヲ呈シ中ニハ線狀或ハ紡錘狀ヲナセルモノアリ考フルニ
此等ハ飛來セル血液ノ小末ガ附着乾燥セルモノナラム
第十六號證 麻裏鼻緒ニアル小血痕ハ靜ニ落下セルモノト斷ニ擦
過セルモノトノ二種アリ次ニ毛髮ハ銳器ニテ切斷セラレ血液ヲ以
テ斧ニ附着セルモノト認ム
四、血痕ト確定セル斑ハ第一號證ヲ除キソノ他ハ材料極メテ少量ニ
シテ之ヲ比較研究スルコト能ハズト雖ソガ生理的食鹽水ニ溶解ス
ル速度、ソノ色澤等ニヨレバ孰レモ附着後今日ニ至ル迄ノ日數ニ
大差ナカルベシ之ヲ豫メ貯藏セル已知ノ血痕ト比較スルニ三ヶ月
以上ヲ經過セザル比較的新鮮キ血痕ナラムト推定ス
五、各證物品ニ附着セル血痕ハ同一ノモノニシテ且同時ニ附着セル
モノナルヤ否ヤ今日ノ學問ノ程度ニテハ之ヲ決定スルコト能ハズ
此鑑定ハ大正〇年〇月〇日著手
同 年同月〇〇日結了
大正〇年〇月〇〇日
京都市外田中村大漢廿一番地
鑑定人醫師 小南又一郎

三、精液検査

Examination of seminal stains,
Examen des taches de sperme,
Nachweis von Sperma.

精液ノ附着セル疑アル物品ハ、成ルベク表面ノ摩擦ヲ避ケ、斑痕ノアル部分ハ厚紙等ニテ掩ヒ、且ソノ
部ノ折曲サル、コトヲ防グベシ、斑痕ガ小ナル物品上ニ在ル時ハ塚中ニ入レテ貯フベシ、尙流動性ノ精液
ハ塚中ニ集メ一〇%ふをるまりん數滴ヲ加へ、或ハとるを以テ積層シテ腐敗ヲ防グベシ。
精液附着ノ疑アル衣服及物品ハ先ヅ肉眼ニテ、次デる一ベヲ以テ叮嚀ニソノ所在ヲ檢シ、次デ顯微鏡的

精液検査

検査ニ移行スベシ。精液斑ハ一般ニ地圓狀ノ形態ヲ呈シ、乾燥後ハ無臭ナレドモ、之ヲ温スカ或ハ新鮮ナ
ル場合ニハ、一種栗花臭様ノ臭ヲ發シ、乾燥シタル面ニ觸ルレバ稍硬クナリ居レリ。斯クテ證品上ニ於ケ
ル斑痕ノ所在明カトナレバ、ソノ位置大サ形状、色等ヲ叮嚀ニ記載シ置クベシ。精液斑ハ紫外線ニテ明カ
ナル螢光ヲ發ス。
一般ニ斑痕ノ中央ニ最も多ク精蟲存在スルモノナレバ、其部ヨリ小乾塊ヲ剝離シ、或ハ一、二條ノ纖維
ヲ切取シ、精蟲ノ尾部ハ折レ易キモノナレバ、注意シテ取扱ヒツ、次ノ検査ヲ施行ス。

上、豫備検査

Preliminary examination.
Examen d'orientation.
Die Vorproben.

本検査ニ屬スル諸法ハ、精液中ニ在ルれちゝん等ニ依リテ陽性ヲ來スモノナレバ、精液ニ限ラズソノ他
ノ體液ニテモ往々陽性ヲ來スコトアリ、故ニ本検査陽性ナレバ、精液ノ疑アリト云フニ過ギズ。

イ、ふろらんす氏検査

Reaction of Florence
Reaction de Florence..
Florence'sche Probe.

本法ヲ行フニハ新製セル所謂ふろらんす氏試薬ヲ必要トス、ソノ處方ハ左ノ如シ。

- 純 沃 度 一・五四瓦
- 沃 度 加 里 一・六五瓦
- 蒸 餾 水 三〇〇珎

先ヅ可檢小塊ヲ載物硝子板上ニ取り、水ニテ浸軟シ覆蓋硝子板ヲ以テ掩ヒ、之ニふろらんす氏試薬ヲ注

ふろらんす試

品

第九十二圖
ふらるんす結晶ト精蟲



第十三圖
ふらるんすノ結晶



第十三圖
不規則ナルふらるんす結晶



加シ、顯微鏡下ニ窺フニ、モシ可檢斑ガ精液ナル時ハ、初メハ褐色ノ顆粒ヲ生ジ、次デ針狀トナリ、遂ニ本検査ニ特有ナル褐色板狀乃至らんせつと形或ハソレ等ノ瘡合シタル結晶トナル、此結晶ハたいひまんノ結晶ヨリモ大ニシテ、ソノ約五六倍ニ達シ、光線ヲ重屈折ス、水ニ溶解シ易ク、甚ダ不安全ノ結晶ニシテ成生後一、二時間ニシテ自然ニ消失ス、此時精蟲ハ結晶ト混在シ居ルモノナリ、同様ノ方法ニヨリ種々ノ植物性物質或ハ吾人ノ體液、例之、唾液及鼻汁等ヨリモ同一ノ結晶ヲ作ルコトヲ得、コハれちん、のいりん等ノ存在ニ依リテ成生スルモノナレバ、精蟲ト何等ノ關係ナキモノナリ。

精液ニ便、尿、血液及化學的藥品ノ混在スル時ハ、本反應行フモ結晶ヲ成生セザルコトアリ、然レドモ精液ノ單ニ古クナリ、或ハ強ク乾燥シ、若クハ高熱ニ曝露シ或ハ腐敗セルノミナル時等ハ本結晶ヲ作ルコトヲ得、本法ヲ行フニハ亦材料モ極メテ少量ニテ充分ナリト雖、其結晶ノ形ニ依リテソガ人類ヨリ由來セ

ばるべりを氏
檢法

ルモノナルカ、將タ獸類ノモノナルカヲ區別スルコト能ハズ。

ロ、はるべりお氏檢法

Barberio's reaction, Reaction de Barberio, Barberio'sche Reaktion.

精液或ハソノ浸出液ノ一滴トびくりん酸ノあるこほる、ぐりせりん飽和溶液ノ一滴トヲ載物硝子板上ニテ相接觸セシメ、覆蓋硝子板ヲ被セ、鏡檢スル時ハ兩液ノ接觸面ニ、小ナル黄色乃至白色ノ數多ノ十字形或ハ星形結晶ヲ生ズ、コハびくりん酸磷酸すべるまんノ結晶ナリ、此結晶ノ形ハ種々ニシテ、時トシテ板狀針狀或ハ麻粒狀トナルコトアリ。此反應ニ又ハえすばつはノ試薬ヲ代用スルコトヲ得。

ハ、て、どみにちす氏檢法

De Dominici's reaction, Reaction de Dominici, De Dominici'sche Reaktion.

精液或ハ精液斑浸出液ト三臭化金ノ飽和水溶液トヲ載物硝子板上ニ混和シ、覆蓋硝子板ニテ掩ヒふんせん燈火上ニテ熱シ、小氣胞一二生ズルニ至リテ止ミ、急ニ冷却セシムル時ハ、赤黄色ノ針狀板狀乃至束狀ノ結晶ヲ生ズ、此結晶ハ重屈折ヲナシ持久的ノモノナリ。

此他べつちい氏沃度すべるまん反應アレドモ、特記スベキ必要ヲ認メズ。

中、實性反應

Special Reaction, Reaction spéciale Spezifischer Nachweis.

可檢斑痕ガ精液斑ナリト決定スルニハ、是非共其中ニ精蟲ノ存在ヲ檢出セザルベカラズ、而シテ精蟲ノ尾部ハ甚ダ離脱シ易キモノナレバ、此検査ニ當リテモ餘リ種々ノ所置ヲ加フルコト能ハズ、若シ精蟲ガソノ尾部ヲ失ハバ、單ニ頭部ノミトナリテ、往々植物ノ胞子或ハ原蟲トノ區別困難トナルコトアリ、注意セザルベカラズ。

精蟲ノ檢出ハ甚ダ勞多キ事業ニシテ、ソノ所置ハ重二次ノ原理ニ準據スルモノナリ。

て、どみにち
す氏檢法

- 一、種々ノ薬液(色素ニアラザル)ヲ加ヘテ精蟲ヲ光學的ニ發見シ易カラシム
- 二、乾着セル精蟲ヲ附着基質ヨリ浸漬離脱シ、遠心器ニヨリテ集積セシム
- 三、色素ニ依リテ精蟲ヲ染色シテ、ソノ發見ヲ容易ナラシム
- 四、精蟲ノ附着セル纖維ヲ薬液ニヨリ透明ナラシムルカ、或ハソレ等ノ夾雜物ヲ崩解セシメテ検査ヲ容易ナラシム
- 五、前記種々ノ條件ヲ併合應用シテ検査ヲ便ニス

新鮮ナル精液検査

イ、新鮮ナル精液検査

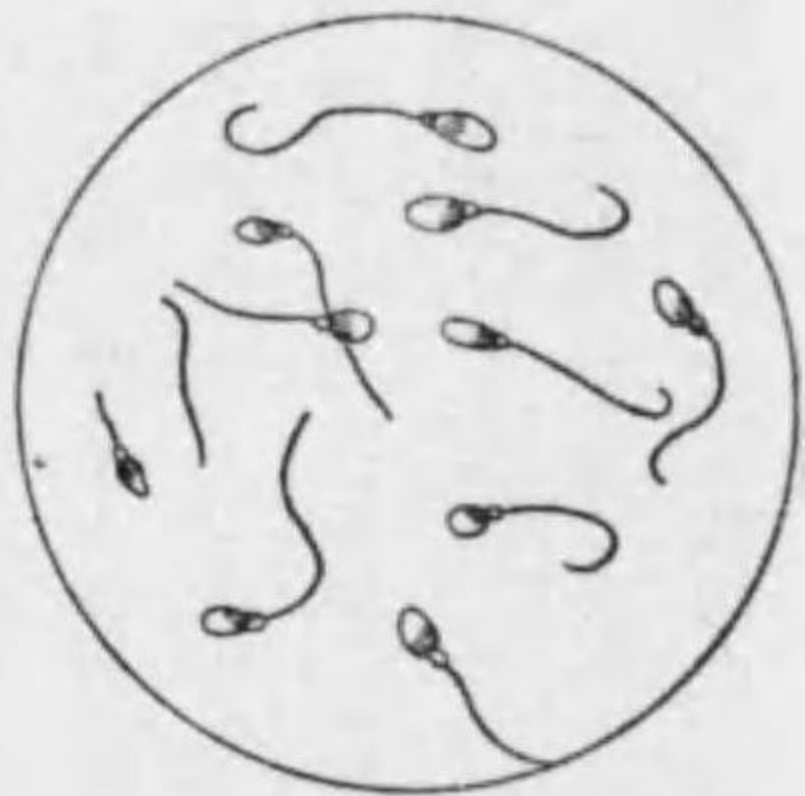
Examination of fresh seminal stain
Expertise des taches de sperme fraîches.
Untersuchung frischen Samens.

載物硝子板上ニテ精液一滴ニ生理的食鹽水一滴ヲ注加シ、覆蓋硝子板ヲ被セ、鏡檢スレバ頭部ハ三—五μ長、二—三μ幅、一—二μ厚、楕圓形ニシテ光ヲ強ク屈折シ、四〇—六〇μ長ノ尾部ヲ附着スル精蟲ヲ見ルコトヲ得、精蟲ノ形ヲ注意シテ檢スレバ、ソガ人獸何レヨリ由來セルモノナルカヲ直ニ區別スルコトヲ得、法醫學的ニハ完全ナル精蟲ヲ見出スニ非ラズンバ、決シテ精液ナル斷定ヲ下スコト能ハズ、若シ上皮細胞等ノ夾雜物アリテ、検査困難ナル時ハ、5%ノ醋酸或ハあんもにあ水ヲ注加スル時ハコレ等ハ透明トナリ、精蟲ハ明瞭ニ見ルヲ得ルニ至ル。

比較的尙新鮮ナル精液斑ヲ檢スル場合ニハ、ソノ中央ヨリ一二ノ纖維ヲ切取シ、或ハ小鱗片ヲ剝離シ載物硝子板上ニ置キ、生理的食鹽水ヲ加ヘテ徐々ニ軟化セシメ、輕ク覆蓋硝子板ヲ被セ(強壓等ヲ忌ム)鏡檢スベシ。此際夾雜物例ヘバ血球膿球大小便ノ成分等ニ就テモ、充分ノ注意ヲ怠ルベカラズ。モシ腔内ヨリ

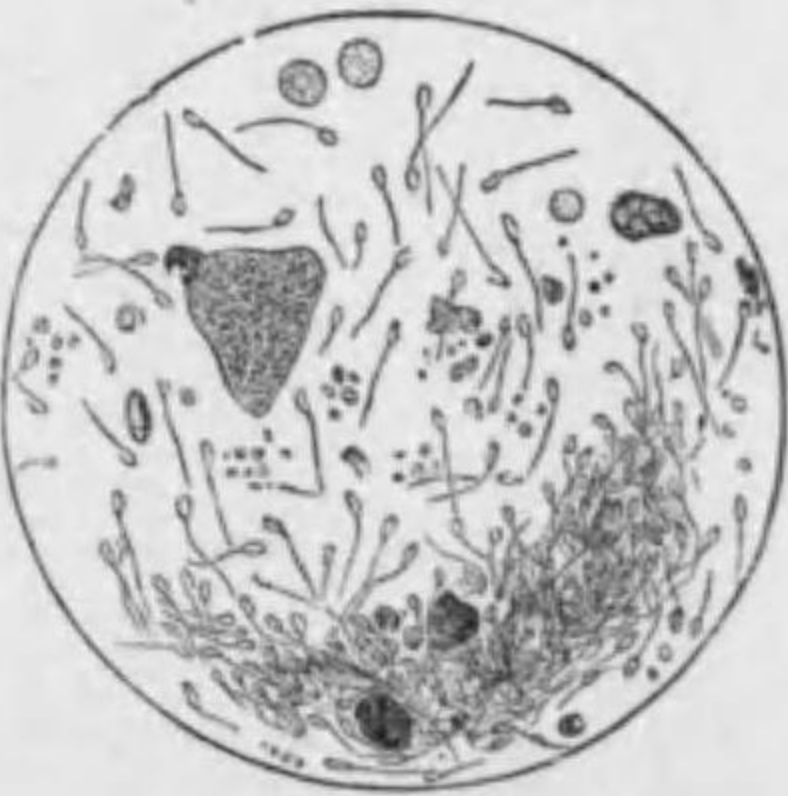
精蟲ノ大サ

第三十三圖



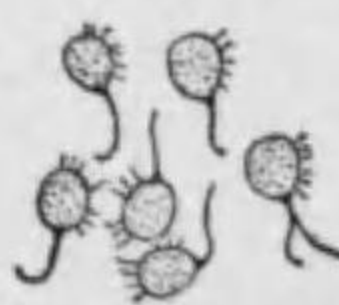
正形精蟲

第三十三圖



久陳精液ニ於ケル精蟲

第三十四圖



原蟲及こもり

ノ分泌液中ヨリ精蟲ヲ檢出スル場合ニハ、腔原蟲ニ注意シ、之ト精蟲トヲ混同スベカラズ、其中最モ精蟲ト類似セルモノハ、「トリコモナス」及扁平細胞縁ニ乗レル胞子ニシテ、コハ胞子ガ精蟲ノ頭部ノ如ク、細胞縁ガ尾部ノ如ク見ユルガ故ナリ。

ロ、塗抹標本検査法

Examination of smears
Examination des préparations fixées et colorées
Untersuchung von Ausstrichpräparaten

新鮮ナル精液或ハ精液斑ヨリ浸出液一滴ヲ、載物硝子板上ニ取リ之ニ墨汁液ノ一滴ヲ加ヘ、薄層トナシ、空氣中ニテ徐々乾燥セシメ、かなだばるさむニテ封固シ、鏡檢スレバ精蟲ノミ視野ニ明瞭トナル、暗視野裝置ニテ窺フ時ニ特ニ然リ、本法ニ墨汁ヲ用ヒテ成巧セシハ、九州大學法醫學教室ノ兒島氏ナリ、此塗抹標本ヲ染色スル時ハ、更ニ美麗ナル精蟲ヲ見ルコトヲ得。

墨汁検査

精液斑浸漬法

古キ精液斑ヲ浸漬シテ精蟲ヲ原形ニ復セシメ、或ハ斑痕中ヨリ離脱セシムルニハ、稍長時ヲ要ス、即チ先ヅ斑中ノ纖維一二條ヲ切取シ、或ハ小鱗片ヲ剝脱シ、載物硝子板上ニ取リ、生理的食鹽水及ほるまりんノ一滴ヲ加ヘ、覆蓋硝子板ヲ被セ、時々硝子棒ヲ以テ輕壓ヲ加ヘツ、二十四時間放置シ浸出シ得タル液ヲ直ニ鏡檢スルカ、或ハ染色ヲ施シ、又ハ塗抹標本トナシテ檢スベシ。精蟲ノ數非常ニ少キ時ハソノ浸出液ヲ遠心沈澱セシメテ、ソノ沈洋物ヲ檢スルカ、或ハ浸漬セル纖維等ニ直ニ染色ヲ加ヘテ檢スベシ。

二、精蟲染色検査法

Staining of seminal stain
coloration du sperme
Färbung der Samenfasern

精蟲ヲ染色スル爲メノ注加液ニ種々ノ處方考案セラレタリ。各核染色々素、例ヘバめちれんぶらう、ヘまとをきしりん、るごーる液等ハ精蟲ノ頭部ヲ染色シ、頭部尾部ヲ同時ニ染色スルモノトシテ、げんちあなびをれつと、えをじん、えりとろじん、めちーるぐりゆん等アリ、今ソノ染色法ノ一・二ヲ列舉セン。

甲、こりん、すといきす氏法、(Corin-Stokis)

試薬、えりとろじん

〇・五瓦

二五%あんもにあ水

一〇〇・〇珪

染色法、可檢斑ヨリ一二條ノ纖維ヲ切取ル、

試薬ニテ三乃至三〇秒染色ス、

精蟲染色法

こりん、すといきす氏法

水ヲ加ヘテ纖維ヲ分解セシム、
過剰注加液ヲ濾紙ニテ吸收ス、

更ニ水ノ一滴ヲ加ヘ覆蓋硝子ニテ掩ヒ鏡檢ス、

結果、頭部ハ赤色ニ強ク染色シ、尾部モ淡紅色ニ染色スルモノノ度非常ニ薄シ。

乙、ベツキ、氏法、(Baechli)

試薬、(1) 1% 酸ふくしん溶液一分ト、1% ノ鹽酸四十分ヲ混和ス、

(2) 1% めちーるぶらう溶液一分ト 1% ノ鹽酸四十分ヲ混和ス、

(3) 1% 酸ふくしん溶液、1% めちーるぶらう各一分ニ 1% ノ鹽酸四十分ヲ加フ。

染色法、可檢斑ヨリ一平方糎大ノモノヲ切取リ、上記三液ニテ各一分内外染色シ、次で 1% ノ鹽酸ニテ洗滌シ、染色面ヲ上方ニ向ケ、空氣中ニテ乾燥シ、きしろーるニテ透明トナシ、かなだばるさむニテ封固ス、モシ餘リ古キ斑痕ナレバ、あんもにあ水ニテ所置シテ後染色スベシ。

結果、頭部ハ赤ク、尾部ハ青ク染ミ最モ立派ナル標本ヲ得、本法ハ精蟲染色中ノ最モ優越セルモノト思ハル。

丙、でるびゆう氏法、(Darvieux)

試薬、(1) えりとろじん 〇・五瓦ニあんもにあ水 一〇〇珪ヲ混和ス。

(2) めちれんぶらう 〇・〇五瓦ニ水 一〇〇珪ヲ加フ。

染色法、成ルベク小ナル細キ纖維ヲ第一液ニテ一分間染色ス、第二液ヲ加ヘ纖維ヲ離開セシム、次で濾

ベツキ、氏法

でるびゆう氏法

紙ニテ注加液ヲ去リ、一、二滴ノ水ニテ洗ヒ、再ビ濾紙ニテ乾カシ空氣中ニ十分乾燥後、かなだばるさむニテ封固ス。

結果、頭部ハ紫色ニ染ミ、尾部ハ青色トナル。本法ニテハ纖維モ同様ニ染ム、簡單ナルヲ以テ本法ノ特徴トス。

丁、めちるぐりゆん染色法、コハ比較的ヨク精蟲頭ヲ青染シ、夾雜セル纖維ヲ着色セザル方法ニシテ、左ノ液ヲ用ユ、

めちるぐりゆん

〇・三

水

一〇〇・〇 cc

鹽酸

三滴

黒岩氏法

即チ載物硝子板上ニテ、此混合液ヲ可檢物ニ加ヘ、ヨク纖維ヲ分離セシメ、覆蓋硝子板ヲ被セ鏡檢ス。戊、黒岩氏法、同氏ハへまときしりん染色ヲ用ヒテ、精蟲染色ニ好果ヲ得タリ。

一、可檢物(腔粘液等)ヲ載物硝子板ニ薄ク塗附シ、空氣中ニ乾燥ス。

二、めちるあるこほるニテ之ヲ固定ス。

三、ペーめる明礬へまときしりん液ヲ水ニテ二倍ニ稀釋シ、之ニテ十分乃至十五分染色ス。

四、水洗

五、十%水性えをじんニテ一、二分間染色ス

六、水洗、乾燥、脱水、封固ス。

めちるぐりゆん染色法

濃硫酸法

結果、精蟲ノ頭部先端ハ淡紅ヲ帯ビタル淡青色、其後部ハ濃青色、尾部ハ淡紅色ニ染ム。

此他夾雜スル纖維ヲ染色セザル目的ニテ、しよすてん氏法、花岡氏法等アレドモ、茲ニ之ヲ略ス。

上記ノ諸法ニ依リテ精蟲ヲ見出スコト能ハザル時ハ、纖維ヲ濃硫酸ニテ崩解セシメ、殘存セル精蟲ノ檢査スベシ、元來精蟲ハ濃硫酸ニ對シ抵抗強キモノナレバ、纖維ソノ他ノ夾雜物ノ如ク、濃硫酸ニ依リテ崩解セザル特徴ヲ利用セルモノナリ。濃硫酸ヲ以テスレバ、浸漬等ニヨリテ容易ニ離脱シ、來ラザリシ精蟲、或ハ夾雜物ノ蔭ニ隠レタルモノヲモ、容易ニ檢出スルコトヲ得、且之ニ染色ヲ施セバ、益明瞭トナルモノナリ。

試薬、濃硫酸、蒸留水、あるこほる性えをじん、

溶液、れふれる氏めちるぐりゆん溶液、

染色法、試験管ニ四珦ノ濃硫酸ヲ入レ、ソノ上ニ蒸留水ヲ積層シ、混和セザル様ニ注意ス、茲ニ於テ約二厘半方大ノ可檢斑ヲ投ジ、振盪シ纖維等ノ崩解セルヲ見レバ、水ヲ加ヘテ十五珦トナシ、浮

上シ來レル殘餘ノ纖維ヲ取り出シ、載物硝子板上ニ乾カシ、えをじん及めちるぐりゆんニテ染色シ、鏡檢スレバ精蟲ヲ檢出スルコトヲ得、

結果、本法ハ植物性纖維ニノミ應用サル、又一面ニハ精蟲ハ試験管底ニ沈澱シ居ルモノモアレバ、注意スル必要アリ。

下、人類ノ精蟲ナルヤ否ヤノ検査

Human semen or not?
sperme human ou non?
Menschensamen oder nicht?



人類ノ精蟲ト他動物ノソレトハ、形態及大サ等ニ於テ差異アルモノナレバ、精蟲ヲ檢出スルコトヲ得バソノ區別容易ナリ。精液ニテ精蟲ヲ缺ケル場合ハ、鑑別容易ナラズ。生物學的鑑別法、就中、沈降素檢法ハあるぬむ、てるぶゆう、ばあいふえ等ニヨリテ試ミラレタルモ、未ダ成功ノ域ニ達セズ、次ニみね、るくれるく、ぶあいへる等ニ依リテ試ラレタル過敏性檢

法モ、尙信用スルコト能ハズ。

精液斑ガ次第ニ古クナレバ精蟲ノ數ハ次第ニ減ジ、數年ヲ經レバ殆ンド全ク消失スルコトアリ。古キ斑痕ヲ檢スル際此點ニ注意スベシ。

尙茲ニ附加スベキハ、時トシテ細菌學的檢査ニ依リ、法醫學上興味アル據點ヲ得ルコトアリ、例ヘバ淋疾ニ罹レルモノガ、該病ナキモノヲ凌辱シテ、之ヲ傳染セシメタル際ノ如キ、其被害者ヨリ淋菌ヲ證明スルコトヲ得バ、大ナル犯行ノ證據ヲ得タルナリ、今次ギニ之ニ對スル好鑑定例ヲ示サム。

淋菌檢査
例 淋菌檢出鑑定

大正〇年〇月〇日余ハ〇〇地方裁判所〇〇支部檢事〇〇〇ヨリ左ノ事項ヲ鑑定スベキ命ヲ檢事ヨリ下付セラレタル材料ニ就キ細菌學的檢査ヲ遂ゲ本鑑定書ヲ作成セルモノトス

鑑定事項
一、大正〇年〇月〇日檢事ノ領置物件第〇號甲乙ニ付淋菌又ハ酸毒ヲ檢査材料
檢事領置物件第〇號甲

摩紙二葉ニシテ、〇〇〇〇被殺現場警署ノ上ニ在リシ紙ト記載シタル紙製二重封筒内ニ在ルモノ
二葉共ニヨク乾燥シ其内一葉ハ中央部ニ於テ斷裂ヲ形成シ其中心不正十字形ニ斷裂ス而シテ裂線ノ纖維ハ肉眼上其本來ノ形態ヲ失ヒ一旦液體ノ爲メニ浸淫セラレタル後乾燥セルガ如キ觀ヲ呈ス然レドモ全紙面ニ於テ特異ノ變色乃至斑點ヲ認メズ
檢査方法及其所見
其一 淋菌

其二 淋菌

紙質ノ肉眼の異常部ヲ察シテ中心トスル斷裂部ヲ剪除シテ顕微鏡ニシテ檢査セルニ容レ之ニ約十疋ノ淋菌ヲ注シ約二時間浸漬シ次ニ滅菌セルニシテ以テ浸漬セラレタル紙質ヲ動搖シ約二時間靜置シテ取リ出シテ滅菌器ニシテ以テ滅菌シ約半時間水遠心器ニ依リテ遠心沈澱シ其沈澱ヲ覆蓋硝子ニ取リ先ツ空氣中ニ乾燥シ次ニ以テ染色シ油浸裝置ノ顯微鏡下ニ照シ檢査セシニ每視野少キハ五六箇多キハ數十箇ノ幅約一、六ミ厚約〇、八ミ有リシ咖啡豆狀ノ重球菌ヲ認ムルコトヲ得タリ尙引續キ數葉ノ覆蓋硝子標本ヲ製シ檢査セシニ何レモ前記同様ノ成績ヲ得タリ依テ此重球ノ爾他ノ性状ヲ究メンガ爲メぐらむ氏染色法ニ依リ染色檢査セシニ著色セズニ於テ此細菌ハぐらむ氏法非染色ノ細菌ナルコトヲ確メ得タリ尙該菌ノ淋菌タルコトヲ確認スベキ微鏡下ニ培養上ノ性状ヲ精査スル必要アルヲ以テ予ハ次ノ培養試驗ヲ施シタリ即チ遠心沈澱シタル沈澱數白金耳ツ、ツキいふる氏法ニ從ヒ腹水寒天培養基ニ塗抹シ尙對照トシテ普通寒天培養基及膠質培養基ニ塗抹シ之ヲ攝氏三十七度ノ溫度ヲ保テテ培養シ之ニ集落ノ發生スルヲ待テリ而シテ二十四時間後ニ至リ之ヲ檢スルニ普通寒天培養基膠質培養基ハ淋菌特異ノ集落ヲ發生セズ之ニ反シテ腹水寒天培養基ニ在リテハ培養基表層ニ發育シタル集落ハ集心性類白灰色ヲ呈シ法ノ如ク之ヲ鉤取シ鏡檢スルニぐらむ氏染色法ニ染色セザル固有毒動ナキ咖啡豆狀ノ重球菌ヲ認メ得タリ

淋菌ハ固有毒動ナキ咖啡豆狀ノ重球菌ニシテ其大サハ幅約一、六ミ厚約〇、八ミ有リシぐらむ氏染色法ニ染色セズ且普通ノ寒天培養基及膠質培養基ニ發育セザレドモ腹水寒天培養基ニ發育スルヲ以テ以上ノ檢査方法ニヨリテ得タル成績ハ明カニ淋菌存在ヲ確認セルモノナリ

其二 菌毒すびろへにて
前述ノ遠心沈澱シタル沈澱ヲ覆蓋硝子ニ取リ法ノ如ク墨汁暗視野檢査法ニ依リ鏡檢スルモすびろへにて認ムルコト能ハズ

檢査材料
第一編 物品検査 三、精液検査

檢事領置物件第〇號乙
摩紙四葉ニシテ、〇〇〇〇被殺死體ノ着衣ノ秩ニ在リシモノト記載シタル紙製二重封筒内ニ在ルモノ
肉眼の所見
相重リタル二葉ハ同一局部ニ於テ少シク斷裂ヲ呈スルノミ肉眼上特異ノ變色又ハ斑點等ナク他ノ二葉ハ全然變色ヲ認メズ
檢査方法及其所見
前述檢事領置物件第〇號ニ於ケル同一ノ檢査方法ニ依リ檢査シタルニ淋菌並ニ酸毒すびろへにて共ニ陰性ノ成績ヲ得タリ
前記細菌學的所見ニ依リ鑑定スルコト左ノ如シ
檢事領置物件第〇號甲ニ於テハ明カニ淋菌ノ存在ヲ認ムルモ酸毒すびろへにて存在ヲ認メズ同號乙ニ於テハ淋菌及酸毒すびろへにて認メズ
右及鑑定候也
此鑑定ハ下關市立高尾病院細菌室ニ於テ大正〇年〇月〇日午前九時ニ初メ同年同日午後四時ニ終ル
大正〇年〇月〇日
下關市丸山町四百〇五番地
鑑定人 安田茂太郎

四、胎便検査

Eamination of meconium
Examen du meconium
Untersuchung des Mekoniums.

1. 顯微鏡的検査

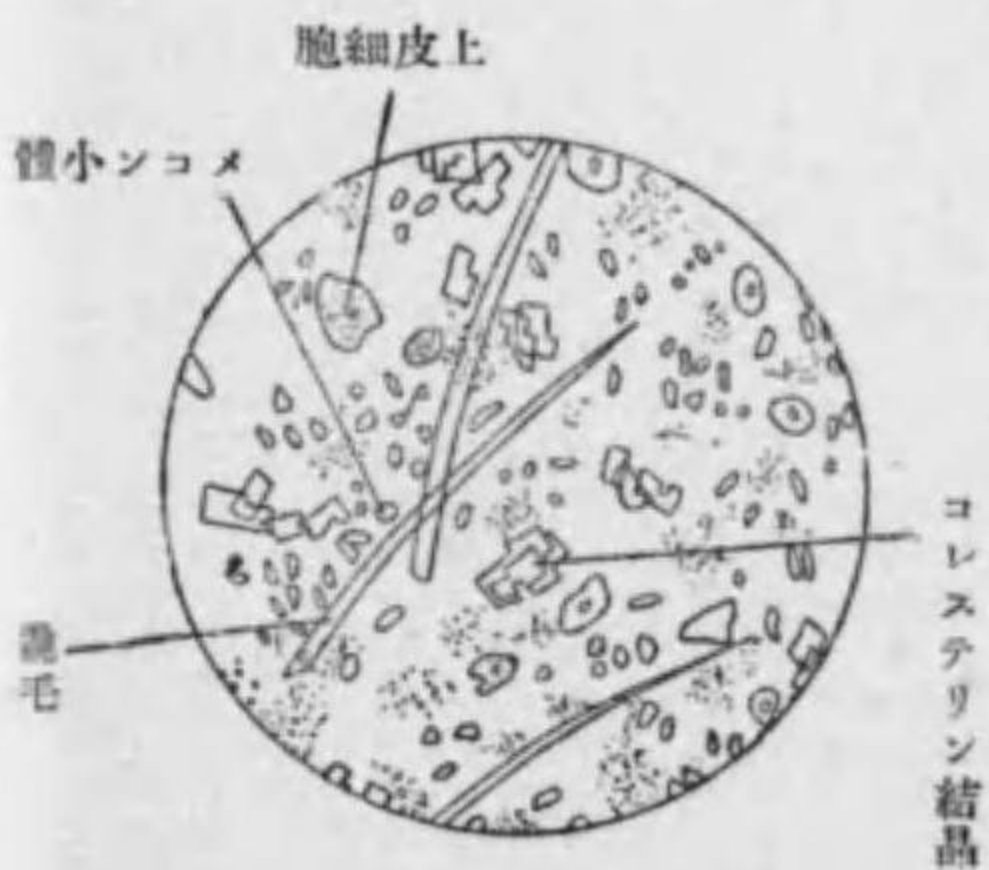
Microscopic Investigation.
Examen aux microscope
Mikroskopische Untersuchung.

新鮮ナル胎便ハ粘稠無臭ニシテ通常帶褐綠色ヲ呈ス、一部ヲソノマ、載物硝子板上ニ取り薄層トシテ、
覆蓋硝子板ニテ掩ヒ、鏡檢スレバ毳毛、板狀ノひよれすてりん結晶、扁平上皮細胞、有核ノ纖毛上皮細胞
膽汁色素、脂肪顆粒及ビめこん小體ヲ發見ス。此中胎便ニ特有ナルハめこん小體ニシテ之ヲ見出セバ、少
クトモ胎便ノ混在セルモノナルコトヲ斷定スルコトヲ得。

胎便検査

めこん小體

圖六十三第



めこん小體ハ帶綠黃色乃至帶綠褐色ノ、光ヲ強ク屈折
スル無構造ノ圓形若クハ楕圓形ノ小體ニシテ、其大サハ
二乃至四十ミクロ算シ、コハ無色ナル基質ガ膽汁色素ニヨ
リテ着色セルモノナレバ、ぐめりんノ反應ヲ呈ス、即チ
めこん小體ニ濃硝酸ヲ加フレバ帶黃綠色ヨリ綠色ニ移行
ス、更ニ硝酸ヲ加フレバ紫色或ハ赤色ヲ現出スルコトア
リ。めこん小體ノ白色無構造ノ基質ハ弱酸、弱鹽基、う
ゐるひよう氏液、ほふまんばちにー氏液ニヨリテ犯サレ

胎便ノ生物學
的検査

ズ、氷醋酸ニ溶解ス。色素ニ對シテハへまときしりん及ふくしんニ染色セザレドモ、えをじん、めちれんぶ
らう、かるぼーるふくしん等ニテ染色ス。めこん小體ハ如何ナル所ヨリ由來セルカハ今日尙未ダ明カナラ
ズ、ソノ他胎便有形成分ハ、羊水ヲ嚥下シタルヨリ來リシモノナレバ、胎便検査ニ對シ獨特ノ意味ナシ。
種々ノ物品ニ乾着セル胎便ヲ證明スルニハ、先ヅ可檢斑ヨリ小鱗片ヲ剝取シ、載物硝子板上ニ置キ生理的
食鹽水ヲ加ヘ覆蓋蓋硝子板ヲ被セ數時間軟化セシメ、めこん小體ノ原形ニ復スル頃ヲ窺ヒ、鏡檢スレバ前
記ノめこん小體ヲ檢出シ、尙扁平上皮細胞、毳毛これすてりんノ結晶等ヲ發見シ、胎便ナルコトヲ決定シ
得ベシ。浸漬液トシテハ生理的食鹽水ノ代リニ、古キ斑痕ニ對シテハういるひよう氏液ばちにー氏液ヲ用
ヒ、又夾雜セル上皮細胞ヲ透明ニスル爲メ、二―五%ノ醋酸溶液ヲ加フルモ可ナリ。尙めこん小體ナルコ
トヲ確定スル爲メニ、覆蓋硝子板ノ下ニ濃硝酸ヲ注加シテめこん小體變色ノ狀態ヲ研究スルモ可ナリ。め
こん小體ニ種々ニ染色ヲ施ス人アルモ、別ニ必要ナルコトニ非ラズ。

ロ、生物學的検査

Biological investigation, Examen biologique,
Biologische Untersuchung.

近來血清學ノ發達スルニ伴ヒ、胎便検査上ニモ之ヲ應用シテ、ソガ人類ノモノナルヤ、將タ獸類ヨリ由
來セシカヲ決定セントセル學者アリ。然レドモ未ダ確固タル結果ヲ得ル能ハズ。

即チ胎便或ハソノ生理的食鹽水えむるじをんヲ以テ家兎ヲ免疫シ、ソガ血清ヲ取リテ胎便斑浸出液ニ積
層シ、沈澱ヲ生ズルヤ否ヤヲ檢シ、或ハ胎便若クハソノえむるじをんヲ以テ、第一次注射ヲ海狸ノ腹腔ニ
ナシ、第二次注射ヲ心臟ニ行ヒ、過敏性しよつくノ來ルヤ否ヤヲ檢シタレドモ、何レモ好結果ヲ得ル能ハ
ザリキ。胎便斑ガ除程古クナリテモ尙めこん小體ヲ檢出シ得テ、胎便ナルコトヲ斷定セシ報告アリ、例之

しゆみつどハ七乃至九年ヲ經過セル胎便斑ヨリめこん小體ヲ檢出シ得タリト云フ。

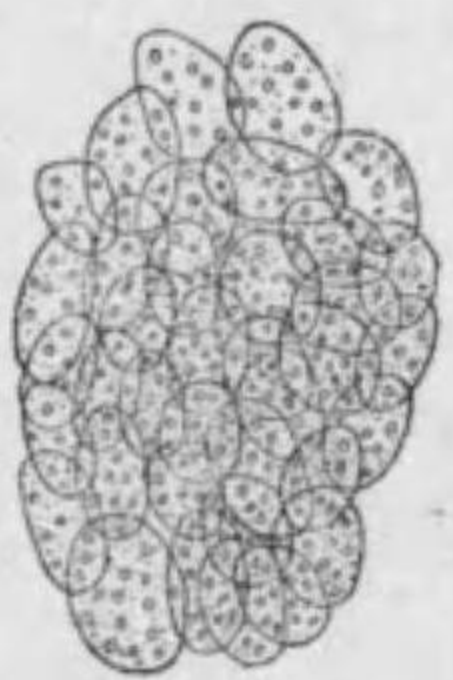
五、胎垢検査

Examination of Caeseous vernix
Examen de sébacé, Untersuchung der
Vernix caseosus.

胎垢ガ身體或ハ種々ノ物體ニ附着スル時ハ、乾燥スルニ從テ痂皮狀トナリ、初メハ灰白色ヲ呈スレドモ次第ニ褐色ニ移行ス。

可檢斑ヨリ小鱗片ヲ剝取シ、載物硝子板上ニ取り、水或ハ稀薄ナルぐりせりんヲ加へ、覆蓋硝子板ニテ掩ヒ鏡檢スル時ハ、多數ノ無核扁平上皮細胞、毳毛、脂肪ノ顆粒、及脂肪酸結晶、及ひよれすてりんノ

第三十七圖



結晶等ヲ見ル時ハソハ、恐ラクハ胎垢斑ナリ。尙扁平上及細胞等ニふくしん、げんちやなびをれつと染色、わいげるとノ纖維素染色、ぐらむ染色法等ヲ試ムルモ可ナレドモ、此ノ如キ必要ヲ見ザルコト多シ。

六、羊水斑及惡露斑検査

Investigation of amnion fluid, Examen
des taches de liquide amniotique,
Untersuchung der Amnion- und lochienflecke.

白色基質ノ上ニ於ケル羊水斑ハ、之ヲ識別スルコト容易ナレドモ、染色サレタル基質上ニ於ケルモノハ鑑別稍困難ナリ。

羊水斑ハ通常大ニシテ、帯灰淡黄色ヲ呈シ、周圍ノ境界明ニシテ、柔軟ナル基質ニ少シク硬度ヲ附與ス。

羊水斑ヲ檢スルニハ、成ルベク斑ノ中央ヨリ一二條纖維ヲ切り取り、載物硝子板上ニ置き、生理的食鹽水、或ハ稀薄ナルぐりせりん溶液ヲ加ヘテ纖維ヲ離解シ、暫時放置後鏡檢シテ扁平上皮細胞、毳毛、これ

胎垢検査

ひよれすてり
れ結晶

羊水斑

惡露斑

乳汁斑

すてりん結晶等ヲ見ルコトヲ得レバ、略羊水斑ナルコトヲ決定スルコトヲ得、モシ鏡檢シテ有形成分少キ時ハ可檢斑ノ稍大ナル一片ヲ、生理的食鹽水ニ浸漬軟化後、浸漬液ヲ集メ遠心沈澱セシメ、ソノ沈澱ニ付テ羊水ノ有形成分ヲ検査スベシ。

惡露斑ハ産後ノ經過日時ニ相當シテ、血液含有量ニ差アリ。從テソノ色モ暗赤色乃至淡汚赤色ヲ呈ス。此ノ検査法ハ全ク羊水ニ於ケル場合ト同ジク、水或ハ生理的食鹽水ニテ浸漬軟化セシメテ鏡檢スベシ。而シテ惡露斑検査ノ場合見出ス有形成分ハ、産道ニ於ケル種々ノ上皮細胞赤血球乃至白血球、膿球、絨毛細胞、脱落膜細胞等ナリ。此中特有ナル意味ヲ有スルハ、絨毛細胞及脱落膜細胞ニシテ、コレヲ發見スレバ惡露ナリト斷定スルコトヲ得。

有形成分少キ時ハ、生理的食鹽水ニ浸漬壓出セル液ヲ遠心沈澱シテ、ソノ沈澱ヲ檢スルコト羊水斑ノ場合ト同ジ。

羊水及惡露検査ノ場合、血清學的ニ沈澱素檢法ニヨリ、該蛋白ノ種屬ヲ鑑別スルコトヲ得バ、ソガ人類ヨリ由來セルコト益々確實トナルモノナリ。

七、乳汁斑検査

Examination of milk-stain
Examen des taches de lait
Untersuchung von Milchflecke.

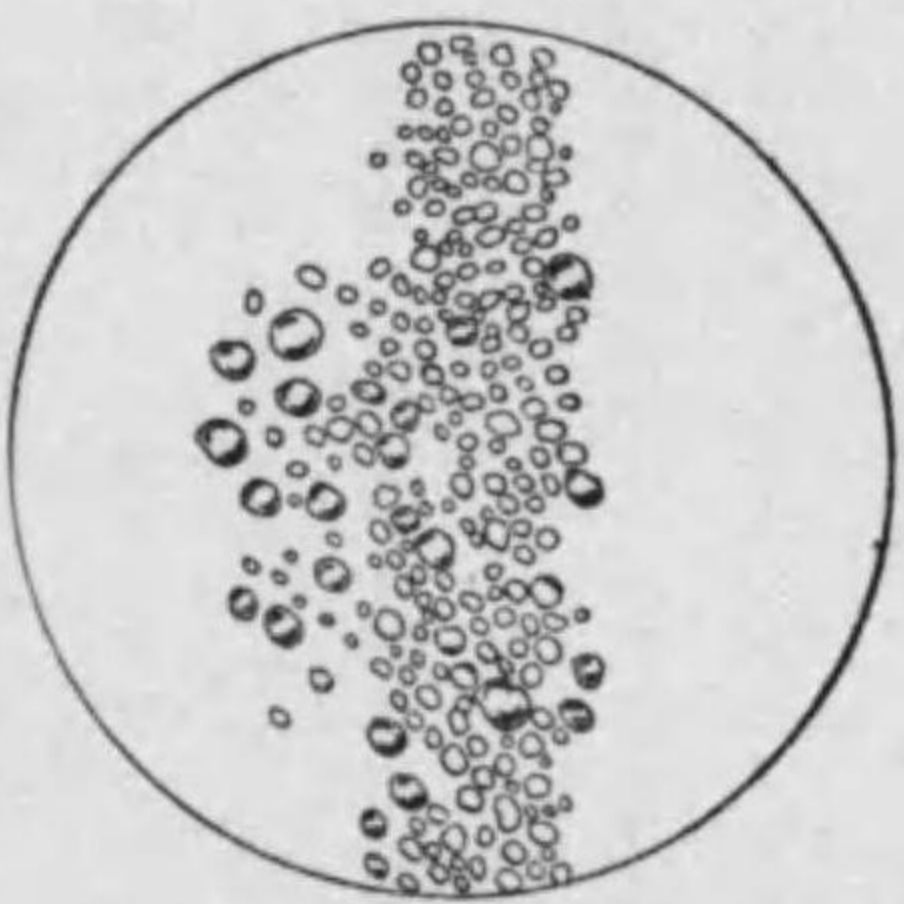
乳汁斑ガ白色基質上ニ在ル時ハ灰白色ニシテ、ころすとするむ斑ハ多少黄色ヲ帯ビ、且柔軟ナル基質ニ一定ノ硬度ヲ附與ス。

乳汁斑新鮮ナル時ハ、之ニ三%過酸化水素水ヲ滴下スレバ小氣泡ヲ生ジ、すだんIII等ニテ染色スレバ赤

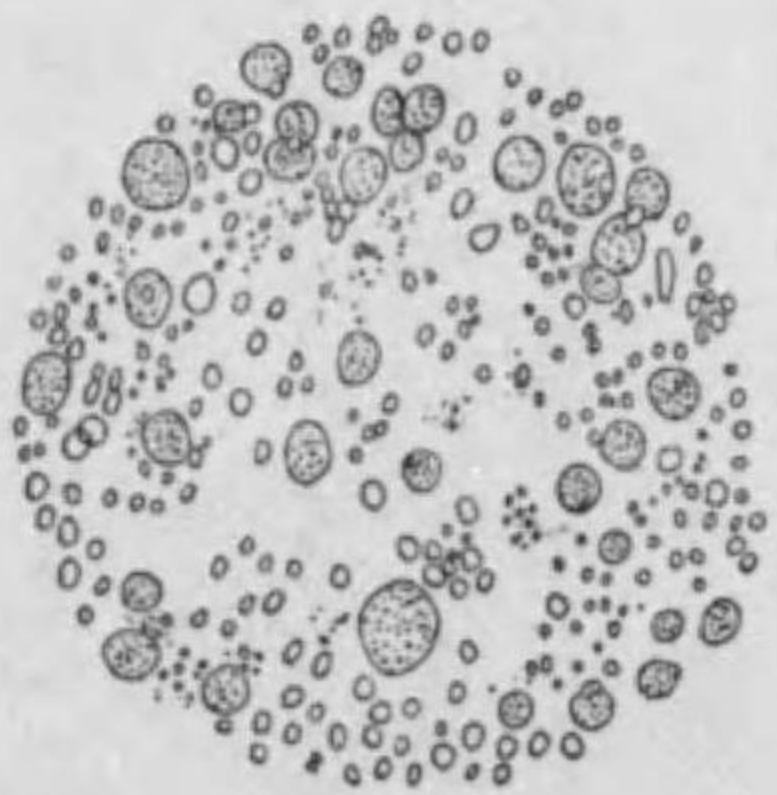
色ヲ呈ス。法醫學的乳汁斑検査ノ場合、化學的検査トシテハ特記スベキモノナク、顯微鏡的検査ヲ以テ重要ナルモノトス。

可検査ノ小片ヲ、水或ハ生理的食鹽水ノ少許ヲ以テ浸漬後液分ヲ壓出シ、ソノ一滴ヲ載物硝子板上ニ取り、覆蓋硝子板ヲ被セ鏡檢スベシ。然ル時可検査ガ乳汁ヨリ由來セルモノナレバ、光線ヲ強ク屈折スル、多數ノ乳汁球ヲ

第三十八圖 人乳大



第三十九圖 初乳大



見、モシソガころすとるむナル時ハ、乳汁球中ニ大ナル、直径三〇みくろンニ達スル、有核桑實形ノ、所謂こ

ろすとるむ小體ヲ檢出スベシ。強廓大ヲ以テ窺フ時ハ、二—五みくろン大ノ乳汁球多數、及乳腺ノ上皮細胞ヲモ見ル。ころすとるむ小體ヲ檢出シタル時ハ、産後尙數日ヲ經過スルノミナルヲ想定スルヲ得、何トナレバころすとるむ小體ハ、通常産後五、六日ニシテ消失スルモノナレバナリ、人乳ナルヤ將タ他ノ動物ノ乳汁ナルカラ、沈降素檢法及過敏性反應等ニ依リテ區別セントスル方法アレドモ法醫學的乳汁斑検査ニテハ未ダ成功ノ域ニ達セズ。

うみこふ氏反應

モシ多量ノ新鮮ナル乳汁ヲ手ニスルコトヲ得バ、ソガ人乳ナルカ將タ牛乳ナルカハ、所謂うみこふ(Umlkoff)反應ニ依リテ鑑別スルコトヲ得ベシ。
うみこふ氏反應、乳汁五珄ヲ取り、之ニ一〇%ノあんもにあ水二、五珄ヲ加へ、六十度ニ十五分間熱スレバ、人乳ナレバ紫色ヲ呈シ、牛乳ナレバ帶黃褐色ヲ呈ス。
伊藤、武部氏ニヨレバ、紫外線ニ照セバ牛乳ハ淡黃色、人乳ハ淡紫灰白色ノ調子アレバ、容易ニ之ヲ鑑別スルコトヲ得ト云ヘリ。

八、膿汁斑及喀痰斑検査

Examination of pus and sputum stain.
Examen des taches de pus et crachats
Untersuchung von Eiter- und Sputaflecken.

可検査ヨリ小鱗片ヲ剝取シ、或ハ斑ノ一部ヲ取り、生理的食鹽水ニテ浸軟壓出セル浸出液ヲ、載物硝子板上ニ取り、醋酸ヲ加ヘテ檢シ、膿球多クシテ粘液纖維少キ時ハ膿汁斑ニシテ、粘液小體淋巴球等多キ時ハ、喀痰ナリテ思惟スベシ、但シ喀痰ニテモ膿性ノモノアレバ、只此所見ノミヲ以テ一概ニ決定スルコト能ハズ、上記ノ検査ニ依リテ、ソノ何レナルカラ略決定スレバ、次ニ種々ノ細菌ニ對スル染色法ヲ施シ、ソノ結果ニ依リテ、或ハ淋毒膿斑ナリ、或ハ結核ノ喀痰ナリ等ノ事實ヲ推定スベシ。

九、尿斑ノ検査

Examination of urinstain.
Examen des taches d'urine.
Untersuchung von Harnflecken.

尿ハ元來成形物少キ排泄液ナルヲ以テ、ソノ附着ニ依リテ成レル汚斑ヲ檢シテ、ソガ尿斑ナルコトヲ決定スルハ、困難乃至不可能ノ事ナリ。

膿汁斑及喀痰斑検査

尿斑検査

糞尿斑ノ疑アル場合ハ、該斑ノ極メテ濃キ生理的食鹽水浸出液ヲ作り、或ハ必要ニ應ジテ、ソノ浸出液ヲ遠心器ニカケ有形物ヲ集積シ、載物硝子板上ニ取り鏡檢シ、其中ニ尿道ノ上皮細胞、腎臟上皮細胞、圓柱ノ如キ尿中ニ存在スル有形成分ヲ檢出シ、且一面ニハソノ浸漬液ヨリ化學的ニ、尿酸或ハ尿素ヲ檢出シ得レバ、ソガ尿斑ナルコトヲ略決定スベシ。尙尿ニ對スル特有ナル試薬ヲ考察セルモノアリ、ソハウをるふらむ酸ソーだ二五・〇瓦鹽五・〇珪水二五〇・〇珪ノ混合液ニシテ、尿ニ炭酸ソーだヲ加へ而シテ後、本試薬ヲ加フレバ、青色ヲ呈スト云フト雖、此反應ハ尿ノミニ限ラズ呈色スルモノナレバ信ズルニ足ラズ。

十、糞便及糞便斑検査

Examination of feces,
Examen de matieres fecales,
Untersuchung von Kotflecken.

糞便検査

新鮮ナル糞便ナレバ、ソノマ、時計硝子ニ取り、少許ノ生理的食鹽水ヲ加ヘテコトク混和シ、之ヲ載物硝子板上ニ取り、鏡檢スルコト通常ノ臨床的検査ニ於ケルガ如シ。

糞便ガ物體上ニ乾變スル時ハ、黄色或ハ褐色ノ薄層トナリ居ルヲ以テ、之ヲ検査スル際ニハ、ソノ小鱗片ヲ剝取シ、生理的食鹽水ヲ加ヘテ浸漬軟化セシメ、式ノ如ク顯微鏡標本ヲ作りテ検査スベシ。

可檢斑ノ中ヨリ半消化セル横紋筋纖維、澱粉顆粒、結締織、弾力性纖維、穀物ノ穀皮種々ノ植物纖維、扁平細胞、脂肪酸ノ結晶、磷酸鹽結晶、微菌、蟲卵、蟲體ノ一部等ヲ證明スレバ、ソガ糞便ナルコトヲ知ル。尙糞便ナルコトヲ決定スルニ都合ヨキハ、ソノ特有ナル臭氣ナリ。モシ乾着セル糞便ナレバ、之ヲ生理的食鹽水ニ浸漬シツ、硝子鏡内ニ氣密ニ入レ置キ、一晝夜ノ後之ヲ試臭スレバ、多クハ明カナル糞便臭ヲ感ズルコトヲ得ルモノナリ。

糞便或ハソノ斑中ノ有形成分ヲ檢シテ、ソノ糞便ガ如何ナル季節ニ排出セシモノナルカ、或ハ乳兒ノ糞便ナルカヲ見出スコトヲ得ルコトアリ。例ヘバ糞便中ニ莓實ヲ多ク見出セバ、ソハ夏季ニ排泄サレタル糞便ナランカト疑ヒ、又ソノ中ニ乳汁球ノミヲ多ク見出セバ、乳兒ノ排出セルモノナルヲ推定スルコトヲ得、又糞便斑ヲ化學的ニ検査シテ、中毒ナルヲ知ルヲ得ルコトアリ。

人糞ナルカ、動物ノ糞便ナルカヲ區別スルニハ、全クソノ中ニ在ル有形成分ニ依ルモノニシテ、生物學的検査ニヨリテ、之ヲ區別スル方法ハ未ダ成功セズ。

十一、腦質斑検査

Examination of cerebral substance,
Examen des Matieres cerebrales,
Untersuchung von Hirnsubstanz

腦質斑検査

腦質ノ一片ガ兎器、或ハ物體ニ乾着セル時ハ、叮嚀ニ之ヲ剝取シ、生理的食鹽水ニテ浸軟シ、少許ヲ載物硝子板上ニ取り、直ニ或ハ染色ヲ施シテ腦ニ特有ナルぐりあ細胞、みえりん球、節細胞ノ存否ヲ檢シ、ソノ然ルヤ否ヲ決定スベシ。

ソノ他ノ臟器片ノ乾着セル場合モ、之ト同様ノ所置ニ依リ、該臟器ニ特有ナル細胞、或ハ組織ノ有無ヲ檢シ、然ル後ソガ斷定ヲ與フベシ。

十二、骨質検査

Examination of bones.
Examen des os.
Knochen-untersuchung.

イ、人骨ナルヤ獸骨ナルヤ

Human or animal bone
Os humans ou animaux
Menschen-oder Tierknochen.

骨質検査
人骨カ獸骨カ

第一編 物品検査 十二、骨質検査

二一〇

骨質検査ニ於テ、吾人ノ先ヅ以テ決定セザルベカラザルハ、人骨ナルヤ將タ獸骨ナルヤニ在リ、コハ完全ナル骨片アル時ハ、ソノ形、大サ等ニ依リテ多クハ容易ニ判断スルコトヲ得レドモ、若シ小ナル骨片ナル時ハ、之ヲ鑑定スルコト困難ナリ。然レドモソノ骨片ノ一部ヲ取り、研磨標本ヲ作りテ之ヲ鏡檢スレバ、人骨ニテハハ―べる氏小管ハ大ニシテソノ數ハ少ク、動物骨ニテハハ―べる氏管ハ細クシテ數多キニ依リテ、區別スルコトヲ得ト云フ人アレドモ、コハ必ズシモ然ラズ、ソノ他動物骨ハ比較的重クシテこんばくと質多シ、組織學的所見ニ於テモ、胎兒ノ骨ハ猿類ノソレニ近シト云フ。而シテ小兒ノ骨ト犬猫狐狸等ノ骨トハ、單ニソノ一部分ヲ見タルノミニテハ鑑別困難ナルコトアリ、故ニ人骨ナルヤ將タ獸骨ナルヤヲ區別スルニハ、是非共生物學的ニ沈降素檢法ニ依ラザルベカラズ。

骨質ヲ以テ沈降素檢法ヲ行ハンニハ、先ヅソノ小骨片ヲ鉋鋸等ニテ極メテ小片、或ハ寧ロ粉狀トナシ、生理的食鹽水浸出液ヲ作り、之ヲ豫メう―れんふうと氏法ニヨリ作り置ケル、對人血清家兎特殊血清ニ積層スベシ、然ルトキ若シソノ人骨ナレバ、直ニ兩液ノ接觸面ニ白色絮狀ノ沈澱ヲ生ズ、尙骨質ガ非常ニ脂肪ニ富メル場合ニハ、前以テあるこほる、え―てる、或ハべんじんヲ以テ所置シ、脂肪ヲ脱去シ、而シテ後生理的食鹽水浸漬液ヲ作ルベシ。一般ニ骨質ガ古クナル程蛋白ノ含有量少クナルヲ以テ、材料ヲ多ク用ヒザルベカラズ、今骨質ノ古サト、用フベキ材料ノ重サト、生物學的検査ノ結果ガ如何ナル關係ニアルカヲ表示スレバ左ノ如シ。

骨質ノ古サト
沈降反應

新鮮骨或ハ一月ヲ經過セル骨質ノ骨粉

骨質ノ古サ
用ヒシ量
生物學的検査ノ結果

空氣中ニテ四十年ヲ經過セシ骨粉	二〇・〇瓦	(+)
同上九年ノ骨粉	八・〇瓦	(+)
百年土中ニ在リシ骨片ヨリノ骨粉	一〇・〇瓦	(±)
水中ニ七ヶ月ニ在リシ骨粉	二〇・〇瓦	(+)
煮沸水ニ十分・五分・三分ニアリシ骨粉	〇・二五瓦	(+)
百度ノ熱氣中ニ在リシ骨粉	二五・〇瓦	(+)
百五十度ノ熱氣中ニ在リシ骨粉	一〇・〇瓦	(+)
百五十度ノ熱氣中ニ三十分アリシ骨粉	三〇・〇瓦	(+)
予ノ實驗セル一例ニ於テハ、七ヶ月胎兒ノ腸骨片ヲ骨粉トナシ、約一瓦ヲ得、食鹽水浸出液ヲ作り、免疫價一萬倍ノ特殊血清ヲ積層セシニ、約二十五分ノ後ニ陽性ヲ呈シ、數年間雨露ニ曝サレタル人骨骨粉約三瓦ハ同様ニシテ全ク陰性ナリキ。		

一人ノ骨ナルカ

The bone of one or several persons.
Les os d'une seule ou des plusieurs personnes.
Knochen von einer oder mehreren Personen.

各骨片完全ナル形ヲナセル時ハ、ソノ形態ヲ比較シ大サヲ計リ、或ハ相重複セル骨片ナキヤ等ヲ注意シテ檢スレバ、一人ニ屬スル骨ナルカ、或ハ多人數ノ骨ナルカ區別スルコトヲ得ト雖、モシソノ骨片トナリ居ル時ハソノ決定ハ困難ナルカ或ハ不可能ナリ。

男子ノ骨ナルカ女子ノ骨ナルカ

Determination of the sex.
Détermination du sexe.
Die Bestimmung des Geschlechtes.

骨格ノ種別

第一編 物品検査 十二、骨質検査

二一一

圖十四第



男子骨盤 (Dickinson)

圖一十四第



女子骨盤 (Dickinson)

已ニ異同ノ部ニ於テ述ベタルガ如ク、女子ノ骨ハ一般ニ纖細美麗ニシテ凹凸少ク、ソノ大サ、長サ、厚サ等モ男子ノ同年齡ノモノニ比シ小サシ、尙骨盤ガ存在スレバ、ソノ區別容易ニシテ、男子ノ骨盤ハ狭ク、断面ハ心臟形ニシテ、薦骨ハ狭ク耻骨弓ハ銳角ヲナセリ。之ニ反シ、女子ノ骨盤ハ廣クシテ低ク、断面

骨盤測定法

ハ楕圓形ニシテ、薦骨ハ廣ク耻骨弓ハ弧形ヲナス。

今骨盤測定法ノ大要ヲ示セバ左ノ如シ(盤瀨氏ニヨル)。(第四十三圖參照)

(イ)骨盤上口、後方ハ薦骨岬、及翼ノ上縁、側方ハ腸骨無名線、前方ハ耻骨鶏冠及耻骨縫際ノ上縁ニヨリテ形成セラル。

(ニ)前後徑或ハ真結合線ハ、薦骨岬ノ耻骨縫際後面間ノ最短距離ニシテ、其長サ平均本邦婦人ニテ一〇・七種ヲ算ス。

(三)横徑ハ左右無名線間ノ最遠距離ニシテ、本邦婦人ニ於ケル平均ハ一一・一種ナリ。

(三)斜徑ニハ左右アリテ右側薦腸關節ヨリ左側腸耻結節間距離ヲ右斜徑線、左側薦腸關節ト右側腸耻結節間ノ距離ヲ左斜徑線ト云ヒ、其長サ左右共本邦婦人ニテ一一・〇種ナリ。

(ロ)骨盤腔ハ骨盤上下兩口ノ間ニ介在スル腔隙ニシテ、之ヲ廣狹二部ニ分ツ。

(甲)骨盤廣部ハ骨盤腔ノ上部ヲ占メ、後方ハ第二、第三薦骨椎癒合部、側方ハ腓白底内面上縁、前方ハ耻骨縫際トノ間ニ於ケル想像面ニシテ、殆ンド圓形ヲ呈ス。

(ニ)前後徑、第二、第三薦骨椎癒合部ノ中央ヨリ、耻骨縫際内面ノ中央ニ至ル距離ニシテ、本邦婦人ニテハ一一・三種ヲ普通トス。

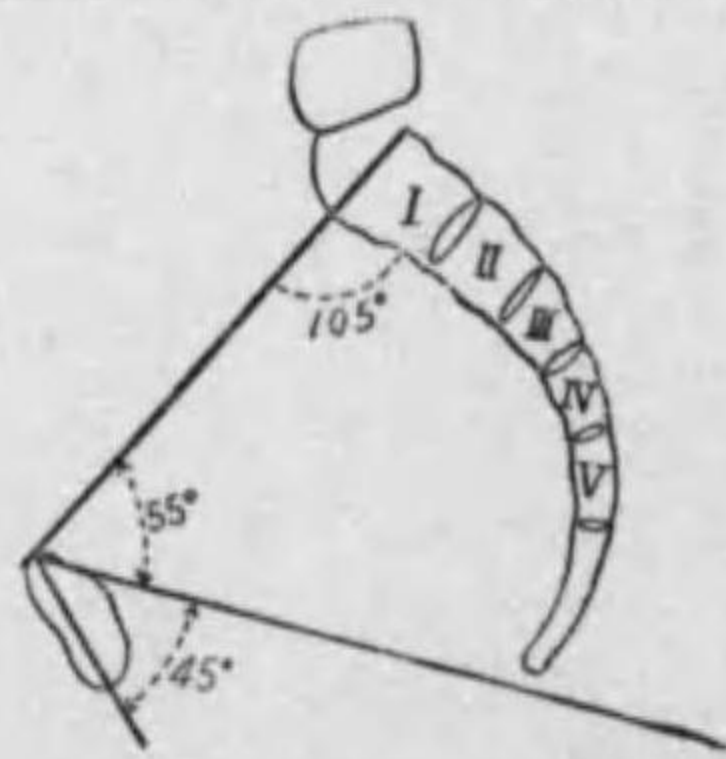
(一)横徑、左右兩腓白底内面上縁間距離ニシテ、其長サ日本婦人ニテハ一〇・六種ナリ。

(三)斜徑、大坐骨截痕上縁ヨリ他側閉鎖上縁ニ至ル間ノ距離ニシテ、左右ノニアリ、其稱呼ハ骨盤入口ニ於ケルト同シ長サ一三・五種ナリ。

(乙)骨盤狹部、骨盤下部ニ在リテ後方ハ薦骨尖端、側方ハ坐骨

圖二十四第 本邦婦人ノ骨盤傾斜(直立時)

小金井大澤博士	44.0度 (50人=就テ)
木下博士	42½" (18人=就テ)
榎博士	33½" (500人=就テ)
佐藤博士	32½" (150人=就テ)
中島學士	37.4" (192人=就テ)



圖三十四第



一、前後徑、尾骶骨尖端ヨリ耻骨縫際下線ニ至ル距離、
二、横徑、兩側坐骨棘間距離ニシテ、
其長サ一〇・〇種ナリ。
三、斜徑其後端ハ移動シ易キ薦骨結節帯ニ達スルヲ以テ一定ノ測定ヲ示ス能ハズ。
(ハ)骨盤下口、骨盤最下部ニ位シ、後方ハ尾骶骨尖端、側方ハ坐骨結節、前方ハ耻骨弓ヨリ成リ稍心臟形ヲ呈ス。

一、前後徑、尾骶骨尖端ヨリ耻骨縫際下線ニ至ル距離、
二、横徑、兩側坐骨結節間距離ニシテ其長サ一〇・〇種、
三、斜徑、一定セズ。

骨盤測定數

獨一直徑	骨盤上口	骨盤潤部	骨盤狭部	骨盤下口
一一・〇	一一・七五	一一・五〇	一一・五〇	九・五

逸子女	日本子女	本日子女	又柳今田氏ニヨレバ男女骨盤ノ差異大約第十五表ノ如シ。
横徑	斜徑	直徑	
一一・五	一一・七	一一・一	
一一・五〇	一一・三〇	一一・五〇	
一一・〇〇	一一・五〇	一一・六〇	

第十五表 (上)

骨盤各部		骨盤各部		骨盤各部		骨盤各部		骨盤各部	
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
全形	狭シテ小長ニ	全形	狭シテ小長ニ	全形	狭シテ小長ニ	全形	狭シテ小長ニ	全形	狭シテ小長ニ
上口	心臟形	上口	心臟形	上口	心臟形	上口	心臟形	上口	心臟形
下口	隘	下口	隘	下口	隘	下口	隘	下口	隘
骨盤腔	狭シテ小深ニ	骨盤腔	狭シテ小深ニ	骨盤腔	狭シテ小深ニ	骨盤腔	狭シテ小深ニ	骨盤腔	狭シテ小深ニ
薦骨尾間骨	長クシテ僅ニ後方ニ凸	薦骨尾間骨	長クシテ僅ニ後方ニ凸	薦骨尾間骨	長クシテ僅ニ後方ニ凸	薦骨尾間骨	長クシテ僅ニ後方ニ凸	薦骨尾間骨	長クシテ僅ニ後方ニ凸
坐骨耻骨	長	坐骨耻骨	長	坐骨耻骨	長	坐骨耻骨	長	坐骨耻骨	長
耻骨接合	狭	耻骨接合	狭	耻骨接合	狭	耻骨接合	狭	耻骨接合	狭
耻骨弓	七十五度	耻骨弓	七十五度	耻骨弓	七十五度	耻骨弓	七十五度	耻骨弓	七十五度

とるト氏 (Toldt Maschka's Handb. III, 562) ニ據レバ、左ノ數ハ重要ナル骨盤直徑ノ平均尺度ト看做スヲ得ベキモノナリト。

(下) 表 五十 第

骨盤出口ニ於テ	骨盤腔ニ於テ	骨盤入口ニ於テ	眞正結合線	
			斜徑線	眞正結合線
横徑線	横徑線	斜徑線	一三三密透	一三八密透
縦徑線	縦徑線	斜徑線	一二七密透	一三五密透
横徑線	横徑線	斜徑線	一一四密透	一二四密透
縦徑線	縦徑線	斜徑線	一一〇密透	一二〇密透
横徑線	横徑線	斜徑線	七五乃至九五密透	九〇乃至一一〇密透
縦徑線	縦徑線	斜徑線	一一〇密透	一一〇密透

ニ、骨格ニヨリテ年齢ノ決定

Determination of the age by the bones.
Determination de l'age d'après les os.
Die Altersbestimmung mittels Knochen-untersuchung.

先ヅ全骨格或ハ各骨ノ長サニヨリテ、ソノ身長年齢ヲ知ルヲ得ルコトアリ、例ヘバ歐人ニテハ上膊骨ノ五倍或ハ大腿骨ノ三、七倍ハ通常全骨格ノ長サニ相當シ、生前ノ身長ハ全骨格ノ長サニ約五種ヲ加ヘタルモノニ相當スト云フ。今各骨ノ長サヲ知リテ、成人身長ノ大體ヲ計算スル係數(歐人)ヲ示セバ左表ノ如シ。

骨名	男(係數)	女(係數)
大 腿 骨	三・五六六	三・七七一
上 膊 骨	四・五三三	四・六一一
尺 骨	四・五八八	四・六六六
腕 骨	五・〇六六	五・二二二
手 骨	六・四一一	六・六六六
腕 骨	六・八六六	七・一六六

成人身長ノ大體ヲ計算スル係數

骨格ニテ年齢ノ決定

(上) 表 六十 第

日本人ノ身長ト各骨トノ相關係數			
骨名	男	女	
上 膊 骨	左	5,474	5,577
	右	5,337	5,440
腕 骨	左	7,112	7,500
	右	7,086	7,415
尺 骨	左	6,638	6,885
	右	6,606	6,813
大 腿 骨	左	3,836	3,901
	右	4,840	3,934
腕 骨	左	4,731	4,812
	右	4,792	4,822
手 骨	左	4,812	4,912
	右	4,813	4,920

然レドモコハ歐洲人ニ對スル相關係數ナルヲ以テ、直ニ取テ我國人ニ應用スルハ甚ダ危險ナルコトナリ、何トナレバ、彼ト我トハ大ニ其風俗習慣ヲ異ニシテ、且人種的ノ差異アルコトナレバ、其四肢骨ノ長サト身長トノ間ニモ相當ノ差アルハ自明ノ理ナレバナリ、即チ安藤守元氏ハ夙ニ此點ニ注目シ、日本人ノ身長ト、各骨片

表七十第

肢骨長總平均值(單位耗)

妊婦月數	鎖骨		肩胛骨		上膊骨		尺骨		橈骨		大腿骨		脛骨		腓骨	
	共	骨	高	幅	共	骨	共	骨	共	骨	共	骨	共	骨	共	骨
II	8	3	—	—	8	3	6	—	6	—	17	—	16	—	9	—
III	16	14	4	4	15-20	11	17	10	15	9	21	10	16	8	20	1
IV	24	14	13	11	24	23	30-35	22	—	19	34	19	31	17	32	21
V	—	20	19	16	40-45	18	—	35	—	32	—	37	—	34	—	33
VI	38	32	28	19	52	43	40	40	27	39	57	40	43	43	43	40
VII	—	38	29	23	—	52	—	46	—	42	—	55	—	50	—	49
VIII	41	42	35	25	59	52	—	49	—	48	65	61	65	57	—	54
IX	—	43	—	—	—	61	—	59	—	51	85-90	71	—	60	70-75	58
X	43	47	40	30	77	68	73	59	65	55	90	76	79	68	78	67
成熟初生兒	—	47	41	30	78	68	76	62	68	53	96	84	81	74	80	71

表中「共」トセルハ軟骨ヲ共ニ加算セル長サ、「骨」トセルハ「骨質ノミノ長サ」ヲ意味ス

頭骨總平均值(單位耗)

妊婦月數	後頭鱗		後頭骨基部		顛頂骨		前頭鱗		顛額骨		上脛骨		額骨		楔狀骨體	
	高	幅	長	幅	前後徑	左右徑	高	幅	高	幅	高	幅	高	幅	長	幅
II	—	—	—	—	—	—	4	3	—	—	1	—	—	—	—	—
III	5	8	—	—	19-24	8-22	6	7	3	5	3-5	—	—	—	—	—
IV	8	18	5	4	23	20	17	18	7	9	8	11	7	10	—	—
V	8	24	8	—	37	32	27	27	8	12	11	19	—	—	—	—
VI	43	41	9	8	54	34	42	41	15	22	18	21	17	23	7	15
VII	44	43	10	11	62	44	44	40	22	26	20	23	16	20	7	16
VIII	52	50	12	14	67	65	51	42	19	26	20	39	18	20	10	16
IX	54	61	—	—	71	67	54	44	19	24	21	42	—	—	—	—
X	63	68	13	14	84	86	57	49	18	31	27	37	20	27	—	—
初生兒	64	63	14	16	85	81	62	54	29	33	29	41	18	27	12	18

各骨片重量ノ平均值(單位耗)

妊婦月數	骨															
	頭				上肢骨				下肢骨				其他			
	後頭骨基部	前頭骨	顛頂骨	顛額骨	上脛骨	下脛骨	額骨	楔狀骨	鎖骨	肩胛骨	上膊骨	尺骨	橈骨	大腿骨	脛骨	腓骨
IV	8	2	—	7	5	2	4	5	2	—	—	—	3	5	8	3
VI	92	16	21	102	131	20	28	38	17	28	13	15	33	65	30	23
VII	93	20	26	89	124	27	27	37	14	31	17	17	31	62	27	22
VIII	137	30	32	123	191	29	45	50	21	44	27	19	41	83	37	27
IX	376	61	65	263	468	—	95	112	29	95	—	60	143	200	91	64
初生兒	406	51	63	290	503	65	84	105	42	89	—	—	—	—	—	—

(下)表六十第

次ニ又各骨片ノ大サ及重サニヨリテ、胎兒ノ發育程度ヲモ知ルコトヲ得ルモノニシテ、高田氏ニ依レバ

身長	大腿骨		脛骨		腓骨		上膊骨		橈骨		尺骨	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
1400	365	365	295	292	291	291	256	262	197	198	211	212
1420	370	370	300	296	295	295	259	266	200	200	214	215
1440	375	375	304	301	299	299	263	270	202	203	217	218
1460	381	380	308	305	303	303	267	274	205	206	220	221
1480	386	385	312	309	308	307	270	277	208	209	221	224
1500	391	390	316	313	312	311	274	281	211	212	226	227
1520	396	395	320	317	316	315	278	285	214	215	229	230
1540	401	400	324	321	320	319	282	289	217	218	232	233
1560	403	405	328	325	324	323	286	292	219	220	235	236
1580	411	410	332	329	328	327	289	296	222	223	238	239
1600	416	415	336	333	332	331	292	300	225	226	241	242
1620	421	420	340	337	336	335	296	304	228	229	244	245
1640	426	425	344	341	340	339	300	307	231	231	247	248
1660	431	430	348	345	344	343	303	311	233	234	250	251
1680	436	435	352	349	348	347	307	315	236	238	253	254
1700	441	440	356	353	352	351	311	319	239	240	256	257
1720	446	445	360	357	356	355	314	322	241	243	259	260
1740	451	450	364	361	360	359	318	323	245	246	262	263

女

身長	大腿骨		脛骨		腓骨		上膊骨		橈骨		尺骨	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
1400	359	356	291	286	285	285	251	257	187	189	203	205
1420	364	361	295	290	289	289	255	261	189	191	206	208
1440	369	366	299	294	293	293	258	265	192	194	209	211
1460	374	371	303	298	297	297	262	266	195	197	212	214
1480	379	376	307	292	291	291	265	272	199	200	215	217
1500	384	381	311	306	305	305	269	276	200	202	218	220
1520	389	386	315	310	309	309	273	280	203	205	221	223
1540	394	391	319	314	314	313	276	283	205	208	224	226
1560	399	396	323	318	318	317	280	287	209	210	227	229
1580	404	401	327	322	322	321	283	290	211	213	230	232
1600	409	406	331	326	326	325	287	295	213	216	233	235
1620	414	411	335	330	330	329	291	298	216	218	236	238
1640	419	416	339	334	334	333	294	301	218	221	239	241

ノ長サトノ相關係數ヲ研究シ、前記第十六表(上)ヲ得タリ。或ハ第十六表(下)ニ依ラバ、計算ヲ用キズシテ、骨片ノ長サヨリ其身長ヲ概算スルコトヲ得ベシ。

骨片測定法

ソノ大サヨリモ重サノ方ガ之ノ目的ニ適當ナリト云フ。今數多ノ學者ノ計算セルモノヲ一括平均シテ、之ヲ表示スレバ、茲ニ掲載セル第十七表ニ於ケルガ如シ。

此表ニ於テ各骨片ノ重量ハ、製骨乾燥セルモノヲ用ユレバヨシト雖、ソノ大サ或ハ長サヲ計ルニ於テハ一定ノ規定ナカルベカラズ、一般ニハ左記ノ如ク、とると氏ノ法ニ從ヒテ測定スルヲ常トス。

即チ扁平骨ヲ計ルニハ、曲尺ヲ以テ各骨片ノ外面ニ沿ヒテ測定スルモノニシテ、敢テ直徑ニアラズ、之ヲ各骨ニ就テ詳説スレバ左ノ如シ。

後頭鱗ノ高サハ、大後頭孔ノ後縁ト鱗尖部トノ間ノ距離、同幅ハ假性縫合ノ兩端ノ距離。

顛頂骨ノ幅ハ顛頂結節ヲ過リテ、正中線ニ平行ニ卷尺ヲ置キ、其ノ前頭縁及ビ後頭縁ニ交ル、二點間ノ距離、同高サハ、同様ニ骨ノ前頭縁ニ平行シテ左右ノ骨端ニ交ル二點間ノ距離。

前頭鱗ノ高サハ、上眼窩截痕ヨリ前頭結節ヲ過リテ、正中線ニ平行ニ走リ、其ノ骨上縁ニ交ル點迄ノ距離、同幅ハ正中線ヨリ前頭結節ヲ過リ、水平ニ足リテ冠狀縫合ニ達スル距離。

顛頂鱗ノ高サハ頰骨突起ノ後根部ヨリ、鱗ノ上端迄ノ距離、同幅ハ、顛頂截痕ヨリ水平ニ前縁ニ至ル迄ノ距離、扁平ニアラザル骨ヲ測ルニハ、卷尺ヲ用ヒズシテ、二點間ノ直線距離ヲ採ル。

上齶骨ノ高サハ、該骨、前頭突起ノ上端ヨリ、犬齒ト外門齒間ノ齒槽間隙ノ下縁迄ノ距離。同幅ハ頰骨突起ノ後下縁ヨリ、口蓋突起ニ直角ニ引ケル直線ノ長サノ二倍ヲ採ル。是レ胎兒ノ上齶骨ハ未ダ左右兩側ニ分レ居リ、兩端ノ頰骨突起ノ下端間ノ直線距離ヲ測定シ得ザレバナリ。

管狀骨ハ、軟骨ヲ除キ、骨質部ノミノ長軸ノ兩端間ノ距離。

鎖骨ハ、稍S字狀ヲ呈スレドモ亦、他ノ管狀骨ニ準

ジテ兩端間ノ直線距離。

肩胛骨ノ高サハ、卷尺ヲ以テ其内面ニ於テ（外面ニハ肩胛棘等ノ突起アリテ計測ニ不便ナルガ故ニ）内側角ト、下角トノ間距離、同幅ハ、關節窩ノ部ヨリ肩胛棘ノ上縁ニ、平行ニ卷尺ヲ置キテ、其脊椎縁ニ交ル點迄ノ距離。

頰骨ハ、其形（菱形）ニ依リテ直ニ知ラル、ガ如ク上下及ビ左右ノ四突起ノ相對スル直線距離ヲ採ル。

後頭骨基底部ノ長サハ、大後頭孔ノ前縁ヨリ、骨前縁迄、同幅ハ左右縁ノ殆中央ニ於ケル小突出部（名稱未ダ無シ）間ノ直線距離。

楔狀骨體ノ長サハ、其ノ前後徑、同幅ハ左右ニ在ル舌狀ノ突起（無名）ノ兩側端ノ直線距離。

此規定ニ依リテ測定シ得タル數ヲ、第十七表ニ比較シテ凡ソ何ヶ月ノ胎兒ナルカラ決定スベシ。又成長期ノモノニ對シテハ、各骨ノ長キ大サヲ測定

齡骨ノ大サト年

表 八 十 第

骨	性	年	身長	肩 胛 骨			上 齶 骨			尺 骨			機 骨			全身			
				長サト軟骨ト共	長サ軟骨	幅	骨 幹	上軟骨	下軟骨	全長	骨 幹	上軟骨	下軟骨	全長	骨 幹		上軟骨	下軟骨	
男	男	初生兒	48.5	43.5	41	34	29	65	10	5	80	62	5	3	70	55	4	2	61
男	女	初生兒	52.0	46	46	33	26.5	66	11	6	83	61	6	4	71	54	3	3	60
女	女	一年半	74	64	58	48	45	101	11	7.5	119.5	85	8.5	4.5	98	77	3	4	84
女	女	二年半	83	66	63	54	52	116	10	8	134	98	8	4	110	87	3	4	94
女	女	四年	96	80	80	72	64	146	12	8	166	133	7	5	125	102	3	5	110
男	男	六年半	106	84	84	79	65	164	15	7	186	197	10	3	150	124	3	6	133
男	男	十二年	137.8	110	116	105	78	247	15	8	270	206	8	5	219	181	3.5	6.5	191
男	男	十五年	152	134	125	115	97	272	17	8	297	216	8	6	230	195	4	7	206
男	男	廿四年	163	140	141	—	113	—	—	—	300	—	—	—	236	—	—	—	221
男	男	廿四年	175	161	160	—	114	—	—	—	326	—	—	—	264	—	—	—	233

(表中身長ノミハ體單位他ハ皆體單位ナリ) (とると氏)

年	齡	脊 柱		肩 胛 骨		上 膊 骨	尺 骨	橈 骨	手 骨		大 骨 盤	大 腿 骨	胫 骨	腓 骨	足 骨
		サ長ノ	幅	サ長ノ	幅				サ長ノ	幅					
妊婦六ヶ月ノ終リニ於テ胎兒	身長三十一仙	一三三	二五	二五	一六	五〇	四〇	二六・五	三四	二九	二七	五六	四三	四三	三九
身長四十八仙	初生男	二三五	四三五	四一	二九	八〇	七六	六一	六一	五一	四六	九〇	七一	七三	七〇
身長五十二仙	五仙	二六〇	四六	四六	二六・五	八三	七一	六〇	七一	五七	五三	九九	八一	八〇	七二
身長七十四仙	女	三三六	六四	五八	四五・五	九五	九八	八四	八七	七一	五七	一一一	一一三	一一二	一〇四
身長八十三仙	女	三七八	六六	六三	五二・三	一〇一	九八	八四	八一	七一	六一	一一一	一一三	一一二	一〇四
身長九十六仙	女	四四四	八〇	八〇	六四・一	一一〇	一一〇	九四	一一〇	八八	七一	一一一	一一三	一一二	一〇四
身長百六仙	男	四九四	八四	八四	六五・一	一一五	一一五	一〇一	一一三	一〇八	一一〇	一一一	一一三	一一二	一〇四
身長百七十八仙	男	五八四	一一〇	一一〇	七二・七	一二〇	一二〇	一〇九	一二三	一一三	一一〇	一一一	一一三	一一二	一〇四
身長百五十二仙	男	六四六	一二五	一二五	七九・七	一二三	一二三	一一二	一二六	一一五	一一二	一一三	一一五	一一四	一〇六
身長百六十三仙	男	七六五	一四〇	一四一	九七・二	一三〇	一三〇	一二二	一三七	一二七	一二二	一二三	一二五	一二四	一一六
身長百七十五仙	男	八七五	一六一	一六一	一一四・三	一四〇	一四〇	一三三	一四五	一三七	一三三	一三四	一三五	一三四	一二六
身長百七十五仙	男	九七五	一六一	一六一	一二四・三	一四二	一四二	一三五	一五九	一四一	一四〇	一四一	一四三	一四二	一二六

シ、第十八表ニ對比シテソノ年齢ヲ決定スルノ補助トナスコトヲ得。又とると氏ハ骨ニ就キ測定シテ第十

九表ノ如キ結果ヲ得タリ、以テ年齢鑑定ノ参考トナスヲ得ン。但シ第十八、九表ハ耗ヲ以テ單位トシ各ソノ出所ヲ同ジクスレドモ、記載スル所ニ多少ノ差異アレバ茲ニ掲記セリ、更ニとると氏ハ各年齢ニ於ケル頭骨ヲ測定シテ、第二十表ヲ得タリ。

第二十表

年	齡	後頭骨鱗狀部		顛頂部		前頭骨鱗狀部		額骨鱗狀部		乳頭突 起ノ横ノ最大ノ幅	上 額 骨	上 額 骨	上 額 骨	下 額 骨
		高	幅	高	幅	高	幅	高	幅					
成長五十一・六	初産男	六七	六六	八五	八〇	六二	五七	二三	三五	五五	五一	二四	四二	三三
三ヶ月	女	七八	八三	一一一	九四	七六	六九	二四	三七	七一	八六	三一	五一	四〇
六ヶ月	女	八三	九二	一一二	一〇四	八〇	六一	二五	三三	七四	九〇	三二	五一	四一
九ヶ月	女	九一	一〇四	一二三	一一〇	九五	六四	二六	三三	七九	一〇一	三三	五一	四一
十三ヶ月	男	九二	一〇八	一二三	一一〇	九五	六四	二六	三三	七九	一〇一	三三	五一	四一
二	男	一〇〇	一二〇	一三三	一二四	一〇八	七二	二七	三三	八五	一一一	三四	五一	四一
三	男	一〇八	一二五	一三一	一二二	一一六	七二	二七	三三	八五	一一一	三四	五一	四一
四	男	一一〇	一二二	一三〇	一二二	一一四	七一	二八	三三	八四	一一〇	三四	五一	四一
五	男	一一〇	一二三	一三三	一二五	一一六	七一	二八	三三	八四	一一〇	三四	五一	四一
七	男	一一〇	一二五	一三三	一二五	一一六	七一	二八	三三	八四	一一〇	三四	五一	四一
九	男	一一〇	一二五	一三三	一二五	一一六	七一	二八	三三	八四	一一〇	三四	五一	四一
十	男	一一一	一二八	一三五	一二九	一一七	七一	二八	三三	八四	一一〇	三四	五一	四一
十	男	一一一	一二八	一三五	一二九	一一七	七一	二八	三三	八四	一一〇	三四	五一	四一
十	男	一一一	一二八	一三五	一二九	一一七	七一	二八	三三	八四	一一〇	三四	五一	四一
十	男	一一一	一二八	一三五	一二九	一一七	七一	二八	三三	八四	一一〇	三四	五一	四一

尺骨	17.7(15.0-19.0)	0.02(0.01-0.03)	0.1(0.06-0.15)
大腿骨	18.1(15.0-21.0)	0.02(0.01-0.03)	0.15(0.08-0.22)
胫骨	15.1(13.0-17.0)	0.01(0.005-0.015)	0.1(0.05-0.15)
腓骨	15.1(13.0-17.0)	0.01(0.005-0.015)	0.1(0.05-0.15)

五ヶ月

骨名個数	長	容積(立方厘米)	重量(グラム)
平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)
肩胛骨	10.1(8.0-12.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
上膊骨	10.1(8.0-12.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
尺骨	10.1(8.0-12.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
橈骨	10.1(8.0-12.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
大腿骨	10.1(8.0-12.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
胫骨	10.1(8.0-12.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
腓骨	10.1(8.0-12.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)

六ヶ月

骨名個数	長	容積(立方厘米)	重量(グラム)
平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)
肩胛骨	11.1(9.0-13.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
上膊骨	11.1(9.0-13.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
尺骨	11.1(9.0-13.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
橈骨	11.1(9.0-13.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
大腿骨	11.1(9.0-13.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
胫骨	11.1(9.0-13.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
腓骨	11.1(9.0-13.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)

七ヶ月

骨名個数	長	容積(立方厘米)	重量(グラム)
平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)
肩胛骨	12.1(10.0-14.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
上膊骨	12.1(10.0-14.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
尺骨	12.1(10.0-14.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
橈骨	12.1(10.0-14.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
大腿骨	12.1(10.0-14.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
胫骨	12.1(10.0-14.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
腓骨	12.1(10.0-14.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)

八ヶ月

骨名個数	長	容積(立方厘米)	重量(グラム)
平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)
肩胛骨	13.1(11.0-15.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
上膊骨	13.1(11.0-15.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
尺骨	13.1(11.0-15.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
橈骨	13.1(11.0-15.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
大腿骨	13.1(11.0-15.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
胫骨	13.1(11.0-15.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
腓骨	13.1(11.0-15.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)

九ヶ月

骨名個数	長	容積(立方厘米)	重量(グラム)
平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)
肩胛骨	14.1(12.0-16.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
上膊骨	14.1(12.0-16.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
尺骨	14.1(12.0-16.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
橈骨	14.1(12.0-16.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
大腿骨	14.1(12.0-16.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
胫骨	14.1(12.0-16.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
腓骨	14.1(12.0-16.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)

初生児

骨名個数	長	容積(立方厘米)	重量(グラム)
平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)	平均値(最小値-最大値)
肩胛骨	15.1(13.0-17.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
上膊骨	15.1(13.0-17.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
尺骨	15.1(13.0-17.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
橈骨	15.1(13.0-17.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
大腿骨	15.1(13.0-17.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
胫骨	15.1(13.0-17.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)
腓骨	15.1(13.0-17.0)	0.01(0.005-0.015)	0.05(0.02-0.08)

化骨ト年齢

次ニ骨發育ノ状態ニテ年齢ヲ鑑定スルコトヲ得ルコトアリ。今ソノ概要ヲ次ニ述ベム。

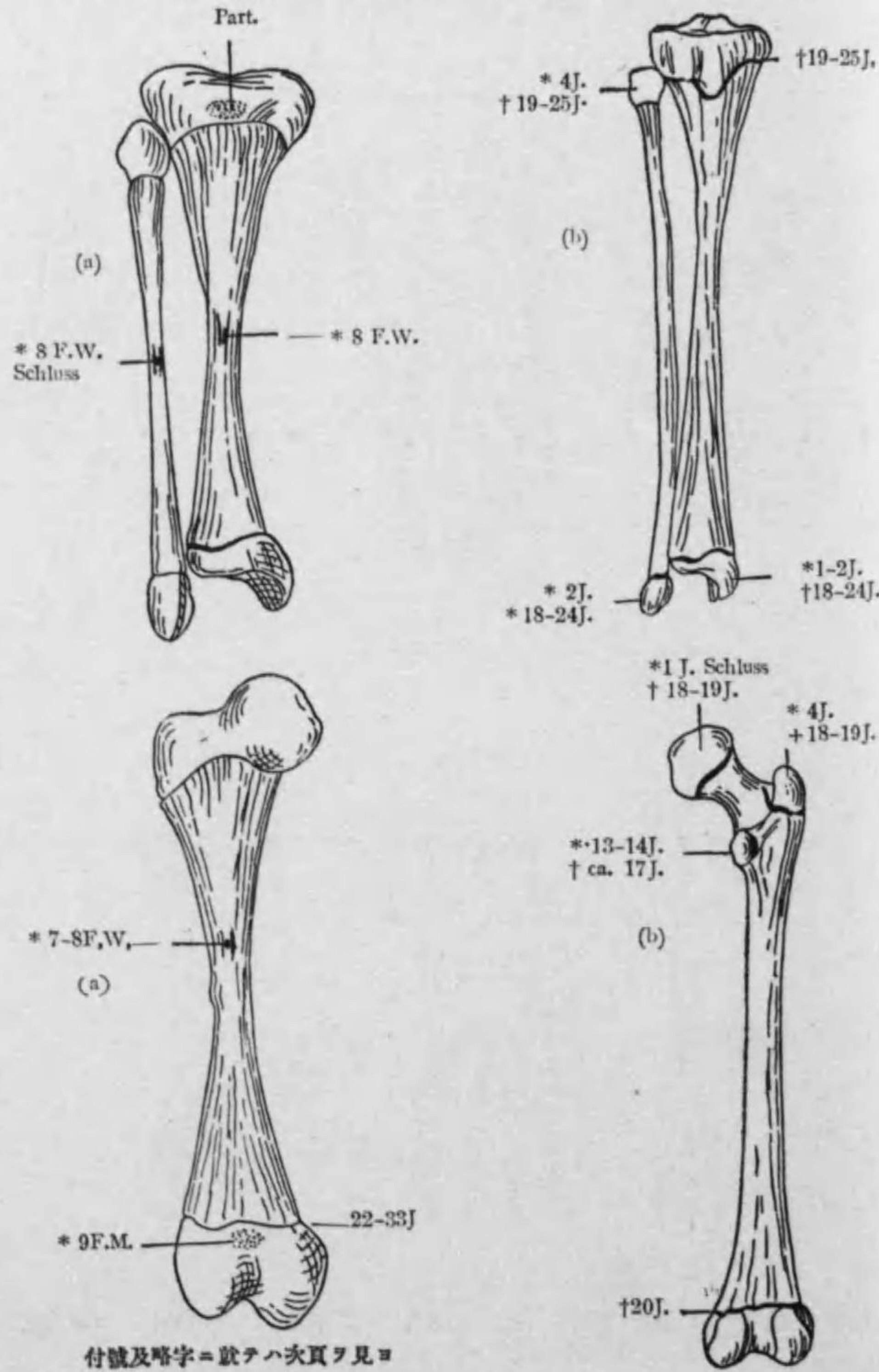
生後第一年、分娩後第一月以内ニ於テ、前頭縫合融合シ大顛門狭小トナリ、乳様百會融合シ、乳様突起ノ初兆ヲ呈シ、蝴蝶骨大翼ハ體ト癒合シ、下顎骨兩半部亦相連結ス、載域ノ前弓ニハ一骨核ヲ發生シ、椎骨弓ハ先ヅ胸椎及下部頸椎、次テ腰椎、終リニ載域ニ於テ骨結合ヲ營ム、胸骨ニ於ケル骨核ハ増加シ、嚮嘴突起、上膊骨頭大腿骨頭ニ新核ヲ生ズ。

第二年、前頭縫合全ク化骨シ、大顛門閉鎖ス、脛骨弓ノ骨癒合益進ス、上膊骨大結節、橈骨腓骨椎骨掌骨趾骨ノ骨頭ニ骨核ヲ形成ス。

第三年、後頭骨鱗狀部ハ體ト癒合シ、顛骨乳様突起完成シ、樞軸齒狀突起ハ體ト癒合シ椎骨弓ノ骨結合全クナル。

第四年、劍狀突起ニ於テ化骨點ヲ形成シ、上膊骨頭ノ小結節、大轉子腓骨上端ニ骨核ヲ生ジ、膝蓋骨化

第 四 十 五 圖 (其 一) (ルヨ = 氏るけるめ)

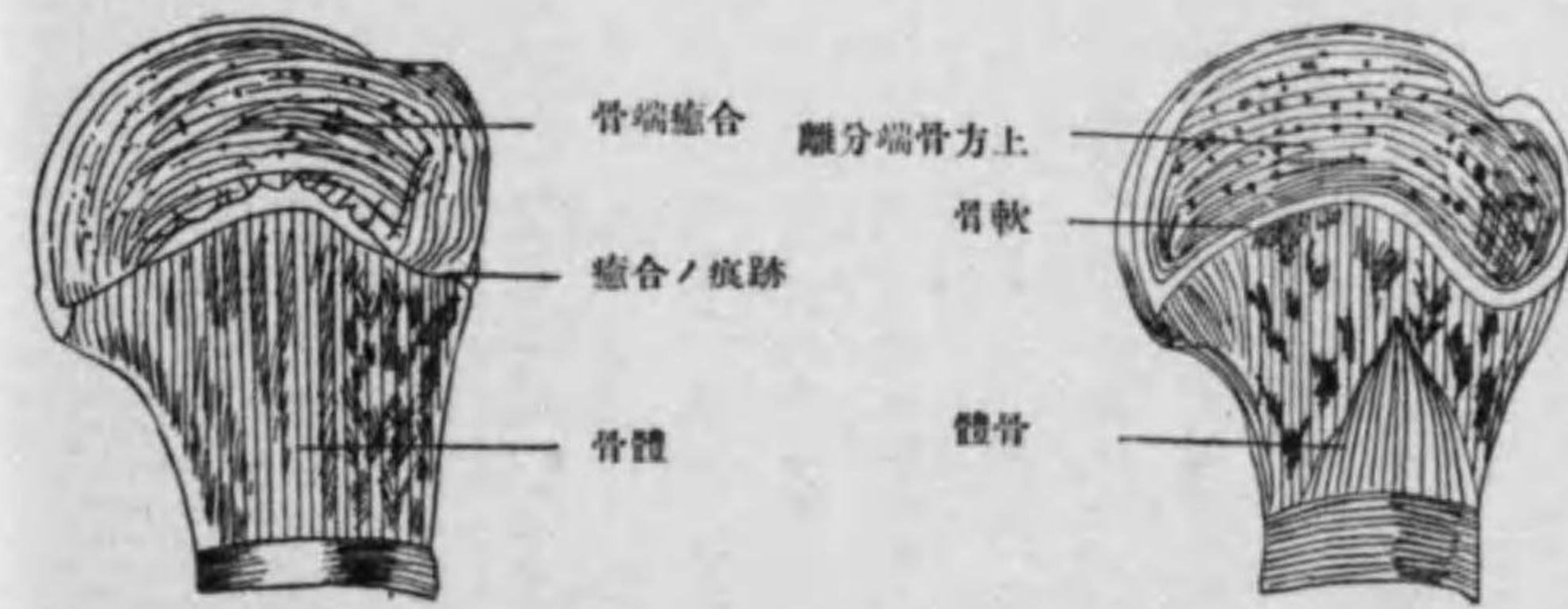


第 四 十 四 圖

面 斷 縦 ノ 端 上 骨 膊 上

女 歳 九 十 (B)

男 歳 三 十 (A)



骨ヲ初ム。

第五年、上膊骨頭及結節ハ、癒着シ、上膊骨下端ノ内上髁及撓骨上端ニ骨核ヲ形成ス。

第六年、後頭骨ノ關節部ト基礎部ト癒合シ、尺骨ノ兩端ニ化骨始マリ、膝蓋骨及坐骨上行枝ノ化骨ヲ完成ス。

第七年乃至八年、齒牙ノ交換始マル。

第十年乃至十一年尾間骨化骨シ、薦骨トノ癒合ヲ初ム、就中ソノ下突起及横突起ノ癒合體ニ化シ早シ。

第十五年、尺骨烏喙突起及上膊骨滑車ニ一部ノ骨核ヲ生ズ第十三乃至十四年、上膊骨外上顆ニ骨核ヲ現出シ、小轉子化骨ス。

第十四乃至十五年、烏喙突起及肩峰突起弓骨核ヲ形成ス。第十六以後第二十二年、脊柱ノ棘狀突起及横突起ノ尖端

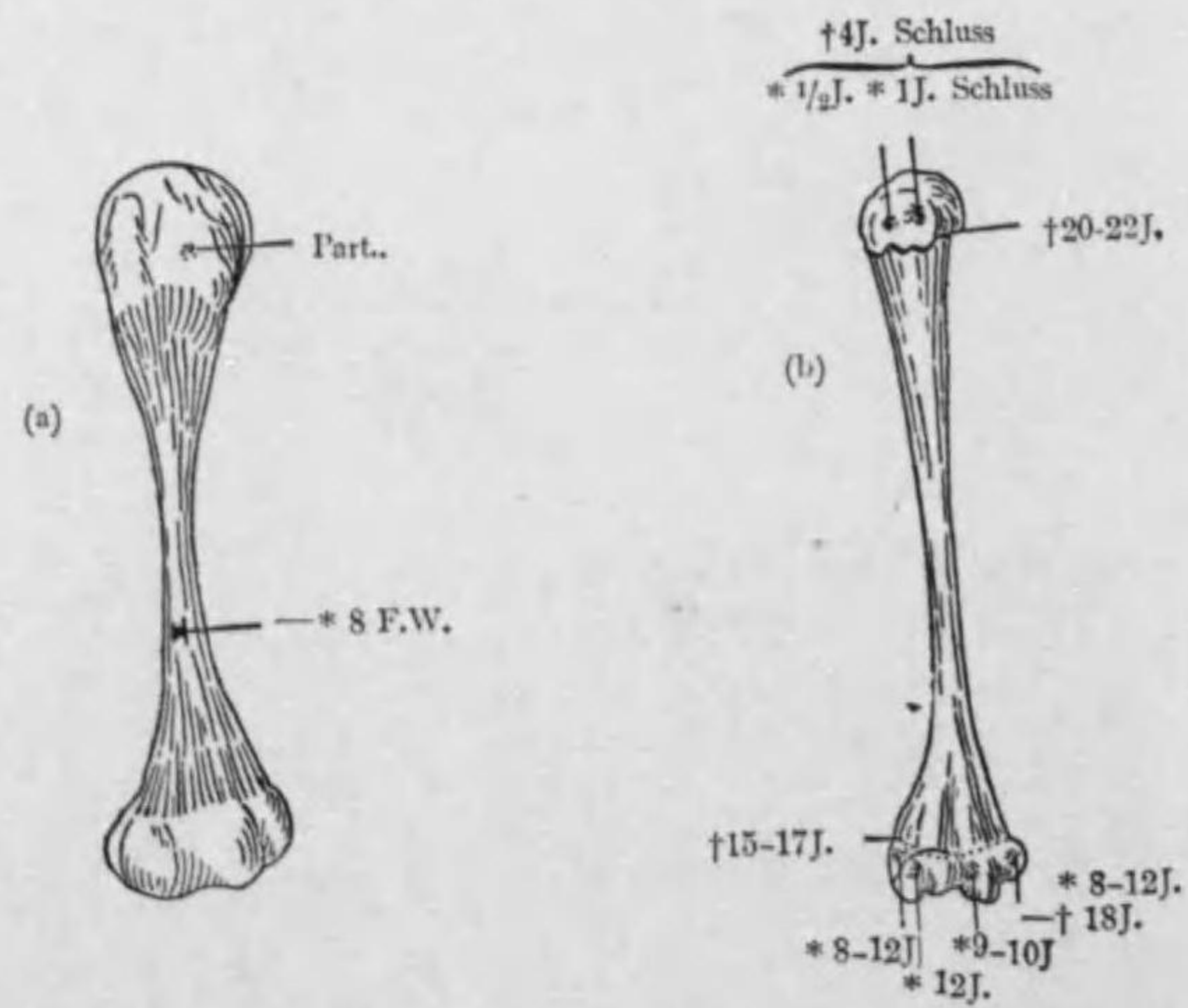
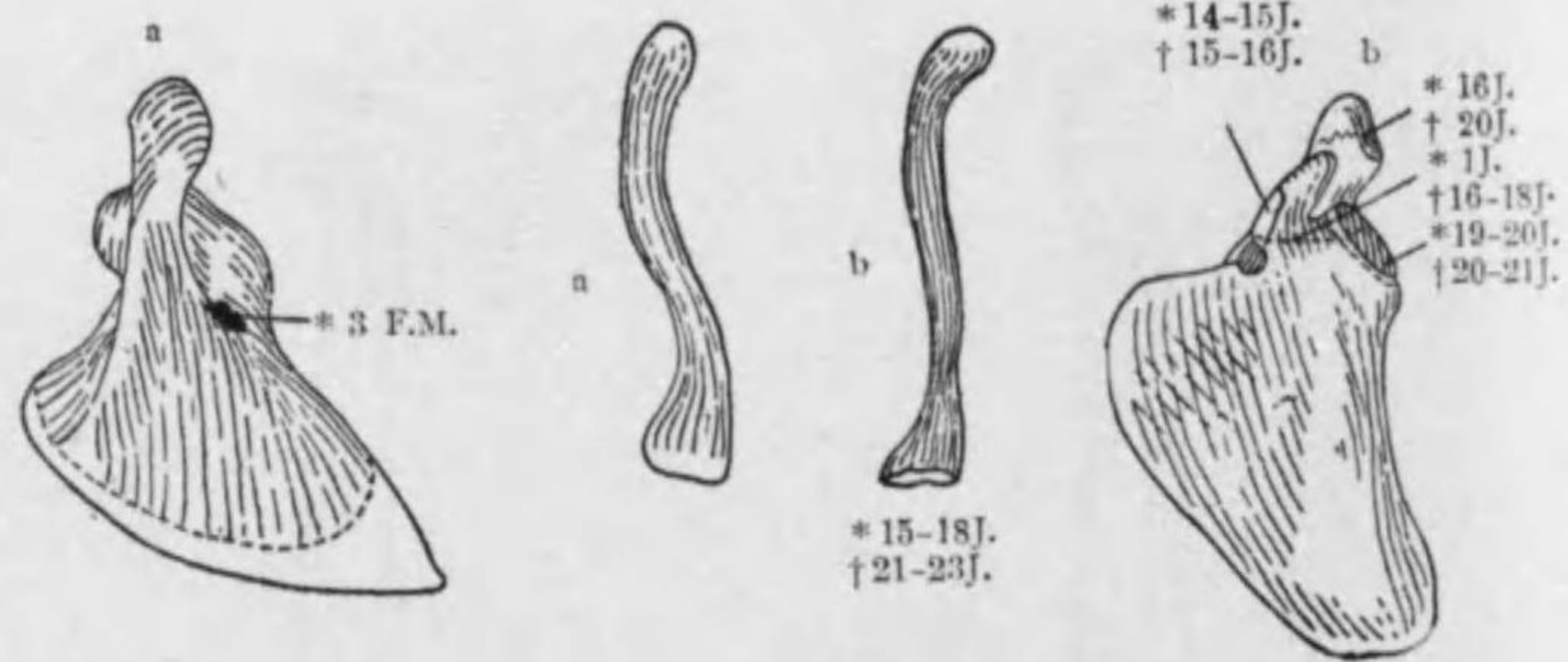
ニ小骨核ヲ生ジ、各椎骨ノ上下面ニ圓板狀骨ハ相癒合シテ、第十八乃至十九年ニ肩胛棘ト癒合シ、肩胛内緣ニ沿フテ一

骨線ヲ形成シ、肩胛下隅ニ一骨核ヲ生ズ、鎖骨ノ胸骨端ニハ一骨核ヲ現出シ、一、二年ノ後ニ體ト癒合ス、尺骨ノ上骨端ハ

(一其) 圖 六 十 四 第

(ルヨニ氏るけるめ)

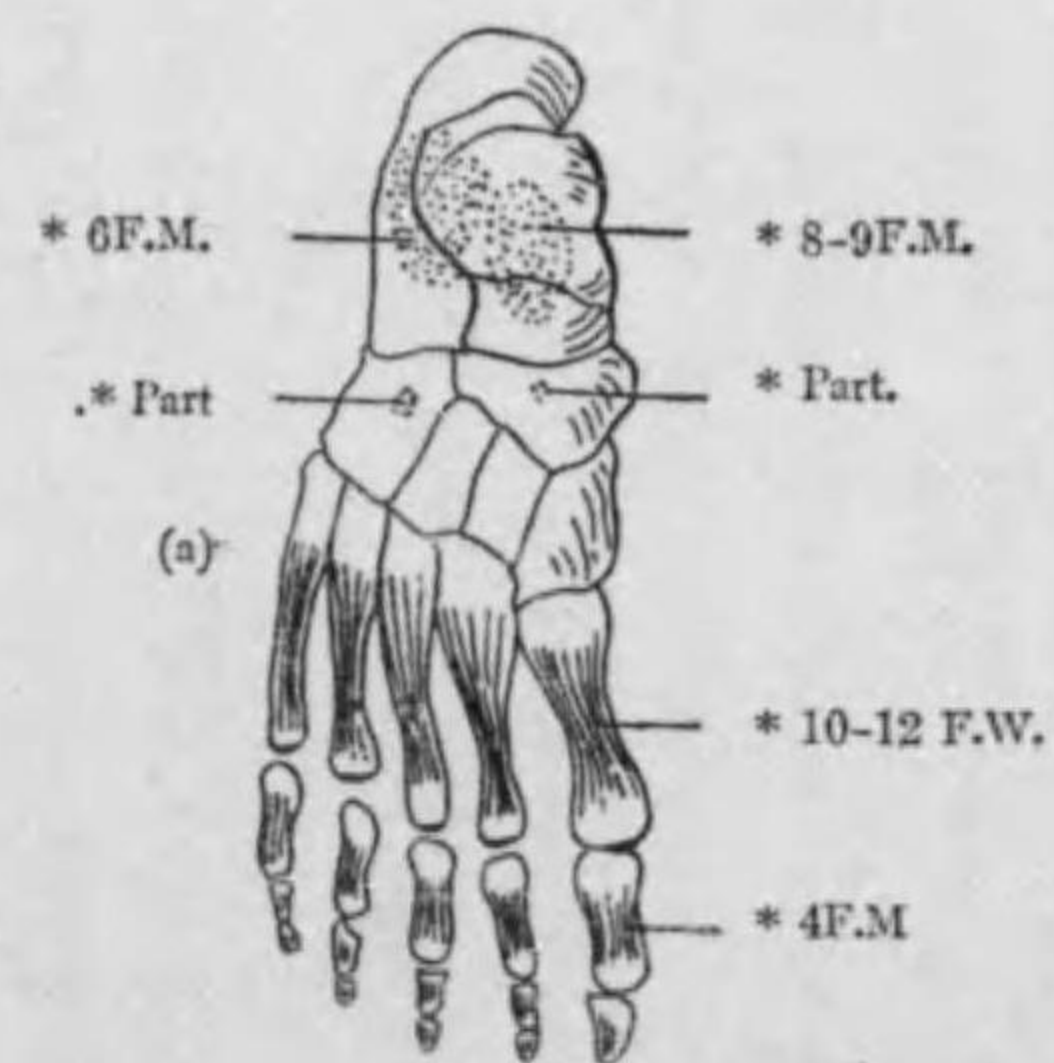
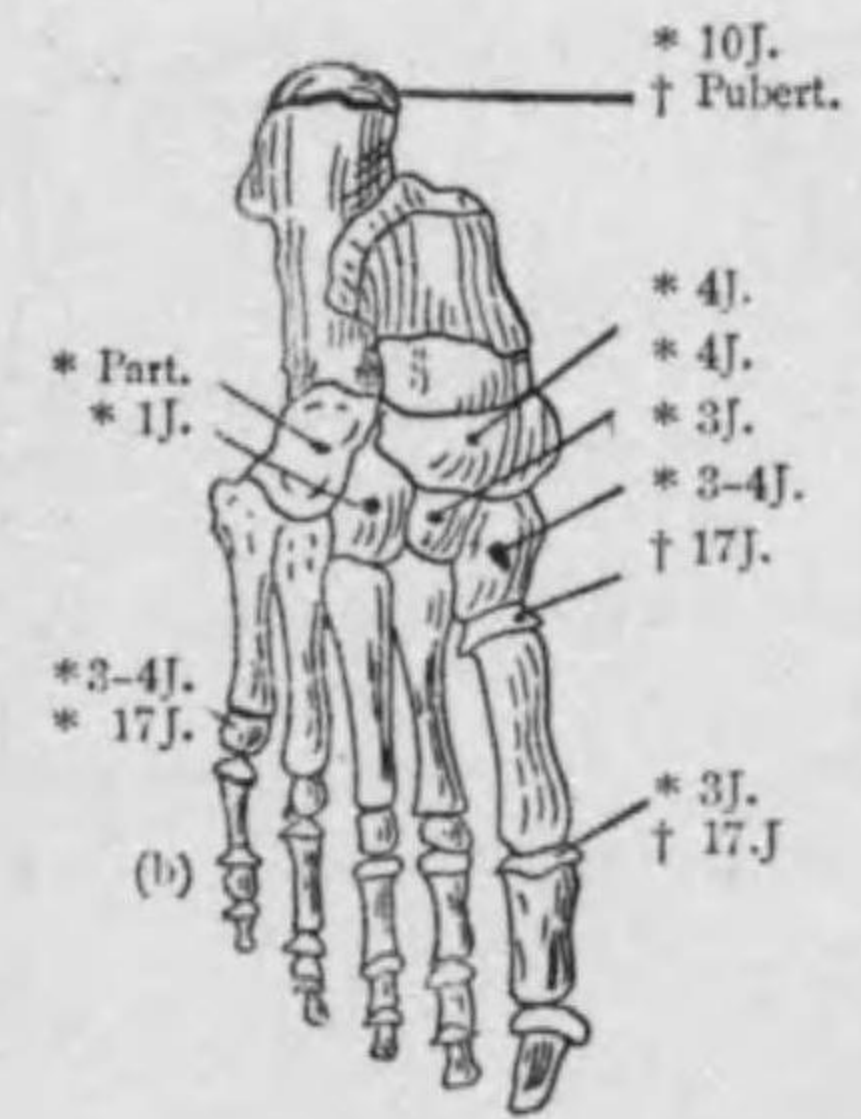
第一編
物品検査



二三〇

(二其) 圖 五 十 四 第

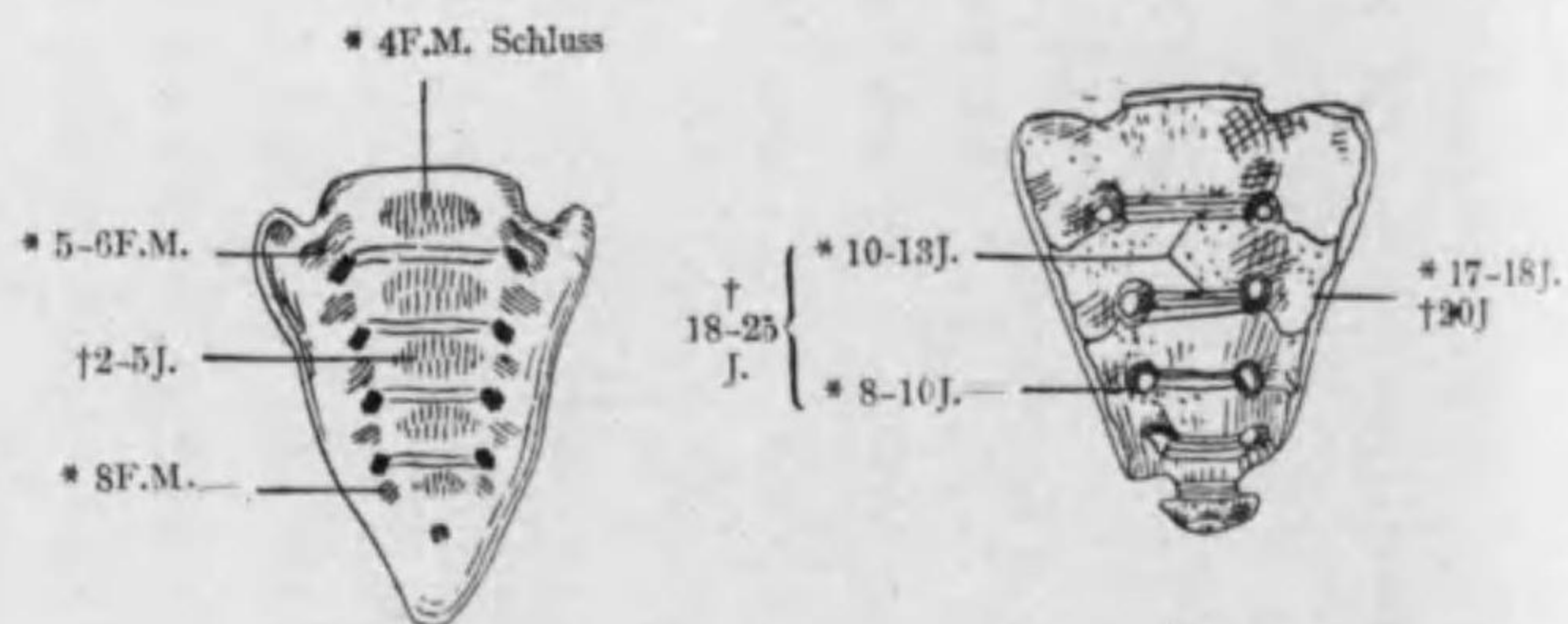
第一編
物品検査



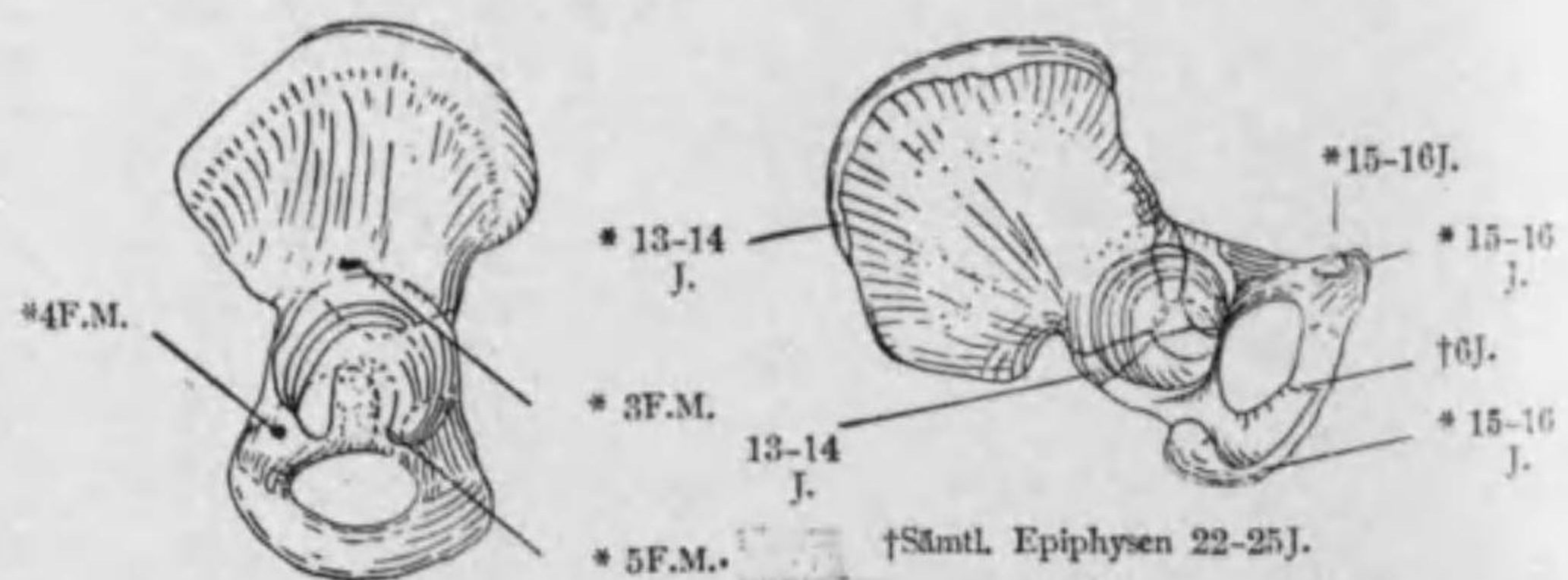
二三〇

* 化骨核ノ發生 † 骨端ノ癒合 F.M 胎生月 J. 年齢 a 前面 b 後面

圖七十四第

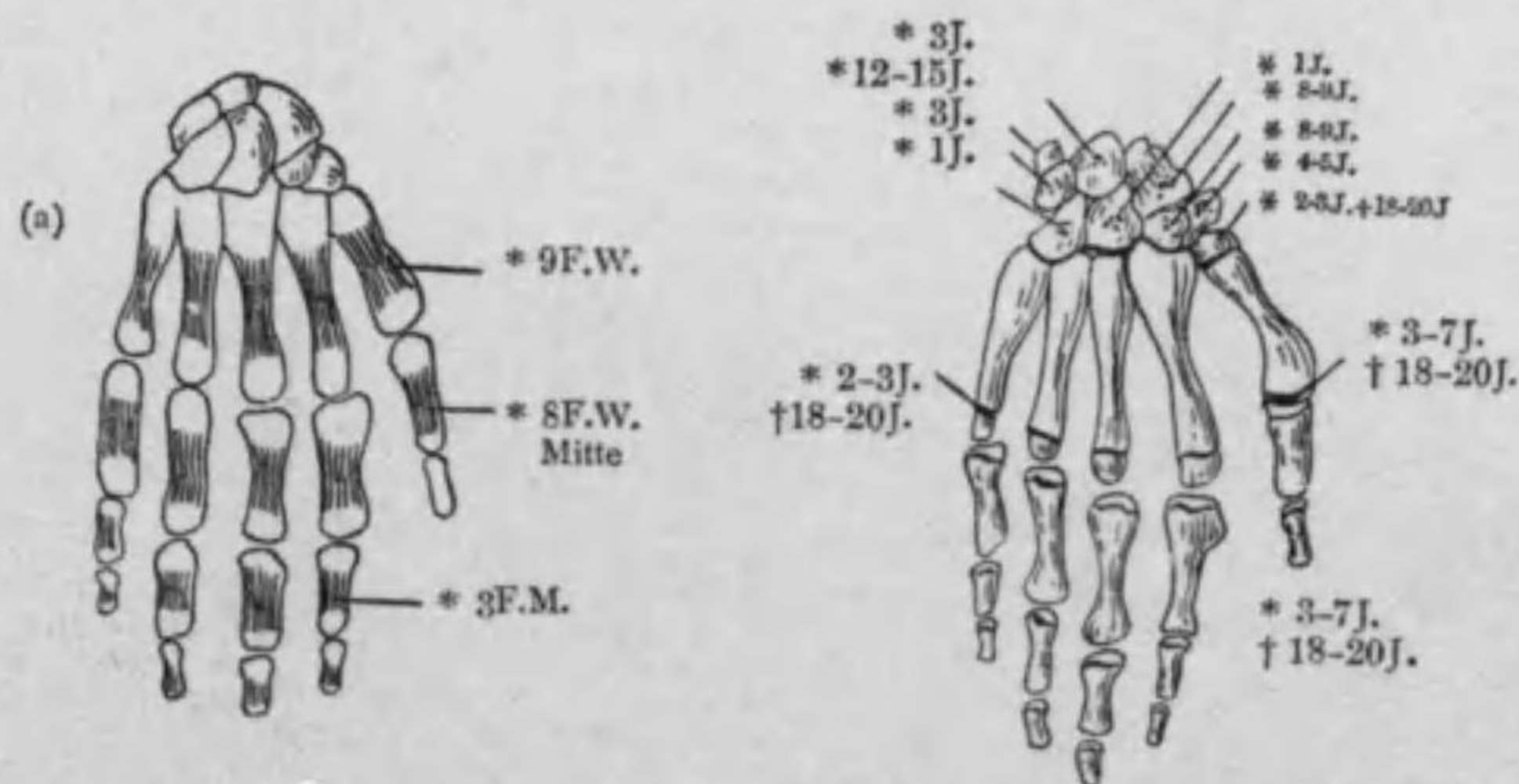
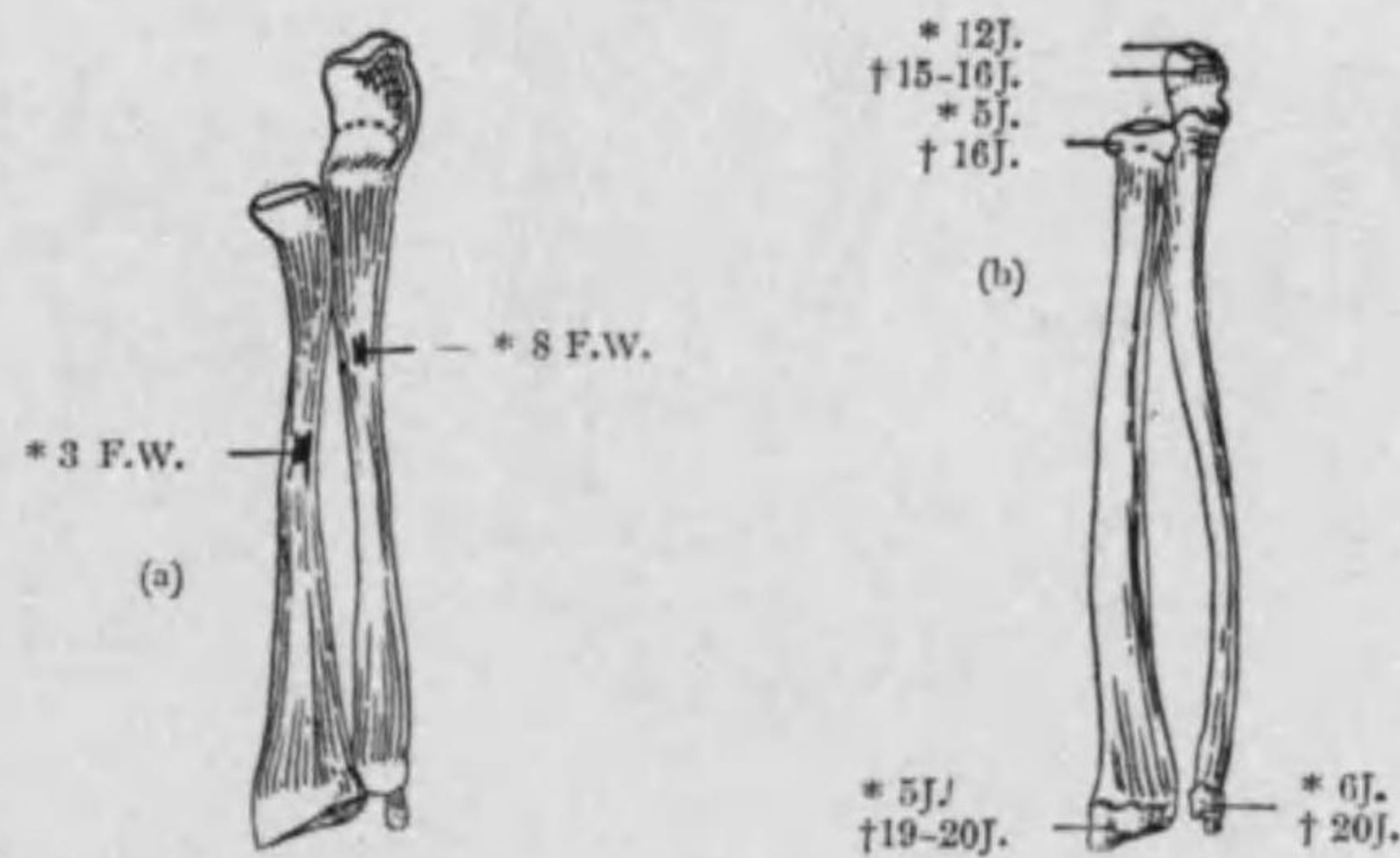


圖八十四第



骨體ト癒合ス、腸骨ハ髌白ニ於テ座骨ト次デ耻骨ト癒合シ、跟骨ノ後端ハ第十七乃至十八年ニ於テ其前部ハ癒着ス、第十八乃至二十二年ニハ薦骨互ニ癒合ス、第十六乃至二十年ノ間ニハ蝴蝶後頭縫合及胸骨ノ横縫合全ク消失シ、上膊骨、尺骨下端、橈骨下端ノ大腿骨、脛骨、蹠骨、掌骨、指骨等ノ骨端ノ骨體ト癒合ス。
第二十二乃至二十五年、肩胛骨全ク化骨シ、椎骨體ノ上下兩骨端板亦癒合シ、次デ骨盤骨端全ク癒合シ腸骨上縁、耻骨弓ニ於テ骨端

(二其) 圖六十四第



癒合シ、骨格完成ス。是等ノ關係ヲ表示スレバ概ネ第二十二表第四十四圖乃至四十八圖ニ於ケルガ如シ。
 三十年乃至四十年ハ骨ニ著明ノ變化ナシ。
 四十年乃至五十年、喉頭軟骨助軟骨化骨ヲ初メ、胸骨ノ體ト劍狀凸起相癒合ス。
 五十年以後、頭蓋骨ノ縫合消失シ、即チ先ヅ矢狀縫合次デ冠狀縫合、後頭縫合最後ニ乳狀縫合消失ス。
 六十乃至七十年ニ達スレバ骨格骨質漸次消耗シ、殊ニ頭蓋骨ニ於テ著シク、下顎隅角ノ如キハ小兒時代
 ハ鈍角ナルガ、成年壯年時代ニハ直角ニ近ヅキ、老年トナレバ再ビ鈍角トナリ消瘦ノ狀著シ、又齒牙發生
 ノ順位ニヨリテ骨格ノ年齢ヲ知ルヲ得ルコトアリ。

齒牙ノ交換

乳 齒	齒 名	發生年齡	永 久 齒	齒 名	發生年齡
下内切齒	生後七ヶ月	第一大臼齒	第五—七年		
上内切齒	八九ヶ月	内切齒	第七—八年		
下外切齒	十一—十一ヶ月	外切齒	第八—九年		
上外切齒	十二ヶ月	第一小臼齒	第九—十年		
下第一臼齒	十八—廿ヶ月	第二小臼齒	第十一—十二年		
犬 齒		犬 齒	第十一年		
		第二臼齒	第十二年		
		智 齒	第十六乃至廿五年		

化骨點發生期

尙骨髓ニ就テ云フ時ハ、四十歳迄ハ赤色ヲ呈シ、ソレヨリ以後ハ黄色トナリ、又六十歳以後トナル時ハ
 はーべる氏小管甚シク擴張ス。

第二十二表 化骨點發生期表 (高田氏ニヨル)

年 齡	胎	兒	化 骨 點 ノ 發 生 ス ル 部 位	總 著 ス ル 部 位
一 月	前頭骨上眼窩部 後頭骨基底及左右側部 顛狀骨大翼及小翼 同管下垂體高及視神經交叉流部 第一頸椎左右弓ノ基部 第二頸椎左右弓ノ基部 第一胸椎左右弓ノ基部 第一指骨第一指骨體 第二指骨第一指骨體 第一掌骨第一指骨體 第一腕骨第一指骨體 第一腕骨第一指骨體 第一腕骨第一指骨體	左側顛骨突起基部 右側顛骨突起基部 左右側顛骨中央部 助骨後端 胸椎體 上胸骨及機骨中央部 大腸骨及脛骨中央部	胎	胎
二 月	同上	同上	同上	同上
三 月	同上	同上	同上	同上
四 月	同上	同上	同上	同上

第一編 物品検査

年												
十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六
第一肋骨肋骨突起	第一肋骨肋骨突起	肩胛骨肩峰突起	腰椎肋骨突起	大腸骨小腸子	尺骨鷹嘴(基部)	尺骨鷹嘴(基部)	尺骨鷹嘴(基部)	尺骨鷹嘴(基部)	尺骨鷹嘴(基部)	尺骨鷹嘴(基部)	尺骨鷹嘴(基部)	尺骨鷹嘴(基部)
端起突狀棘椎腰		起突喙鳥骨胛肩				上膊骨滑車						
				(根手)骨豆		踝上外及踝上內骨腓上						
起突喙鳥骨鎖												
及骨大頭腿	第一二五趾骨末端	同骨趾骨末端(下)	大腸骨第三(下)趾骨末端	腕骨基端	腕骨基端	腕骨基端	腕骨基端	腕骨基端	腕骨基端	腕骨基端	腕骨基端	腕骨基端
端下骨腓上 = 起突喙鳥骨胛肩				腸骨關節軟骨化骨		助骨關節						
骨第一端 助骨後端突起						第五腰椎下第一薦椎間						

第一編 物品検査

歲					月					
五	四	三	二	一	成熟兒	九月	八月	七月	六月	五月
機骨上及下端	足舟狀骨及第二楔狀骨	大腸骨大轉子	腓骨上端	月標骨及三角骨(手根)	上膊骨上端	大腸骨下端	第四薦椎體		跟骨體	第五腰椎體
(根手)角稜多大		末五乃及第一端至第二端		節結前椎頸一第		距骨		第五腰椎		第五腰椎
		末五乃及第一端至第二端		端下骨歷						
端基骨指手										
第二頸椎齒下體	前頭骨正中線	第二頸椎左右弓間	楔狀骨體下大翼	楔狀骨體下小翼	顱狀骨體下小翼	顱狀骨體下小翼			後頭骨基底部及左右側部間	
體下弓椎	節後頭椎一	小上開左頭骨	小上開右頭骨	小上開右頭骨						
胸椎體下弓		問弓兩右左椎胸								

甲表 手 關節

手根骨	著者	クエーンホフ	テスワート	ランバウドレ	キヨリケル	ヘンレー	グーゲンボウ
	發現期	マン		ナウト			エル
頭骨		1年	1-3年	3年	1年	1年	1年
有鈎骨		1-2年	1-3年	3年	1年	1年	2年
橈骨 (遠端)		2年	4-5年	5年	5年	2年	3年
三角骨		3年	3年	3年	3年	3年	—
大多稜骨		5年	4-5年	4-5年	5年	4-5年	8年
月狀骨		5年	3年	3年	5年	4-5年	4年
舟狀骨		8年	3年	3年	6-7年	8-9年	5年
尺骨 (遠端)		4-5年	6-9年	6年	6年	6年	—
豆骨		(20年)	(20-25年)	(22-24年)	(19-20年)	(20年)	12年
小多稜骨		12年	10-16年	10-15-16年	12年	12-15年	—
掌骨		8-9年	4-5年	4-5年	7-8年	8-9年	6年
指骨		3-8年	4-5年	2-3年	2年	2-3年	—
種子骨		(20年)	(18-20年)	(19-20年)	(18年後)	(18-20年)	—
		3-6年	5-6年	3年	3年	3-7年	—
		(20年)	(18-20年)	(18-19年)	(18年後)	(18-20年)	—
手根骨	著者	ラウベル及	スバルテホル	メルケル	マシユカ	タンドラー	高田
發現期		コブシユ	ツ				
頭骨		1年	1年	1年	1年中頃	1年	1年
有鈎骨		1-2年	1-2年	1年	1年中頃	1-2年	1年
橈骨 (遠端)		2年ノ終	胎生8月-13年	5年	2年前半	2年	5年
三角骨		(20年)	(21-25年)	(19-20年)	3年後半	(20-21年)	2-3年
大多稜骨		3月	3年	2-3年	6-7年	3年	4-5年
月狀骨		5年	5-6年	4-6年	4年	5-6年	2-3年
舟狀骨		5年	4-5年	3-5年	5年	5-7年	8-9年
尺骨 (遠端)		8年	5-7年	4-6年	5年	5-7年	8-9年
豆骨		4-5年	6-9年	6年	4年	4-5年	6年
小多稜骨		(20年)	(18-24年)	(20年)	(16-17年)	10-12年	13-14年
掌骨		12年	10-12年	9-13年	10-11年	10-12年	—
		8-9年	7-9年	4-6年	6-7年	7-9年	8-9年
		3-8年	2-3年	2-3年	2-3年	—	2-3年
		(20年)	(18-20年)	(18-20年)	(18年)	(18-20年)	(18-20年)

又伊藤哲一氏ハ我教室ニ於テ、四肢骨れんとげん像ニ依ル年齢鑑定法ヲ研究シ、日本人ノ化骨期ハ西歐人ニ比シテ早ク、殊ニ融合期ニ於テ然リトナシ、女性ハ男性ヨリ早ク化骨スト述べ、第二十三表ヲ作成シテ之ヲ比較シ、コハ生體ニ應用スルコトヲ得ルヲ以テ非常ニ便利ナリトセリ。

次ニ掲記セル第二十三表中ニハ、四肢ノ諸關節ニ付各甲、乙兩表アリ。

甲表ハ解剖學ニヨリ定メタル化骨期及融合期、乙表ハれんとげん學ニヨリ定メタル化骨期及融合期、即チ括弧内ノ數字ハ融合期ヲ示ス

第二十三表

齡						
廿五	廿四	廿三	廿二	廿一	二十	十九
肩胛骨關節高						
端下骨腓及骨脛						
間椎薦二第一第及間椎薦一第一ト椎腰五第						
端上骨腓及骨脛						
合化骨ノ下體脛 一骨板軟端上椎		高關節骨脛層			轉骨子大	
					端骨ニ端突棘腰 木棧並起狀椎	
端上骨脛上						
鎖骨烏喙突起		基三指骨各末			第二五乃	
		大腕骨第一端			尺骨末端峰突起	
		下骨助骨突起			肩胛骨峰突起	

月状骨	5年	3-5年	3年始	5年半	—	6年初
舟状骨	6年	6年	6年半	9年半	—	6年半
尺骨 (遠端)	6-8年 (18-20年以降)	7-9年 (18-20年)	7年ノ初 (16-17年)	8-9年	—	8年末 (17年)
豆骨	10年	10年	12年初	11-12年	—	12年初
小多稜骨	5年ノ終 6年ノ始	5年ノ終 6年ノ始	6年始	6年半	3年7月 (15年6月-16 年3月)	6年半 2年3月以 後(16年始)
掌骨	—	—	(18-20年)	—	—	2-3年 16年ノ始
指骨	—	—	(18-20年)	—	—	—
種子骨	13-14年	13-14年	—	—	12年2月15年 マテ	13年ノ半以降

甲表

骨名	著者	タエン ホフマン	テスツ ト	ランバウ ド及レナ ウト	キヨリケ	ヘンレー	ラウベル	スバルテ ホルツ	鈴木
中指第2節	發現期	3-6年 (20年)	5-6年 (18-20 年)	3年 (18-19 年)	3年 (18年以 降)	3-7年 (18-20 年)	3-6年 (20年)	2-3年 (18-20 年)	3年3月ノモ ノ認ム (18-21年5月)

乙表

骨名	著者	ベーレン ドセン	ランケ	ウイス	ウイルムス	伊藤
中指第2節	發現期	2-3年 (17-20年)	2-3年 (19年)	2-3年 (男16-19年 女15-17年)	3年ノ始 (17-18年)	2年ノ終 (16年ノ始)

甲表 肘關節

肘關節	著者	タエン ホフマン	テスツ ト	ランバウ ド及レナ ウト	キヨリケ	ヘンレー	ゲーゲン パウエル	ラウベル	スバルテ ホルツ
上膊骨小頭	發現期	3年 (16-17年)	2年 (16-18年)	3年 (20年)	1年 (16-20年)	2年 (16-18年)	第1 (18年)	3年 (16-17年)	1-3年 (16-17年)
滑車	發現期	11年 (16-17年)	12年 (16-18年)	14-17年 (20年)	12年 (16-20年)	12年 (16-18年)	第3 (18年)	11-12年 (16-17年)	2-16年 (16-17年)
内上髁	發現期	5年 (18年)	5年 (17-20年)	12年	5-10年 (16-20年)	5年 (16-18年)	第2 (18年)	5年 (18年)	5-9年 (18年)

指骨	3-6年 (20年)	2-3年 (20-24年)	3-7年 (20-24年)	4年1月ノ終 (18-19年)	—	3-7年 (18-20年)
種子骨	—	13-14年	—	—	(20-24年)	—

乙表

手根骨	著者	ベーレン ドセン	ランケ	ウキース	ウイルムス	ヘルマン ゴットベ シュ	ウキース	ロツテ
頭骨	發現期	8-12月	4月	2年3月前	4-5月	2年末	4-5年	1月
有鉤骨	發現期	8-12月	5月半	2年3月前	4-5年	1年半	4-5年	2月
橈骨 (遠端)	發現期	2年 (17-20年)	1年10月 (19年前)	2年3月前 (男20年前 女18年前)	1年4月	1-4年	1年3月 (18年ノ終)	2-4年
三角骨	發現期	4年	1年10月	3-5年	3年	3-7年	3年	2-3年
大多稜骨	發現期	5-7年	2年ノ終 3年ノ始	6-7年	5年終	3-6年	5年	5年
月状骨	發現期	5-7年	2年ノ終 3年ノ始	5年	5年	7年	5年	4-5年
舟状骨	發現期	5-7年	5年	5-7年	6年半	5-7年	6年	5-6年
尺骨 (遠端)	發現期	8-9年 (17-20年)	7年 (19年前)	7-8年 (男20年前 女18年前)	7年 (18年ノ終)	5年	10年 (18-20年)	5-7年
豆骨	發現期	11-12年	11年	11-15年	8年	8年	11年	12年
小多稜骨	發現期	5-7年	7年	6-7年	6年始	3-4年	5-6年	4-7年
掌骨	發現期	2-4年 (17-20年)	2年ノ始 (19年前)	2-3年 (男16-19年 女15-17年)	3年始 (17-18年)	—	3年始	—
指骨	發現期	2-3年 (17-20年)	2年終3年 (19年前)	2-5年 (男16-19年 女15-17年)	3年始 (17-18年)	—	3年始	—
種子骨	發現期	12-13年	16年10月	—	13-14年	—	13-14年	—

手根骨	著者	ケーレル	デツサウ エル ウイスナ	藤 沢	浮 田	深 堀	伊 藤
頭骨	發現期	4-5月	4-5年	2月半	3月	—	3月
有鉤骨	發現期	4-5月	4-5月	2月半	4月	—	4月
橈骨 (遠端)	發現期	1年2月 (18-20年)	15月	1-3年 (18年ノ終)	1年4月	—	1年3月 (17年)
三角骨	發現期	3年	3年	2年半	3年末	—	3年末
大多稜骨	發現期	5年	3-5年	6年始	6年半	—	6年半

肘關節骨	著者	ツェンド	深 鈴	堀 木	ボツチエールワ ーター	デツサウエ ル	伊 藤
	發現期						
上膊骨小頭		1年 (19年)	生後9月 (16年)	1年 (18-19年)	2年半 (16-20年)	1年 (15-16年)	
滑 車		9-10年 (19年)	10年3月 (16年)	11年 (18-19年)	10-13年 (20年)	10年半 (15-16年)	
内 上 髁		7-8年 (19年)	6年11月 (16年)	5年 (18-19年)	8-9年	7年始 (15-16年)	
外 上 髁		12-14年 (16-19年)	12年4月 (16年)	12-1年 (18-19年)	10-13年	12年 (15-16年)	
橈骨骨頭		-	満7年 (16年)	5年 (16-17年)	6-7年	7年終 (15-16年)	
尺骨鷹嘴突起		-	11年8月 (16年)	-	-	11年末 (15-16年)	

甲 表 肩 胛 關 節

肩胛關節骨	著者	キヨリケ ル	スバルテ ホルツ	ゲーゲン パウエル	ラウベル	高 田	鈴 木	メルケル	グンドラ
	發現期								
上膊骨頭化骨核		1年 (16-20年)	1-2年 (16-25年)	2年	2年 (20年)	成熟兒 (20-22年)	9月 (18年9月)	1-1年半	1-1年半
大 結 節		2年	1-3年	2年	3年	2年	10月	-	2-3年
小 結 節		前者ヨリ 少数遅ル	3-5年	2年	5年	1年	3年3月	-	4年

乙 表

肩胛關節骨	著者	ウ イ ル ム ス	デサウエル、ウイスナ	伊 藤
	發現期			
上膊骨頭化骨核		1年3月 (18年)	1年ノ終 (16-18年)	1年 (15年ノ終)
大 結 節		2年	2年中頃	1年半 (15年ノ終)
小 結 節		2年	-	3年

外 上 髁	13-14年	12年	14-17年	5-10年	13-14年	第4	13-14年	11-18年	
橈骨骨頭	5年 (17-18年)	5-6年 (16-18年)	6年 (24-25年)	5-7年 (16-17年)	5年	5年	5年 (17-18年)	4-9年 (17-20年)	
尺骨鷹嘴突起	11年 (17年)	14-18年 (16-20年)	14-18年 (20年)	11-14年 (16-17年)	6年 (15-16年)	8年	10年 (17年)	8-14年 (17年)	
肘關節骨	著者	メルケル	高 田	鈴 木	ロフチヌ モークス	グレー	ピアソル	ソボタ	タスドラー
	發現期								
上膊骨小頭		1-2年 (15-17年)		9年 (15年5月)	2年 (17年)	2年 (16-17年)	1年半 (14-15年)	1-2年 (20-21年)	1年
滑 車		9-10年 (15-18年)	9-10年 (15-18年)	12年3月 (15年5月)	10年	12年	10年	9-10年	10-12年
内 上 髁		8-12年 (18年)	9-11年	9年1月 (16年7月)	5年	5年	5年	8-12年	4-5年 (16-17年)
外 上 髁		8-12年	9-11年	12年3月 (15年5月)	12年	13-14年	14年	12年	12-14年
橈骨骨頭		4年終	5年 (15年)	4年11月 (16年7月)	5年	2年	5年	5年	4-5年
尺骨鷹嘴突起		12年	12年	12年3月 (15年5月)	10年	10年	10年	12年	

乙 表

肘關節骨	著者	ウ イ ス	エドリツカ	ウイラムス	ウイスナー	デーストトビ ナード及バラ フチャーヤ	ケーレル
	發現期						
上膊骨小頭		4年ノ初 (16年)	3-4年	3年ノ中頃 (19-20年)	2年半 (20年)	3年	1-3年
滑 車		13年初 (16年)	11年	11年 (19-20年)	10-13年 (20年)	12-13年	11年
内 上 髁		8年ノ初 (18年)	6-9年 (18年)	8-9年	8-9年 (19-20年)	4年 (16-20年)	6-9年
外 上 髁		14年ノ始 (18年)	8年	11年 (19-20年)	10-13年 (20年)	10年	8-10年
橈骨骨頭		5-7年 (男18年 女16年)	5-6年	6-7年 (19-20年)	6-7年	-	5-6年
尺骨鷹嘴突起		9-11年 (男18年 女16年)	10-12年	9-10年 (17-19年)	9-10年	-	10年 (16-17年)

距骨	六胎生月	—	6-7月	胎生7月	8-9月
跟骨	六胎生月	—	6-7月	胎生7月	6月
跟骨隆起	7-10年	10年 (春期發動期)	—	8-10年 (16-18年)	—
舟狀骨	4年	—	4年ノ半	3-5年	成熟兒
楔狀骨	内	1年	—	2年ノ始	3年
	中	4年	—	2年末	3-4年
	外	3年	—	3-4月	1-2年
骰子骨 (第1乃至第5)	分娩前	9月	2-3月	— 3-5年 (18-20年)	成熟兒
趾骨	基節	3年	—	—	(18-20年)
	中節	—	—	—	—
	末節	—	—	—	—
趾骨(第1乃至第5) 種子骨	3-8年 (14-21年) 12-14年	3-4年 (17年)	—	—	3-4年 (17年)

乙表

足關節骨	著者 發現期	ウイス	バーデ	ハーン	シツク	ウイスナー	ケーレル
脛骨下端	2年半頃 19年前	2年始 (19年)	1年ノ終 (男17-24年) 女17-20年)	2年ノ始中間	2年ノ中間	—	—
腓骨下端	2年頃 (18年)	2年始又ハ終 (19年)	4-5年 (男17-24年) 女17-20年)	2年ノ始中間	2年ノ始中間	—	—
距骨	分娩前	分娩前	—	分娩前	分娩前	—	—
跟骨	分娩前	分娩前	—	分娩前	分娩前	—	—
跟骨隆起	7-8年 (23年前)	6-10年 (9-19年)	—	8年 (18-19年)	8年	—	—
舟狀骨	5年頃	3-4年	—	3-5年	3年	4年中間	—

甲表 足關節

足關節骨	著者 發現期	クエーンホフ マン	テスフート	ランバウド, レナウト	キヨリケル	ヘンレー	ラウベルコフ シュ
		脛骨下端	2年 (18-19年)	2年中間 (16-18年)	2年中間 (18年)	2年	1-2年 (18-25年)
腓骨下端	2年 (20年後)	2年 (18-19年)	2-3年 (20-22年)	3年	2年 (18-25年)	2年 (20年後)	
距骨	分娩前	分娩前	分娩前	分娩前	分娩前	6-7月	
跟骨	分娩前	分娩前	分娩前	分娩前	分娩前	6-7月	
跟骨隆起	10年 (15-16年)	7-10年 (16-20年)	10年 (16年後)	6-10年 (春期發動後)	10年 (春期發動後)	10年 (15-16年)	
舟狀骨	4-5年	4-5年	1年	4年	4-5年	5年頃	
楔狀骨	内	3年	1年	1年	3年	3年	2年半頃
	中	4年	4-5年	3年	4年	4年	5年頃
	外	1年	4-5年	4年	1年	1年	5年頃
骰子骨 (第1乃至第5)	—	—	—	—	—	—	
趾骨	基節	8-10年 (19-21年)	3-4年 (15-16年)	6年 (16-22年)	3年 (春期發動後)	3-7年 (18年)	8-10年 (19-21年)
	中節	—	3-4年 (16-18年)	—	—	—	—
	末節	—	—	—	—	—	—
趾骨(第1乃至第5) 種子骨	3-8年 (19-20年)	2-4年 (16-18年)	2-6年 (16-19年)	2年 (春期發動後)	2-3年 (18-20年)	3-8年 (19-20年)	
足關節骨	著者 發現期	スバルテホルツ	メルケル	トルト	タンドラー	高田	
		脛骨下端	2年 (16-19年)	1-2年 (18-24年)	—	1-2年 (17-19年)	1-2年 (18-24年)
腓骨下端	2年 (20-22年)	2年 (18-24年)	—	2年 (17-19年)	2年 (18-24年)		

趾骨	基節	2年半3年 (男16-21年 女14-18年)	-	-	-	-
	中節	2年半3年 (男15-19年 女13-16年)	-	-	-	-
	末節	4年半頃 (男15-17年 女12-15年)	-	-	-	-

甲表 膝關節

膝關節骨	著者	ヘンレー	スバルテホルツ	ラウベル	ゲーゲンバウエル	キヨリケル
大腿骨下端	著者	ヘンレー	スバルテホルツ	ラウベル	ゲーゲンバウエル	キヨリケル
	發現期	出生時=認メズ	出生直前 (20-24年)	胎生9月 (20年)	出生直前 (20-25年)	胎生ノ終 (17-24年)
脛骨骨頭	著者	ヘンレー	スバルテホルツ	ラウベル	ゲーゲンバウエル	キヨリケル
	發現期	生後1月以内 (18-25年)	出生時 (19-24年)	出生直前或直後 (21-22年)	出生頃	1-3年 脛骨ヨリ遅ル (18-20年以上)
腓骨骨頭	著者	ヘンレー	スバルテホルツ	ラウベル	ゲーゲンバウエル	キヨリケル
	發現期	4年 脛骨骨頭ヨリ僅 =遅シ	3-5年 (20-24年)	3-4年 (20年以上)	3-6年	1-3年 脛骨ヨリ遅ル (18-20年以上)
脛骨結節	著者	ヘンレー	スバルテホルツ	ラウベル	ゲーゲンバウエル	キヨリケル
	發現期	-	13-14年	-	-	-
膝蓋骨	著者	ヘンレー	スバルテホルツ	ラウベル	ゲーゲンバウエル	キヨリケル
	發現期	4-6年	3-5年	-	3年=始マル	1-3年=認メズ

膝關節骨	著者	ダンドラー	高田	鈴木	ランゲル	トルト
大腿骨下端	著者	ダンドラー <td>高田 <td>鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td></td></td>	高田 <td>鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td></td>	鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td>	ランゲル <td>トルト </td>	トルト
	發現期	胎生9月	9月	初生兒=認メ (18年9月)	-	-
脛骨骨頭	著者	ダンドラー <td>高田 <td>鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td></td></td>	高田 <td>鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td></td>	鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td>	ランゲル <td>トルト </td>	トルト
	發現期	-	(19-25年)	初生兒=ナシ (18年後)	-	-
腓骨骨頭	著者	ダンドラー <td>高田 <td>鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td></td></td>	高田 <td>鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td></td>	鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td>	ランゲル <td>トルト </td>	トルト
	發現期	4年	4月 (19-25年)	4年11月 (18年2月)	-	-
脛骨結節	著者	ダンドラー <td>高田 <td>鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td></td></td>	高田 <td>鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td></td>	鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td>	ランゲル <td>トルト </td>	トルト
	發現期	-	-	11年	11-13年	11-13年
膝蓋骨	著者	ダンドラー <td>高田 <td>鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td></td></td>	高田 <td>鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td></td>	鈴木 <td>ランゲル <td>トルト </td></td>	ランゲル <td>トルト </td>	トルト
	發現期	3-4年	-	9年1月	-	-

乙表

膝關節骨	著者	シツク	ボチエル	キルシュネル	藤深	濱堀	デッサウエル ウイスネル	ウイムス
膝關節骨	著者	シツク	ボチエル	キルシュネル	藤深	濱堀	デッサウエル ウイスネル	ウイムス
	發現期	-	-	-	-	-	-	-

腕狀骨	内	2年半頃	2年ノ始ト終	-	外腕狀骨後=	外腕狀骨ノ後	-
	中	5年頃	3年ノ始ト半	-	外腕狀骨後=	外腕狀骨ノ後	-
	外	5年頃	6月頃	-	2年	1年ノ終	6月
骰子骨	著者	2年半頃	出産時	-	1年前	1年前	分娩前
趾骨(第1乃至第5)	著者	6年頃 (21年前)	3-4年 (19年)	-	4年ノ終5年始 (春期發動後)	-	3-5年ノ終
趾骨	著者	基節 (21年前)	3年ノ始ト間 (19年)	-	3-4年	-	3年ノ終-5年
	中節	-	-	-	-	-	-
	末節	-	-	-	-	-	-
足關節骨	著者	ハツセルワ デル	浮田	藤深	濱堀	デッサウエル ウイスナー	伊藤
	發現期	-	-	-	-	-	-
脛骨下端	著者	-	2年ノ始	8月 (15年4月)	1年半	8月 (15年ノ半)	-
腓骨下端	著者	-	2年ノ末	9月 (15年4月)	1年4分1-2分1	9月 (15年ノ半)	-
距骨	著者	胎生4月-胎 生後1年中頃	胎生	胎生期 (15年)	分娩前	胎生 (15年ノ終)	-
跟骨	著者	胎生4月-間 生後1年中頃	胎生	胎生 (15年6月)	分娩前	胎生 (15年ノ終)	-
跟骨隆起	著者	女7-8年中頃 男9-10年中頃 (男17-21年 女13-17年)	-	-	8年 (18年)	7年ノ終 (15年ノ終)	-
舟狀骨	著者	3年中頃	4年ノ半	3年7月	4年半	4年半	-
腕狀骨	内	3年中頃	2年ノ始	8月	4年半	2年ノ始	-
	中	3年中頃	2年ノ末	1年6月	外腕狀骨ノ次	2年ノ半	-
	外	5-6月中頃	3-4月	2年ノ始	1年ノ終	3月	-
骰子骨	著者	分娩前	2-3月	3月	生後1月	3月	-
趾骨(第1乃至第5)	著者	3年中頃 (男17-21年 女14-19年)	-	-	-	-	-

丙組ハ帶黒淡汚濁色表面粗ニシテ凸起明カナリ而シテ各組ニハ左ノ骨アリ

三、甲組、左右顛頂骨及前頭骨左右半并ニ後頭骨、左右大腸骨、左右脛骨、上膊骨、前膊骨、肘骨、此中後頭骨顛頂部ノ左上角ニ於ケル特大ナル缺損アリト雖ツノ折線ノ性状ニヨルニコハ自然ニ存スル化石狀ニシテ又ツノ左側縁ニアル小缺損ハ骨折ナリ次ニ顛頂左ノ前下角部ニ大ナル辨狀骨折アリソノ周圍ニハ薄層ノ血液乾著シ居ルヲ認ムソノ他ノ骨片ニハ損傷異狀ナシ

四、乙組、顛頂骨一個、前頭骨左右半、後頭部顛頂部、右顛頂骨大腸骨、脛骨、尺骨、橈骨、肩胛骨各一個、助骨五個

五、丙組、左右顛頂骨、前頭骨左右半、後頭部顛頂部、左右大腸骨、脛骨、左右腓骨、上膊骨、左右尺骨、橈骨、以上乙及丙組ノ骨片ニハ毫モ損傷異常ナシ

六、前記各組ノ骨片ハ小兒ノ骨ナルコトハ明カナルモソガ何歳位ノ小兒ノ骨ナルヤハ各骨片ヲ精細シテ初メテ知ルコトヲ得ルモノナリ此目的ニ向テ予ガ注意シテとるニ氏法ニ從ヒ測定シ得ル結果ヲ表示スレハ左ノ如シ但シ測定ニ用ヒタル單位ハ皆標ナリ尙骨片ニ附著セル頭毛モ亦參考ノ爲メソノ長サヲ測定セリ

第三、骨片測定(附頭毛測定)

顛頂骨
左 右 左 右 左 右 左 右
幅高 幅高 幅高 幅高 幅高 幅高 幅高 幅高
八八八八 五五六六 七六七六 甲組
〇五〇〇 ||| 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
八八七 二二五五 五五五五 六六六六 乙組
|| 〇〇七 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
七八八 五五五 五五五 六六六 丙組
五五五 ||| 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇

大腸骨 左 右 長 長 長
脛骨 左 右 長 長
腓骨 左 右 長 長
上膊骨 左 右 長 長
尺骨 左 右 長 長
橈骨 左 右 長 長
肩胛骨 左 右 長 長
頭毛ノ長サ 二〇二〇 二〇二〇 二〇二〇 二〇二〇
是等三組ノ骨片ノ大サ及頭毛ノ長サハ各自多少ノ差異アリト雖骨成熟初生兒骨ノ大サニ相當ス

第四、血清學の検査

七、是等三組ノ骨片ハ其形態ニヨリ人類ノモノニ相違ナケレドモ念ノ爲メ血清學の検査ヲ行フ即チ此骨片ヲ細切シ乳鉢内ニテ細碎シ生理的食鹽水ニテ一晝夜浸漬シソノ浸出液ヲ濾過シテ透明トナシ之ヲ羅メラールンと氏法ニヨリテ作レル抗人血漿免特殊血清ニ檢スルニ開モノナク其接觸面ニ於テ何レモ絮狀ノ沈澱ヲ生ズ之レ三組ノ骨格ハ何レモ人類ノモノナルノ證ナリ

乙、鑑定

上記検査ノ結果ニ依リ左ノ如ク鑑定ス

一、交附セラレタル甲、乙、丙三組ノ骨片ハソノ形態ト云ヒ(記録第一項参照)血清學の反應ト云ヒ(記録第七項)疑ヒモナク人骨ニシテ而モ幼兒ノ骨片ナリ

二、記録第六項ノ各骨測定ノ結果ニ依レバ甲、乙、丙三組ノ骨片ハ何レモ成熟初生兒ノモノナリ

三、甲組ノ骨片中左顛頂骨前下方ニ於ケル辨狀骨折ハ其ノ近傍ニ著明ナル薄層ノ血液乾著シ居ルヨリ見レバ恐ラクハ生前ニ起コレ

ル骨折ナラン(記録第三項参照)前後頭骨顛頂部ニ在ル小骨折ハ周圍ニ何等異常ナキヲ以テツガ生前或ハ死後ノ何レニ生ジタルヤ區別スルコト能ハズ而シテツガ骨折ノ原因ニ至リテハ今ヤ全ク不明ナリ其他乙及丙組ノ骨片ニハ損傷異常ナシ

四、甲、乙、丙三組ノ骨片ガ骨化セル状態即ソノ色、骨表面ノ滑粗小突起ノ磨滅ノ狀及埋葬セラレタル土地ノ狀況等ニヨルニ(記録第一、第二項参照)乙組ハ最モ古クシテ死後五年以上丙組ハ之ニ次ギテ古ク死後三年以上甲組ハ最モ新ラシクシテ死後一二年ヲ經過セルモノ、骨片ナラント推定ス

此鑑定ハ大正〇年〇月〇日着手
同年同月〇〇日終了

大正〇年〇月〇日

住 所 醫師 小南又一郎

檢案書

住所氏名年齢小兒骨格三組

右ハ大正〇年〇月十三日京都市東山阿彌陀峰豐公廟近傍ノ叢中ニ於テ発見シタルモノナルガ同日十四日京都市府松原警察署長警視Vハコノ骨格ニ就キソノ年齢、男女ノ別、死後ノ經過日數ヲ檢案スベキ旨ヲ予ニ命ゼリ依テ京都市帝國大學醫學科大學法醫學教室ニ輸送ノ上同教室ニ於テ同日ヨリ同年十月廿六日ニ至ル期間ニ於テ之ヲ檢査セルニソノ所見左ノ如シ

一、諸骨混亂シ三個ノ顛頂骨アルニヨリ三人分ノ骨ナルベキ事ヲ知り得タルノミ而シテ各骨互ニ分離シテ連續スルモノナク軟部ハ全ク缺如シ毛髮ノ少許ヲ混在シ表面ニハ塵芥泥土ヲ附著スルガ故ニ先ヅ水ヲ以テ丁寧ニ洗滌シ乾燥セシメ然後注意シテ骨ノ全部ヲ三人分ニ選リ分ケタルニ一人分トシテ完全ニ揃ヒタルモノナシ

甲、(最幼者)ニ於テハ後頭骨基部及左右側部、鎖骨、脊椎骨ノ多數、右上肢骨、左腸骨、右脛骨、左右腓骨等

乙、(仲ノ者)ニ於テハ後頭骨基部、左橈骨、脊椎骨及助骨ノ多數

測定シ出タル骨長	骨 格		骨格
	方 法 (欄ニテ示ス)	格	
顛頂部	幅 高	幅 高	丙 骨格
前頭部	幅 高	幅 高	乙 骨格
後頭部	幅 高	幅 高	甲 骨格
顛頂骨	長 高	長 高	右 左
前頭骨	長 高	長 高	右 左
後頭骨	長 高	長 高	右 左
大腸骨	長 高	長 高	右 左
脛骨	長 高	長 高	右 左
腓骨	長 高	長 高	右 左
上膊骨	長 高	長 高	右 左
尺骨	長 高	長 高	右 左
橈骨	長 高	長 高	右 左
肩胛骨	長 高	長 高	右 左
頭毛ノ長サ	長 高	長 高	右 左

縁鈍ニシテ、且凸凹多キ故射出口ト射入口ヲ鑑別シ、從テ銃丸ガ何レノ方面ヨリ來リシヤヲ區別スルコトヲ得ルコトアリ。予ハ腦溢血ニテ死亡セリトテ埋葬セラレシモノヲ、六ヶ月後發掘シテ、ソガ頭骨破裂ニテ死亡セルコトヲ知リシコトアリ。

ト、火葬遺骨ト普通遺骨トノ鑑別

Differentiation of incinerated bone from not incinerated. Differentiation des os incinérés de ceux qui ne le sont pas. Unterscheidung feuerbestandeter Knochen von nicht feuer bestandeten.

火葬遺骨

空氣中、水中或ハ土中ニテ腐敗シ、骨格トナリタル骨片ハ、尙幾分ノ脂肪分アルヲ以テ、骨表面滑澤ニシテ灰白色乃至白色ヲ呈シ、骨質モ亦強靱ニシテ多ク全形ヲ有スレドモ、火葬遺骨ハ白色乃至帶黒白色ヲ呈シ、表面粗ニシテ且縦横ニ走行スル裂隙數多アリ、質甚ダ脆クナリ、完全ナル骨形ヲ備フルモノ少キヲ常トス、此等ノ點ヲ注意スレバ、ヨクソノ何レナルカヲ區別スルコトヲ得。又紫外線ニテ視ヘバ火葬骨ハ紫色ニシテ、通常遺骨ハ然ラザルヲ以テ之ヲ區別スルコトヲ得ン。

尙茲ニ注意スベキハ、金屬性毒物ノ中毒ニ依リテ死亡セルモノ、普通遺骨ハ、勿論火葬遺骨ヨリモ尙ソノ毒物ヲ證明スルコトヲ得ル場合アルコトナリ。

検査書

住所氏名年齢不詳ノ人骨
右者大正〇年〇月〇日京都市〇〇山官有林内ニ於テ發見セラレタ
ルモノナルガ同月卅日〇〇地方裁判所檢事〇〇〇〇ハコノ人骨ニ付
一、男女ノ別 二、死後ノ經過日數ノ推定
三、死因 四、骨ニ損傷ノ有無
五、年齢

ヲ検査スベキ旨ヲ予ニ囑託セリ依テ之ヲ京都帝國大學醫學部法醫學
教室ニ檢送ノ上同教室ニ於テ翌卅一日乃至二月十二日ニ至ル期間、
コレヲ検査セルモノノ所見左ノ如シ
(甲) 検査記録
(天) 骨格検査
(イ) 頭骨検査
(一) 頭蓋骨ハ已ニ大部分筋肉及皮膚ヲ失ヘリト雖前頭部ヨリ頭頂哈

Table with multiple columns of anthropometric measurements for males and females, including skull length, width, and facial dimensions. Includes a section for '計測' (Measurements) and '本頭顱' (Cranium).

同 角間 (男)	不明凡ソ	九七・二二	一〇一・六五
同 角間 (女)	九一・八〇	九二・五二	九二・〇七
下 顎 板 (男)	一一〇・五〇	一一一	一一二・一七
下 顎 板 (女)	一一〇・五〇	一一一	一一二・一五

(以上ノ測定法ハ鈴木太郎氏著「人類」ヲ参照セヨ)

(四) 骨盤検査

(四) 骨盤ハ骨膜及少許ノ筋肉ヲ殘セルノミニテ殆ソド骨格化シテ黑色ノ泥砂ヲ附着シ左右兩腸骨ノ上縁ハ殆ソド缺損シ其骨折面ハ凹凸不正ナリ體部ニ小ナル穿孔多アリ左耻骨ノ下行枝ハ缺損シ骨端ノ性状ハ前述ノモノト同ジ

向之ヲ精檢センガ爲メ骨ニ附着セル汚物及骨膜ヲ全部剝離シ骨ヲ露出セシメ之ヲ精檢スルニ骨盤諸骨ノ骨端全ク癒合シ尙腸骨ノ上縁耻骨上ニ於テ骨端相癒合セリ右耻骨ニ於テハ耻骨連合ヲ去ル約二・〇釐ノ所ニ縱在スル直線ノ隙及癒合アリコノ部ハ狹窄骨盤ノ時應急ニ行フ産科手術ノ骨切線ニ相當セリ

骨盤ハ其形態的觀察ニ依レバ女性骨盤ニ近シ今此骨盤ヲ數量的ニ計算スルニソノ結果左ノ如シ但本邦人男女骨盤ノ計測ヲモ便宜ノ爲メ附加表示セン單位ハ釐ヲ用ユ

骨盤上口	横前	横後	斜徑	左	右	本邦男子骨盤ノ平均數	本邦女子骨盤ノ平均數
骨盤腹部	斜前	斜後	斜徑	左	右	一一・〇三	一一・〇七
骨盤腰部	斜前	斜後	斜徑	左	右	一一・〇三	一一・〇七
骨盤下口	斜前	斜後	斜徑	左	右	一一・〇三	一一・〇七

(註)表中「」ハ骨缺損ノ爲メ計測シ得ザリシモノナリ右表ヲ精檢スルニ本骨盤ハソノ前後徑徑徑ニ於テハ通常婦人骨盤ノ

ソレニ一致シ斜徑ニ於テハ著シキ異常アルヲ知ルコトモ右耻骨ニ在ル直線骨破裂ハ手術ノ痕跡ナルベク産科醫ニ就キテ其意見ヲ叩クニ此骨盤ニ於テカカ、ル手術ヲ爲スハ策ノ得タルモノナルコトヲ確信シテ予ノ意見ヲ確實ニセリ

(八) 四肢骨検査

(八) 左大腿骨ハ少シク泥砂ト筋肉ヲ附着シ上下端ニ不規則ニ折レ骨折端ヨリハ暗赤色ノ骨髓ヲ見ル

(七) 左大腿骨ハ少シク泥砂ヲ附着セルノ外兩端ニ於ケル骨折面ノ性状ハ上膊骨ニ同ジク兩者共骨端癒合スルガ故ニソノ長サ等ヲ測定スルコト能ハズ

(九) 骨ノれんげん検査

(九) 骨ノれんげんニ照ラシテ窺フニ頭骨及四肢骨ニ於テハ常骨ト異ナル點少シト雖骨盤ニ於テハ前記第四項ニ記載ノ直線の隙ハ非常ニヨク骨化シテ手術痕跡ヲ作り術後一ケ年以上ヲ経過セルモノナルコトヲ知ル而シテ右側腕骨ニ於テハ石灰ノ沈著左ニ比シ著シ之レ後者ハ前者ヨリモ常ニ下位ニ在リシコトヲ推知セシム

(十) 土壌ノ血清學的検査

(十) 警官ガ衣服及人齒ニ本ヲ發見セリト云フ場所ノ土壌ヲ朽葉ト共ニ採集シ別ニソレヨリ數箇隔セル場所ノ土壌ヲモ對照ノ爲メ採集セル土壌ヲ〇・八%ノ食鹽水ニテ廿四時間浸出シ之ヲ濾メ「れんげん」ト云フニ依リテ作レル人血ニ特殊性質ヲ有スル家兎血清ニ積層スルニ

検査物	浸出液	沈降	十五分	廿分	卅分	四十分	一時間
可檢土壌	中性	反應	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
對照土壌	中性	反應	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
人血	中性	反應	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)

即チコハ衣服等ヲ發見シタル場所ニハ已ニ長時間屍體ノ存在セザリシ證左ナリト云フハシ

(十一) 頭皮ニ殘存セル頭毛ヲ取りテ精檢スルニソノ斷端ハ鏡ニモ整數

第十五圖 發見タル骨盤



上 A B 下圖 A B 相當セリ

へぼと
みーノ
痕跡及
咬傷ニ
ヨリテ
缺損セ
ル所



骨手術痕
ニ「カル
ク沈著セ
ルヲX光
線ニテ見
タル圖
(手術後
一年以上
経過)

ニ切ラレアリト雖末端稍磨耗ノ傾キアリ即チ此頭毛ハ死後暴力高メノニ切レタルモノニ非ラスシテ生前ヨリ斷髮シ居リシモノナルコトヲ知ルニ足ル

(二) 検査案

上記検査ノ結果ニ依リ左ノ如ク検査ス

(一) 本骨格ニ於テ性別ヲ知ルニ最も有力ナルモノハ骨盤ニシテ其形態上及計測上(記録第四、第五項参照)明カニ女子ノ骨盤ナリ頭蓋骨モ亦ソノ計測上形態上(記録第一、三項参照)女性ノ頭骨ナリ而シテ此骨盤ト頭骨トハ同一人ノモノナルヲ否ヤハ確言スルコトヲ得ザルモノニ在場所、年齢性等ヲ綜合シテ考フルニ恐ラクハ同一人ニ屬スル骨格ノ一部ナルベシ(記録第一、四項参照)

(二) 本骨格ノ在場所、之ニ附着スル筋肉皮膚等ノ腐敗程度及當時ノ氣象等ヲ綜合スレバ死後検査時迄約二、四月ヲ経過セルモノナラント推定セラル

(三) 各骨片ノ骨端ハ不規則ナル破損ヲ被リ且骨體ニハ小穿孔ヲ爲セル所アラリ而シテ此ノ如キ破損ノ生前ニ各骨片ニ受クルコトハ殆ソド不能ナルガ故ニコハ恐ラク死後獸類ノ齒牙ニ依リ生ジタルモノナランソノ他ニハ特記スベキ損傷ナシ

(四) 死因ニ就テハ之ヲ判定スベキ據ナシ

(五) 本骨格ニ於テソノ頭骨ノ見ルニ細螺殼頭縫合ハ骨化シテ見ルコトヲ得ス(記録第一項参照)骨盤諸骨ノ骨端全ク癒合シ尙腸骨上縁、耻骨弓ニ於テ骨端相癒合セリ(記録第四項参照)故ニ本骨

格ハ年齢ニ於テハ成人ニ達セルモノニシテ一面頭骨ニ於テハ
 狀、冠狀、三角乃至顴狀縫合部明カニ之ヲ檢スルコトヲ得(記
 録第一項参照)齒牙ノ咀嚼面ハ磨滅セズ(記録第二項)又四肢ノ
 骨髄暗赤色ヲ呈ス(記録第六、七項)彼はヲ綜合スルニ本骨格ハ
 年齢廿四歳乃至卅歳ノ婦人ノモノナルベシ
 (六)前記ノ諸項ニ依リ本骨格ヲ有セシ人ノ生前ノ狀況ヲ追想スレバ
 恐ラクハ左ノ如キ身柄ノ人ナリシナラン
 ○體格中等ナル廿七八歳ノ婦人ニシテ頭髮ヲ短剪シ少シク右足跛行

シ且我邦ニハ殆ンド行ハレザル骨盤手術ノ痕跡ヲ有スルヨリ見レ
 バ本屍ノ異同決定ニ大ニ資益スル所アルベシト信ズ
 此檢案ハ大正〇年〇月〇日着手
 同 年〇月〇日終了
 大正〇年〇月〇日
 京都市上京區田中大塚町廿一番地
 醫師 小南又一郎 謹

十三、紫外線ノ法醫學的應用

Anwendungen ultravioletter Strahlen zu
 gerichtlich-medizinischen Zwecken.

紫外線検査

法醫學的検査ニ用ユル紫外線發生器ハ、獨逸はなう會社製品、モシクハ日本石英工業株式會社考案モノ
 ヲヨシトス。茲ニハ便宜上先ヅ前者ニ就テ略述セン。

紫外線發生器

はなう製紫外線發生器ハ、小箱形卓上用交流器ニシテ、發生器ト變壓器トヲ有シ、發生器ノ上部ニ發光
 管室アリ、其光ヲ他ニ漏ル、事ナカラシメ、其下方ニ新暗色濾光器ヲ設ケ、箱ノ外面ニ現ハル、把手ハ、
 外部ヨリ之ヲ廻轉シ、内部發光管ヲ二・三回傾斜シテ、内ニ在ル水銀ヲ移動シ、導電點火セシム。而シテ此
 發光管室ノ底ハ前方ニ反轉シ、検査ノ目的ニ從ヒ、隨時濾光硝子ヲ交換スルコトヲ得ル様ニナシアリ。或
 ハ往々濾光硝子ヲ用キズシテ、直接ニ發光管ヨリ紫外線ヲ受ケテ、各種ノ實驗ニ供スルコトヲ得。
 本器ヲ使用セントセバ、變壓抵抗器ヲ通ジテ、電流ヲ發光管ニ通ズル様ニシ置キ、發光器外部ノ把手ヲ、
 外ヨリ二、三回輕ク廻轉シテ、發光管ヲ傾斜セシムル時ハ、發光管内ノ水銀ニ通電シテ發光スルニ至ル。
 而シテ暗室内ニ於テ、發光後數分間眼ヲ慣ラシ、箱内濾過板下ニテ可檢物ヲ照射スベク、必要ナル場合ニ
 ハ、ソノ光力單位ヲ一定法ニヨリテ決定シタル後用ユベキハ言ヲ俟タズ。

紫外線應用

本器ニ特有ナルハ、はなう會社特有ノ光線濾過板ニシテ、コハ發光管ヨリ生ズル一切ノ光線中ヨリ、波
 長四〇〇・〇乃至三〇〇・〇間ノ光線ノミヲ通過セシメ、他ノモノヲ通過セシメザルガ故ニ、茲ニ照ラセバ
 特ニ強キ螢光ヲ發スルナリ。我邦ノ日本石英株式會社ニテモ、亦此濾光板ヲ製造スルニ成功シ、之ヲ普通
 治療用ノ水銀燈ニ附加スル装置ヲ作成セリ。コハソノ視野廣ク、時トシテハ全身ヲモ一時ニ檢スルコトヲ
 得ルガ故ニ、相當便宜アルモノナリ。

我邦ニ於テ紫外線ヲ、法醫學的検査ニ應用スベク主稱シタルハ高山博士ニシテ、同氏ハ之ヲ以テ偽造手
 形、偽造書類等ヲ觀破スルニ用ヒタリ、次デ我教室ニ於テ、伊藤哲一氏ハ此研究ニ手ヲ染メ、遂ニ殆ンド
 ソヲ完成スルニ至リ、同氏ハ紫外線照射ニヨリ、普通見エザル癩痕、文身、皮下溢血及指紋等ハ著シク明
 瞭トナリ、火葬遺骨ハ帶白紫色、通常遺骨ハ黒味ヲ有シ、生毛ハ黒色トナルモ、義毛ハ灰白褐色トナル故、
 かもじ等ヲ鑑別スベク、人乳ハ紫色、牛乳ハ帶黃白色、血痕及精液斑ハ肉眼ニテ見エザル程度ニ洗滌スル
 モ、紫外線ニテハ之ヲ見ルコトヲ得ベク、小切手、書類等ノ文字抹消セル際、紫外線ニテ照射セバ淡褐色
 ヲ呈スルニヨリテ明ニ之ヲ發見スルコトヲ得ト發表セリ。

而シテ土井、大林及武部等ノ諸氏ハ、更ニ夫々伊藤氏ノ云フ所ヲ研究シテ其微ニ入り細ヲ穿テ、ソガ法
 醫學的ニ用ユルニ足ルヲ知り、又永田氏ハ酒類中ニ混入セラレタルざるちゝる酸化合物ノ發見ニ、紫外線
 ヲ用ユルヲ便利ニシテ容易ナリト主張シ、川口氏ハ之ヲ尿検査ニ應用シテ、色素ヲ以テ血尿或ハ黃疸尿ヲ
 詐病スルヲ容易ニ觀破シ得ベシトナセリ。

十四、足痕検査

Examination of footprints, Etude des empreintes
 des pieds. Untersuchung der Fusspuren.

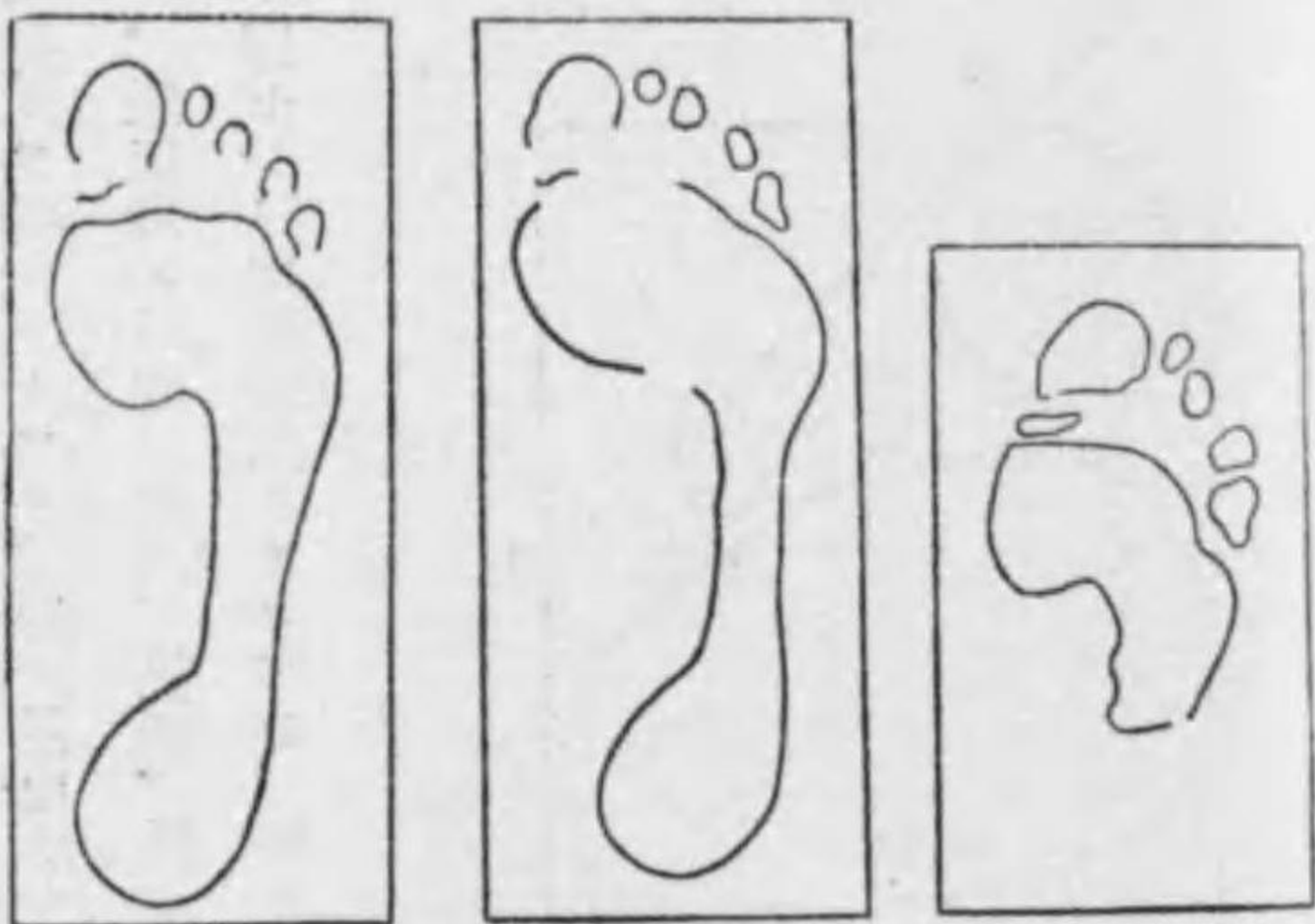
足痕ヲ検査スルコトモ亦法醫學上并ニ犯罪學上興味ヲ有スルコトニシテ、個人ノ異同ヲ決定スルニ甚ダ大切ナルコトナリ。

犯行ノ現場ニ足痕ヲ發見シタル際、ソガ明瞭ナル時ハ透寫或ハ撮影等ニ依リ、ソノ精確ナル寫圖ヲ作製スルコトヲ得ベシ、即透寫ニハ透寫用紙ヲ用ヒ、又ハ硝子板上ニ蠟鉛筆ヲ以テシ、止ムヲ得ザル際ニハ白紙ニ亞麻仁油ヲ輕ク擦込ミタルモノヲ代用スベシ、是等ノモノヲ注意シテ足痕ノ上ニ擴グ、直上方ヨリ透視シツ、描寫スレバ、之ト寸分違ハザルモノヲ描キ得ベシ、但シ硝子板ヲ用ユル際ニハ、足痕ト密着セザル様、足痕ヨリモ大ナル穴ヲ切り取りタル厚紙ヲ足痕ノ見ユル様ニ据エ、ソノ上ニ硝子板ヲ置クベシ、時トシテ此硝子板ヲ鉛白ヲ擦リ付ケ、透視ヲ妨ケザル程度ノ白色薄層ヲ作り、之ヲ足痕ノ上ニ置キ、鉛筆ヲ以テ足痕ヲ透寫シ、之ヲ黑色紙ノ上ニ載スル時ハ、描畫ハ白地ニ黒ク顯出ス、或ハ此硝子板ヲ硫化カリウむノ溶液ニ浸ス時ハ、鉛白ハ黑色ニ變化スル故ニ、茲ニ足痕ノ鉛板ヲ作製スルコトヲ得ベシ、青色寫眞等ヲ用ユレバ此鉛板ニテ多數ノ複寫ヲ作ルコトヲ得。

此ノ如クニシテ吾人ハ足痕ノ描畫ヲ得レバ、之ヨリシテ足痕ヲ殘シタル人ガ如何ナル特徴ヲ有セシカ、或ハ男女何レナリシヤ、走行シツ、アリシヤ否ヤ、或ハ或疾病ヲ有セシニアラザルカ等ヲ判定シ得ル場合アリ。

凡ソ健康ニシテ通常ナル足ノ印痕ハ、足底ノ前部ニ相當スル所ハ廣ク、後部ノ踵ニ相當スル所ハ卵狀ヲ呈ス、良ク殘サレタル足痕ニ在リテハ、此前後ノ兩部分離シ、唯一條ノ狹キ帶狀ノ部分ヲ以テ連絡セリ、此帶狀ノ部分ハ足ノ小趾側ニ相當スル所ニシテ、ソノ形狀ハ個人ニヨリテ著シク異ナレリ、足痕ノ最前端

第五十圖 足痕



第五十一圖



ニハ趾ニ相當スル五個ノ印痕アリ、踵ヨリ生ズル卵狀印痕ノ形狀ハ、各人ノ差左程大ナラザルモ、其他ノ部分即チ前部ノ廣キ部分、之ト踵トヲ連絡スル帶狀ノ部分、及五趾ノ印痕ハ普通ノ足ニ在リテモ、人々ニヨリ其形ヲ異ニスルコト甚シ、而シテ歩行ノ際吾人ノ體重ハ足ノ内側ヨリモ多ク外側ニ及ブガ故ニ、外側帶狀部分ノ外縁ハ内縁ニ比スレバ、印痕殆ンド常ニ明瞭ナルモノナリ。

足痕ヲ検査スル際、先ヅ以テ吾人ノ注意セザルベカラザルハ、ソガ歩行中ニ印セラレタルモノナルカ、

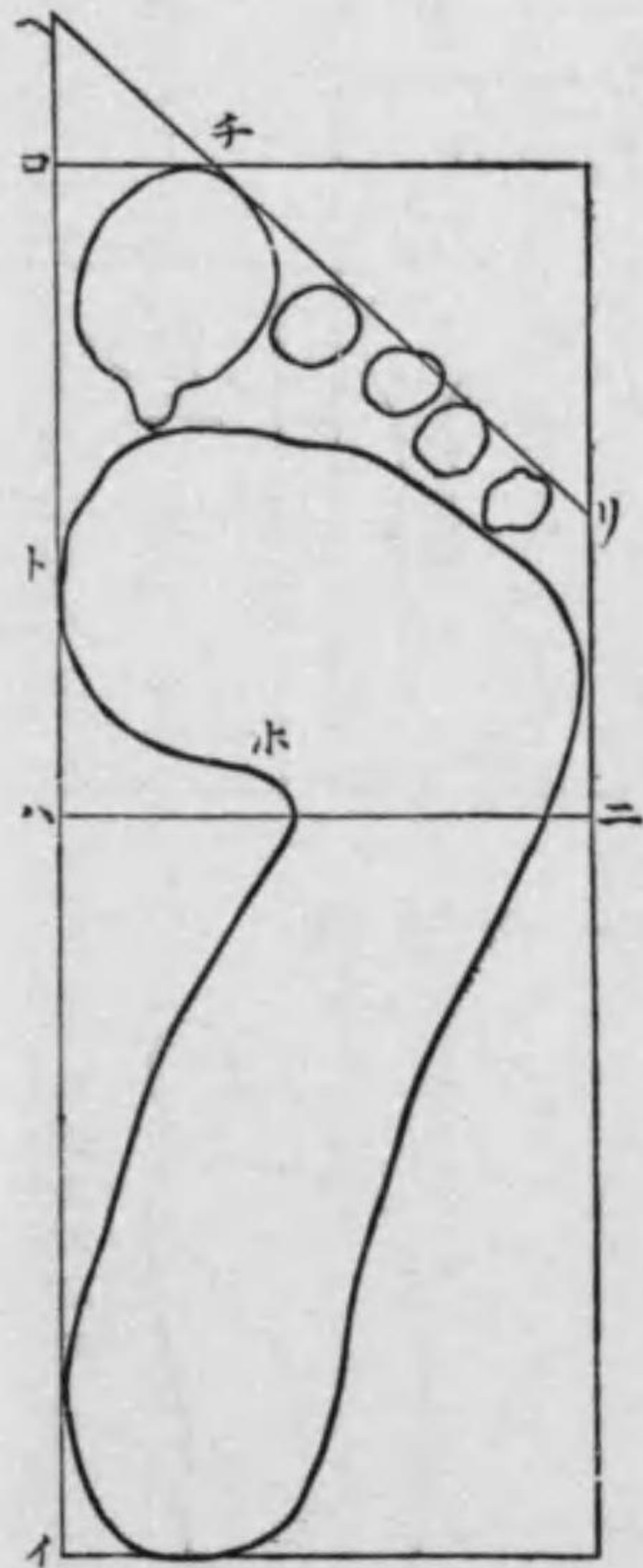
或ハ静止ノ際ニ印セラレタルモノナルカヲ鑑別スルニ在リ。

即チ同一足ノ印痕ハ静止時ヨリモ、歩行時ノモノ長ク、歩行ノ際印痕ノ大トナルハ特ニ拇趾痕ニ於テ著シ、之ニ反シ、足痕ノ幅ハ静止ノ際ノ方歩行時ヨリモ廣シ、是等ニ注意スル時ハ足痕ガ静止中、或ハ走行中ノ孰レニ生ジタルカヲ鑑別スルコトヲ得ルコトアリ。

ソノ他扁平足、通常ヨリ廣キ土着カズヲ有スル足、指紋ニ相當スル蹠紋、畸形、疣等ニヨリテ異同鑑別ニ大ナル手掛リヲ得ルコトアリ、即チ見出サレタル足痕ト、一定ノ人ノ足痕ト同一人ノモノナルヤ否ヤヲ檢スルニハ、嫌疑者ノ足蹠ニ血液、黒鉛、墨、ぐりすりん、或ハ赤色あにりん粉等ヲ附着セシメ、白紙ノ上ニ足痕ヲ印セシメ比較研究ヲナスベシ、即チ足痕ノ大サヲ比較スルニハ双方ノ足痕ニ付、先ヅ第五十二

圖ノ如キ線ヲ引クヲ要ス。

第五十二圖ニ



於テ「イロ」ハ足ノ全長、「イト」ハ拇指ヲ除キタル足ノ長サ、「ハニ」ハ足ノ幅、「ハホ」ハ土着カ

ズノ幅ヲ示シ、「イロ」延長ト拇趾小趾ヲ結ビ付ケシ斜線「リチ」トガ「ヘ」ニ於テ交叉ストセバ、「角ロヘリ」ヲ生ズ、此角ハ拇指ノ長サニヨリテ變ズルモノナルヲ以テ、鑑定ノ際重要ナル價值ヲ有スルモノナリ。次ニ足痕ノ大サ全ク等シカリシトスルモ、單ニ之ノミヲ以テ同一人ノ足痕ナリト直ニ断定スルコト能ハズ、即チ足痕ノ鑑定ニハ其大サノミナラズ、常ニソノ形ヲモ比較セザルベカラズ、此比較法中最モ簡單ニシテ且精確ナルモノハ、比較セントスル足痕ノ内縁ニ沿ヒ「イロ」線ヲ引キ、之ヲ任意ノ數ニ等分シ、其點ヨリ各垂線ヲ引キ之ト足痕内外縁ノ交叉スル距離ヲ測定スレバ、始メテ著シク思ハザリシ相違モ明ニ觀破スルコトヲ得ベシ。

第三十五圖



尙簡單ニハ兩者ノ足痕ヲ透明ナル紙ニ描寫シ、此紙ヲ重ね合シテ双方ノ足痕ガ、全ク重リ合フヤ

否ヤヲ檢スベシ。

足痕或ハ靴痕ノぎぶす型ヲ作ルコトモ、亦大ナル參考トナルコトアリ、之ニハ新製セル濃厚ナルぎぶすえむるじおんヲ少シツ、凹痕ノ内ニ一様ニ注入シ、凝固後之ヲ取出スベシ、此ぎぶす型ヲ精細ニ檢スレバ足痕ノ形狀、靴底ノ磨耗狀態、歩幅等ニ依リソノ足痕乃至靴痕ハ男女何レニヨリテ附セラレシヤ、酒客ナラザリシヤ、重荷ヲ負ヒ居リシモノニアラザリシヤ、跛行者神經病者等ニ非ラザリシヤ等ヲ鑑別スルヲ得ルコトアリ、例ヘバ重荷ヲ運ブ人ハ足痕ヲ平行ニ地ニ印シ、酒客ノ足痕ハ亂雜ヲ極メ、跛行ハ病足ヲ引擦リ居ルガ如キノ好例ナリト云フベク、又我國ニ特有ナル下駄、足袋、草履等ノ痕跡ニモ注意スベシ。

踏、踏趾ハ全形ヲ存セサルヲ以テ確言シ難キモ、檢第五號證ノ枕
覆ヒニ存スル泥足痕ニ於テハ、他者ニ比シテ其方向少シク
外方ニ偏スルモノ、如シ。
七、元來踏趾ニハ外轉踏筋有リ第五趾ニハ外轉小趾筋有リテ夫々、



備考
直立
踏趾
踏趾ノ足
踏趾ノ足
踏趾ノ足
踏趾ノ足



備考
踏趾
踏趾ノ足
踏趾ノ足
踏趾ノ足
踏趾ノ足

靜止時ニ於ケ
ル足痕ノ變形
足ト足趾
相違

第五圖 第六圖

其所屬趾ヲ外側ニ移動セシムル機能ヲ營ムト雖、之ヲ夫々兩趾ヲ
内側ニ移動セシムル筋肉(其名稱ヲ省略ス)ノ力ニ比スレハ甚大ト
ナルカ故ニ、踏趾及ヒ第五趾ヲ強ク第二或ハ第四趾ニ附著スル迄
内轉セシムル事ハ容易ナリト雖、兩趾ヲ外側ニ移動セシムル力ハ
甚タ微弱ニシテ且、其際同時ニ第二或ハ第四趾ノ不隨意ニ同方向
ニ移動スルヲ難キカ故ニ、踏趾及ヒ第五趾ノ外方ニ推移スル
距離ハ通常僅々一乃至二耗ニ過キス、唯趾部ノミニテ全身ヲ支
テ立ツ際即チ所謂「脊延ヒ」スル際ニハ第二乃至第四趾ハ原位置
ヲ、餘リ變セシテ上方ニ屈曲シ、踏趾ト第五趾ト殆ド單獨ニ外
方ニ偏位ス(附圖第七參照)ト雖、其差(踏趾ノ差ハ第六圖ニ於テ

踏趾カ全形ヲ缺クヲ以テ測ラヌ(第五趾ノ差ハ第七圖ニ於テ約三
耗)反テ附圖第六ニ於ケル差(第五趾ニ於テ約五耗)ニ及ハサルコ
ト遠シ、而シテ、況ンヤ附圖第七ノ場合ハ踏趾ノ偏位自由ナル踏足
ノ儘ナルニ反シ、附圖第六ノ場合ハ踏趾ノ偏位不自由ナル足袋穿キ
ナルニ於テヲヤ
八、足袋穿キノ足痕ニ於テ踏趾及ヒ第五趾ノ外方ヘノ偏位カ踏足ノ
足痕ニ於ケルヨリ些キトハ、附圖第八ニ就テ見ルコトヲ得
九、故ニ檢第五號證ノ枕覆ヒニ存スル泥足袋ノ足痕ト、檢第六號證
ノ足袋ヨリ作リタル記録中ニアル第一乃至第四號ノ足痕トハ、夫
々別人ノ足ニヨリテ印セラレタルモノナリト思量セラル
十、(附圖)第六項ニ記載セル如ク五趾ガ一直線ニ近キ排列ヲナス
事、及ヒ第五趾カ比較的第四趾ヨリ遠距離ニ在ル事ハ通常靴ヲ
使用セサル者ノ足痕ニ於テ見ル事多シ。
踏趾ノ痕跡ハ不明ナレトモ若シ踏趾ノ方向、正シク外側ニ向フ
モノトスレハ、之レ亦靴ヲ常用セサル者ニ於テ通常認メラル、
所ナリ。
第二編 定
上叙ノ如キ理由ニ依リ、左ノ如ク鑑定ス。
一、檢第六號證ノ足袋ハ檢第五號證ノ枕覆ヒニ存スル泥足袋ノ足
此鑑定ハ大正〇年八月二十八日着手シ、同年九月二日終了ス。
大正〇年九月二日
京都市上京區新町通出水上ル
醫師 高田義一 耶仰

第二編 身體ニ於ケル犯
行ノ痕跡検査

Examination of the trace of violence,
Examen des traces de la violence,
Die Untersuchung der Gewalttaten.

一、急死々體検査

Examination of sudden death
Examen des morts subites,
Untersuchung des plötzlichen Todes

殺人ノ罪

殺人ノ罪

刑法第九十九條 人ヲ殺シタル者ハ死刑又ハ無期若ハ三年以上ノ
懲役ニ處ス
同 第二百條 自己又ハ配偶者ノ直系尊屬ヲ殺シタル者ハ死刑又ハ
無期懲役ニ處ス
同 第二百一條 前二條ノ罪ヲ犯ス目的ヲ以テ其準備ヲ爲シタル者

急死々體検査

急死セル死體ヲ検査シテソノ死ガ自然ニ來レルモノナルカ、或ハ犯行ノ加ハリシモノナルカヲ判定スル
コトハ、醫師ノ屢遭遇スル所ニシテ、且大切ナル職務ノ一ツナリ。外見上健康ナルモノガ突然急死スルコ
トハ、人ヲシテソノ死因ニ付キ疑問ヲ起サシムル基トナレドモ、此中ニモ、種々ノ病症ノタメニ自然ニ死
ニ至リ、毫モ犯罪ノ手ノコレニ加ハザルモノアリ、すといつける氏ニ據レバ、斯カル疑ヲ以テ法醫學的檢
査ニ上リシモノ、中、約十二%ハ自然ノ病死ナリシト云フ。

京都大學法醫學教室ニ於テ大正五年迄ニ解剖セル死體ニテ、裁判上ノ問題トナリシモノ、及ビ死因ニ付
キ特別ノ興味アルタメ解剖セラレシモノ、合計三百四十四例中、

死産	十三例	初生兒氣管枝炎	十一例	諸所ノ結核	十一例
生活力不全	八例	榮養不真	八例	腹膜炎	六例
産中死	五例	胃腸カチー	五例	心臓疾患	三例
腦膜炎	三例				

第二編 死體検査

赤痢、腸ちふす、咽頭炎、肺水腫、肋膜炎、凍死、心臓麻痺、各二例。
あるこゝる中毒、動脈瘤破裂、もろひれ中毒、疫痢、溺死、腸軸捻轉、腸出血、蜂窩織炎、胃潰瘍各一例。

アリ、即チ病死者ハ計百十八例ニシテ全數ノ約三十%ヲ算ス。コノ中ニハ司法上ノ問題トナリシモノ、ミナラズ、行政上ノ必要ノタメ、或ハ篤志ニ依リテ解剖セラレシモノヲ含有スルヲ以テ、是等ヲ差引ケバノ約半數トナリ、實際司法上死因不明ノタメ解剖ニ附セラレシモノ、約十五%ハ病死ニシテ、犯罪ノ手ノコレニ加ハラザリシモノナリ。醫師ガ司法上ノ解剖ヲ命ゼラレテ、ソノ手段ヲ十分盡サザリシガタメニ、往々病死ナリシモノヲモ變死トナシ、或ハ然ラザルモノヲモ犯罪ノ手ノコレニ加ハリシトナシ、無辜ノ民ヲ鐵窓中ニ泣カシムルコトアリ。仁ヲ旨トスル醫師ハ常ニコノ點ニ留意シテ、斯カル錯誤ニ陥ラザル様注意セザルベカラズ。今變死ト看做サレシモノニシテ、解剖ノ結果病死ナルコト明瞭トナリタル二、三ノ好適例ヲ示シ、實地醫家ノ注意ヲ促サントス。

第一例 傷害致死カ病死カハもろひれ自殺 R、S、七十一歳男子
醫師、生前ヨリ多少心臓疾患ヲ有セシモノナリシカ、大正〇年五月二十一日墮胎ヲ施行シタルノ嫌疑ニ依リテ取調ヲ受クルタメ、A巡査ニ護送サレM警察署ニ出頭ノ途中、或飲食店ニ立寄り夕食ヲ取リタルカ、A巡査ハ此所ニ少シク飲酒シタルタメ酩酊シ、同飲食店出發後R、Sノ歩行變トナリシヲ以テ、A巡査切ニ彼ヲ叱咤シ、且ツ二ノ毆打ヲ加ヘタルト云フ、然ルニA巡査ハ少シク酩酊シ居リ且ツ夜中ノコトナレハ同行セルR、Sヲ問モテ見失ヒタリシヲ以テ、捜索ノ結果、二十日朝R、Sハ前記飲食店ヨリ二十町許リ隔リタル路傍ニ墜レ、昏睡ニ陥リ不明ノ言語ヲ發シ、四肢弛緩シ居レリト云フ。依テ人力車ニテM警察署ニ送リ、同日午前十時頃同署ノ警察醫ヲシテ診察セシメタルニ、R、Sハ、微ニ肝腎ヲ散ラ昏睡シ居レリヲ以テ、ソノ姓ヲ呼ビ、身體ニ微動ヲ興ヘシニ醒覺シタルカ如ク二、三質問ヲ試ミシニ言語澁滞セルモ明ニ答辯シ、輕度ノ頭痛並上ノ感、全身ノ疼痛ヲ訴ヘ、顔面潮紅

Sノ死因ハ暴毒症カ或ハ藥物ノ中毒カノ内ニ在リト推考セラレ、胃内容肝臟等ヲ化學的ニ検査シ、多量ノもろひれヲ檢出シ、生前ノ症狀ト併セ考ヘテR、Sノ死因ハもろひれ中毒ナルノ断定ヲ得タリ。即チ殺人嫌疑者タリシA巡査ハ單ニ潰瘍罪被告トシテ法廷ニ立ツニ至レリ。

第二例 傷害致死カ病死カ下墜性肺炎 F、K、四十歳男子、大正〇年九月中旬ヨリ精神病ニ罹リ、折々暴行ヲナシ不條理ノコトヲ云ヒ、九月二十四日ニハ甚シキ亂暴ヲ爲シ、家族ハソノ處置ニ窮セリト云フ。然ルニ十月一日頃ヨリ病勢増悪シ、終ニ同四日死亡セルカ檢屍ノ結果肋骨ニ骨折アルヲ發見シ、ソノ死因ニ付キ疑問ヲ生シ、終ニ當教室ニ於テ解剖スルニ至レリ解剖所見トシテ特記スヘキハ、右第二乃至第六肋骨及ヒ左第六肋骨ハ骨折シ、右第二、三肋骨ノ折傷部ニハ潰瘍ヲ伴ヒ、肺ニハ著シキ下墜性肺炎アリ、軟腦膜ハ著シク潤濕シ、前頭葉及ヒ中心迴轉ハ稍萎縮スソノ他全身ニ記スヘキ異常所見ナシ、乃チ本屍ノ死因ハ下墜性肺炎ト診斷セラレ、嫌疑者ハ死因ニ對スル疑問ヲ解カレタリ。

第三例 絞殺カ病死カ一氣管枝肺炎 A、B、一歳女児、二週間程前ヨリ感冒ニ罹リ居リシモ稍輕快シ居リシ處、大正〇年十一月二十八日夜急死セリ、然ルニソノ周圍ノ事情ニ甚タ疑フヘキ餘地コレアリシヲ以テ、解剖シテソノ死因ヲ確ムルコトトナレリ。

此ノ如キ事件ヲ列擧スレバ殆ド際限ナキ位ニシテ、要之、通常疑ハシキ事情ノ下ニ急死セル死體中ニモ、自然ノ病死者意外ニ多キモノナリ、故ニ醫師ハ常ニコノ點ニ留意シテ死因鑑定ニ從事シ、事實無辜ノ民ヲシテ鐵窓ノ下ニ呻吟セシメザル様ニ注意シ、他面ニハ司法ノ嚴正ヲ期シ、常ニ社會ノ公安ニ眼ヲ放タザルベカラズ。

1、内因的急死或ハ頓死

Sudden death
Morts subites
Plötzlicher Tod aus natürlicher Ursache.

急死ノ突然襲來スルコトアルハ、吾人ノ往々遭遇スル所ニシテ、外力ノ加ハリテ、急死セル者即チ犯行

ノ手或ハ災害ノ之ニ加ハリシモノハ、茲ニハ之ヲ論及スルヲ避ケ、主トシテ外力ノ加ハラザルカ、或ハ加ハリシトスルモ微細ニシテ、單ニソレノミニテハ到底死因トナリ得ル程ノモノニ非ラズ、而モ突然頓死シタル者、即チ内因的ニ急死シタル者ニ就テ略述セントス。

外見上健康ナル人ガ突然街上ニ於テ、或ハ執務中、又ハ些小ナル誘因ニ依リ、若クハ全然特記スベキ原因ナク、且大ナル病的症狀ヲ呈セズシテ、俄ニ致死スルコトアルハ吾人ノ屢々見聞スル所ナリ、此クノ如キ場合、醫師竝ニ非醫師ハ其ノ死因ニ就キ、一種ノ疑念ヲ喚起スルモノニシテ、其ノ死直前ノ症候ガ比較的明カニシテ、且ツ死因トナリ得ベキ剖檢所見著明ナレバ、後日ニ何等ノ疑問ヲ殘サルモ、死體ノ剖檢上死因トナリ得ベキ程ノ、病的變化ヲ發見セザルニ於テハ、其ノ死因ハ愈々迷路ニ陥リ、剖檢者或ハ臨牀家ハ困却ノ餘リ、心臓麻痺又ハしよつク等ノ診斷ヲ附シテ、一時ヲ糊塗セント試ムルモノナルモ、コハ非常ニ注意ヲ要スルコトニシテ、如何ナル犯罪ノ手ガ之ニ加ハリシヤモ測ラレザルニ依リ、法醫學的事件ニ關シテハ此方面ニ向テ研究ノ眼ヲ放タザルベカラズ。

甲 内因的急死或ハ頓死トハ何ゾヤ

本題ニ入ルニ先チ、吾人ハ先ヅ以テ内因的急死ナル者ノ意義ヲ明カニセザルベカラズ、らんちー氏ニ依レバ、内因的急死トハ普通健康ナル人、或ハ疾病ヲ有ストモ輕微ニシテ、到底其ノ生命ヲ脅カス程ノモノニ非ラザルモノガ、短少ナル時間内ニ斃死スルヲ云フト言ヒ、其ノ後此定義ハ數多ノ學者ニ依リテ、多少ノ變改ヲ見タルガ、びべる氏ハ内因的急死トハ健康者若クハ僅微ナル身體的障礙アルモノガ、特記スベキ原因ナク、甚シキ症候ヲ呈セズ、豫告ナクシテ、數時間乃至一日中ニ死亡スル者ヲ指スト云ヒ、マタふる

あるる氏ハ更ニ之ヲ訂正シテ、内因的急死トハ潛在疾病ノ爲メニ、突然豫告ナク死亡スルモノナリト云ヘリ、予ハ此等ノ學者ノ說ヲ綜合シテ、内因的急死トハ潛在セル疾病或ハ特異性體質ヲ有スルモノニ、僅微ナル誘因加ハルカ、或ハ何等ノ誘因ナクシテ、突然發病シ、意外ニ短時間内ニ死ニ至ルモノヲ云フト定義セントス。

乙、内因的急死ノ統計的觀察

内因的急死ニ就キ、學者ノ調査ニ成ル統計的ノ事實ニ、三ヲ列舉スレバ、まるべりー氏ハ巴里ニ於テ十四ケ年間ニ千一人、へるりひ、ほつぶ兩氏ハ十三年間ニ二十六人、きー、あべる氏ハ五年間ニ八百五十二人ノ内因的急死者ヲ發見セリト報告セルモ、全人口或ハ全死亡者ニ對スル其ノ百分率ヲ記載セザルヲ以テ、其ノ詳細ヲ知ル能ハザルヲ遺憾トス、我國ニ於テモ内因的急死者ハ意外ニ多キモノナリト信ズ、何トナレバ、我教室ニ於テ、司法竝ニ行政上ノ問題ニ關シ、年々剖檢セル急死者四、五十例中、内因的急死者ハ毎年五、六例ニ上ルヲ常トスレバナリ、即チ司法官ヨリ死因ニ疑問アリトシテ、解剖ニ附セラレタル死體中、其ノ十四、五%内因的急死者ナルコトヲ知ルヲ得タリ。

一般ニ内因的急死ハ年齢上ヨリ見レバ、五十乃至六十歳、季節ヨリ云ヘバ七乃至九月、時間的ニハ夜間、職業上ヨリ見レバ職工、下男等ニ最モ多ク來ルト云フト雖モ、コハ歐洲ニ於ケル調査ニシテ、我國ニ於テハ尙未ダ此種ノ調査ナク、直チニソガ適用セラル、ヤ否ヤ不明ナリ、况ンヤ歐米ノ學者間ニ於テモ、此等ノ統計ニ皆多少ノ異義アルニ於テオヤ、今此異說アル統計ヲ一括シテ論ズレバ、内因的急死者ハ全死亡率ノ二、三%ヲ占メ、少ナクトモ獨逸國軍隊内ニ於テハ五%ニシテ、勞働階級ノモノニ多ク、激動ノ後、特

ニ秋冬ノ候ニ於テ最モ多數ヲ占メ、時日ヨリ云ヘバ夕景及ビ夜中ニ多ク來リ、特異性體質ヲ有スルモノニ屢々之ヲ見ルモノナリ。

頓死ノ原因

丙、内因的急死ノ原因

内因的急死ノ原因トナル疾病ハ甚ダ多クシテ、其ノ分類法モ學者ニ依リテ頗ル種々ナリ、予ハ今病理學的分類法ニ從テ之ヲ記載シ、且ツソレニ對スル一、二ノ興味アル例ヲ附加シ、成ルベク予ノ見聞セル好例ヲ述ベントス。

心臟死

一、心臟疾患ノ爲メニ來ル急死

ぶしゆ氏ハ心臟疾患ノ爲メニ、急死セル者八十一例ヲ報告セルガ、其ノ中四十例ハ剖檢ニ依リテ、ソガ確實ナルコトヲ證明セラレタル者ナリキ、れつせる氏ハ剖檢例百七十一例中七十一例、ぶるあるでる氏ハ急死者二百三十例中、四十五例ハ心臟疾患ニ基因セル事ヲ報告セリ、心臟疾患ニ依リテ急死セルモノヲ一般ニ心臟死ト稱シ、甚ダ急劇ニ死ニ至ルモノナリ。

ぶしゆ氏ノ報告セル心臟死八十一例中、十八例ハ夜間、五例ハ練兵後、其ノ他ハ或ハ飲酒中、飲酒後又ハ執務中若クハ舞踏中等ニ突然死ニ至リシモノナリ、岡本教授ノ剖檢セル一例ハ四十二歳ノ女子ニシテ、其夜情夫ト同衾中突然死亡シタルヲ發見セルモノニシテ、其ノ死因ニ疑ハシキ點アルニ依リ剖檢セラレタルモノナルガ、心臟表面ハ甚シク脂肪ニ富ミ、其ノ大サハ本屍ノ手拳ノ一倍半、筋色淡ニシテ少シク黃色ヲ帶ビ、筋纖維ハ明カニ脂肪變性ニ陥リ居リ、且ツ脾臟ノ断面ニ明カニ溢血アルヲ見タリ、其ノ他全身ニ特記スベキ異狀ナカリシ、即チ本屍ハ同教授ニヨリ、心臟麻痺ニ依リ死亡セルモノナリト鑑定セラレタリ。

心臟死ノ死直前ノ症狀ハ甚ダ僅微ニシテ、一般性ノ不快、眩暈、嘔氣及ビ嘔吐等相踵イデ來ルヤ、間モナク突然窒息急死スルモノナリ。

心臟死ニ陥リ易キ原因ヲ有スルモノハ、脂肪多キ體質者及ビ慢性酒精中毒者ニシテ、一般ニ云ヘバ甚大ナル身體的勞作中、或ハ其ノ後ニ來ルコト多ク、例ヘバ多食後ノ血液ガ消化器系統ニ集マル爲メ、心臟ノ勞作多クナリシ時、更ニ他ノ身體的激動ヲナシタル爲メ、兩者相俟テ心臟ノ負擔ヲ重カラシメ以テ、能ク心臟死ヲ來スモノナリ。

心臟死ナル診斷ヲ下スハ甚ダ困難ナルコトニシテ、らんち一氏ノ如キハ心臟ガ突然永久的停止ヲナシ、患者ハ直ニ人事不省ニ陥リ、間モナク死ニ至ル者ヲ心臟死ト命名シ、へるりひ、ぼつぶ兩氏ハ急激ナル而モ直接ノ心動停止ニ依リ死ニ至ルモノヲ指シタレドモ、現今ニ至リテハ心臟死ナル者ノ定義ハ甚ダ不明トナレリ、即チうるひよう氏ハ之ヲ窒息性及ビ麻痺性心臟死ニ分チ、前者ニテハ右心、後者ニテハ左心ニ甚シク血液ヲ充滿スルニ依リ、兩者ノ鑑別トナスベシト云ヘリ、然ルニふるーめんとつく氏ノ如キハ、心臟死乃至心臟麻痺トハ困難診斷ニ過ギズトナセリ、然レドモ心臟死ハ次ノ病理的變化アル場合ニ來リ得ル事ハ事實ナリ、即チ心臟瓣膜症、心筋疾患、脂肪心、冠狀動脈疾患、心臟擴大、心臟外膜炎、心臟破裂、心臟神經裝置ノ障害、脚氣等ニ來ルモノニシテ、就中注意ヲ要スルハ冠狀動脈疾患及ビ心臟神經裝置ノ障害ナリ。今此實例ニ就テ少シク詳述セン。

きー、あべる氏ニ依レバ内因的急死者八百五十二例中、四百五十一例即チ五十二・九%ハ冠狀動脈ノ硬變アリテ心臟死ニ陥レルモノナリシト云フ、冠狀動脈硬化スレバ一面其ノ血栓或ハ栓塞ヲ來シ易ク、他面ニ

ハ血液ノ流入不良トナル爲メ、心筋ノ營養充分ナラズ、從テ其ノ部ノ心筋ニ營養不良ヲ來シ、心臟死ニ陷リ易キニ至ル者ノ如シ、故ニ心臟死ノ疑アル場合ニハ、必ラズ冠狀動脈ヲ剔出シテ之ヲ鏡檢セザルベカラズ、えすとらいひ氏ニヨレバ、今迄全ク健康ナリシ三十一歳ノ男子ガ結婚ノ當夜ニ突然急死セルニ依リ、剖檢セルニ兩冠狀動脈ニ栓塞ヲ發見シ、其ノ他ニハ全身何處ニモ死因トスベキ程ノ病變ナカリシト云フ。

二、胸腺淋巴腺性體質トしよつく死

胸腺淋巴腺性體質トしよつく死

ふるあるでる氏ニヨレバ、極メテ輕微ナル機械的或ハ精神的刺戟ガ、反射的ニ心動ヲ停止セシムル事アルモノニシテ、通常之ヲしよつくニテ死亡スト云ヒ、例ヘバ胃部ニ於ケル輕微ナル衝擊ハ、時トシテ人ヲ急死セシムルコトアリ、一小兒ガ遊戲中他ノ小兒ノ胃部ヲ輕ク足蹴ニセル爲メ、蹴ラレタル小兒ハ突然其ノ場ニ仆レテ急死セリトノ例ヲ舉ゲ、まーしゆカ氏モ亦タ同様ノ例ヲ報告セリ、其ノ他單ニかてーてるヲ尿道ニ挿入セシ爲メ、或ハ喉頭ニ小ナル損傷ヲ得タルノミニヨリテしよつく死ニ至リシ報告アリ。

しよつく死

しよつく死トハ剖檢上身體ニ死ニ至ル程ノ特記スベキ病變ナクシテ、突然心動停止ニヨリ死ニ至ルモノニシテ、胸腺ガ年齢ニ比シ比較的大、且ツ身體諸所ニ於ケル淋巴装置ノ發育旺盛ナルモノハ、僅微ノ原因ニ依リ極メテ容易ニしよつく死ニ至ルモノナリ、ほふまん氏ノ報告ニ依レバ、一男子一夜街上ニテ脱糞中警官ニ叱咤セラレテ其ノ場ニ斃死シ、又或ル婦人ハ醉漢ニ追跡セラレ驚愕ノ餘リ死ニ至リ、もるかぐにー氏ハ一男子ガ銃器ヲ向ケラレタルノミニシテ、既ニ斃死セル一例アルヲ報告セリ、其ノ他之ニ類似ノ報告甚ダ多數ナルガ、其ノ當時ノ學者ハ此等ノしよつく死ヲ、單ニ精神作用ノミニ依リテ來レル心臟死ナリト説明セリ、然ルニ近年ニ至リ身體ニ何等ノ變態ナク、極メテ健全ナル人ガ、單ニ精神的打撃ノミニヨリテ、

死亡スルコトアルハ甚ダ不合理ナリトシ、此クノ如キ者ニ付キ剖檢ノ際、特ニ注意ヲ拂ヘルニ、多クハ胸腺淋巴腺性體質ヲ具フルモノナルコトヲ知レリ、今京都大學醫學部法醫學教室ニテ經驗セル實例中、特ニ興味アルモノ二三ヲ列舉セン。

第一例 子宮病ヲ有スル二十三歳ノ婦人

子宮病ヲ有スル二十三歳ノ婦人、婦人くらゐほるむトエーテる麻酔ノ下ニ、其ノ十五趾ヲ約四十分間ニ吸入セシメ、子宮内面ヲ搔爬シ、沃度丁酸布ヲ行ヒ、尙ホ子宮ヲ少シク切り擴ゲントスル際、急ニ變調ヲ來シ、突然患婦ハ死亡セリ、剖檢ノ結果所謂胸腺淋巴腺性體質ナル他、死因トナルベキ程ノ病變ナカリシヲ以テ本屍ハ同體質ニ依レルしよつく死ナリト鑑定セラレタリ。

第二例 十四歳ノ男子、明カニ入水セルニモ拘ラズ

十四歳ノ男子、明カニ入水セルニモ拘ラズ、身體ニハ毫モ溺死ノ標徴ナク、且亦死因トナリ得ベキ程ノ病變及ビ犯行ノ手ノ之ニ加ハリシ痕跡ナクシテ、淋巴腺性體質ノミヲ有セシヲ以テ、著水セル際ニハ既ニ精神的にしよつく死ヲ來シ居リシモノナラント鑑定セラレタリ。

第三例 五十七歳ノ男子、某日午後二時三十分頃東京大學傳染病研究所

五十七歳ノ男子、某日午後二時三十分頃東京大學傳染病研究所ノちふすわくらん一託ノ注射ヲ受ケ、三丁程ノ道ヲ歩ミタル後、午後三時ニ至リ、下肢ノ倦怠、惡寒等アリシヲ以テ就牀シ、同六時頃頭微ノ頭痛、惡寒、胸内苦悶等ヲ來シ、嘔吐、人事不省等相次イデ至リ、午後七時頃遂ニ死亡セリ、之ヲ剖檢セルニ所謂淋巴腺性體質ノミニシテ、其ノ他ニハ特記スベキ異常ナシ、即チ本屍ノ死因モ亦タ其ノ體質ニ依ルしよつく死ナリト鑑定セラレタリ。

第四例 二十三歳ノ男子、某日午後六時頃或ル醫院ノ代診ヨリある

二十三歳ノ男子、某日午後六時頃或ル醫院ノ代診ヨリあるこえれくらゐ五趾ヲ靜脈内ニ注入セラル、三十分ニシテ顔面潮紅シ、暫時ノ後冷汗ヲ流シ、顔面蒼白トナリ、三十分ニシテ胸内苦悶ヲ訴ヘ、痲狀次第ニ險惡トナリ、同七時頃遂ニ死亡セリ、剖檢ノ結果、胸腺淋巴腺性體質ヲ有スル外、特記スベキ異常所見ナク、毒物ノ化學的證明モ亦タ陰性トナリシヲ以テ本例モ其ノ異常體質ニヨル急死ナリト鑑定セラレタリ。

第五例 四歳ノ女兒、呼吸困難ヲ有スルノ故ヲ以テ某日午後十一時

四歳ノ女兒、呼吸困難ヲ有スルノ故ヲ以テ某日午後十一時

頃某院ノ代診ニ依リ、祛痰ノ目的ニテ數回咽頭部ヲ拭除中突然急死セリ、剖檢ノ結果、咽頭後壁ニハ膿瘍アリテ氣管ヲ壓迫シ居リ、其ノ他ニハ死因トナリ得ル程ノ異常所見ナシ、即チ同兒ノ死因ハ咽頭ノ器械的刺戟ニヨル心臟及ヒ呼吸運動停止ニ在リテ、彼ノ咽頭部ニ於ケル病變ノ異常ハ此ノ機構ヲ助ケタルモノナリト診斷セラレタリ。

死體解剖検査記録

東京市〇谷區〇年町二丁目十一番地
〇木〇三〇娘
源〇〇内縁ノ妻
ナ〇〇二十歳

第一 外表検査

一、女性屍體。重三九二〇〇。其身長一四六。〇。顔面赤。右半側眉脚部、背部右上方外側及下肢ノ背面ハ著シク暗紫色ヲ呈ス(屍斑)胸腹部及四肢ノ前面ハ蒼白ナリ
死後ノ強直ハ凡テノ關節ニ於テ稍々強ク存在ス皮膚赤。下腹部鼠蹊部ハ溫暖ニシテ體溫直腸内ニ於テ攝氏三十度ナリ(室温攝氏十八度)
二、頭部、結髮亂レズ髮全長七五。〇。頭皮ハ蒼白、異常ナシ
三、顔面兩眼ハ閉ツ。之ヲ開檢スルニ右眼瞼ニ眼結膜ハ淡紅色血管充溢スルモ血點ヲ認メズ、角膜ハ透明、中等度ニ開大セル瞳孔ヲ透見シ得、眼球ハ彈性ニ富ム、左眼瞼ニ眼結膜

ノ充血ノ度右ヨリモ軽度ナリ、其他ノ性状ハ全ク右ニ等シ、左右ノ鼻孔ニハ綿栓ヲ挿ス、之ヲ除去スルニ其内端ニハ汚穢暗灰色ノ粘濁液ト少許ノ血液トヲ附着ス、鼻翼ヲ壓スルニ胃液ヲ洩サズ口ハ半開キ口唇粘濁ハ汚穢淡紫色、口腔粘濁亦同様色ヲ呈ス、舌尖ハ齒列ノ後ニ在リ、口腔内異物ヲ認メズ

左右ノ耳翼及外聽道内ニ異常ナシ

四、頭部前頭部置ニ項部ニ異常ナシ

五、胸腹部損傷異常ナシ

六、背部肩胛間部及背面中央部、背柱ノ兩側ニ於テ各一個ノ新シキ灸痕ヲ存シ脊髄ヲ貼ス其他ニ損傷異常ナシ

七、右上肢肘關節ノ外側ニ於テ拇指頭大ノ暗赤色ニ透見セル部一個アリ割テ加フルニ皮下ニ暗赤色ノ出血ヲ存ス

其他ニ損傷異常ナシ

八、左上下肢ニ損傷異常ナシ

九、外陰部陰阜ニハ黒色ノ陰毛ヲ叢生シ陰門ニ異常ナク處女膜ハ厚クシテ尚健全シ中央ニ大豆大ノ處女膜孔アリ、陰ニ損傷異常ナク内ニ白色粘濁液少許ヲ存ス顯微鏡下ニ檢スルニ無數ノ扁平上皮細胞少數ノ白血球赤血球ヲ存シ精蟲ノ存在ヲ認メズ

十、肛門ハ閉テ周圍ニ汚穢ナシ

第二 内景検査

十一、頭皮ヲ式ノ如ク横断開檢スルニ其際暗赤色ノ流動性血液稍々多量ヲ洩出ス軟部組織ノ前半部ハ淡紅色水分ニ乏シク後半部ハ淡赤色ヲ呈シ水分ニ富ム前半部軟部組織間ニ蛋割大乃至米粒大ノ血液點數個散在ス

頭蓋骨ヲ鋸斷開檢スルニ其際暗赤色流動性血液多量ヲ洩出ス骨ノ厚サ最厚部五・〇耗最薄部二・〇耗板障ハ暗赤色ヲ呈シ血液ニ富ム骨質ニ骨折等ノ異常ナシ硬腦膜ハ骨ニ固著ス内面ハ硬膜滑澤潔白大脳鎌膜起始部ニ相當シテ硬腦膜下ニ少許ノ出血ヲ存ス其他ニ異常ナシ軟腦膜ハ一般ニ透明血管網ノ充盈ハ著シキモ出血等ノ異常ナシ側室内ニハ淡黄色透明液少許ヲ存シ室壁ノ血管ハ稍々充盈ス脈絡叢ノ血漿中等ナリ大脳半球ノ血點著シカラズ視神經球線狀體

「レンズ」鏡内鏡外蓋ジルクワイ氏導水管蓋形高太脚小腸腸小腸腸ノロル橋及延髄等ニ出血其他ノ異常ナシ基礎動脈柔軟異常ナシ底面ノ硬腦膜性状奇隆部ニ等シク頭蓋底ノ骨質ニ損傷異常ナシ

乙 胸腹部開檢

十二、胸腹部ノ正中ヲ式ノ如ク縱断開檢スルニ皮下脂肪組織ノ發育佳良ニシテ其厚サ腹壁ニ於テ一・五種ナリ筋内ハ淡赤褐色發育佳良ナリ出血等ノ異常ナシ腹腔内ニハ汚穢帶黃褐色ノ酒濁液一〇・〇託ヲ存ス大網膜及腹膜下ノ脂肪含量著シク多ク腹腔臟器ノ位置ニ異常ナク横膈膜ノ高サ右ハ第四肋間左ハ第五肋骨ニ位ス

其 一 胸腔臟器

十三、胸腔ヲ開檢スルニ左右胸腔ニ顯著ナク同腔内ニ異液ナシ胸肋膜下ニ出血ナク肋骨ニ骨折等ノ異常ナク同部皮下筋内等ニ出血ヲ認メズ

十四、胸腺尙遺殘ス左右ノ二葉ヨリ成リ大サ五・五—八・〇—七・〇重量三〇・〇五ナリ表面淡褐色被膜上ニ脂肪沈着多シ實質ハ血液ニ富ム(胸腺ノ一部ヲ一〇%ニおろし)る液ニテ固定シ之ヲ氷結薄切シテ「マトキシリン」「エオジン」共染法又ハ「マトキシリン」「エオジン」共染法ヲ施シテ顯微鏡下ニ檢スルニ間質稍々増殖セルモ尙形態上完全ナル胸腺實質ヲ存シ脂肪變性ノ像ナク充血著シク所々小出血點アルヲ認ム

十五、心室内ニハ淡黄色透明液四・〇託ヲ存ス内面蒼白健滑澤血液點ナシ

十六、心臓大サ木屐手拳ヨリ稍大、外心膜下ニ脂肪沈着稍多シ、心尖ハ左心室ヨリ形成セラレ冠狀脈管ハ蛇行セズ外心膜下葉ニ左心室背面ニ於テ蛋割大乃至米粒大血液點數個ヲ群在シ其他ニモ蛋割大ノ血液點數個ヲ存ス右心房内ニハ暗赤色流動性血液約五・〇託ヲ含ミ左心房内ニハ同様血液約二・五〇託ヲ存シ左右心室内ハ殆んど空虚ナリ、心臓別出ノ大血管ヨリ同様に血液約七・〇託ヲ洩出ス大動脈彎曲ニ肺動脈ハ満水ニヨリ能ク閉鎖ス、房室間孔右ハ三指左ハ二指ヲ過シ心筋ノ厚サハ左ハ一〇指右ハ三・〇指ナリ其色褐色ヲ呈シ硬度ハ殆ど正常ナリ肉眼的ニ脂肪變性ノ像ナシ、内臓ハ殆ど透明出血等ノ異常ナシ、僧帽瓣半

月三尖瓣索乳嚢筋肉柱等ニ異常ナシ、大動脈起始部ノ内面淡黄色平滑柔軟ニシテ其幅狭ク冠狀脈管開口部ニ於テ花壇狀ニ隆シ脂肪性潰瘍ノ像ヲ呈ス、卵圓窩ニ異常ナシ(心筋ノ一部ヲ一〇%ニおろし)る液ニテ固定シ之ヲ氷結薄切シテ「マトキシリン」「エオジン」共染法又ハ「エオジン」共染法ヲ施シテ顯微鏡下ニ檢スルニ心筋ノ排列ニ異常ナク大サモ殆ど正常ナリ脂肪ハ間質ニ稍々多キモ筋細胞ニアルコト少シ褐色色素モ甚ダ少ク断裂ノ像モナシ只所々心筋ノ不規則ニ太ク收縮シタルガ如キ像ヲ存シ間質ノ一部ニ「アラスマ」細胞少許ヲ存セル所アリ

十七、右肺表面ノ色淡紅若白若浮腫狀ヲ呈ス硬度ハ海綿様柔軟哮喘ノ感著シ肋膜下ニ出血、血液點ナシ断面ノ色表面ニ等シク之ヲ壓スルニ氣管枝ノ斷端ヨリハ細小白色泡沫液多量ヲ、血管ノ斷端ヨリハ暗赤色流動性血液多量ヲ洩出ス、氣管枝内ニハ白色粘濁ナル絮狀片ヲ有スル粘濁透明液乃至泡沫液ヲ以テ充タサル粘濁ハ著シク充血ス肺門膜ハ大豆大乃至蠶豆大ニシテ數個ヲ存ス(肺臟ノ一部ヨリ前項同様ノ切片標本ヲ作リテ鏡檢スルニ一般ニ充血著シク肺胞ハ或部分ハ漿液ニテ滿サレ肺水腫ノ像ヲ呈シ或部分ハ擴張シテ破裂レ肺氣腫ノ像ヲ呈スルモ大體ニ於テ殆ど正常ナリ脂肪ハ殆どナク氣管枝粘濁ノ割離又ハ其他ノ病的現象ナシ)

十八、左肺表面ノ色淡紅若白若浮腫狀ヲ呈ス硬度ハ海綿様柔軟哮喘ノ感著シ肋膜下ニ出血、血液點ナシ断面ノ色表面ニ等シク之ヲ壓スルニ氣管枝ノ斷端ヨリハ細小白色泡沫液多量ヲ、血管ノ斷端ヨリハ暗赤色流動性血液多量ヲ洩出ス、氣管枝内ニハ白色粘濁ナル絮狀片ヲ有スル粘濁透明液乃至泡沫液ヲ以テ充タサル粘濁ハ著シク充血ス肺門膜ハ大豆大乃至蠶豆大ニシテ數個ヲ存ス(肺臟ノ一部ヨリ前項同様ノ切片標本ヲ作リテ鏡檢スルニ一般ニ充血著シク肺胞ハ或部分ハ漿液ニテ滿サレ肺水腫ノ像ヲ呈シ或部分ハ擴張シテ破裂レ肺氣腫ノ像ヲ呈スルモ大體ニ於テ殆ど正常ナリ脂肪ハ殆どナク氣管枝粘濁ノ割離又ハ其他ノ病的現象ナシ)

十九、頸部器官ハ淡黄色ノ若クハ淡褐色ノ舌ヲ以テ蔽ハル舌根部ノ濾胞著シク發育ス咽頭食道ノ粘濁ハ淡赤色食道ノ下端ニハ木栓化ノ米飯粒ヲ介在ス粘濁ニハ濾胞著シク多量ニ發育シ存ス喉頭氣管ノ粘濁ハ淡赤色細小泡沫ヲ有スル粘濁多量ニ存ス舌骨竇ニ喉頭ノ諸軟骨ニ骨折等ノ異常ナシ

其 二 腹腔臟器

二十、脾臟大サ一三・〇—一八・〇—二三・〇種表面ノ色汚穢帶淡紅色硬度ハ稍々軟断面ノ色殆ど表面ニ等シク脾胞ハ著シク増殖シ存ス(脾臟ノ一部ヨリ上記ノ如キ處置ヲ以テ切片標本ヲ作リテ之ヲ鏡檢スルニ一般ニ脂肪ナク所々腫脹著シク擴張シ鬱血セル所アリカカル所ニハ色素顆粒ヲ有スル脾細胞少カラズノ他場所ニヨリテハ「アラスマ」細胞ノ群在セル所アリ尙少許ノ骨髄細胞等ノ多數ノ

第二編 死體検査

脾臟固有ノ細胞内ニ混在シ存ス)

二十一、左腎大サ一・〇—一・六—五・三—五種表面ノ割離シ易シ表面ノ色淡赤褐色硬度ハ弾力性硬固断面ノ色表面ニ等シク體質ハ著シク暗赤色ヲ呈ス皮質殆ど透明異常ナシ血液多シ(腎臟ノ一部ニテ切片標本ヲ作リテ鏡檢スルニ脂肪變性ノ像ナク圓形細胞浸潤等ノ像モナシ殆ど全ク健康ノ状態ニアルヲ見ル)

二十二、右腎大サ一・〇—一・五—一・六—五種表面ノ色淡紅若白若浮腫狀ヲ呈ス、副腎左右共ニ皮質殆ど正常ナルモ髓質著シク萎縮ス

二十三、膀胱内空虚粘濁ハ淡紅色ニシテ汚穢淡黄色ノ膿液ヲ以テ蔽ハル出血等ノ異常ナシ

二十四、胃内ニハ未消化米飯粒ヲ混スル汚穢暗褐色ノ粘濁ナル内容約四〇・〇託ヲ存ス粘濁ハ一般ニ血管怒張充盈シ濾胞ノ發育佳良ナリ小腸ノ周圍ニハ所々粘濁下血液點ヲ存ス其他ニ粘濁塊出血等ノ異常ナシ

二十五、小腸内ニハ汚穢帶黃褐色ノ粘濁ナル内容少許ヲ存ス粘濁ハ其血管怒張充盈シ孤腸集腸ハ明カナリ出血其他ノ異常ナシ

二十六、大腸内ニハ野菜片ヲ混スル帶綠黄色ノ稍々柔軟ナル糞便多量ヲ存ス粘濁ハ淡紅色血管怒張充盈シ濾胞ノ發育著シ其他ニ出血粘濁塊等ノ異常ナシ腸間膜ハ大豆乃至蠶豆大ニ腫脹シ其断面ハ腫脹ヲ呈ス

二十八、肝臟大サ二一・〇—一四・五—一七・〇種表面ノ色淡紅色硬度ハ弾力性硬固ナリ被膜下ニ於テ中心紫紅色ヲ呈シ周圍黄色ヲ呈ス小葉ヲ明カニ透見ス断面ノ色表面ニ等シク小葉ノ分界ハ明カニシテ表面ノ状態ニ等シク血液著シク多シ(之ヨリ顯微鏡標本ヲ作リテ檢査スルニ各小葉中心靜脈竇ニ毛細管ハ著シク充血シ肝小葉ハ著シク腫脹シ其脂肪染色標本ヲ見ルニ到ル處細胞体内ニ至ルマテ微細脂肪顆粒ヲ以テ充タサルヲ見ル)

二十九、膽囊内ハ淡綠色ノ胆汁中等度ニ存シ粘濁ニハ「コレステリン」ノ沈澱ヲ存ス

三十、内陰部子宮高サ八・五種底面ニ於テ五・五種頸部ニ於テ三・

第二編 死體検査

内陰部子宮高サ八・五種底面ニ於テ五・五種頸部ニ於テ三・

内陰部子宮高サ八・五種底面ニ於テ五・五種頸部ニ於テ三・

○ 腹内臓器ニ於テニ、五臓六腑ニ於テニ、○ 腸ヲ算ス、子宮口ハ横裂レ瘻管ナシ子宮腔ヲ閉鎖スルニ頸部ノ結膜ハ蒼白淡黄色寒天様内容ヲ存ス體部及底部ノ粘膜ハ著シク暗赤色ヲ呈シ血管充盈ス其表面ニ汚穢淡黄色膿液ヲ固着ス右卵巣稍々腫大グラフ氏濾胞著シク大ナリ喇叭管ハ一般ニ血管怒張充盈ス左卵巣ハ蒼白殆ト異常ナク喇叭管ニモ著シクナシ

三十一、胸部及腹部大動脈ノ内面ハ蒼白脂肪性潰瘍多數ニ散在スルヲ認ム右ニテ解剖検査終了時ニ午前十一時四十分ナリ

本屍内景ニ於テハ胸腺淋巴腺ノ異常發育以外ニハ何等特記スヘキ病變ナク内出血等ノ異常モナシ心臓肺臟腎臟等ハ之ヲ組織學的ニ検査スルモ殆ト全ク正常ノ状態ニアリ唯肝臟ノ變色ハ顯著ニシテ脂肪變性稍々著シキモ急慢性増悪ノ像ナク久慢ノ病變ニ過キサレハ之ヲ以テ死因ト認ムルヲ得ス(解剖検査記録第十六第十七第十八第二十一第二十二第二十八項)要之本屍ニ於テハ死因ト認ムヘキ損傷ノ痕跡乃至病變ヲ肉眼的並ニ顯微鏡的ニ檢出スル能ハス然レニ本屍剖檢ノ主所見ハ屍斑著シキコト血液ノ到ル所暗赤色流動性ナルコト腹部内臓器ニ肝臟腎臟等ノ變色著シク胸腺内臓器ヲ胸腺肺臟心臓モ高度ノ血量ヲ有セルニ反シ腸胃實内ニ血液アルコト等ニシテ約言スレハ急激死ノ像ヲ呈セルニアリ(解剖検査記録第十六乃至第二十八項)

而シテ一方特記スヘキコトハ本屍ニハ既掲ノ如ク年少ノ時ニノミ存シ成年ニ達セハ消失スルヲ常トスル胸腺ヲ殘存シ(解剖検査記録第十四項)身體中諸所ノ淋巴裝置著シク増殖シ同記録第十七第十八第

三 血管疾病ノ爲メニ來ル急死

(天) 動脈疾患

先天的ニ大動脈狹隘ナル爲メ、常ニ心臟ノ負擔ヲ重カラシメ、從テ心臟衰弱ヲ來シ、其ノ爲メニ急死ニ至ルコトアリ、ぶつしゆ氏ハ之ニ關スル三實例ヲ報告セリ、第一例ハ作業中突然急死シ、第二例ハ器械體

十九第二十第二十五第二十六第二十七項)所謂胸腺淋巴體質形成セラレ存スルニアリ然リ而シテ胸腺淋巴體質ノ人カ通常ノ人ニ何等危害ナキ些少ナル外力ノ作用ニ由リ容易ニ死ニ至ルコト多キハ周知ノ如ル所ナリ

今本屍剖檢所見ヲ精査スルニ外表面ニ左側腹部ニ於テ何等外力ノ作用シタル痕跡即表皮變色皮下出血等ヲ認メサレトモ立會官伊藤警部補ノ談ニ「義兄長○○ガナ○ノ左側腹部ヲ足ニテ蹴リタルニナ○ハ痛イ」ト云ヒサマ倒レ其儘様子カ變リ遂ニ間モナク死亡シタリトアルニヨリテ之ヲ按スルニ

本屍ノ死因ハナ○カ上記ノ如ク淋巴腺腫ニ胸腺ノ腫脹ニ肝臟ノ病變アリテ通常人ニハ何等危害ヲ來ササル程度ノ些ナル外力ニヨリ容易ニ死ニ至ヘルキ體質ヲ有セシカ爲ニ腹部ニ受ケタル僅微ナル外力ノ結果反對的ニ腹部内臓器血管神經ノ麻痺ヲ來シ同神經ノ支配セル諸血管ハ弛緩シテ血壓ニ急ニ沈降シ爲ニ腦貧血ヲ生シ所謂「ショック」死ニ陥レルモノト史料ス

鑑定

前記說明ノ理由ニヨリ鑑定スルコト左ノ如シ

一、本屍ノ死因ヲ「ショック」死トス

此鑑定日數ヲ大正七年五月一日ヨリ

同月八日ニ至ル八日間トス

大正七年五月九日

東京地方裁判所醫務囑託
鑑定人 淺田 一國

東京地方裁判所醫務囑託
鑑定人 古畑 基徳

血管疾病ノ爲メニ來ル急死

操後間モナク死亡シ、第三例ハ或ル夜突然死亡シ居レルヲ發見シタルモノナルガ、剖檢ノ結果何レモ大動脈ガ異常ニ狹キコトヲ發見セリト云フ、時トシテ又先天性ニ血管壁薄キ爲メ急死ニ陥ルコトアリ、ぶるあるでる氏及ビびべる氏ノ報告ニ依レバ、何等特記スベキ原因ナクシテ死亡セルモノヲ剖檢セルニ、大動脈ニハ毫モ硬變ナキニ拘ラズ、先天性ニ血管壁非常ニ薄カリシ爲メ管壁破裂シ、ソガ死因トナリ居リシコトヲ發見セリト云フ。

血管ニ於テ後天性ニ來レル變化中最モ、急死ヲ來シ易キモノハ、云フ迄モナク血管硬化症ナリ、而シテ之レガ急死ノ原因トナルハ老年者ノミニ限ラズ、往々比較的の年少者ニモ來ルコトアリ、其ノ原因タルモノハ多クハ微毒及ビ慢性ノ酒精中毒ナリ、冠狀動脈ノ硬化ニヨリテ、甚ダ屢々急死ノ來ルコトアルハ既述ノ如シ、次デ硬化ニ基因スル血栓ガ往々急死ノ原因トナリ、或ハ硬化ノ爲メニ管壁ノ抵抗弱クナリ動脈瘤ヲ作り、其ノ破裂ノ爲メニ出血死ニ陥ルコトアリ、若シ動脈瘤ガ腦底ノ基礎動脈ニ生ズル時ハ、甚ダ危険ニシテ、管壁ノ抵抗力ト血壓トカ僅カノ差ニ依リテ平衡セル際、其ノ患者ノ立腹興奮等ノ原因ニ依リ、血液鬱積シテ血壓亢進スル時ハ忽チ其ノ平衡ヲ失ヒ、管壁破裂シテ腦出血ヲ來シ突然急死スルコトアルモノナリ、予ハ之ニ關スル數例ニ遭遇セリ、一ハ六十五歳ノ婦人ニシテ、某日午前八時頃、其ノ子息ト二三口論ヲナセリト思フ間ニ突然急死セリ、剖檢セルニ左側室内ニハ流動血ト共ニ黑色ノ凝血極メテ多量アリ、同側ノ大脳神經節ハ殆ンド破壊シ盡クサレタリ、其ノ他本屍ニハ死因トナルベキ程ノ病變ナカリシ、即チ本屍ノ死因ハ腦出血ナリト鑑定サレ、其ノ子息ニ對スル嫌疑ハ解除サレタリ、尙ホ一例ハ一俠客常ニ我慢強キヲ以テ自慢トナセルガ、或ル日一大炙ヲ點ジ熱キ餘リ氣張リ居ル中、突然腦出血ヲ起シテ死亡セリ、以テ血

腦出血

第五十七圖



門水腫

管ノ弱キ人ニハ些細ナル誘因モ亦死ヲ來スニ足ルコトヲ知ルベシ。

ぶつしゆ氏ノ報告ニ依レバ、腦出血死亡者中、前夜健全ニシテ何等ノ異常ナク就床セルモノガ、翌朝床中ニ死亡シ居レル者、馬ヲ飼養セントシテ突然斃死セル者、愛犬ト遊戯中忽如急死セル者、酒客ガ拘留中ニ死亡セル等ノ實例甚ダ多シ、腦出血ニテ死亡スル際ニハ死ハ殆ンド二、三分間ニ來リ、時トシテ其ノ前驅症トシテ頭痛、違和等ヲ感ズルコトアリ、出血ノ好發部位ハじるびー氏溝動脈及ビ基礎動脈等ナリ。

(地) 靜脈疾患

ぼるたる氏ニ依レバ肺動脈ノ破裂ニ依リテ急死セルモノアリ、又もるがくにー氏ハ強キ咳嗽發作ノ爲メニ奇靜脈破裂シテ死ニ至リシ例ヲ報告セリ、然レドモ最モ注意スベキハ靜脈中ニ於ケル血栓ニシテ、管壁ヨリ離レタル血栓ガ貴要ナル場所ヲ栓塞シ急死ニ至ルコトアルモノナリ、ぶるあるる氏ノ報告ニ依レバ、中耳炎ニ罹リタル事アル三十六歳ノ男子ガ、突然急死セルニ依リ之ガ解剖ヲナシタルニ、竇栓塞ガ離脱シテ肺動脈ヲ塞ギ以テ死ニ至ラシメタル者ナリシト云フ。

四、呼吸器疾患ニ基因スル急死

喉頭疾患ニ依リテ反射的ニしよつく死ヲ來スコトアルハ既ニ述ベタリ、次ニぶるあるる氏ハ聲帯ぼりーぶガ、聲帯被裂間ヲ栓塞シテ急死ヲ來シタル一例ヲ報告シ、すとりゆんべる氏ハ急性聲帯水腫ガ突然人ヲ

靜脈血栓

呼吸器疾患ニ依ル急死

急死セシムルコトアルヲ注意シ、ぶつし。氏亦タ聲門水腫ニ依リテ急死セル一例ヲ報告セリ。

甲狀腺肥大ニ依リテ氣管ヲ壓迫シ、窒息急死セシムルコトアルハ往々報告セラル、所ナルモ、此際甲狀腺ハ左程大ナラザルモ、該腺ニ疾患ヲ有スルモノハ不明ノ原因ニ依リテ急死スルコトアリ、予ノ考ニヨレバ、コハ機械的壓迫ニ依ルト見做スヨリモ、寧ロ甲狀腺内分泌ノ關係ニヨリテ説明スルヲ適當ト信ズ。

肺水腫ニ依リテ急死スルコトアルハ、成書既ニ記載スル所ナルモ、心臟、腎臟等ヲ犯サズシテ、單獨ニ肺水腫ノミ來ルコトハ甚ダ稀有ナレバ、外見健康ナルモノガ、單純ニ肺水腫ノミニテ突然急死スルコトハ甚ダ少ナシ、次ニ肺或ハ肋膜ニ疾患アリテ十分ニ呼吸ヲ營ムコト能ハズ、從テ血液ノ酸素攝取不十分ナル時ハ重要ナル臟器例ヘバ腦、心臟等ノ營養完全ナラズ、爲メニ患者ハ急死ニ陥ルコトナリ、例示スレバ肋膜ノ大部分癒着セル際、通常ノ作業ニテハ漸ク血液ノ瓦斯交換ヲ調節シ得ルモ、一度ビ身體的作業甚シク昂進シテ、活潑ナル瓦斯交換ヲ必要トスル時、肺ノ運動充分ナラザル爲メ、其ノ要求ニ應ズル能ハズシテ突然急死スルコトアリ、硬キこるせつとヲ着用シ舞踏セシ少女ガ、往々人事不省ニ陥ルハ全ク此ノ原因ニ依ルナリ。

急性滲出性肋膜炎ニ依リテ急死スルコトアルハ、亦タ吾人ノ屢々遭遇スル所ナルモ、其ノ原因果シテ何レニアリヤ尙ホ不明ナリ、とるぞー氏ニ依レバコハ滲出液ニ依リテ心臟ガ壓迫セラレ、爲メナリシ、ぶるあるる氏ハ下行大動脈ガ咳嗽等ニ依リテ甚シク屈曲セラレ、爲メニ血壓ノ調節ヲナス能ハザルニ依ルトナセリ。

急性肺炎ニ際シ醫師ガ尙ホ安全ト思ヒ、患者モ亦タ既ニ疾病ノ極期ヲ經過シ、幾分安靜トナリシ際、何

肺炎ト急死

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

内因的急死

等ノ發見スベキ原因ナクシテ突然急死スルコトアリ、其ノ原因ニ就テハ學者ニ依リテ種々ノ說ヲナシ、或ハ血流ガ抵抗強キ炎衝性肺組織ヲ通過セル爲メ、心臟ノ困難ヲ來シ、以テ心臟死ニ陥ルモノトナシ、或ハ肺胞中ノ纖維ガ溶解シ始ムルニ依リ、其ノ中毒ニ由ルトナシ、或ハ細菌ニ由來セル毒素ニ依リ、心臟ヲ疲勞セシムルニ因ルトナセリ、予ノ屢々遭遇セルモノハ初生兒ガ夜中急死シ居ルニ依リ、往々司法上ノ問題ヲ惹起シ、其ノ屍ヲ剖檢シテ、急性肺炎ニ依リテ死亡シ居ルコトヲ發見セルコトナリ。

肺ニ於ケル大出血ニテ突然急死スルコトアリ、例ヘバ結核性ノ空洞中ニ突然大出血ヲ爲スガ如キ場合はレナリ、予ハ興味アル特異性肺出血死ノ一例ヲ有ス、ソハ生後約七日ノ初生兒ニシテ、某日晝寢ヲ爲サシメ置キタルニ、急ニ死亡シ居ルヲ發見シタルモノナリト云フ、剖檢セルニ肺ノ表面帶紫黑色ニシテ、之ヲ按壓スルニ嘔噦ナク充盈ノ感アリ、肺ハ重クシテ皆冷水中ニ沈降ス、顯微鏡的標本ヲ作りテ檢スルニ、肺胞ト云ハズ、間質ト云ハズ、助膜ト云ハズ、皆赤血球ニテ充滿シ居レリ、其ノ他ニハ剖檢上特記スベキ異常ナシ、即チ本屍ノ死因ハ特異性肺出血ト見做サレ、嫌疑者ノ責任ヲ解除セラレタリ。

五 頭腔内疾患ニ關スル急死

潛在腦膜炎ガ突然ニ重キ症狀ヲ發シ、急死ヲ來スコトアルハ甚ダ屢々實驗スル所ニシテ、患者ハ二、三日前ヨリ僅ニ頭痛ヲ訴フル位ニ止マリ、敢テ執務等ニ差支ナカリシモノガ、急ニ眩暈、嘔吐、人事不省等ヲ突發シ、急死スルモノナリ、熱發ハ發來スルコトアリ、或ハ全ク之ヲ見ザルコトアレドモ、項部強直、反射ノ昂進及ビ癱瘓ハ殆ンド常ニ發來ス、コハ或ハ就眠中或ハ街上ニテ起リ、人事不省ニ陥ルモノニシテ解剖的所見トシテハ腦膜ノ引赤、腦腔ニ於ケル化膿性滲出物等ヲ見、其ノ原因多クハ不明ナルモ、時トシ

頭腔内疾患ニ關スル急死

テ中耳炎或ハ結核等ニ續發スルコトアリ。

往々出血性硬腦膜炎ニテ急死スルコトアリ、予ハ麻痺狂患者ノ突然死亡セルモノヲ剖檢シ、出血性硬腦膜炎アルヲ發見シタルコトアリ、尙ホ腦膿瘍ニテ急死ヲ來スコトアルモ、コハ甚ダ稀有ニシテ、ぶっし氏ノ報告ニ依レバ、一男子一、二日來消化不良ト頭痛トニ惱マサレ醫療ヲ受ケツ、アリシガ、突然激烈ナル頭痛ニ次テ人事不省トナリ、一、二時間ニシテ輕キ熱發、遲脈、瞳孔ノ左右不同等ヲ來シテ死ニ至リ、剖檢ノ結果小腦膿瘍アルコトヲ發見シタリト云フ、次ニ腦膿瘍ニ依リテ來ル急死ノ症狀ハ、前記腦膿瘍ノ場合ト甚ダ相似タリ、ぶっし氏ハ一男子某日午後、強キ頭痛ノ爲メニ頭部ヲ冷スベキコトヲ命ゼラレ、椅子ニ倚リテ之ヲ爲シツ、アリシ際、午後九時頃一友彼ヲ訪問セシニ、毫モ姿勢ヲ變ゼズシテ死亡シ居ルヲ發見シ、剖檢ノ結果、腦水腫及ビ小ナルぐりを爲メニ腦第三室ニ出血シ居ルヲ發見セル例ヲ報告セリ。

癲癇ト急死

急性腦水腫ニ依リテ腦室内ニ多量ノ水分蓄積シタル爲メ、特記スベキ症狀ナクシテ、或ハ嘔吐、癱瘓等ヲ伴ヒ急死スルコトアリ、又癲癇ニ依リテ往々急死スルコトアルモノニシテ、ぶっし氏ノ蒐集シタル五十例ノ癲癇病者急死例中、五例ハ就眠中死亡シ居ルヲ發見セラレ、其ノ體位ヨリ考察スレバ癲癇發作中ニ枕蒲團等ニテ窒息シタルモノナラント云フ、其ノ他ノ者ノ中ニハ或ハ街上ニテ押送中死亡シタルモノアリ、就中五例ハ剖檢ニ附セラレタルガ、二例ニテ軟腦膜一般ニ瀰濁シ、一例ニハ硬軟腦膜間ニ纖維素樣物橋架シ、更ニ他ノ一例ニハれんす體ノ崩解ヲ見、亦タ何レノ例ニモ肺水腫アルヲ發見シタリ。

腦微毒ニテ腦出血或ハ腦腫瘍ヲ來シ急死スルコトアルハ既述ノ如シ、一般ニ死因不明ナル急死者ヲ心臟

麻痺或ハ腦出血ト見做ス傾向ナキニアラザルモ、コハ大ニ熟考ヲ要スベキコトナリト信ズ。

六 胃腸病ニ依ル急死

消化管ニ於テ潰瘍ヲ生ジ、毫モ何等ノ症狀ヲ呈セズシテ、經過シツ、アリシモノガ突然穿孔シ、或ハ出血シテ急死ヲ來スコトナリ、但シ胃潰瘍ノ場合ニハ全ク無症候ニテ經過スルコト少ナク、既ニ死ノ二三日前ヨリ消化不良、酸嘔、嘔吐等ヲ來スト雖モ、餘リ注意ヲ拂ハズシテ執務中、突然穿孔或ハ出血ヲ來スコトアリ、反之、十二指腸潰瘍ハ往々何等ノ症狀ヲ呈セズシテ經過スルモノナレバ、剖檢ノ際特ニ注意ヲ要ス、然ルニ腸ノ下部ニ來ル潰瘍ハ、結核、ちふす、栓塞等ニ基因シ、時トシテ嚙下セル魚骨ニテ腸壁ヲ穿孔シ急死ヲ來スコトアリ、予ノ實驗セル二例ヲ舉グレバ、一例ハ非常ニ亂暴ヲナセル囚人ヲ取抑ヘ、其罰トシテ狭衣ヲ著用セシメタルニ、間モナク急死セリ、玆ニ司法上ノ問題トナリ之ヲ剖檢セルニ、蟲様突起ヨリ四鞭許リ上方ニ結核性潰瘍ノ穿孔セルモノアリテ、腸内容ハ腸腔内ニ漏レ、腹膜しよつくり起シテ死セラルナリキ、他ノ一例ハ魚骨ガ腸壁ヲ貫キ、腹膜炎ヲ惹起シ死セラルナリキ、同様ノ例ハ歐米ニモ數多ノ報告アリ。

(附) 脾臟出血ニ依ル急死

機械的ニ腸通路ヲ閉塞シ、爲メニ急死ニ陥ルコトアリ、此際ニハ腹痛ヲ來シ、便通全ク閉止シ、嘔吐ヲ伴ヒ、間モナク死ニ至ルモノニシテ、其ノ原因トシテハ、腸軸ノ捻轉、符頓、纖維ニヨリ纏束、へるにあノ符在等ヲ其ノ重ナルモノトス。

脾臟ノ出血ニ依リテ往々急死スルコトアルハ、つえんける一派ノ學者ノ唱道スル所ニシテ、コハ恐ラク

脾臟出血ト急死

ハ出血ノ爲メニ太陽叢ヲ刺戟シ、心臟死ヲ招來スルモノナラント説明セリ、くらてる氏ハ三十三例ノ急死者ニ於テ脾臟出血ヲ見出シタルガ、眞ノ死因ハ他ノ臟器ノ疾病ニ歸セシムベキモノナリシト云フ。

七 腎臟疾患ニ依ル急死

腎臟間質炎ノ際、突然尿毒症ノ症狀ヲ來シ急死スルコトアルモノニシテ、ぶつしゆ氏ハ腎臟炎ノ爲メニ急死セル七例ヲ報告シ、其ノ中三例ハ全身違和、疲勞ノ感アリ、次テ嘔氣、嘔吐、頭痛等ヲ伴ヒ、定型の尿毒症昏睡、人事不省及ビ癩癩ヲ來シ、一二時間ノ後死ニ至リ、剖檢所見トシテハ、間質性或ハ實質性腎臟炎、心臟肥大、心筋炎及ビ心臟内膜炎等ヲ發見セリ。

八 新陳代謝病ノ經過中ニ於ケル急死

脂肪過多症ノモノハ一面脂肪心ヲ伴ヒ易ク、他面ニハ心臟ノ負擔常人ニ比シ大ナルガ爲メ容易ニ心臟死ニ陥ル傾向アリ、次ニ糖尿病及ビ尿崩症ハ屢々潛伏性ニ經過スル疾病ニシテ、該患者ニハ全身違和アリ、疲勞シ易ク、睡眠及ビ消化不良ヲ訴ヘ、次第ニ羸瘦シツ、モ、自己ノ職業ニ携ハリツ、アル間ニ、突然昏迷來リテ急死スルコトアリ。

九 傳染病ニ依ル急死

ちふす患者ガ腸出血ニ依リテ急死スルコトアルハ言ヲ俟タズ、玆ニ法醫學的興味ヲ有スルモノハ、所謂消遙性ちふすナリ、ぶつしゆ氏ノ蒐メタル例ニ依レバ、一ちふす患者ハ彼ガ急死スル日迄執務シツ、アリシガ俄然人事不省ニ陥リテ死セリ、他ノ一ちふす患者ハ發病セリト報告セラレタル際ニハ、既ニ人事不省ニ陥リ同日直ニ死亡セリ、剖檢ノ結果就レモ小腸ニ特異ナルちふす性潰瘍アリ、ばいえる氏集腺及ビ孤腺

腎臟疾患ト急死

新陳代謝病ト急死

傳染病ト急死

腫脹シ、脾臓腫大セリト云フ、此ノ急死ノ原因ハ、ちふす菌毒並ニ新陳代謝ノ爲メニ生ジタル毒物ノ中毒ニアリト云ヘリ。

急性發疹性傳染病(例ヘバ猩紅熱及ビ麻疹)ニテモ、發熱、人事不省、肺水腫ノ症候ヲ來シ、一、二日中ニ急死スルコトナリ、其ノ原因ハ不明ナルモ、一種ノ中毒性心臟麻痺ナラン、又ちふてりあニ依リテ機械的ニ窒息急死ヲ來スノミナラズ、其ノ毒素ニ依リテ急死スルコトアリ、其ノ他一度ビ同病ニ罹リシ者ハ非常ニ心臟ヲ犯サレ、急死シ易キ素因ヲ得ルモノナリト云フ。

次ニ流行性感冒ハ、頗ル混合傳染ヲ起シ易キモノニシテ、爲メニ腦膜炎等ノ症狀ヲ來シ急死スルコトアリ、其ノ他化膿性微菌ニ因由スル敗血症ニ依リテ急死シ易キハ、茲ニ之ヲ説明スルノ要ナキモノト信ズ。

一〇 熱射病ニ依ル急死

熱射病ニ依リテ急死スル事アリコハ後章ニ於テ詳説セシ。

一一 酒精中毒ニ依ル急死

酒精中毒ト急死

酒精飲料ヲ一時ニ多量ニ飲用シ、人事不省ニ陥ル迄泥酔シ急死セルモノアリ、剖檢ノ結果腦及ビ腦膜ニ血量多キノ他特記スベキ異常ナカリシ、時トシテ泥酔ノ餘リ吐物ヲ氣道内ニ吸入シテ窒息死ニ至ルモノアリ、又酒客譫妄ニヨリ急死セルモノアリ、剖檢ノ結果腦水腫ヲ發見セリト云フ。

燥性酒精中毒者ガ急死スルコトアルハ、多クハ彼ノ心臟及ビ血管ガ該中毒ノ爲メ變性ニ陥リ、或ハ硬化セルニ基因ス、即チ腦出血或ハ心臟死等ヲ來シテ急死スルモノナリ、予ノ遭遇セル二例ヲ舉グレバ、一泥酔漢警察署ニ檢束中死亡シ、又他ノ泥酔漢ハ警官ニ連行セラル、際途中ニテ斃死シ、即チ其ノ死因ニ不明

ノ點アリタルヲ以テ剖檢ニ附シ、其ノ結果何レモ心臟死ナルコト發見セラレタリ。

一二 水中ニ於ケル急死

水中ニ於ケル急死

水中ニ於テハ吾人ハ身體ヲ浮揚セシムル爲メニ相當ノ體力ヲ要シ、更ニ冷水又ハ温水ガ體温ニ及ボス影響ニ依リテ、心臟ノ負擔ヲ増スモノナルヲ以テ、心臟ニ疾患アル者、或ハ胸腺淋巴腺性體質ヲ有スル者、或ハ大食若クハ泥酔後水浴ヲナシ、又ハ温泉ニ浴スル時、突然急死スルコトアリ、此際ニハ實際呼吸器内ニ液體ニ吸入シテ窒息死ニ至ルモノアルモ、或ハ又液體ハ單ニ喉頭ニ達シタルノミニシテ窒息急死スルコトアリ、即チ水中ニテ死シタルニ拘ラズ、毫毛溺死ノ解剖所見ナキモノナリ。

水中ニ於テ心臟死ニ陥ルモノハ極メテ多ク、水泳ニ巧ナル者ニシテ水泳中急ニ死亡シ、或ハ泥酔者ガ水中ニ入りテ心臟死ニ至ルガ如キ、又長途ノ水泳ノ爲メ、或ハ泥酔ト水泳ノ爲メ心臟ガ其ノ負擔ニ堪エズシテ、突然永久的停止ヲ來シ死ニ至ルモノナリ、此際ニ於テハ全ク溺死ノ剖檢の所見ヲ有ナルモノ少ナク、又脂肪心若クハ心筋ノ脂肪變性、心臟肥大、瓣膜病等ヲ隨伴スルコト多シ、又肺臟機能衰弱セル際モ、水中ニ於テ心臟死ヲ來スコトアリ、例ヘバ肋膜癒著等アリテ、身體浮動ニ對シ肺ガ充分ノ機能ヲ發揮スルコト能ハズ、即チ血液中ニ炭酸ノ蓄積ヲ來シテ窒息急死スルコトアリ、又血管硬化症ヲ有スル人ガ水中ニテ激動セル爲メ、血壓非常ニ亢進シテ腦出血ヲ來ス事モアリ、尙ホ胸腺淋巴腺性體質ヲ有スル人ガ水中ニ陥リ、僅微ノ液體ヲ喉頭ニ吸入スルトキハ、意外ニ容易ニ反射的しよつク起シ死ニ至ルコトアリ、余ノ遭遇セル例ニテハ一男子自己ノ二兒(六歳及ビ八歳ノ者)ヲ抱キテ投水セシニ、二兒ハ意外ニ容易ニ絶命シ、自己ハ苦痛ノ餘リ死スルコト能ハズ、逃走セルガ、二兒ヲ解剖スルニ、氣管内ニハ少許ノ水ガ入り居リシ

ノミニシテ、溺死ノ徵候ナク、二兒共ニ胸腺淋巴腺性體質ノモノナリシ、又胸腺非常ニ大ナル時ハ、機械的ニ氣道或ハ大血管ヲ壓迫シ、突然急死スルコトアリト述ベ居レルモノアルモ、コハ前記甲状腺ノ場合ト同ジク、内分泌ノ關係ニ依ル者ナリトスルヲ妥當トスベシ。

次ニ水中ニ在リテ何等カノ原因ニ依リ嘔吐ヲ來ストキハ、其ノ吐物ヲ吸入シテ窒息急死スルコトアリ、此際ニハ溺死ノ徵候ナシ、攝食後或ハ酩酊後水泳等ヲナス時ハ、心臟ハ胃ニモ血液ヲ送り、又激動ノ爲メニモ作業セザルベカラズ、即チ血行ノ平衡ヲ失シテ、急死ニ至リ易キコトハ前述ノ如クナルガ、ばるたあふ氏ノ如キハ單ニ機械的ニ此死因ヲ説明セントシ、食後擴張セル胃ガ心臟ノ作用ヲ機械的ニ妨ゲ、以テ急死ニ陥ラシムルモノナリト説明セルモ、此機械的作用妨害ノ說ハ取ルニ足ラズ、何トナレバ非常ニ擴張セル胃ニ依リテモ、心臟ノ作用妨害セラレザルコトハ、吾人ノ常ニ實驗スル所ナレバナリ。

尙ホ投水ノ際冷水ガ耳中ニ突入シ、内耳ヲ刺戟シ、爲メニ眩暈、人事不省或ハ嘔吐等ヲ來シ、次デ溺死セシムルコトアリ、或ハ又鼻呼吸ノ不充分ナルモノハ、水中ニ於テ往々突然急死スルコトアリ、是レ酸素ノ需要増加セルニ反シ、其ノ供給十分ナラザルガ爲メニ窒息死ニ至レルモノナリ。

一三 婦人生殖器病ニヨル急死

卵巢囊腫、子宮外妊娠ガ僅カノ原因ニ依リテ破裂シ急死ニ陥ルコトアリ。

ロ、死前病狀

Symptoms before the death.
Symptomes avant la mort.
Krankheitsymptome vor dem Tode.

急死々體検査ノ場合、吾人ノ先ヅ第一ニ調査モザルベカラザルハ、死ノ直前ニ如何ナル症候ヲ呈セシカ

死前ノ病狀

ニアリ。即其症候ヲ知レバ往々ニシテ、検査ノ方針ヲ決定スルコトヲ得ルガ故ナリ。而シテソガ死因ヲ決定スルニハ、叮嚀ナル屍體検査ニヨリ、何カ據所ヲ得ザルカラ注意シ、次デ剖檢、化學的検査、動物試驗、細菌學的検査ヲナシ、生前ノ症候ヲ顧慮シテ診定ヲ下スベキモノナリ。

ハ、檢

屍

Aspect of dead body.
Examen du cadavre.
Die eigentliche Leichenschau

檢屍
火葬ト犯罪

死體検査、或ハ檢屍、更ニ正確ニ云ヘバ、死體ノ外表検査ハ甚ダ大切ナルモノナレドモ、之ニ餘リ重キヲ置ク時ハ、思ハザル錯誤ヲ來スコトアリ、例ヘバ腐敗及血液低下ノ爲メ顔面暗赤色トナリ、一見恰モ窒息死ノ如ク見ユルモノヲ解剖シテ、ソノ死因ハ腦出血ナルコトヲ知り得タルコトアリ、或ハ冬時屍斑鮮紅ナル死體ヲ檢シ凍死ナラント思惟セシモノガ、剖檢ノ結果酸化炭素中毒ナリシコトアリ。故ニ疑ハシキ死體ニ於テ單ナル檢屍ノ後、直ニ火葬ヲ行フハ犯跡ヲ失フノ恐レアレバ大ニ考慮スベキモノトス。

屍體検査ヲ輕卒ニ行ヒタル爲メ、損傷或ハ中毒ニヨリ死ニ至リシモノヲ看過セル事ハ、往々吾人ノ聞ク所ニシテ、損傷ノ記載等甚ダ簡單ニ失シ、而モソノ死體ガ火葬サル、カ、或ハ然ラズトモ腐敗ニ移行スルコトアラバ、後日ニ到リテソノ損傷ガ自傷ナルカ、或ハ他人ノ手ニヨリテ附セラレタルカサヘ不明トナリ、或ハソガ生前ニ附加セラレタルモノナルカ、死後ニツキシ傷ナルカノ區別スラ困難トナルコトアリ。故ニ必要ヲ認メタル場合ハ、檢屍ノミニ止メズ是非剖檢ヲナスベキモノトス。

檢屍ノ際ニハ性體格營養及身體ニ於ケル異常、例ヘバ屍斑ノ多少、死體強直ノ有無、皮色、腐敗ノ程度損傷、灸痕、文身、附着セル汚斑、鼻口腔中ノ内容物等ハ云フニ及バズ、衣服等ニ於ケル異常、犯行ニ關

係アリト思ハル、物品等ヲ叮嚀ニ記載シ置クベシ。

II、解剖検査—剖檢 Postmortem Examination. Autopsie. Sektion, Obduktion.

解剖検査ハ死因ノ診斷ニ甚ダ重要ナル意味ヲ有シ、多クノ場合ハ剖檢ニヨリテ、ソノ死因ヲ斷定スルコトヲ得、而モ之ニヨリテ得ル結果ハ甚ダ誤謬ノ少キモノナリ。モシ剖檢ノミニヨリテ之ヲ決定スルコト能ハザル時ハ、更ニ組織學的、化學的、或ハ細菌學的検査ヲ行フベキモノトス。吾人ハ剖檢ニヨリテ得タル結果ヲ今次ノ三ツノ場合ニ分チテ説明セントス。

上、異常所見ガ全クナキカ或ハ僅微ナル場合、

中、多少著明ナル異常所見アルモ、尙急死スル程度ニ至ラザル場合。

下、死因トナリ得ベキ著明ナル異常所見アル場合。

上、異常所見ノ全クナキカ或ハ僅微ナル場合

吾人ノ生命ハ非常ニ種々ノ因子ノ調和ニヨリテ持續サル、モノナレバ、此調和ガ或程度ニ破壊サルレバ、身體各所ノ臟器ガ如何ニ夫レ自身トシテハ健康ナリト雖、個人トシテハ直ニ死ニ至ルモノナリ、此場合ニハ如何ニ叮嚀ニ検査ストモ、解剖的異常所見ハナシ、例ヘバ心臟自身何等ノ變化ナクトモ、其神經的刺戟及抑制ニシテ完全ニ行ハレズンバ、心臟ハ十分ニ其機能ヲ發揮スルコトヲ得ズ、血液ノ循環ニ障害ヲ來シ、從テ呼吸作用モ十分ナルコト能ハズ、此等生活上大切ナル臟器ノ共同障害ハ、ヤガテ人ヲ死ニ導クモノニシテ、遂ニ心臟麻痺ニ依リテ死ニ至ル。之ヲ心臟死ト稱シ、即解剖的ニハ毫モ異常所見ナキモノトス。茲ニ述ブル心臟死トハ、通常醫師診斷書死因ノ部ニ濫用セラルル、心臟麻痺ト其意味ヲ異ニス、何トナレバ、

剖檢

異常所見ナキ場合

心臟死

ソハ身體何レカニ死因トナルベキ疾患アリテ、ソノ部分影響トシテ、心臟ガ次第ニ衰弱麻痺シテ死ニ至ルモノナレバナリ。此ノ如キモノ、死因ヲ心臟麻痺トスレバ、死人悉ク心臟麻痺ニ依リテ倒レタルモノナリ。故ニ予ハ此ノ如キモノヲ心臟死ニ算入セズ。

ソノ他癲癇者、急性精神病者、腦水腫、腦質水腫、胸腺或ハ淋巴腺腫脹セルモノ等ハ、僅微ノ原因ニヨリ、何等解剖的異常所見ヲ殘サズシテ死ニ至ル事アリ、次デ注意スベキハ急性熱性病ノ經過中、或ハ治療後同様ノ事ニ遭遇スルコトアリ。例ヘバ猩紅熱ちふてりノ經過中、或ハ治療シテ數年後何等異常所見ヲ殘サズシテ、突然死ニ至ルコトアルガ如キ之レナリ。此等ノ原因ニ付テハ、數多ノ研究發表サレ或ハ自家中毒トシ、或ハ心臟ノ變化ニ基クトシタルモ、未ダ學說一致スルニ至ラズ。カ、ル體質ノモノガ僅微ノ原因ニヨリテ死ニ至リシ場合、法醫學的問題ニ上レル際ハ、甚ダ注意シテ鑑定セザルベカラズ。即チ一面ニハ解剖検査ヲ極メテ精密ニシ、實際死因トナルベキ程ノ病變ナク、且傷害ノ痕跡ハ通常ノ人ナレバ、決シテ死ニ至ル程ノモノニ非ラザルヲ確定シ、他面ニハ僅微ノ原因ニ依リテ死ニ至ルベキ體質、例ヘバ胸腺淋巴腺體質ナルコトヲ證明シ、始メテ其死因ハ加ヘラレタル傷害トハ關係アルモ、僅微ノ原因ニ依リ容易ニ、死ニ至ル體質ヲ有スルモノナルコトヲ附加スベシ。

法醫學的ニ尙注意スベキハしよつく死及あるからいど中毒死ナリ。此兩者亦死後何等ノ解剖的異常所見ヲ殘サズシテ死ニ至ル、就中、しよつくニ就テハ一言セザルベカラズ、しよつくトハ身體的或ハ精神的ニ或ル打撃ヲ破リ、神經系統ニ於ケル反應通常ヨリモ甚シキ爲メ、所謂神經的打撃ソノ度ヲ越エ、突然心臟及肺臟ノ作用停止シテ死ニ至ルモノニシテ、剖檢上何等見ルベキノ異常所見ヲ殘サルモノナリ。所謂し

淋巴性體質

しよつく死

よつくろ起シ易キモノハ、前述ノ異常體質ヲ有スルモノニ多シ。

此ノ如ク剖檢ノ異常所見ヲ殘サズシテ、死ニ至ルモノ、原因ヲ尋ヌレバ、生存ニ必要ナル臟器ノ機能調節ヲ失ヘルニヨルモノ、しよつくニヨリテ死ニ至レルモノ、中毒、或ハ諸種病症ニヨリテ死ヲ招來スルモノ等種々アレバ、是等ニ依リテ死ニ至レルヲ診定スル場合ニハ、非常ナル注意ヲ以テスベキモノトス。何トナレバ、ソノ原因證明ニ付確タル陽性ノ成績ヲ與フルモノ少ク、多クハ想定ニ過ギザレバナリ。

中、多少著明ナル異常所見アルモ、尙急死スベキ

程度ニ至ラザル場合

剖檢ノ結果、一面身體ニハ一定ノ病變ヲ發見シ、他面ニハヤ、強キ損傷等ヲ見出シ、而モソノ何レモ直接急死スル程度ニ達セザル場合、直接死因ヲ何レニ歸スベキハ、或ハ病變損傷等ノ共同作用ニ依リテ死ヲ來セシモノナルヤ、又ハ數多ノ損傷ガ略同程度ニ一人ノ死體ニ附加サレタル場合、ソノ直接死因ヲ決定スルハ、甚ダ困難ナル事業ニシテ、通常ハ最モ生命ニ必要ナル臟器ニ在ル損傷、或ハ病變ヲ直接死因ト見做スモノトス、然レドモ之モ斯ク一概ニ論去シ能ハザルモノニシテ、個々ノ事件ニ從ヒテ、死前ノ病症、周圍ノ事情等ヲモ考究シテ診定ヲ下シ、而モ時トシテ如何ニ手段ト考量トヲ費スモ、到底人力ヲ以テソノ直接死因ノ闡明シ能ハザルコトアリ、此際ハ鑑定書ニ極メテ卒直ニソノ點ヲ記載シ、或ハ司法官ノ希望ニ依リ大略ノ想定ヲ附記スベシ。

下、死因トナリ得ベキ著明ナル異常所見アル場合

單ニ一個ノ死因トナリ得ベキ著明ナル異常所見アル場合ハ、ソノ診定甚ダ容易ナレドモ、此ノ如キ損傷

死因ノ競合

著明ナル死因

或ハ病變ノ一個以上併在スル時ハ、甚ダ診斷ニ苦シムモノナリ。即チ此程度ノ損傷數多アル場合ハ、ソガ附加サレタル時間ノ關係、損傷ヲ被レル臟器ノ生命ニ對スル必要ノ程度ニ注意シ、最モ生命ニ必要ナル臟器ニ、最初ニ大ナル損傷ヲ加ヘタルモノガ、直接死因ニ對スル責任ヲ負フベキモノトス。而モ個々ノ場合ニ依リテ種々ノ事情ノ存スルモノナレバ、醫師ハ只事實ノミヲ記載シテ、最後ノ判定ヲ司法官ニ委スベシ。尙死因ノ競合及競存ニ就テハ後章ニ於テ詳述スベシ。

死因ト兼質

茲ニ注意スベキハ死者ニ或素因アリテ、加害者ガ加ヘタル程度ノ加害力ニ由リテハ、通常健康ノ人ナレバ到底死ニ至ル程ノ障害ヲ來サザルニ、ソノ人ニハ思ハザル大障害ヲ來シ、コレガ直接死因トナルコトアリ。醫師ハカ、ル素因或ハ病變ヲ死者ノ體中ニ見出シタル場合ニハ、之ヲ鑑定書ニ記載シテ、司法官ノ注意ヲ求ムベシ。例ヘバ微毒或ハまらりあノ爲メ脾臟肥大ヲ來シ、質甚ダ破碎シ易クナリシモノハ、比較的小ナル暴力ニヨリテ脾臟破裂ヲ來シ死ニ至ルコトアリ。或ハ胎内ニ於テ已ニ甚シキ疾病ニカ、リ、假令生産ストモ、産後數時間ニシテ死ニ至ルガ如キ産兒ニ、産婦ガ胸部ニ微力ノ壓迫ヲ加ヘタルタメ死ニ至リシガ如キ、或ハ心臟病者ノ胸部ニ對スル小打撃ガ、瓣膜ノ破片ヲ容易ニ腦ニ送リテ、死ヲ招來スルガ如キ場合之レナリ。

急死ヲ突然來ス病症ハ腦出血、動脈瘤破裂、諸種ノ腦膜炎、腦腫瘍及膿腸、腦血管栓塞、氣道ノ閉塞、大出血、大血管栓塞、内臟破裂、肺炎、中毒乃至急性傳染病等ナルコトハ已ニ前記セルガ如シ。

二、隨伴狀況

Circumstance of Death.
Circonstance de la Mort.
Die äusseren Umstände beim Tode.

死者ノ近傍ニアル種々ノ隨伴狀況ヲ検査スル時ハ、意外ノ證據ヲ得ルコトアリ。例ヘバ死者ノ居室ニ散亂セル藥瓶ヲ檢シテ、中毒検査ニ對スル方針ヲ確定シ、或ハ衣服ニ在ル切り傷ニヨリテ、兇器ヲ決定シ得ルガ如キ之レナリ。故ニ此等ノ參考トナリ得ルモノハ、叮嚀ニ記載シ置ク必要アリ。

ホ、變死ト病死

Suspected or natural death?
Mort suspecte ou naturelle?
Fraglicher gewaltsamer oder natürlicher Tod?

醫師ガ死體ヲ檢案シ、或ハ死亡診斷書乃至死體檢案書ヲ作成スル際ニ、ソガ病死ナルカ、將タ變死ナルカヲ決定スルコトハ、二十四時間以内ニ之ヲ所轄官署ヘ報告スベキ必要上、非常ニ大切ナルコトナリ。我内務省ガ死亡診斷書作成方ニ付記載スル所ニヨレバ、死ノ型式ヲ病死、變死及中毒死ノ三ツトシ、自殺ハ變死ノ内ニ算入シ居レルモノノ如シ。

此概念ニ從ヘバ、病死及中毒死以外ノモノヲ皆變死ト見ザルベカラズ、故ニ變死中ニハ主トシテ自殺、災害死及他殺ヲ含ミ、更ニ之ヲ具體的ニ云ハ、縊死、絞殺、扼殺、不慮ノ死、溺死、窒息死、墜落死等ヲ之ニ算入セザルベカラズ。

然レドモ實際ニ於テ、或災害ヲ被リ病院ニ入り、或ハ一定ノ取扱ヲ受ケタル後死亡シタルモノハ、之ヲ病死トスベキカ將タ變死トスベキカ其決定ニ多少ノ疑惑ナキ能ハザルコトアリ、例ヘバ某縣ニテハ假令、外傷後死亡シタリトモ、病院ニ於テ一定ノ處置ヲ受ケ相當ノ時間ヲ經過シタルモノナラバ、病死ト見做スベシナド云フ解釋ヲ下シ居ル所モアリ、然レドモ、コハ牽引附會ノ言ニシテ、斯カル際ニハ、常ニソノ死因ニ注目シ、死因ニヨリテソガ病死ナルヤ、將タ變死ナルヤヲ決定スル必要アリ。コハ單ニ醫師届出義務

ノ爲メニ必要ナルノミナラズ、之ニヨリテ司法官ハ、往々ニシテ加害者ヲ直接殺人罪ニ問フカ、或ハ傷害致死罪トスルカヲ決定スルモノナレバ、其際ニ於ケル醫師ノ責任亦大ナリト云フベシ、例ヘバ外傷ニヨリ出血シツ、アル患者入院シ、止血法ヲ完全ニ行フモ、尙出血甚シク、之ニヨリテ死亡セシナラバ、ソハ變死ニシテ、反之、其後衰弱若シクハ創傷傳染等ニテ死亡セシナラバ、コハ病死ナリ、決シテソノ入院モシクハ手當ノ時間ノ長短等ニハ關セザルナリ。

ハ、死體現象

Phenomena after death, Phénomènes cadavériques, Leichenerscheinung.

假死、吾人ハ眞ノ死亡ヲ述ブルニ先チ、外見上死シタルガ如ク見エナガラ、其實ハ死亡シ居ラザル、所謂假死ニ就テ一言セザルガラズ、即チ或時間内肺心ガ停止シ居リタル後、再ビソガ作用シ始メタル時ハ、前ノ狀況ヲ省ミテ、其人ハ當時假死ニ陥リ居リシト云ヒ、其肺心ノ停止シ居ル間ハ、毫モ眞死ト差異ナキモノナリ、故ニ此際、當人ガ已ニ死亡シ居レリト速断シテ埋葬セラレタル例ハ、歐米ニ於テ屢々見聞スル所タリ、之レ法規上死ノ診斷後二十四時間ハ、埋火葬ナシ能ハザル所以ナリ。

而シテ此假死ニ陥リ易キハ、強烈ナル酒精飲料ノ急性中毒者、阿片中毒者、これらノ重症患者、或ハ或種ノ腦脊髓病患者等ニシテ、歐米ニ多ク我國ニ少シ、例ヘバ、倫敦ニテハ眞死ト思ヘルモノ、内、二十二年間ニ二千百七十五人蘇生シ、あむすてらだむニテハ同ジク二十五年間ニ、九百九十人モ蘇生シタリトノ報告アリ。

一般ニ眞死後人體ニ起ル腐敗、分解等ノ現象、即死體現象ハ法醫學者ニ取リテ甚ダ大切ナルモノナリ。前述ノ如ク死後ノ血色素低下ト露血トヲ誤診シ、或ハ胃粘膜ニ於ケル死後液消化ト、血色素澀潤トヲ見テ

死ノ徵候

身體寒冷

死斑

血液沈下

死體強直

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 死體現象

二九六

中毒ト思考スル如キハ、往々吾人ノ見聞スル所ナリ、故ニ今茲ニ死體現象ニ就テ略述セン。死ノ最初ノ徵候ハ心臟ト呼吸ノ永久停止ニ在リ、次イデ筋肉弛緩スト雖、其電氣興奮性ハ尙二乃至四時間存在シ、所々ノ上皮細胞及精蟲ハ、個體ノ死後二十四時間乃至四十八時間生存スルコトヲ得。

身體ニ血液循環止ムト共ニ全身皮色蒼白トナリ、急性發疹、火傷第一度等ハ此際消失ス。身體ノ全ク厥冷シ終ルハ、死後十時間内外ナルモ個人ノ體格及氣候ニヨリテ差アリ。身體ノ大ナルモノ、肥滿シタルモノ、被服ノ十分ナルモノ、熱ノ不良導體中并空氣中ニ在ルモノ及夏時等ハ身體ノ小ナルモノ、瘦セタルモノ、被服不十分ナルモノ、冬時或ハ水中ニ在ルモノヨリ體溫ヲ保存スルコト永シ、時トシテ死後二十分計リモ體溫ノ上昇スルコトアリ。次ニ身體ノ下方ニ在ル部ニ血液ハ次第ニ就下シ、淡紅色乃至紫紅色ノ死斑ヲ作ル。死斑ハ死後血液ガ永ク流動性ナレバ流動性ナル程早ク且多ク形成サル、平均死後三乃至十時間ニシテ出現シ初メ、十五時間位ニシテ死斑最モ著明トナリ、腐敗進行スルニ從ヒ消失ス。就下セル身體部ニ於テモ、壓ヲ受ケタル部ニハ死斑ヲ生ゼズ、一般ニ死斑ノ鮮紅ナル時ハ一酸化炭素、燃燒瓦斯、青酸化合物中毒死或ハ凍死ノ疑アリ。

内部ノ臟器ニ於ケル血液モ亦ソノ下方ニ就下ス、之ヲ病的變化ト混同スベカラズ、例ヘバ仰臥位ニ在リシ死體ノ腦ノ後頭部、或ハ肺ノ後下部ニハ病的變化ニアラズシテ鬱血シ居ル如キ之レナリ。而シテ後次第ニ周圍ニ滲透シテ内部ニ於ケル血液次第ニ消失ス。

次デ死後筋肉内ノみをじんノ凝固ニ依リテ死體強直ヲ來ス、之ヲソノ發生スル順序ニ從テ述ブレバ、死後二時間ニシテ先ヅ項、下顎ニ硬直來リ、八乃至二十時間ニシテ全身ニ及ブ。初生兒小兒等ニ於テハ、成

(甲) 表 四 十 二 第

びーるふるいんど氏ニ依ル死體強直表

人	氣 溫	死體強直ノ初メ		死體強直完成		死體強直ノ初メ		死體強直ノ全	死體強直ノ終
		時	分	時	分	時	分		
人 類	4	1	30	7	—	38	—	43	—
	20	1	—	5	15	26	—	36	—
	22.5	1	—	4	20	—	—	36	—
	29	—	50	3	20	24	—	28	—
	37.5	—	35	2	—	2	25	4	10
	41	—	45	1	55	1	22	2	30
	52.5	—	15	—	45	1	—	1	40
	54	—	—	—	50	1	—	1	50
	55	—	2-5	—	37	—	40	1	40
	60	—	直ニ	—	10	—	35	1	10
種 類	氣 溫	死體強直ノ初メ		死體強直完成		死體強直ノ初メ		死體強直ノ全	死體強直ノ終
種 類	氣 溫	時	分	時	分	時	分		
小 猫	2	35-40	—	30-40	1	20	6	—	8-9
大 猫	2	35-40	—	30-40	1	40	10	—	12-14
同 猫	2	30-35	—	30	1	40	12	—	18-20
小 猫	2	24-28	1	—	3	—	24	—	30-36
大 猫	2	18-22	1	30	4	—	36	—	42-46
兔	2	18-22	1	—	2	30	28	—	40
大 猫	2	10-15	2	—	5	—	48	—	72-80
小 猫	1	8-12	2	—	6	—	3	—	4
大 猫	2	2-6	3	—	6	—	7	—	7-9
小 猫	2	2-5	3	50	6	—	6	—	6-7
大 猫	1	2-5	3	40	6	—	—	—	11-12

人ヨリ早ク死後硬直ヲ來ス。外界ノ溫度高キ時、燒死、或毒物中毒死ニテハ死體硬直ハ早ク來リ、筋肉ノ良ク發育シタル者ノ急死等ニテハ硬直ハ早ク來リ且長ク繼續ス、一般ニ一歳ノ小兒ニテハ平均死後四十時間、大人ニテハ死後九十時間ハ死體強直アリト雖、凡ソ死後四十五時間目位ヒヨリ緩解シ殆ム、

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 死體現象

二九七

今ビ一るふろいんど氏ノ實驗ニヨル死體強直ノ狀況ヲ表示スレバ第廿四表甲ニ於ケルガ如シ。
次ニ上皮ノ剝離シタル所及通常少シク濕潤セル所ハ死後二、三日ニシテ乾燥ノ初メ、遂ニ數日ニシテ褐色、羊皮紙様ニ乾固ス。

次デ來ルハ腐敗現象ナリ。即チ眼球ハ光ヲ失ヒ角膜溷濁シ、眼球軟トナル、死斑ハ次第ニ汚穢色トナリ、皮色ハ初メ皮下靜脈ニ沿ヒテ淡綠色ヲ帶ビ來ル。即チ最初腹壁綠色トナリ、次第ニ全身ニ及ブ、血清ハ上皮ト真皮トノ間ニ滲出シ所謂腐敗水泡ニ依リ、遂ニ破碎シテ上皮剝離シ、汚綠色ノ濕潤セル真皮ヲ露出ス。

圖八十五第



次ニ腹部及皮下組織ニ腐敗瓦斯ヲ生

死體化粧法

ジ、指壓スレバ嘔嘔ヲ感ズ、從ツテ羸瘦セル人モ肥滿セルガ如ク見ユルニ至ル、之ヲ死體巨人觀トシ、之ヲ原型ニ近ヅカシメントスルニハ、死體ヲヨク水洗シくろーる石灰水ニテ洗滌後、抱水くろーる加鹽化

シテ、大人ニテハ六週間ヲ要セシ報告アレドモ、是亦ソノ當時ノ氣候、死體ノ狀況、死因、昆蟲ノ集否等ニ大ナル關係アル故、一概ニハ論ジ難シ。
内臟ニ於テモ、腐敗進行スルニ從ヒ血量少クナリ、ソノ斷面ハ輕濁變色シ來リ、漸次腐敗瓦斯ヲ生ジ、

水泡臟器

其實質内ニ、大小不同ノ空胞ヲ作り、其斷面ノ性狀恰モ水泡ノ集合セルヲ、切斷セルガ如ク見ユ、故ニ之ヲ水泡臟器ト云フモノアリ。斯クシテ實質ハ泥狀ニ軟化シ、空胞中ノ腐敗瓦斯ノ壓力増大シ、遂ニ内壓ニヨリ臟器破裂シ、實質ハ泥狀トナリテ融解消失ス、此際死體ニ昆蟲モシクハ細菌簇生セバ、ソノ腐敗モシクハ融解ノ速度、著シク昂進ス。内臟中最モ腐敗シ易キハ小兒ノ腦ニシテ、最モ腐敗ニ對スル抵抗強キハ子宮乃至骨盤腔臟器ナリ。

死體ニ集合スル昆蟲ハ、ソノ腐敗進行ニ大ナル關係アルノミナラズ、之ニヨリテソノ個體ノ死ニ至リシ日時ヲ逆算スルニ、大ナル據トナルコトアリ、一般ニ死體ニ集マリ來ル昆蟲ハ、大多數蠅類ニシテ、ソノ他ハ甲蟲ナリ、我教室ニ於ケル岸上氏ノ研究ニヨレバ、蠅類中、死體ニ最モヨク來ルモノハきんばいニシテ、くろばい

第廿四表(乙) (幼蟲ノ長サ單位、耗) 實驗(大正十四年六月ヨリ大正十五年八月)

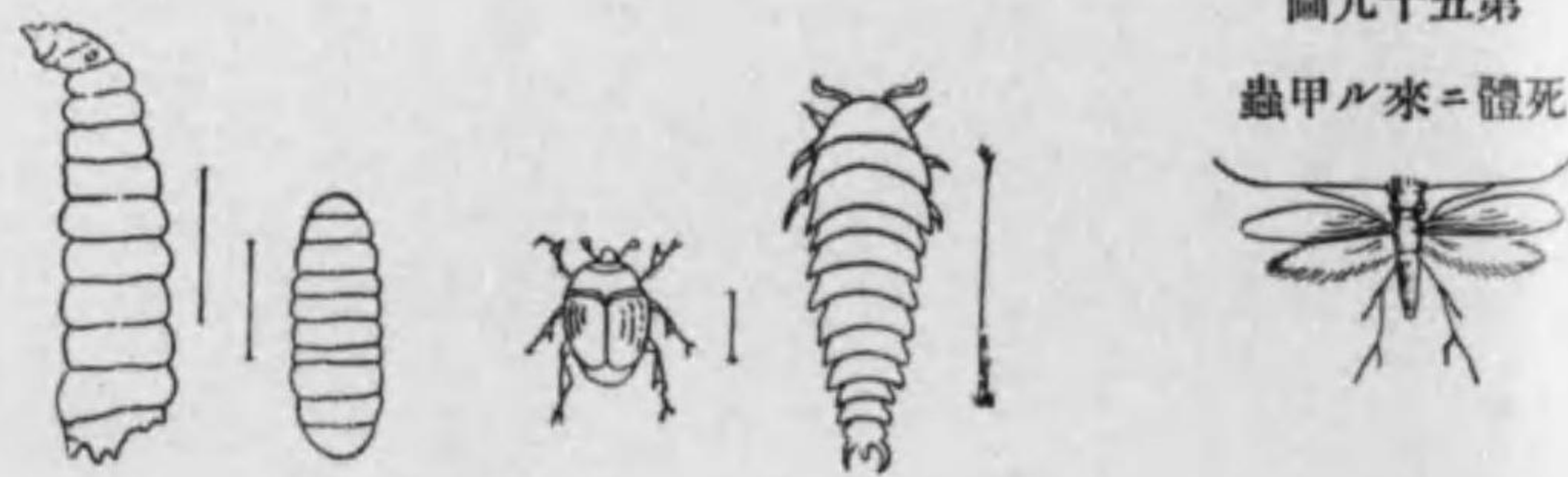
月次	溫度		濕度	第一日		第二日	第三日	第四日	第五日	第六日
	最高	最低		十時	廿四時					
一月	2.0	-1.8	80	—	—	—	—	—	—	—
二月	9.4	-6.6	74	—	—	—	—	—	—	—
三月	10.5	-0.9	71	卵	卵	2.0	2.5	3.0	4.0	5.0
四月	20.2	7.9	76	卵	2.0	2.5	3.0	4.0	5.0	6.0
五月	22.2	10.6	77	卵	2.5	3.0	4.0	5.0	7.0	8.0
六月	26.6	15.6	76	卵	3.0	4.0	5.0	7.0	9.0	10.0
七月	33.3	22.7	75	2.0	4.0	6.0	9.0	11.0	12.0	—
八月	33.3	22.5	73	2.0	4.0	7.0	9.0	11.0	12.0	—
九月	27.8	17.2	80	卵	3.0	4.0	6.0	8.0	10.0	11.0
十月	21.8	11.2	81	卵	2.0	3.0	4.0	5.0	6.0	7.0
十一月	15.7	2.8	80	卵	卵	2.0	3.0	4.0	5.0	6.0
十二月	10.8	0.3	80	—	—	—	—	—	—	—

第 六 十 圖 死體ニ來ル甲蟲

alliphora vomitoria *Hister cadaverinus* *Sylpha obscura*

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

死體現象



第 九 十 五 圖

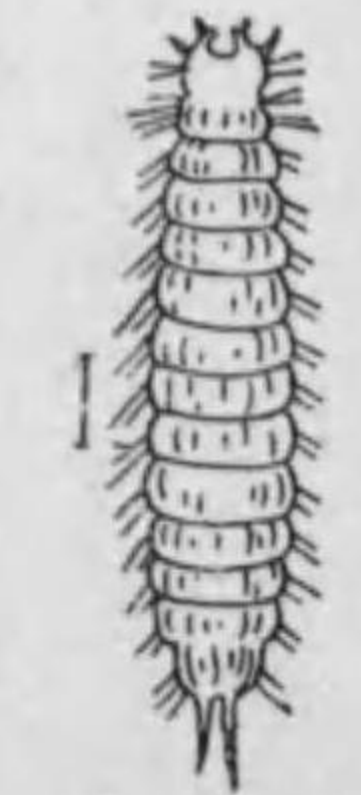
死體ニ來ル甲蟲



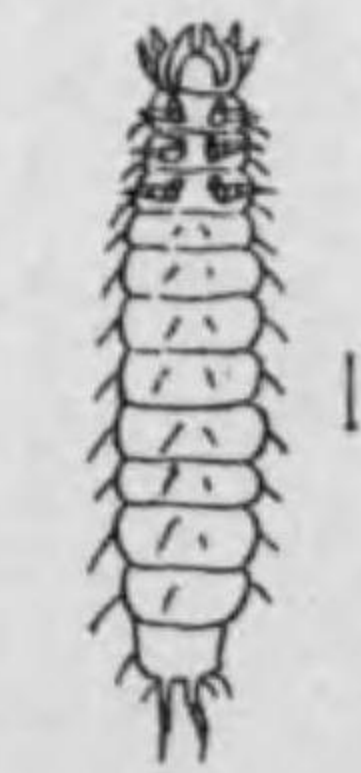
Tineola biselliella



Sylpha obscura



Rhizophagus parallelus



Anthrenus museorum

註、各圖ノ側方ニアリハ實物大ヲ示ス、而シテ技ニハソノ代表者ニ三ツノミ。

第七日	第八日	第九日	第十日	第十一日	第十二日	第十三日	第十四日	第十五日	第十六日
6.0	7.0	8.0	9.0	9.5	10.0	10.5	11.0	11.5	12.0
7.0	8.0	9.0	10.0	11.0	12.0				
9.0	10.0	11.0	12.0						
11.0	12.0								
12.0									
8.0	9.0	10.0	11.0	12.0					
7.0	8.0	9.0	10.0	10.5	11.0	11.5	12.0		

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

死體現象

之ニ次ギ、いへばい、ひめばい等ハ比較的少ク、是等ハ夏期人ノ死後約三十分ニシテ已ニ死體ニ蝨集シ來リ、而シテ約一時間ニシテ、眼裂、口角、鼻腔、耳腔、腔、肛門等ニ産卵シ、後第廿四表乙ノ如ク成長ス、故ニ死體ニ若干大ノ蠅蛆蟲ヲ見出セバ、上表ニヨリテ、時トシテソノ死後ノ經過時間ヲ逆算シ得ルモノナリ。但シ周圍ニ在ル種々ノ狀況ヲ考慮ノ内ニ入レザルベカラザルハ言ヲ俟タズ。

次ニ死體ニ來ル甲蟲ノ數種ヲ圖示スレバ、概ネ左ノ如シ。而シテモシ死體内ニ於テ、此等ノ甲蟲ヲ發見セバ、ソノ死後經過日時ヲ定ムルニ、大ナル參考トナルモノナレバ注意スベシ。或ハ死體ニ發見サル、細菌ノ種類ニヨリテ、死後ノ經過日時ヲ知ラント企テタル人アルモ、コハ甚ダ困難ナルコトナリ。

一般ニ腐敗進行ノ速度ハ、死體ノ有場所、生前ノ疾病、周圍ノ狀況乃至當時ノ氣象、空氣ノ流通及湿度等ニヨリテ左右セラレ、死體ガ甚シク腐蝕シ、乾

燥セル空氣流通シ、或ハ微生物ノ發育ニ不適ナル狀況ニアレバ、腐敗ノ進行停止シ、一種特有ナル狀態トシテ保存サル。

死體冷蔵

(イ)冷蔵、死體ガ非常ナル冷所ニ在リテ、細菌等ノ發育ニ全ク適セザル時ハ原形ニテ保存サル、例ヘバ氷河若シクハ雪中ニ陥リタル死體ノ如キ冷蔵サレテ、氷雪ノ融解セザル間ハ永ク其形ヲ保ツ、しべりあノ氷雪中ニ在ル象肉ガ、今日迄保存サル、ハ此好例ナリ。

死體滲理

(ロ)滲理、死體ガ濃度ノ強キ鑛水等ニ陥リタル時ハ、ソノ内ニ中性鹽類滲入シ來リテ、遂ニ腐敗ヲ妨ゲ、原形ヲ永ク保存スルコトアリ、例ヘバ銅鑛坑ニ陥リタル工夫ガ、自然ノ銅像ニ化シ居リシガ如キ Hanson 例ナリ。

木乃伊

(ハ)木乃伊、營養不良ノ死體、例ヘバこれら若シクハ砒素中毒ニテ死亡セル爲メ、體內ニ水分少ク、其上乾燥セル墓地ニ埋葬サレタル故、乾固シテ全ク腐敗ニ移行セザルコトアリ、之ヲ木乃伊化スト云フ、而シテ此木乃伊化スル時間ノ長短ハ種々ナルモ、予ノ實見シタルモノ、内、最モ短時間内ニ木乃伊化シタルモノニ、次ノ實例アリ、即チ嬰兒ガ死後二週間ニシテ完全ニ乾固シ居リタルコトアリ、コハ初生兒ヲ産後直ニ吸濕性ノ襁褓ニ向ツテ、毎日火ヲ焚キツ、アル圍爐裏上ノ天井ニテ、外窓ニ近ク隠匿シ置キタル爲メ、此ノ如キ結果ヲ來シタルナリ、又名取博士ノ報告ニヨレバ初秋ノ交某婦人ヲ絞殺シテ臥床中ニ放置シタルニ、僅ニ三ヶ月ニソガ木乃伊化シ居ルヲ發見シタリト、而シテ此例ニテ興味アルハ此ノ如キモノニテモ、尙絞痕ノ明カニ存在シタルコトナリ。(第六十一圖參照)

其他宗教上ノ迷信ニヨリ死體ニ防腐法ヲ施シ、或ハばるさむ等ヲ塗付シテ、人工的ニ木乃伊ヲ作成スル

圖 一 十 六 第



(氏取名) 伊 乃 木

圖 二 十 六 第



(氏上川) 臘 死

コトアリ。

(二)屍體、脂肪多キ死體ガ全ク水中ニ沈ミ、永ク放置サル、時ハ、腐敗ニ移行セズシテ、體內ノ脂肪分ハ分解シテ、脂肪酸トぐりせりんとナリ、後者ハ水ト共ニ流去スルモ、脂肪酸鹽ノミ殘置シテ、屍體ノ原形ヲ保ツコトアリ、之ヲ屍蠟化セリト云フ、化學的ニ云ハ、コハ所謂石鹼化サレタルナリ。故ニ木乃伊ハ黑色乃至褐色ヲ呈シ萎縮シ、彈性アルニ對シ、屍蠟ハ白色乃至灰白ニシテ、甚シク萎縮セズシテ原形ヲ保チ居レドモ、甚ダ破壊シ易シ。予ノ實見シタル一例ニテハ、頭部右半ハ地水ニ浸漬シ、左半ハ空氣中ニ在リシ死體ヲ發掘シタルコトアリ、ソノ屍體ニテ右大脳ハ屍蠟トナリ、左大脳半球ハ融解シテソノ形ヲ止メザルヲ見タリ、又水中ニ在ル屍體ガ屍蠟トナル時間ハ、周圍ノ狀況ニ依リテ差アリ、印度がんじす川ニ沈メタル死體ハ二、三日ニシテ屍蠟トナリ、獨逸ニ於テハ二、三月ニシテ屍蠟トナルト云フ。予ノ實見ニ依レバ夏期ニ條城濠ヘ投ジタル小兒死體ガ、一週日後已ニ屍蠟トナリシ部アルヲ發見セシコトアリ。學者ノ說ニ依レバ脂肪以外ノモノヨリ、屍蠟ハ出來ザルモノト考ヘラル、モ、當教室ノ實驗ニ依レバ、筋肉ヨリモ生ジタルコトアリ。例ヘバ十九歳ノ男子ノ舌ガ屍蠟トナリ居リシモノアリタリ。次ニ永ク水中ニ在リシ死體ガ屍蠟トナラズシテ、往々浸軟スルコトアリ。此際皮膚ハ褪色シ、表皮爪甲、毛髮ハ脱落シ、軟部ハ水ニ依リ次第ニ膠狀トナリテ流去シ、最後ニ韌帶及骨格ノミヲ殘存シ居ルコトアリ。尙屍體ノ存在スル外界ノ狀況ニヨリ、腐敗ノ進行ニ遲速アリ。今日迄ノ經驗ニ依レバ、空氣中ノ一日目ト水中ノ二日目ト、地中ノ八日目トハ、腐敗進行度相等シキ割合ナリト云フ。

次ニ死體ガ昆蟲、鼠等ニ咬傷サル、コトアリ(第六十三圖、六十四圖入)此損傷ト生前ニ生ジタル損傷ト

屍體

浸軟

死後ノ咬傷、

第六十三圖



死體ノ動物咬傷

第六十四圖



同上

ハ、所謂生活反應ニ依リテ鑑別シ、決シテ誤リヲ來スベカラズ。蟻ガ顔面上皮ヲ嚙ミシ痕跡ト、硫酸中毒ノ際ノ腐蝕痕跡ト誤認シタル例アリ。之レ口角ヨリ流下セル硫酸ノ腐蝕痕ト蟻ノ顔面ヲ嚙ミシ跡ト相似ノ觀ヲ呈スルコトアレバナリ。

次ニ附加スベキハ所謂棺内分娩ナリ。妊婦ガ死亡シ腐敗ニ移行シ、腐敗瓦斯ノ爲腹歴次第ニ高クナリ、遂ニ胎兒ヲ棺内ニテ分娩シ居ルコトアリ、之ヲ見テ往々假死ノ状態ニテ埋葬サレ、埋葬後生還シ分娩ヲナシ、而シテ後又死亡セルモノナリト誤認セラレタル例アリ。

棺内分娩

上記ノ死體現象ヲ綜合シ、死體硬直ノ有様、及死斑、各腐敗現象ト死體ノ有場所状態トヲ顧慮スル時ハ、死後ノ經過日時ノ大要ヲ知ルコトヲ得。然レドモノノ詳細ニ至リテハ、客觀的觀察ノミニテハ到底之ヲ決定スルコト能ハズ。何トナレバ、死體現象ハ已述ノ如キ諸種ノ條件ニヨリテ左右セラル、モノナレバナリ。然レドモ此際補助トナルベキ他ノ所見ヲ得レバ、更ニソノ測定ニ精確度ヲ加フルモノナレバ、尙常ニ之ヲ發見スルニ努力スベシ、例ヘバ食物ノ消化、乃至ソノ胃腸ニ於ケル運行狀況ヲ知ルコトヲ得バ、之レニヨ

食物ノ運行時

(ル據ニ氏川湯)表間時留停物食
(乙)

食品名	分量	食品名	分量	食品名	分量	食品名	分量
乾鰯(煮)	100.0	鱈	100.0	荷	100.0	蛤	100.0
牡蠣(煮)	100.0	牛ノ・肉(焼)	100.0	鱈卵、留水	100.0	泥鰌	100.0
(停留時間二時四十分ノモノ)		牛ノ肉(焼)	100.0	鯛鹽焼	100.0	鮑	100.0
白酒	200.0	(停留時間三時ノモノ)		鯨(焼)	100.0	龍蝦(煮)	100.0
コンデンスミルク	200.0	牛乳	400.0	板蒲針	100.0	兔(焼)	100.0
酒糟汁	200.0	新豌豆(煮)	100.0	鱈(煮)	100.0	牛肉(焼)	100.0
白麵飽	100.0	甘藷(焼)	100.0	海鰻(焼)	100.0	(停留時間四時ノモノ)	
温饨	100.0	甘藷(蒸)	100.0	鮑刺身	100.0	白麵飽	200.0
古蠶豆(煮脱皮)	100.0	苜蓿	100.0	鯨味増漬	100.0	龍蝦(天鉄羅)	100.0
米飯	150.0	ビスケット	100.0	鱈鹽焼	100.0	鶏(焼)	100.0
凍豆腐	100.0	卵卷焼、留水	100.0	(停留時間三時三十分ノモノ)		(停留時間四時十分ノモノ)	
乾大根	100.0	調(煮)	100.0	鳩(炙)	100.0	鯛刺身	200.0
百合	100.0	鱈(同)	100.0	古蠶豆(炒)	100.0	鯨魚(カズノコ)	100.0
南瓜	100.0	鱈(同)	100.0	白麵飽	150.0	ピフステーク	100.0
カステラ	100.0	雞(焼)	100.0	落花生(炒)	100.0	穀	100.0
葱	100.0	鱈(焼)	100.0	鯛刺身	100.0	豚(焼)	100.0
甜瓜	100.0	海鰻(ハモ)	100.0	卵酒、留水	100.0	圓鰻(同上)	100.0
金米糖	100.0	鱈(焼)	100.0	鯨味増漬	100.0	(停留時間四時三十分ノモノ)	
生卵黃、留水	100.0	雀(炙)	100.0	龍蝦(照焼)	100.0	豚(味増焼)	100.0
鯛刺身	100.0	(停留時間三時十五分ノモノ)		泥鰌(焼)	100.0	(停留時間四時)	
鰻(煮)	100.0	米飯	200.0	鱈(焼)	100.0	牛肉(焼)	150.0
鱈刺身	100.0	餅	200.0	(停留時間三時四十分ノモノ)		(停留時間五時四十分ノモノ)	
鱈(煮)	100.0	栗餅	100.0	古豌豆(炒)	100.0	(停留時間六時四十分ノモノ)	
アンペラ	100.0	葱	100.0	鯨(煮)	100.0	牛肉(焼)	250.0

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 死體現象

三〇七

ルケ於ニ胃康健表五十二第
(甲)

食品名	分量	食品名	分量	食品名	分量	食品名	分量
(停留時間一時十五分ノモノ)		葡萄	100.0	(停留時間二時十五分ノモノ)		水	500.0
水	100.0	水蜜桃	400.0	牛乳	200.0	トロロ汁	200.0
(停留時間一時三十分ノモノ)		(停留時間二時ノモノ)		麥酒	300.0	味噌汁	200.0
水	200.0	水	100.0	赤葡萄酒	200.0	牛乳	300.0
煎茶	200.0	牛乳	200.0	咖啡	200.0	蕎麥	100.0
麥酒	100.0	葛湯	200.0	米飯	100.0	餅	100.0
醬油汁	100.0	鶏肉羹汁	200.0	素麵	150.0	古豌豆(煮)	100.0
平野水	100.0	日本酒	300.0	落(フキ)	100.0	新蠶豆(煮剥皮)	100.0
牛熟卵及留水	100.0	麥酒	100.0	乳菜	100.0	胡蘿蔔	100.0
(停留時間一時四十分ノモノ)		麥飯	50.0	蜜柑	100.0	馬鈴薯	100.0
水	300.0	麵飽	100.0	赤小豆	100.0	薯蕷	100.0
調肉羹汁	200.0	赤小豆	100.0	鉄	100.0	牛蒡	100.0
麥酒	200.0	大根	100.0	蓮根	100.0	塊葱	100.0
鱈節煎汁	200.0	蕪菁	100.0	薇(センマイ)	100.0	胡瓜	100.0
麥茶	200.0	菠菜	100.0	煎餅	100.0	昆布	100.0
砂糖水	200.0	水芹	100.0	水飴	100.0	西瓜	100.0
鹽酸里母那埤	200.0	茄子	100.0	杏	100.0	杷	100.0
米煎汁	200.0	冬瓜	100.0	鯉刺身	100.0	御所柿	100.0
白粥	100.0	桃	100.0	燒鮎	100.0	羊羹	100.0
米飯	50.0	梨	100.0	煮鮎	100.0	朝鮮飴	100.0
麥飯	100.0	加爾兒斯煎	100.0	鱈刺身	100.0	栗なこし	100.0
和昆布	100.0	乾鮎(煮)	100.0	生牡蠣	100.0	蛋白湯留水	100.0
林檎	100.0	乾鰻(炙)	100.0	卵黃湯及留水	100.0	生卵、留水	100.0
蜜柑(袋ヲ除ク)	100.0	鯛生肉	50.0	(停留時間二時三十分ノモノ)		鯨刺身	100.0

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 死體現象

三〇六

食物停留時間

リテ食後何時間ニテ死亡シタルヤヲ推定スルヲ得ル故、從テ死亡時間ヲ推算スルコトヲ得ベシ。
 一般ニ健康胃ニ於テハ、ソノ内容ヲ排出シ盡スハ平均三時間ナリト雖、個人ニヨリテ多少ノ差異アリ、一般ニ云ハ、二乃至六時間ト云フヲ至當トス、モシ胃擴張、下垂症、無力症等アル時ハ食後六時間ニシテ尚胃中ニ多量ノ殘留物ヲ見、十二時間ヲ經ルモ多少殘存スルコトアリ。今湯川氏ガ日本食品ニ付之ヲ調査シタル結果ニヨレバ、概ネ第廿五表ニ示スガ如シ。

蒼鉛食ヲ與ヘ、れんとげん光線ニテ研究シタル結果ニヨレバ、食後ニ二十分ニシテ、空腸ノ大部ニ蒼鉛露ハレ、一時間後ニハ胃及十二指腸ハ全ク之ニテ滿サレ、二時間ヲ經過スレバ、胃内容ハ著シク減少シ始メ、蒼鉛ハ廻腸ニ達ス、食後二時間半ニ至ラバ、胃内ニハ殆ンド蒼鉛ナキカ、殘留ストモ極メテ少許ニシテ小腸盛ニ充實シ來ル。

食後三時間ニシテ胃ハ全ク空虛トナリ、三時間半後ニハ腸管ハ益々充實シ、盲腸ニ蒼鉛現ハレ、四時間ヲ經過スレバ、蒼鉛ハ主トシテ小腸ノ下部ニ達シ、盲腸及上行結腸充實シ始メ、四時間半ニシテ小腸内ニハ愈少クナリ、盲腸及上行結腸ニハ十分ナル内容アリ、蒼鉛ハ横行結腸ノ大部ヲ占メ、食後五時間後ニハ小腸内ノ蒼鉛著シク減少シ、五時半乃至六時間トモナラバ、横行結腸内ノ蒼鉛ハ十分充實シ、六時間ニシテ小腸内殆ンド空虛トナル。

食後七乃至八時間ヲ經過スレバ、其内容ハ多ク横行結腸内ニ集積シ、九時間後ニモ略同様ナレドモ、小腸内ニ尚極微殘留スルコトアリ、食後九時間半ニシテ、廻盲腸部ノ蒼鉛ハ消失シ、小腸内全ク空虛トナリ、同十時間乃至十三時間後ニハ蒼鉛ハ横行結腸ノ終部ニ現ハレ、且ソノ全部ヲ充實シ同十四乃至十六時間目

ニ蒼鉛ハ下行結腸ニ達シ、十六、七時間ニシテ盲腸及上行結腸ノ蒼鉛ハ減少シ始メ、同十九時間後、ソハ下行結腸ノ下部ニ進ミ、同二十二時間乃至二十五時間ニシテ盲腸及上行結腸ハ殆ンド空虛トナリ、下行結腸及S字狀部ハ充實シ、直腸ニ蒼鉛現出ス。

食後三拾時間乃至三十三時間ニシテ、横行結腸空虛トナリ、或ハ再ビ蒼鉛ヲ容レ、S字狀部及直腸モ亦空虛ニシテ膨大部ニ糞便ヲ集積シ而シテ後排泄スト。

即チ蒼鉛食攝取後、約三時間ニシテ盲腸ハ充實シ始メ、ソガ上行結腸ノ下端ニ達スルニハ、尙二乃至三時間ヲ要シ、横行結腸ヲ充實スルニハ、更ニ五乃至六時間ヲ要ス、而シテ攝取後遅クトモ四十八時間ニシテ、蒼鉛ハ排泄シ盡クサル、ヲ常トス。勿論コハ平均的ノ所見ニシテ、實際ニ於テハ、各個人ノ生理的ニスラモ、多少ノ差異アリ、胃腸ノ疾病アル際或ハ食後直ニ臥床シタルカ、モシクハ運動ヲナセシカモ、之ニ若干ノ影響アルヲ免レズ、故ニ常ニ是等ノ點ヲ顧慮シテ、此法則ヲ應用スベキナリ。

かす。氏ハ死後ノ經過日時ヲ定ムルニ、次ノ尺度ニ依ルベシト云フト雖、氣候ノ異ル我國ニハ應用スベクモアラズ、但シ參考ノ爲メ之ヲ掲グレバ左ノ如シ。

- 一、死後二十四時間乃至三十六時間經過スレバ、腹壁汚綠色トナリ、眼球軟トナル。
- 二、死後三乃至五日間經過スレバ、下腹部ハ黒綠色トナリ、所々ノ皮膚ニ綠色斑ヲ生ジ、鼻口ヨリ血色液ヲ漏ラス。
- 三、死後八乃至十二日目ニハ全身黒綠色トナリ、下腹部ハ膨滿シ爪甲尙堅シ。
- 四、死後十四乃至二十日目ニハ全身ハ赤褐色トナリ、所々ニ水泡ヲ形成シ、皮下組織ニ腐敗瓦斯ヲ生ジ、

腐敗進行尺度

火葬

五、死後四乃至六ヶ月目ニハ、死體軟部ハ全部糜爛狀トナリテ流去シ、骨格化スルモノナリ。

火葬、死體現象ヲ進捗セシメズシテ、直ニ死體ヲ分解シ、灰化シ盡スモノヲ火葬トス、コハ死體ニ存スル總ベテノモノヲ、一舉ニシテ殆ンド皆無ニ歸セシムルモノナレバ、火葬ヲナスニ當リテハ、十分ニ死體ヲ調査シテ、何等ノ疑問無キニ至リテ、始メテ之ヲ決行スベシ。然ラズンバ犯行ノ痕跡等ヲ潰滅セシメ、後日大ナル憾ヲ殘スニ至ラン。歐米ニテハ尙未ダ火葬ガ左程行ハレザルガ故ニ、彼地ニテ編成サレタル法醫學書ニハ、此種ノ注意ヲナスモノ少キモ、我國ニ於テハ宗教上ノ習慣ニテ火葬盛ニ行ハルレバ、此點ニ就テハ特ニ注目スルノ必要アリト信ズ。

一、身體ニ於ケル損傷検査

Wound and mechanical Injuries.
Lesions traumatiques.
Die Körperverletzungen.

甲、一般注意

刑法第二百四條 人ノ身體ヲ傷害シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金若クハ科料ニ處ス

刑法第二百五條 身體傷害ニ因リ人ヲ死ニ致シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

自己又ハ配偶者ノ直系尊屬ニ對シテ犯シタルトキハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

刑法第二百六條 前二條ノ犯罪アルニ當リ現場ニ於テ勢ヲ助ケタル者ハ自ら人ヲ傷害セスト雖一年以下ノ懲役又ハ五十圓以下ノ罰金若クハ科料ニ處ス

刑法第二百七條 二人以上ニテ暴行ヲ加ヘ人ヲ傷害シタル場合ニ於テ傷害ノ輕重ヲ知ルコト能ハス又ハ其傷害ヲ生セシメタル者ヲ知

ルコト能ハサルトキハ共同者ニ非スト雖モ共犯ノ例ニ依ル

刑法第二百八條 暴行ヲ加ヘタル者人ヲ傷害スルニ至ラサルトキハ一年以下ノ懲役若クハ五十圓以下ノ罰金又ハ拘留若クハ科料ニ處ス

前項ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

刑法第二百九條 過失ニ因リ人ヲ傷害シタル者ハ五百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

前項ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

刑法第二百十條 過失ニ因リ人ヲ死ニ致シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

刑法第二百十一條 業務上必要ナル注意ヲ怠リ因テ人ヲ死傷ニ致シ

損傷検査

傷害

タル者ハ三年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

刑法第二百四條 強盜人ヲ傷害シタルトキハ無期又ハ七年以上ノ懲役ニ處ス死ニ致シタルトキハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

刑法第二百四十一條 強姦婦女ヲ強姦シタルトキハ無期又ハ七年以上ノ懲役ニ處ス因テ婦女ヲ死ニ致シタルトキハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

民法第七百九條 故意又ハ過失ニ因リテ他人ノ權利ヲ侵害シタル者ハ之ニ因リテ生シタル損害ヲ賠償スル責任ニ任ス

民法第七百十條 他人ノ身體、自由又ハ名譽ヲ害シタル場合ト財産權ヲ害シタル場合トヲ問ハス前條ノ規定ニ依リテ損害賠償ノ責任スル者ハ財産以外ノ損害ニ對シテモ其賠償ヲ爲スコトヲ要ス

民法第七百十一條 他人ノ生命ヲ害シタル者ハ被害者ノ父母、配偶者及ヒ子ニ對シテハ其財產權ヲ害セラレザリシ場合ニ於テモ損害ノ賠償ヲ爲スコトヲ要ス

民法第七百十二條 未成年者カ他人ニ損害ヲ加ヘタル場合ニ於テ其行為ノ責任ヲ辨識スルニ足ルヘキ知能ヲ具ヘザリシトキハ其行為

茲ニ述ブル傷害トハ器械的暴力ニ依リテ、身體ノ一部、或ハソノ官能ノ損傷セララル、ヲ云フ。

損傷ヲ検査スルコトハ、法醫學的事件ニ於テ最も多ク遭遇スルモノニシテ、統計上身體ニ對スル罪ノ大

多數ハ傷害ノ罪ナリ。

損傷ヲ検査スル際、吾人ノ最モ注意スベキハ、次ノ四ツノ問題ナリ。

一、損傷ノ在ル部位及ソノ形状。

二、兇器ノ種類及ソノ使用法。

三、自他傷ノ別。

四、損傷ノ結果或ハ死因。

身體ニ於テ損傷ヲ發見シタル場合ニハ、注意シテソノ小ナルモノト雖、看過スルコトナカラシムコトヲ期

スベシ。ソガ記載ニハ左ノ事項ニヨル。尙之ヲ描畫シ或ハ撮影シ置クコトヲ得レバ重寶ナリ。

(イ)部位。損傷ノ存在スル部位ハ、極メテ明瞭ニ經緯ノ兩方面ヨリ云ヒ現ハスベシ。例ヘバ、右眼直下何種、右耳孔ヨリ左何種ト記載スレバ、ソノ存在部位自ラ決定ス。モシ單ニ右眼直下何種トノミ記載シアル場合ニハ、ソノ上下ノ位置ハ明カナレドモ、左右ハ殆ンド何種ノ所ニ在ルカラ區別スルコト能ハザルガ如キ之レナリ。

(ロ)形狀。損傷ノ形狀モ成ルベク叮嚀ニ記載シ、或ハ一般ニ知ラレタル圓形、星形、多角形等ノ文字ヲ用ヒ、尙ソレニテモ記載困難ナル場合ニハ、之ヲ圖解スルヲ便利トス。此目的ノ爲メニハ次頁ニ掲グル如キ人體輪廓圖ヲ豫メ作成シ置キ、之ニ損傷ヲ記入スレバ最好都合ナリ。

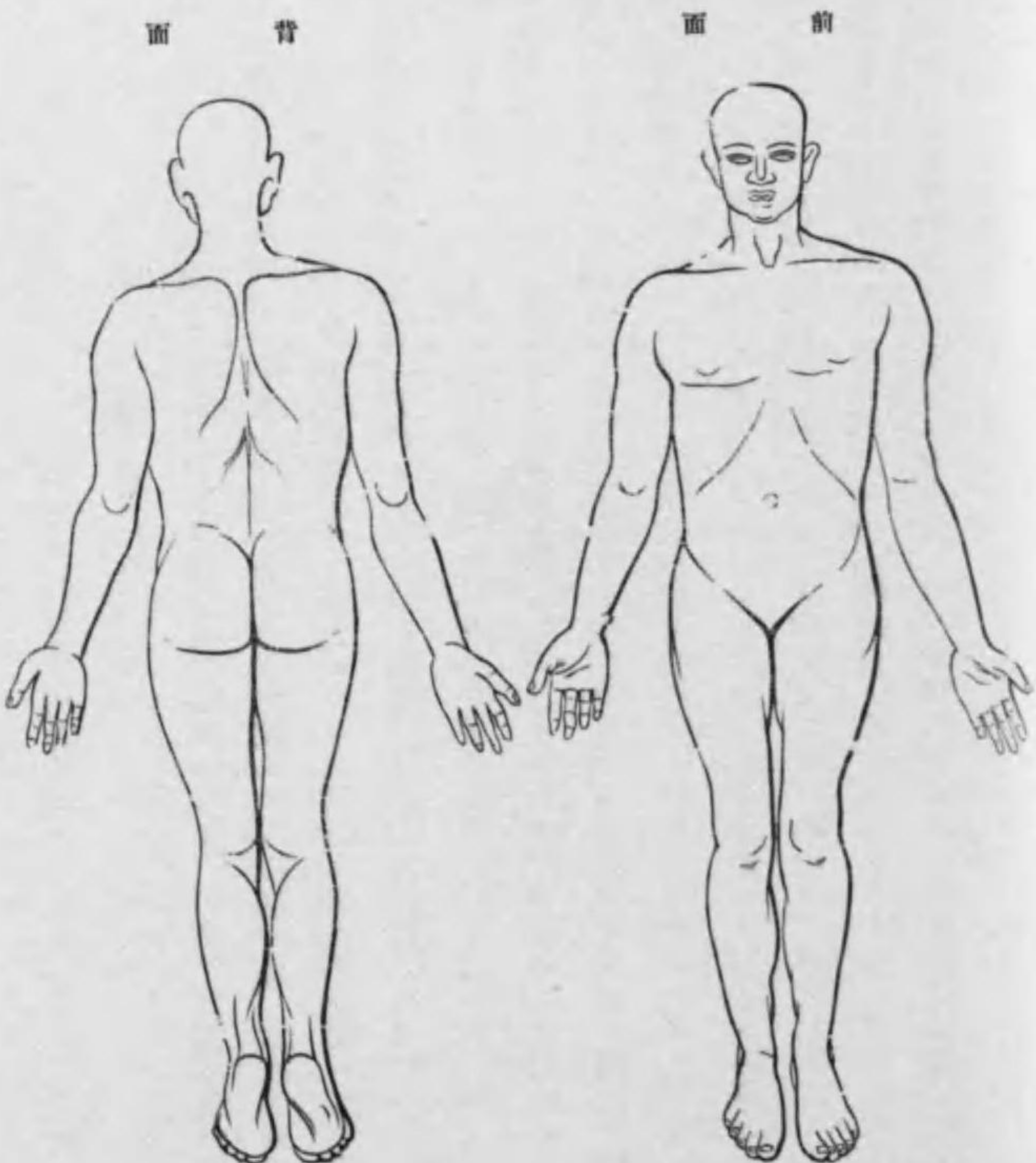
(ハ)大小。大サモ亦小豆大或ハ大豆大等ノ記載法ニ依リ、或ハ尺度ヲ以テ、ソノ上下徑及左右徑ヲ測定シ置クベシ。

(ニ)數。損傷ノ數モ亦後來種々ノ關係ヲ惹起スルモノナレバ、注意シテ記載スベシ。

(ホ)創線創底并創管ノ性狀方向ニ就テモ、ソガ不規則ニシテ凹凸ヲ呈スルカ、或ハ滑澤ナルカ、或ハ瓣狀ヲ呈セザルヤヲ記載スベシ、之ニ依リテ兇器ノ種類、或ハ兇器ノ作用シタル方向ヲ知ルコトヲ得ルモノナリ。

(ヘ)損傷ノ結果ノ判定ハ頗ル困難ナル問題ニシテ、小ナル損傷ニテモ、主要ナル部位ニ在ルカ、出血多キカ、或ハ創傷傳染ヲ來セシ場合ニハ、意外ノ結果ヲ來シ、反之、損傷比較的大ナルモ、清潔ナル創傷ナル時ハ大ナル障害ヲ殘サズシテ、早期ニ治癒スル事アリ。是等ハ個々ノ場合ニ依リテ、判定スルノ外ナ

人體輪廓圖



キセノトス。

損傷ハ一般ニ兇器ノ種類ニ依リテ、鈍器損傷、銳器損傷、及銃創ノ三種類ニ分ツ。今順次之ニ就テ述ベシ

乙、鈍器損傷

Injuries by dull instrument, Lesion par instruments contondants, Verletzung durch stumpfe Werkzeuge.

損傷ノ中ニテモ、鈍器損傷ハ最も多ク吾人ノ遭遇スルモノニシテ、吾人ノ周圍ニ在ル多クノ物品ハ、多クハ所謂鈍器損傷ヲ吾人ニ附加スルコトヲ得ルモノナリ。例ヘバ、手拳、棒、木枝等ニ依ル打撲傷、高所ヨリノ墜落、或ハ轢過等ニ依リテ起ル損傷ノ如キ皆之レナリ。鈍器ニ依リテ身體ニ起ル損傷ヲ、表皮剝脫、皮下溢血、創傷及神經系統ノ振盪、内臓ノ破裂、或ハ轉位、骨折、脱臼等トス。

イ、表皮剝脫

Bruiise, Erosion, Hautabschürfung.

コハ鈍器ガ皮膚ノ表面ニ、接線ノ方向ニ働ク時ニ起ルモノニシテ、多クハ表皮剝脫シテ下層ノ眞皮ヲ露出シ、少許ノ出血ヲ伴ヒ、或ハ伴ハズ數日ニシテ、癬痕ヲ殘サズ治療ス。又強ク四肢ヲ縛セラル、時ハ表皮剝脫ト共ニ繩縛水泡ノ來ルコトアリ。又表皮剝脫ハ自己ノミ單獨ニ來ルコトアリ、又ハ他ノ損傷ニ伴ヒテ來ル事アリテ、外科的ニハ殆ンド無意味ノモノナレドモ、法醫學的ニハ非常ニ必要ナルモノニシテ、其性狀方向等ニ依リテ、鈍器ノ種類、或ハソノ如何ニ作用セシカヲ知ルニ、價値大ナルモノナリ。往々ニシテ表皮剝脫ガ生前ニ生ジタルモノナルカ、死後死體所置ノ際等ニ生ジタルモノナルカノ區別必要ナルコトアリ。死後ニ生ゼシ表皮剝脫ハ、蒼白ニシテ直ニ乾燥シ褐色ヲ呈シ、恰モ羊皮紙様トナル。然ルニ生前ニ受ケタルモノハ、出血後痂皮ヲ作り、切檢スレバ皮下溢血アルコト多キ故兩者ノ區別自ラ明ナリ。死後棺壁ニ觸レテ生ジタル表皮剝脫ヲ棺傷ト云フ。

鈍器損傷

表皮剝脫

繩縛水泡

棺傷

皮下溢血

ロ、皮下溢血

Subcutaneus Haemorrhage, Echytnoses, Blutunterlaufung.

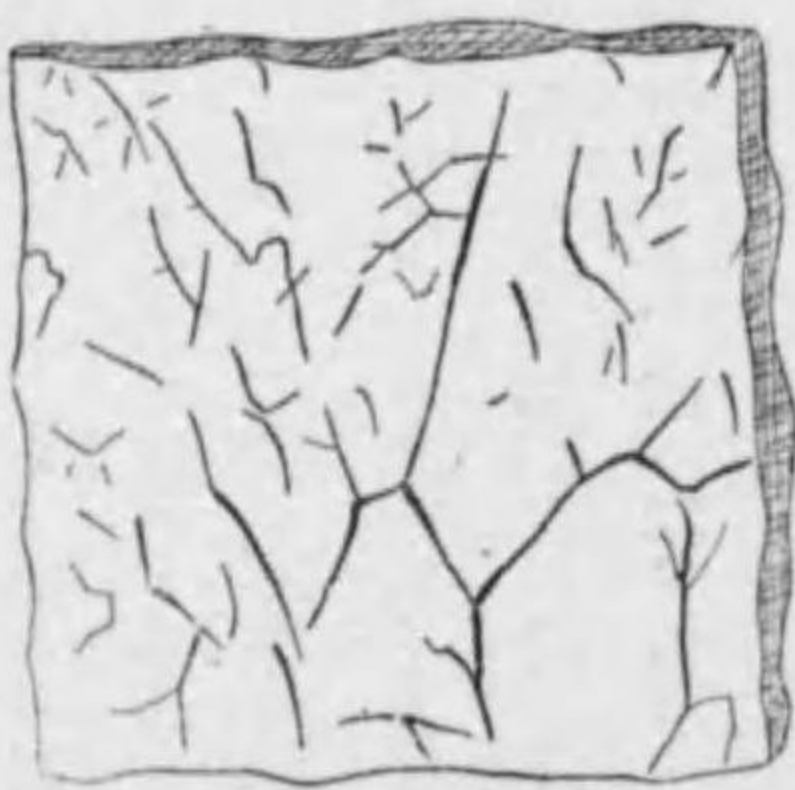
皮下組織ガ挫折ヲ受ケ、ソノ血管ガ破碎セラレ、該組織間ニ出血スルモノヲ皮下溢血ト云フ。皮下溢血ト剖檢ノ際血管ヲ切斷セル爲メ出血セルモノト、一見相似タルガ如キモ、前者ハ容易ニ拭除スルコト能ハザルモ、後者ハ直ニ之ヲ拭除スルコトヲ得ルヲ以テ、ソノ區別容易ナレドモ、時トシテハ剖檢ノ際血管ヨリ流出セルモノヲ、ソノマ、暫時放置スル時ハ、色素ガ周圍ノ組織中ニ滲透シ行キ、恰モ皮下溢血ノ如キ觀ヲ呈スルコトアレバ、注意スベキモノトス。一般ニ鈍器損傷ヲ來セシ皮下組織ノ直下ニ骨質等アレバ、皮下溢血ヲ來シ易シ、ソノ他、血管壁ノ脆弱ナル老人及小兒ニモ、皮下溢血容易ニ生ズルモノナリ。皮下溢血ノ大小ハ、勿論、兇器及暴力ノ大小ニ比例スルモノナレドモ、被害部ノ性狀ニモ大ニ關係スル所アリテ、皮下組織ノ脆弱ナル頭部及眼瞼ノ如キハ、甚ダ皮下溢血ヲ來シ易シ。

皮下溢血ノ形狀ハ多クハ圓形或ハ楕圓形ニシテ、兇器ノ形ニ相當セザルコト多キモ、時トシテ明瞭ニ兇器ノ形狀ヲ記録シ居ルコトアリ。例ヘバ、分枝セル木枝ニテ打撲サレテ生ジタル皮下溢血ガ、樹枝様ノ形狀ヲ呈セルガ如キ之

レナリ。

皮下溢血ガ新鮮ナル場合ニハ、多少皮膚ノ表面ヨリ高マリ、藍色或ハ帶青赤色ヲ呈シ、時間ノ經過スルニ從ヒ、次第ニソノ腫脹ヲ減ジ、漸次暗赤色、赤褐色、帶綠褐色、淡綠色、淡黄色トナリ、遂ニ褪色スルモノナリ。

圖五十六第



塞栓管血ルケ於ニ剝脫皮表

壓迫乃至單純ナル打撲等ニヨリテ來リシ損傷ト認ムルハ不適當ナル状態ニシテ又一種ニ同強度ノ外力ノ作用セル者トモ認マラズシテ強度ノ壓迫ト同時ニ幾分捻轉乃至挫傷の若クハにじる等ノコトニヨリテ最モ發起シ易キガ如キ可能性ヲ有スル状態ナリトス、鈍的物體乃至物體ノ鈍的部分ニヨリテ發起セル損傷ナルコトハ確實ナルガ其内部ノ變化ハ著シク高度ナルニ比シ皮膚表面ニ作用セザルモノトセバ其ノ物體ハ著シク鈍的(銳キ角稜乃至尖端等)ヲ有セザル物體)ナルヲ適當トシ、若シ角稜乃至尖端等ガ作用セシモノトセバ衣服ノ上等ヨリ緩徐ニ作用セシモノノカト察スルヲ適當トスルガ如シ、部位及其ノ性状ヨリ推測シテ一同ノ外力作用ニヨリ來リシ損傷トハ考ヘラズシテ左右共數回若クハ尙ホ其レ以上頻繁ナル外力作用ニヨリ發起セル者ナルヘシ、硬固ノ鈍的物體ノ間ニ其ノ損傷部ヲ挾ミテ壓迫スル等ノコトニヨリテ發起シ得ヘキカ被告者ヲ俯位ニ臥セシメ(完全ナル俯位デナクモ差支ヘナシ)其大腿部背面等ヲ強力ニ踏ミ著ケ踏ミ踞ル等ノコトニヨリテモ結合ニヨリテハ發起セシメ得ル可能性アリト推測サル、殊ニ大腿部背面外部側部内ノ筋肉ガ左右共挫裂斷シ居ル状態モ踏ミ著ケシ際此ノ部ガ左右外側ニ傾キ床面ニ當リテ強キ外力ガ加ハルコトニヨリテハ充分發起可能ナリト推測サル、状態ナリ、而シテ此ノ死體ニ發見セシ損傷ハ一人以上乃至多數ノ人ニヨリテ發起セシメ得ル事勿論ナルガ若シ被害者ガ何等カノ關係上特別動カサル状態ニアレバ一人ニテモ場合ニヨリテハ發起セシメ得ル損傷ナリト認ムラル。

二、死亡ノ原因ニ關シテ本死體ニハ検査所見第二十三項及第二十四項ニ記載ノ如ク慢性腎臟炎ヲ認ム尙ホ同第十六項ニ記載ノ如ク心臓カ肥大(此ノ心臓肥大ハ慢性腎臟炎ノタメト脂肪ノ沈着體ナラガ爲メナリト認ムラル)シ居リシト雖モ是等ノ病變ハ何レモ未ダ致死の意義アル程度ニ非ラズシテ、此ノ他ニハ致死の意義アル病變ハ勿論特別ノ病變アルヲ認メザル(検査所見第三十四項ニ記載ノ如ク特別動脈硬化症ニモ罹リ居ラズ又同第三十六項ニ記載ノ如ク腦出血等ノ徵候モ全然ナシ)ニヨリ宮〇音〇ノ死ハ病死トハ認メラレサル處ナリ、而シテ検査所見第七項ニ詳記セル如ク左右兩大腿部ノ皮下及深部組織間ニハ著シク多量ノ出血血液ヲ認ム、

其ノ出血量ハ之レヲ量定スル能ハサリシヲ以テ斷定ハ出來サルモ左右ニ於ケル出血血液ヲ合スレバ優ニ二千以上ト認メラレ或ハ千五百以上ニモ及ブカト推量サル程度ニシテ殆ンド人ノ出血致死體ニモ達シ居リ(人ノ出血致死量ハ人ニヨリ幾分ノ差異アリト雖モ千五百以上ノ出血アレハ先ツ致死の意義アリト認メテ差支ヘナシ)一面解剖所見上死症ノ極メテ輕微ナル點(検査所見第二項)心臓内殊ニ右心房室内ノ血液ガ少量ナル點(同第十六項)解剖上成ニ何等特別實血ヲ來スベキ原因ノ認メラザルニ諸臟器及各部一般ニ貧血性ニシテ血流量ニ乏シク殊ニ其ノ血液ノ性状カ貧血的ナル點等一般ノ解剖所見ハ失血死ノ解剖所見ニ一致シ居リ、且ツ之レヲ失血死トナスニ何等矛盾乃至不適當ナキ所見ナリ、尙ホ本死體ハ兩下腿ニ於ケル出血ニヨリテ失血死トナスノ外解剖検査上他ニ何等死亡ノ原因タリ若クハ死亡ノ原因タルヘキ特別ノ疑ヒアル所見ナシ、仍ツテ本死體ハ法醫學上兩下腿ニ於ケル損傷ニヨリテ來リシ大出血ニ基クテ失血死ト認ムルノ他ナク、其ノ死亡ノ原因ハ失血ニ因ル心臓麻痺ナリト認ムベキナリ、但シ本死體ハ此醫學上失血死ト認ムルノ他ナキ死體ナルガ體格ニ比シ其ノ出血程度(其ノ出血量ハ概シ量定スル能ハサリシトスルモ)及一般ノ貧血程度カ假令之レヲ失血死トナスニ強支ヘナキ程度ナリトハ言ヘ、幾分程度ナル感アルヨリ觀レバ慢性腎臟炎殊ニ心臓肥大ノ存在セルガため幾分心臓麻痺ヲ早メシ關係アルヤモ知レズ、又損傷乃至外力作用ニヨル疼痛若シハ精神的影響等カシヨク、又損傷ノ下ニ幾分心臓麻痺ヲ助長セルガ如キ關係アルヤモ知レザル處ナルガ、是等ノ關係ノ存否ニ就キテハ解剖検査上ニハ十分之レヲ立證スベキ根據ヲ得ル能ハザル處ナリ、此ノ他本死體ノ心臓内(同第十六項)及血管内(同第三十四項及第三十七項)血液カ濃ク黒赤色流動性ナルニヨリ其ノ死ガ急性死ナルコトハ確實ナリ、依ツテ本人ノ死ハ失血急性死ト認ムルノ適當トナス處ナリトス、尙ホ其ノ下腿ノ皮下内部ニ於ケル大出血ヲ來セル關係ニ就キテハ大腿部ノ組織間ニ比較的餘積アリ(治療上食鹽水ノ大量ヲ皮下ニ注入スル場合等ニモ多ク)此ノ部ヲ攪ア位ナリ、且ツ左右股動脈ハ損傷サレ居ラザルモ多數ノ動脈膠腫ニ此ノ部ノ動脈ハ概シ小枝ト雖モ相當大ナル動脈タル股動脈ヨリ直接分枝シ若クハ分枝シテ

其ノ距離短キ關係上其ノ損傷ノ結合ニハ出血量多キ動脈枝カ筋内其ノ他ノ損傷ト共ニ多數ニ損傷乃至斷裂サレシカ爲メ斯ノ如ク露クヘキ多量ノ出血ヲ來セシモノト認ムラル。

四、死後ノ經過時間ニ關シテハ死體強直ノ状態(検査所見第二項)角膜潤滑ノ状態(同第四項)其他各部ニ於ケル一般死體現象乃至死後ノ變化進行ノ程度ヲ根據トシ、體質、死後、死後死體保存ノ状態、氣温其他ヲ參酌シテ判定スルニ確實ナル判定ハ困難ナルモ死後解剖終了時迄大約二十四時間乃至二十四時間ニハ猶ホ幾分進シ居ラサル死體ト認ムルヲ法醫學上ニハ適當トナスガ如キ状態ナリ。

微ナシ、左右兩下腿ニ於ケル高度損傷ノ挫傷ヘ之レヲ發起セル具體の物體種類判定ハ到底困難ナル關係ナルガ原因ノ鈍的物體乃至鈍的部分ニヨル強度ノ鈍的外力ノ壓迫乃至打撲ト同時ニ幾分捻轉乃至挫傷の若クハにじるか如ク作用スルコトニヨリ最モ發起シ易キガ如キ性状ヲ呈シ硬固ノ鈍的物體ノ間ニ此ノ損傷部ヲ挾ミテ壓迫スル等ノコトニヨリテ發起シ得ベキガ又俯位的ニ臥セル皮下内部等ヲ強力ニ踏ミ著ケ踏ミ踞ル等ノコトニヨリテモ場合ニヨリテハ發起セシメ得ル可能性アリト推測サル。

三、死亡ノ原因ニ關シテ解剖検査上本死體ノ死ハ兩下腿ニ於ケル挫傷ニヨリテ來リシ大出血ニ基クテ失血急性死ト認ムルノ他ナクシテ法醫學上ニハ其ノ死亡ノ原因ヲ失血ニヨル心臓麻痺ナリト認ムルヲ適當トナス状態ナリ、但シ慢性腎臟炎及心臓肥大カ存在セルタメ其ノ心臓麻痺ヲ幾分早メシカ如キ關係アルヤモ知レズ又疼痛の若クハ精神的影響等ガシヨク的關係ノ下ニ其ノ心臓麻痺ヲ幾分助長セルカ如キ關係アルヤモ知レザル處ナルガ是等ノ關係ノ存否ハ之レヲ證明スベキ根據ヲ得ズ。

四、死後ノ經過時間ニ關シテハ死後解剖終了時迄約二十四時間乃至二十四時間ニハ猶ホ幾分進シ居ラサル者ト推定スルヲ法醫學上適當トナスカ如キ状態ナリ。

以上検査所見ヲ根據トシ説明ニ記載セル理由ノ下ニ各検査事項ニ關シ検査スルコト左ノ如シ。

一、損傷ノ部位性状ニ關シテ宮〇音〇ノ死體ニ存在セシ損傷ハ上下唇左側ニ於ケル各一個程度ノ上皮剝脫、左前脛下部手背面ニ二個、右肘關節部背面ニ五個及右膝關節部内面ニ一個ノ麻痺大乃至胡桃大程度表在性單純ナル擦過傷、左右兩大腿部ノ背面全體ヨリ幾分内外側(面)及下腿背面上部ニ互リ著シク高度損傷ニシテ内部ノ大出血及筋肉挫碎ヲ伴ヘル挫傷等ナリ、而シテ何レモ死ノ直前若シクハ死迄ニ餘リ時間の間隔ナキ間ニ受傷セル損傷ナリト認メラル。

二、損傷發起ノ物體ニ關シテ上下口唇ノ上皮剝脫ハ自己ノ齒ニヨリ自嚼傷ト察セラレ、左前脛下部其他ノ擦過傷ハ何レモ硬固ノ鈍的物體乃至鈍的部分ノ擦過ニヨリテ發起セリト認メラル、以上特

本検査ハ昭和二年二月〇日ヨリ同年二月〇日迄ノ間ニ行フ。

昭和二年〇月〇日
大阪府此花區上福島北一丁目三十五番地
検案人 大阪醫科大學教授 中田 篤 郎

玆ニ注意スベキハ何等暴力ノ加ハリタルニ非ラズシテ病的ニ皮下溢血ヲ來ス場合アリ。例之、敗血病、壞血病、血友病、紫斑病、營養不良、急性熱性傳染病及磷中毒ノ際ニ見ル皮下溢血ノ如キ之レナリ。

死體ニ藍色或ハ帶赤藍色ノ斑アレバ、之レテ切開シテ先ツ死斑ナルヤ、或ハ皮下溢血ナルヤヲ鑑別シ、ソガ後者ナレバ、切開ノ際ソノ溢血ノ状態ニヨリテ、新古ヲ區別スルコトヲ得ルコトアリ。即チ溢血ガ古クナレバナル程、水分ヲ失ヒテ濃厚トナリ、色ハ次第ニ變色ス。例ヘバ、溢血後第一日ニハ暗赤色にて

挫傷

瓣狀創

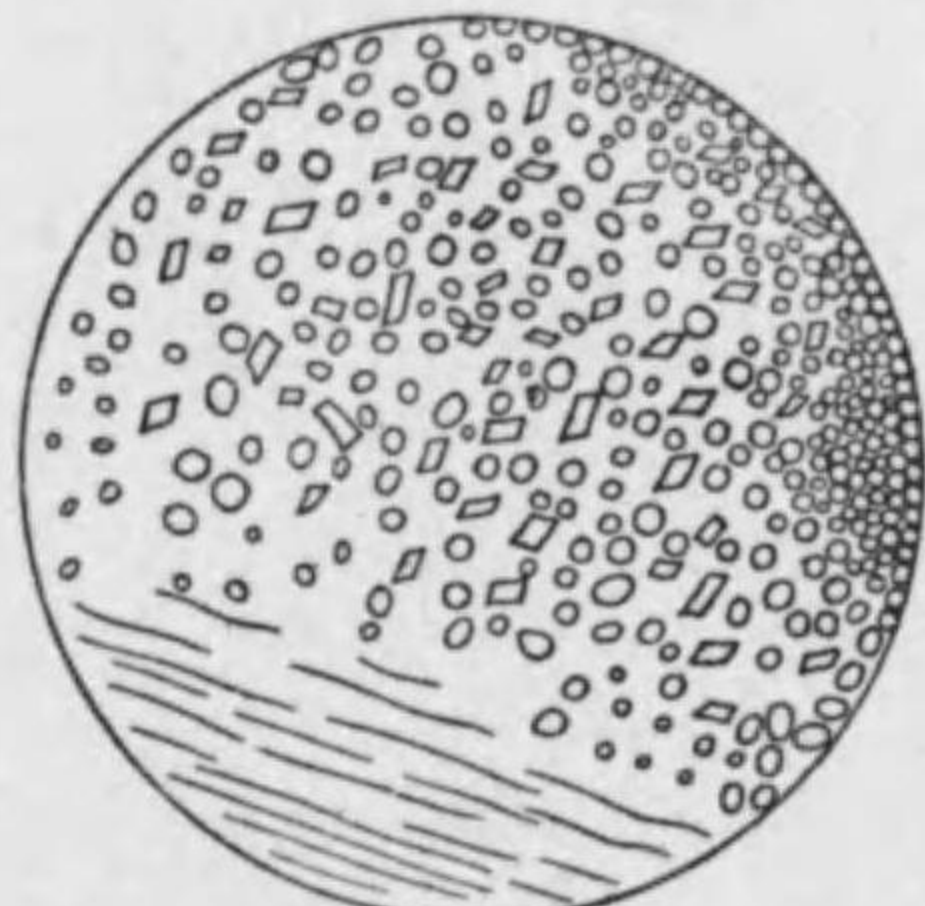
裂傷

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

二、鈍器損傷

三二二

圖六十六第



晶結んいでいとまへ

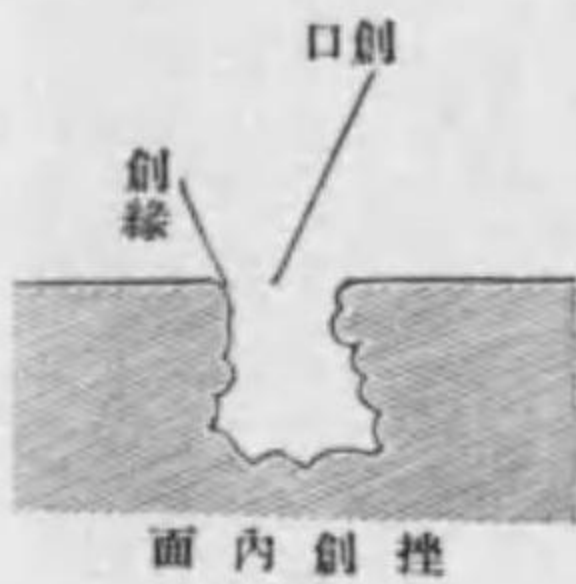
様ノモノガ、數日ヲ經レバ甚シク褐色ヲ帶ビ、水分次第ニ乏シクナリ、遂ニハ綠色殘滓狀ノモノトナル。此時之ヲ鏡檢スレバ、斑中ノ赤血球ノ數減ジ、時トシテへまといぢらんノ結晶ヲ見ルコトアリ。但シ上記ノ事實ハ、腐敗現象ノ甚シク進行セル死體ニハ、應用スルコト能ハズ。之レ腐敗ノ進行ニヨリテ色素ノ滲潤ヲ來セバナリ。

ハ、挫傷、裂傷、咬傷

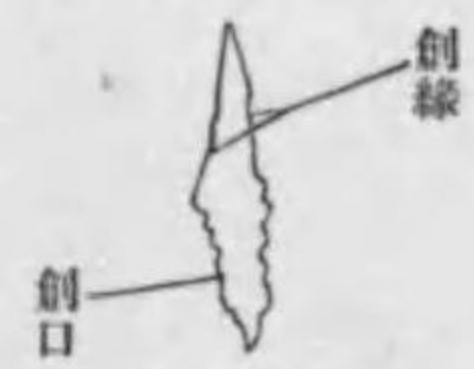
Contused, lacerated and bit wound.
Contusion, Dechire, Morsure.
Quetsch-, Riss- und Bisswunde.

鈍器ガ大ナル力ヲ以テ身體ニ作用スレバ、諸種ノ創傷ヲ生ズ、暴力ノ方向ガ皮膚面ニ直角、モシクハ之ニ近キ時ハ挫傷ヲ來シ、皮膚破レ兇器ガ創傷内ニ進入スルコトアリ。次ニ鈍器皮膚面ニ斜ニ作用スル時ハ瓣狀創ヲ作ル、此時ハ皮膚ハ破裂スルノミナラズ、下部ノ組織ヨリ剝脫セラル。

圖七十六第



面内創挫



圖八十六第

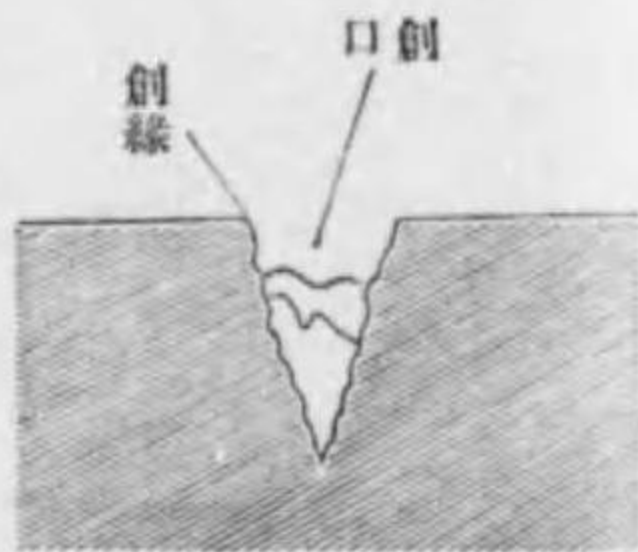


標有ルセ架橋ノ織組

裂傷ハ暴力ニ依リテ皮膚ヲ甚ダシク牽引スル時、皮膚ノ彈力遂ニ之ニ堪ユル能ハザルニ至リ、皮膚破裂シ

咬傷

圖九十六第



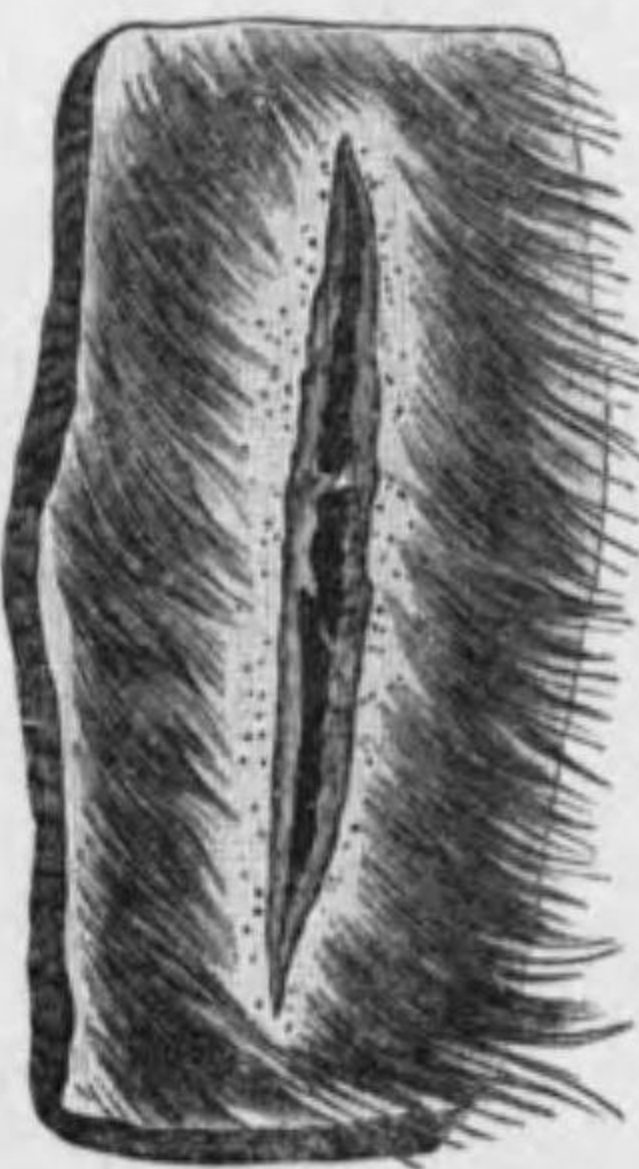
面内創裂



ヲ生ズルモノニシテ、此際ハ直接暴力ガ作用スル場所ノミナラズ、遠所ニ裂傷ヲ生ズルモノナリ。大ナル機械ノ間ニ挟マレ、大爆發或ハ汽車ニ轢過サレタル際ニ生ズル創傷ハ、挫傷裂傷ノ混合シタルモノナリ。動物ノ咬傷モ亦、此兩者ノ混合セシモノト見ルコトヲ得、即チ鼠咬傷乃至鳥啄傷等之レナリ。

挫傷、裂傷ノ形ハ甚ダ不整ニシテ、創縁ハ挫滅セラレ瓣狀トナリ、或ハ凹凸ヲ呈シ腫脹シ、或ハ直下ノ組織ヨリ剝離セリ、而シテ周圍ニハ皮下溢血ヲ伴フコト多シ。時トシテ鈍器ガ急激ナル牽引力ヲ皮膚ニ與ヘテ、線狀ノ裂傷ヲ生ジ、恰モ切創ノ如キ觀ヲ呈スルコトアリ。コハ皮膚ノ直下ニ比較的滑カナル骨質アル場合ニ起ルモノニシテ、殊ニ頭部ニ多ク起ルコトアリ。之ヲ銳器損傷ト鑑別スルニ困難ナルコトアリト雖、注意シテ檢スレバ創縁不正ニシテ、瓣狀トナリ、創中ニ血管神經ノ如キ稍抵抗強キ組織ガ相互ニ橋架

圖十七第



平面上ノ地味ニ由テニ
頭部ニ生シタ
後頭部ニ生シ
線狀創トニシ
線狀創トニシ
或ハ組織ニ深
或ハ組織ニ深
臍大死ニ於テ
臍大死ニ於テ
臍大死ニ於テ
臍大死ニ於テ

圖一十七第



髮毛ルレマ挾ニ中裂破骨頭

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

二、鈍器損傷

三二二

シ、且多クハ皮下出血ヲ伴ヒ、或ハ頭骨ニ骨折アル場合ニハ、時トシテ骨破裂間ニ毛髮ヲ箱入スル等ノ所見アリ。コハ切創ニハ、殆ンド見ザルコトナレバ、假令、一見切創ノ如ク見ユルモ、左ニ非ラザルコトヲ多クハ觀破スルヲ得ルモノナリ。

挫傷、咬傷及裂傷ハ第一期癒合ヲ營ムコト少ク、化膿シ癰疽ヲ殘シテ治癒シ、時トシテ創傷傳染ヲ來スコトアリ。予ノ實見ニ依レバ顛顛部ヲ杓子ニテ毆打セラレ、ソノ所ヨリ創傷傳染ヲ來シ、死亡セシモノアリキ。

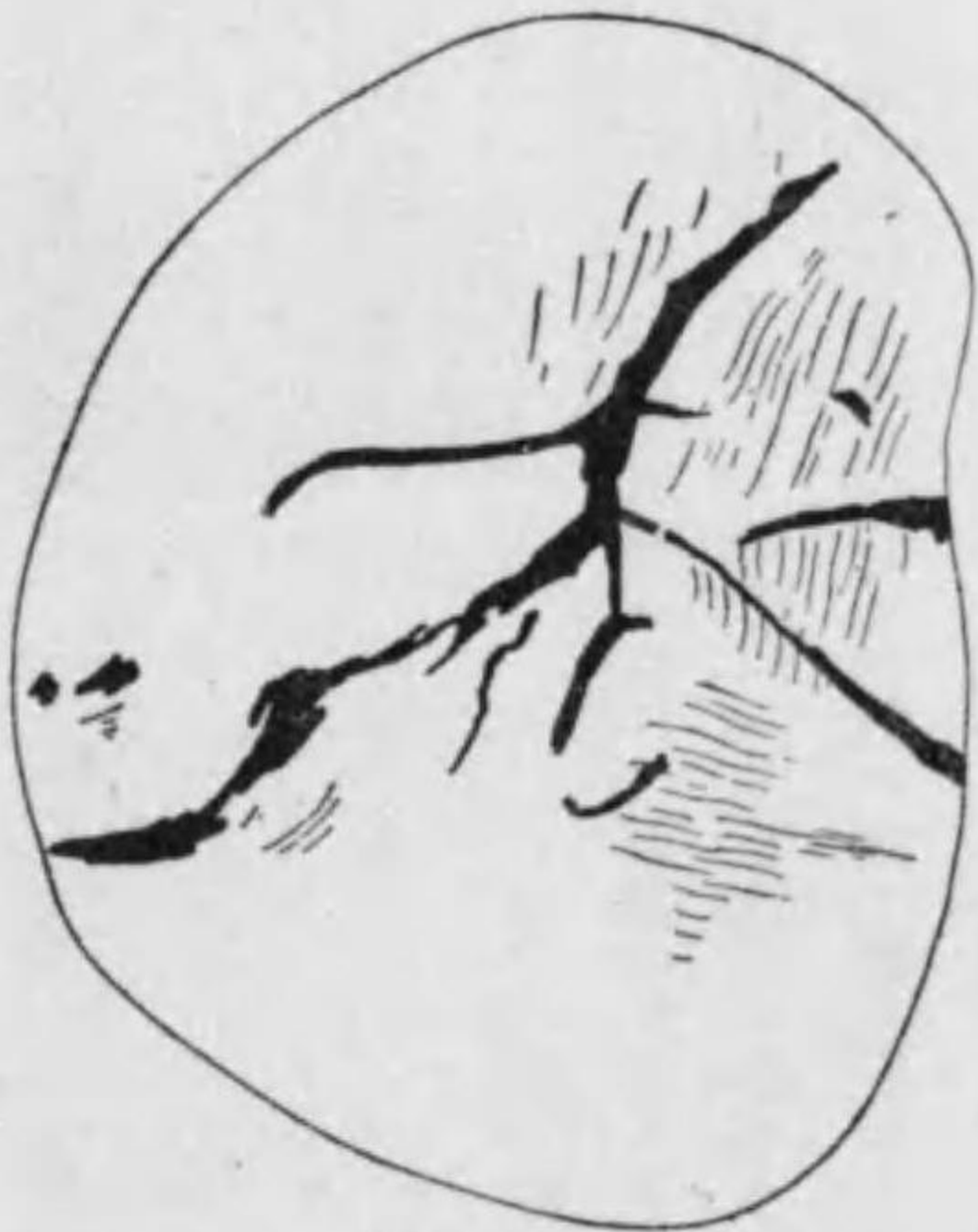
二、内臓破裂及しよつく

Rupture of Organs and Shock. Rupture des organes et choc, Organzerrissung und Shok.

暴力ガ直接内臓ノ存在スル體部ニ襲來スルカ、或ハ高所ヨリ落ち、又ハ轢過サル、等ニヨリテ、内臓破裂ヲ來スモノニシテ、一般ニ云ヘバ形態ノ大ナル、脆弱ナル且保護少キ場所ニ在ル臓器ハ最モ破裂シ易シ。今最モ破裂シ易キモノヨリ漸次列舉スレバ、肝臓、脾臓、腎臓、肺、心臟、胃、腸、膀胱、膈等ノ順位ニ在リ。然レドモ、病變ヲ受ケタルモノ、或ハ度過ノ擴張ヲナセルモノハ、常態ニアルモノヨリ破裂シ易キコ

内臓破裂

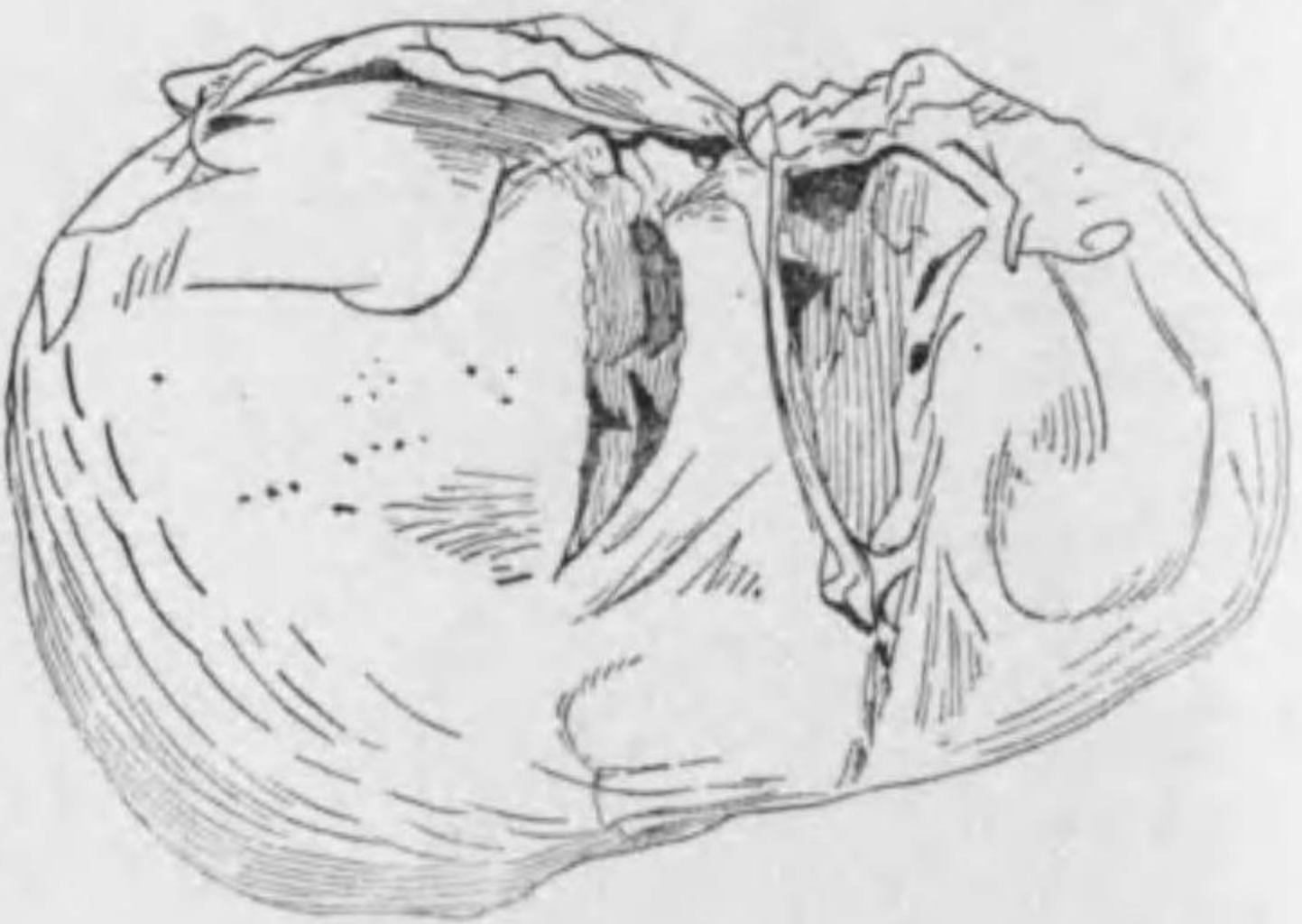
圖二十七第



破裂臟脾ル依ニ撃衝杖木

しよつく

圖三十七第



破裂臟肝

トハ自明ノ理ナリ。身體外表ニ甚シキ暴力ノ痕跡ナクシテ、内臓ノ破裂ヲ來シ、或ハしよつくヲ惹起シ死ニ至ルコトアルハ、先人ノ屢々經驗セル所ナリ。吾人ノ經驗セル一例ヲ舉グレバ、一女子下腹部ヲ蹴ラルタル後、一二町ノ道程ヲ歩ミテ我家ニ歸リ、間モナク人事不省ニ陥リ死亡セルモノアリ、剖檢ノ結果、下腹部ト皮膚ニハ何等ノ所見ナカリシモ、膀胱ハ破裂シ居レリト云フ、即チ本例ハ膀胱破裂ニ依リテ、尿ガ腹腔内ニ漏レ、しよつくヲ起シテ死亡セルモノト診定セラレタリ。

ホ、骨折、脱臼、全身ノ挫碎及離斷

Fracture, luxation, Crushing. Fracture, luxation, ecrasement, Knochenbruch, Luxation, Zermalmung.

骨折脱臼

大暴力ヲ有スル鈍器ノ作用、例ヘバ、轢過、大ナル機械ニ挟マレシ時、大爆發ノ際等ニ骨折、脱臼、全身ノ挫碎、或ハ離斷等來ルモノニシテ、是等ノ診斷及結果ハ、普通外科學ノ述ベル所ト同ジク、茲ニ特記スルノ必要ヲ認メズ。

丙、銳器損傷

Injury by sharp instruments. Lesion a l'aide d'instruments tranchants. Verletzung durch schneidende Werkzeuge

銳器損傷

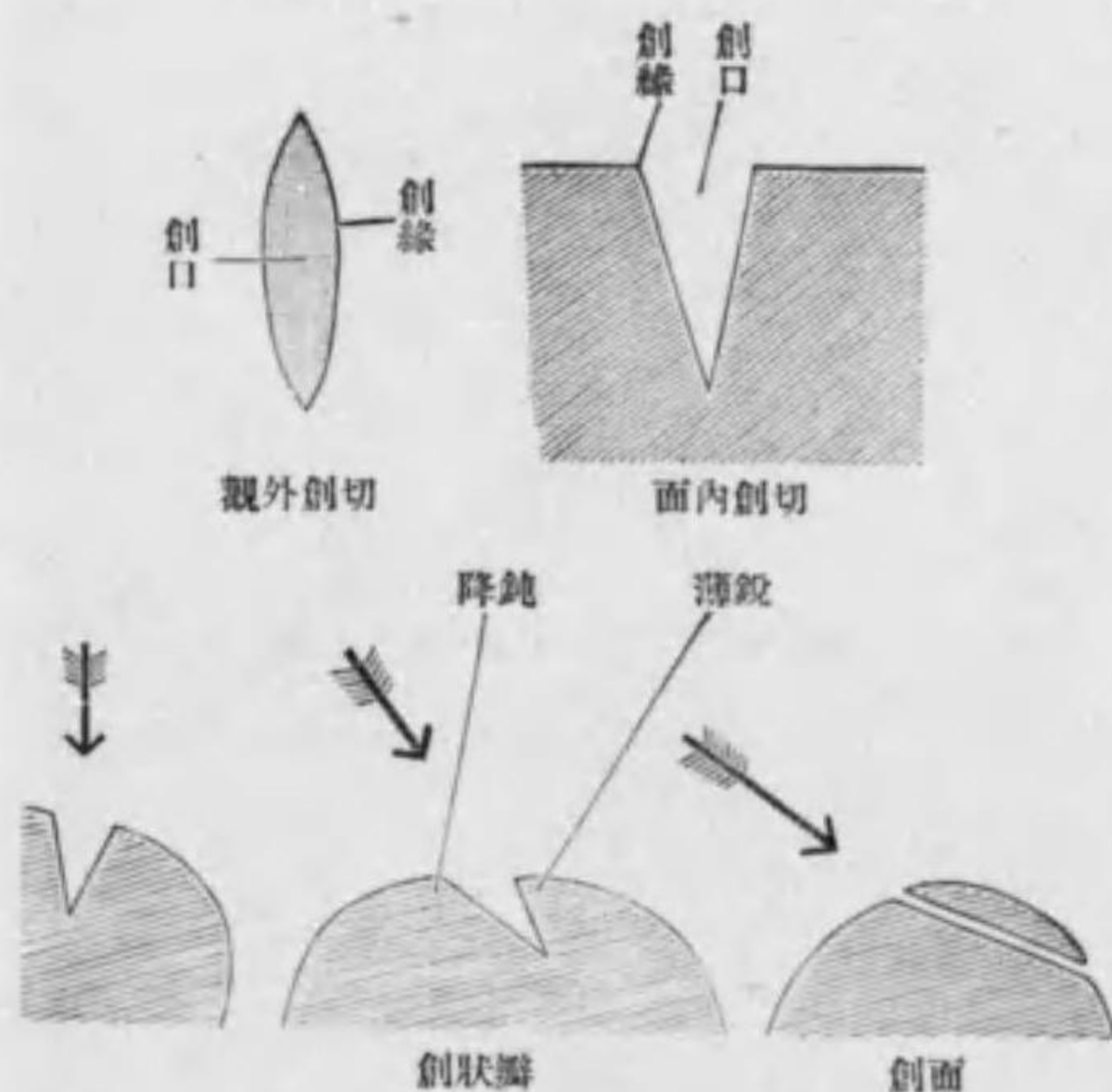
1. 切創

創

Incised wound, plaies causées par des instruments tranchants, Schnittwunde.

切創ハ有刃ノ銳器ヲ以テ、皮膚或ハ組織上ヲ牽引スルニ由リテ起ルモノナリ。切創ハ多ク紡錘狀ニシテ創縁直線狀ヲナシ、且整銳ニシテ創端ハ尖レリ、創面ノ一方ハ銳薄トナリ、他方ハ鈍降スルニ依リテ、兇器ノ作用シタル方向ヲ知り、又創中組織ノ橋架スルコトナシ。故ニ鈍器損傷トハ明ニ區別スルコトヲ得。兇器ガ皮膚ノ表面ニ斜ニ作用スル時ハ左圖ノ如ク瓣狀創ヲ作り、或ハ皮膚ノ一部ヲ切除スル時ハ所謂面創

第七十四圖



第七十五圖



創切

第七十六圖 皮膚ノ分裂方向

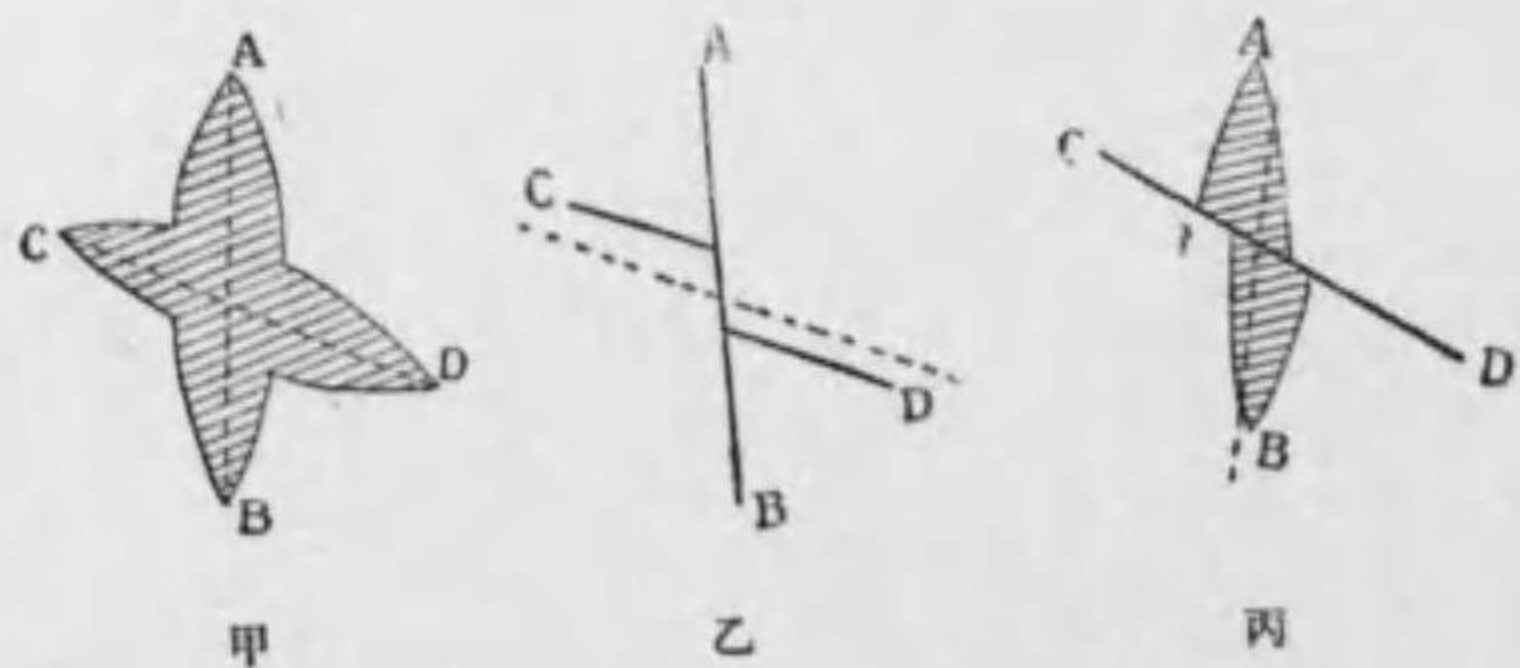


第七十八圖



切傷ト兇器トノ關係、斜ニ作用セル時

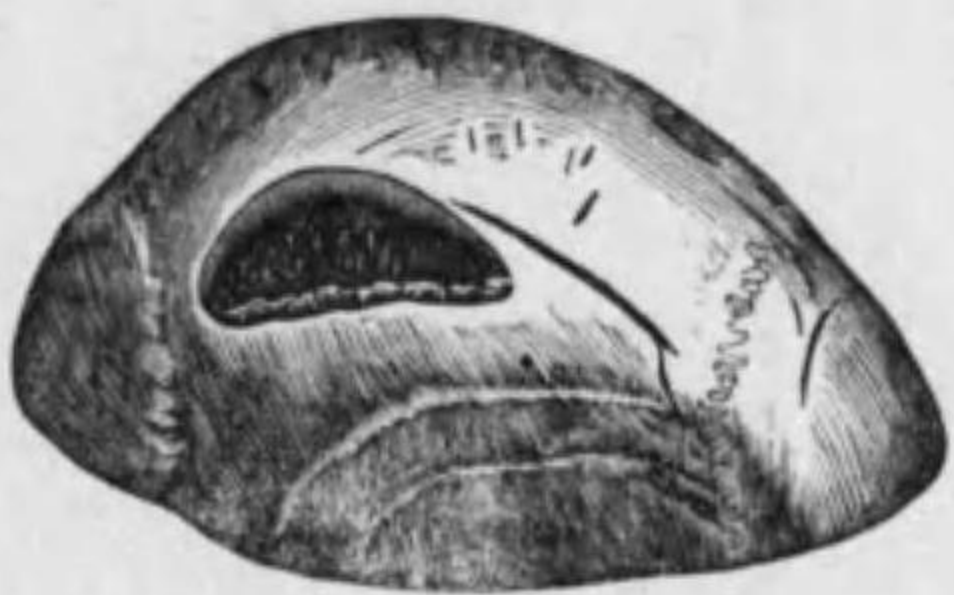
第七十七圖



註、交叉セル創傷アル時、ソノ各創縁ヲ接合シ見テ、無理ナキ接合線ヲ作ル方ノモノ、最初ニ附加セラレタルコトヲ知ル。即チ第七十七圖ニテ甲A Bノ左右創縁ヲ合スル時ハ乙ノ如クナリテ、接合ニ無理ナク、甲C Dノ上下縁ヲ合スル時ハ丙ノ如クナリテ無理ヲ生ズ、即チA BハC Dヨリ先キニ附加セラレタルモノナルヲ知ル。

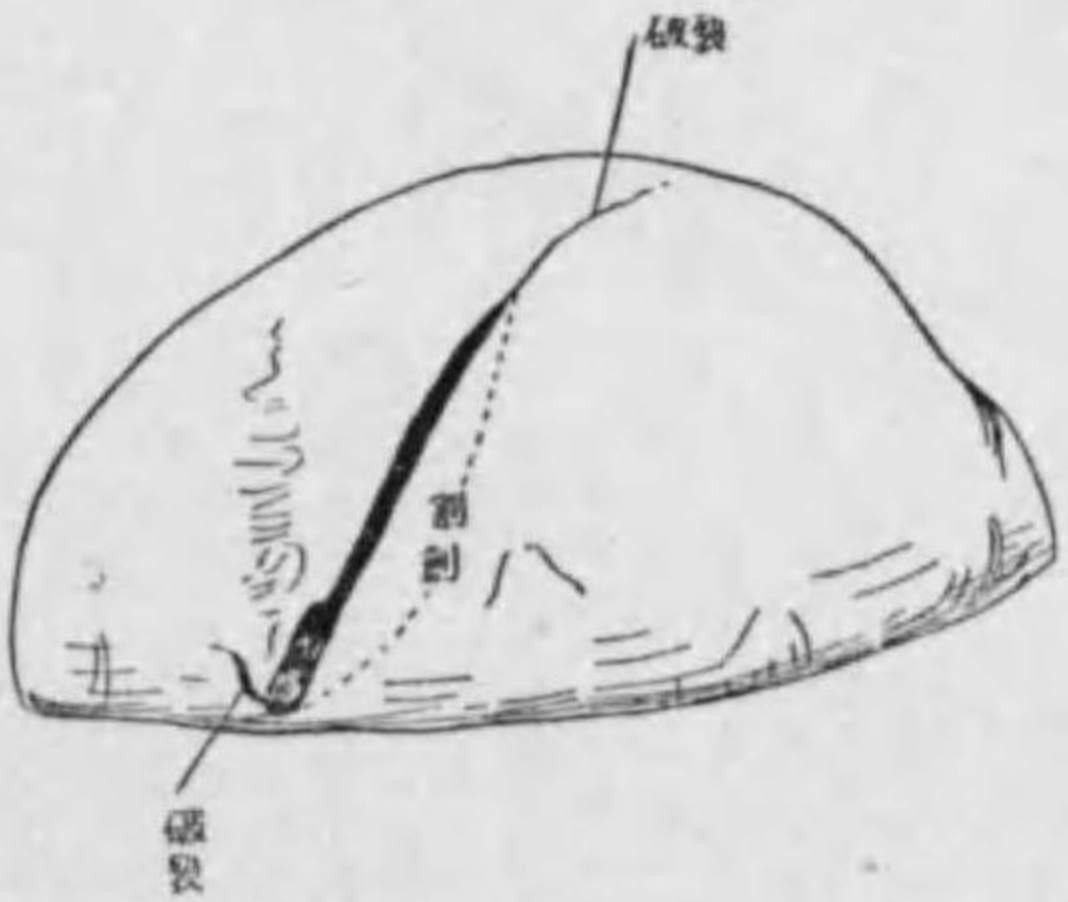
有刃ノ銳器ヲ以テ組織ヲ打撲スル時ニ起ルモノハ割創ニシテ、日本刀或ハ鈍等ニテ受ケタル損傷ハソノ

第七十九圖



頭蓋ノ割創ヲ以テ生ズルヲ示ス

第八十圖



頭骨ノ割創

適例ナリ。創傷ハ大ニシテ深ク、時トシテ骨ニ達シ、創縁ハ線狀、創面ハ滑ニシテ瓣狀創ヲナスコトアリ、創傷ハ兇器ノ銳度ト重サ及用ヒタル力ニ正比シ、組織ノ抵抗ニ反比ス、即チ日本刀ノ如キ銳ニシテ輕キモノニテ

ハ、正整ナル線狀創ヲ作り、鈍ノ如キ鈍ナル重キモノニテハ挫傷ノ切創ノ混合シタルモノヲ作り。即チ兇器ノ断面鈍角ニ近キ程、切ル力少クナリ、甚ダシク鈍トナレバ往々ニシテ創縁ニ近ク、更ニ狭キ痕痕アル挫創ニテ縁付ケラル、而シテ割創ヲ生ズルニ用ユル兇器ノ重心、ソノ先端ニ近クナレバナル程、打撃力強ク、日本刀ノ重心ハ有刃部ノ中間ニ在レバ、之ニテ生ズル割創ハ殆ンド切創ニ近ク、鈍、手斧、斧等トナルニ從ヒ、ソノ重心先端ニ近ク進ム故、皮膚ニ割創ヲ生ズルト共ニ、其近部ニ震動ヲ波及セシムル力強クレバ、頭骨ノ如キハ破裂シ易ク其危險率ハ益々増加スルモノナリ。

割創鑑定例

鑑定書

住 所 島 〇 〇 〇 郡 當 七 拾 年

鑑定實例

大正〇〇年〇月〇日〇〇地方裁判所豫審判事〇〇〇〇〇〇〇〇氏ハ〇〇〇〇殺人及殺人未遂被告事件ニ付被害者前記島〇〇〇郡ノ屍體ヲ檢シ、必要アレバ解剖検査ヲ行ヒテ

- 一、損傷ノ部位程度
二、損傷ノ原因
三、死亡ノ原因
四、兇行ニ付被害者ガ抵抗シタル痕跡アリヤ

解剖検査所見

- 第一、外表検査
一、男屍、年齢ニ比シ體格通常、營養稍佳、皮膚蒼白、屍冷。
二、頭髮ハ半バ白髮ヲ混ジ、發生稍疎、頭部ヨリ右顔面全體ニ飛散落テ附著セル小豆大乃至蠶豆大ノ乾燥血痕ヲ多數ニ認ム。

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 二、鈍器損傷

ナリ、但シ多少ノ分泌物アリ、眼瞼結膜及眼球結膜ハ共ニ蒼白、角膜ハ左方ヨリ僅カニ瞳孔部ニカ、リ不正形ノ白色浸潤アリテ幾分潰瘍狀ニ傾キ、左眼ニ比シ遠カニ程度ニシテ且ツ僅カニ瞳孔ニカ、リ居ルノミナラテ以テ勿論失明シ居ラザルモ殊ニ左方ヲ視ル場合ニ幾分視力障礙アリシ者ト認メラル、此浸潤部以外ノ角膜部ハ極メテ輕度ノ死後浸潤ヲ來ス、瞳孔ハ中等度ニ散大シ、眼壓ハ通常ナリ。
五、鼻腔内ニハ血液ヲ附著シ居ルノ他異常ヲ認メズ、鼻腔粘膜ハ一般ニ蒼白ナリ。
六、口唇ハ蒼白輕微紫紅色、齒牙ハ盡ク脱落シ居リテ齒齦ハ退縮狀ヲ呈ズ、口腔内ニハ何等異物ヲ認メズ、口腔粘膜ハ蒼白。
七、項頸部ハ其最下部ニ於テ銳利ニ殆ンド切斷サレ、僅カニ左側頸部ノ皮膚ト之レニ附隨セル僅カノ筋肉ヨリ辛クテ連絡ヲ保ツトスルニシテ、創縁ハ正銳ニシテ下面ハ附屬ニ示スガ如ク右前方ニ一、六釐ノ突起ヲ形成シ左乳嘴ノ斜右上方六、五釐ノ部ニ終ル、是等突起ハ梗形ニシテ先端ハ尖銳ナリ、創面ニハ皮膚、皮下組織、筋肉、骨髓及脊椎、氣管、食道、血管殊ニ左右頸動脈及頸靜脈、神經等其他項頸部ノ此部ニ存在スル諸組織ノ銳利完全ナル橫斷面ヲ露ス、下面ニ於テ第五及第六頸椎骨ハ約中央ヨリ切斷サレ其間楔形ノ骨片トシテ前方僅カノ軟組織ニヨリ附著ス、第五頸椎骨ノ切斷上端ハ創上面ニ露ハル、該創ハ銳利ナル有刃ノ兇器ニヨリ割創ニシテ所々凝血ヲ示シ、尙諸組織ノ短縮狀等生的反應ノ認ムベキモノアリ。(附圖略)
八、右胸部、右側背部、右大腿及右下肢外側ニモ散在性ニ飛散落テ附著セル乾燥血痕ヲ認ム。
九、屍體強直ハ各關節ニ既ニ高度ニ發生シ居リ、屍斑ハ殆ンド發生セズ。
十、肛門ハ僅カニ開クモ糞便ヲ漏サズ。
十一、以上ノ他全身ニ特別記載スベキ變化アルヲ認メズ。
第二、内景検査
頭部検査
十二、頭頂部ヲ經テ左右耳後乳嘴部ニ五リ頭頂部ノ皮膚ヲ横ニ一線

ニ切り、頭皮ヲ前後ニ割離スルニ頭皮、頭皮下及頭蓋骨外面ニ著變アルヲ認メズ。

十三、頭蓋骨ヲ後頭結節ニ一致スル水平線ニ沿ヒテ鋸斷シ頭蓋頂ヲ去リ頭腔ヲ開クニ、頭蓋頂内面及硬腦膜表面ニ異常アルヲ見ズ。

十四、硬腦膜及硬腦膜下ニ僅カノ血液ヲ容ル、ノ他異常ナシ。

十五、切骨線ニ沿ヒ硬腦膜ヲ切開シ硬腦膜ヲ去ルニ硬腦膜ハ頂部大脳裂裂溝部ニ於テ蜘蛛脚ト著スルモ特變トナスニ足ラズ硬腦膜及硬腦膜下ニ異常ナシ。

十六、延髄下部ニ於テ脊髄ヲ切斷シ頭腔諸臓器ヲ一團トシテ取出ス、諸臓器表面ノ血管ハ血液ヲ含ムモ著變セズ、蜘蛛脚及蜘蛛膜下ニ著變ヲ認メズ。

十七、基礎動脈及其分枝、内頸動脈上部及其分枝ハ何レモ高度ノ硬化變性ヲ示シ(動脈硬化症)、或ハ蟲様ニ彎曲シ、或ハ腦膜ト離レテ橋狀ヲ呈ス、但シ動脈瘤樣ニ膨脹セル部アルヲ認メズ。

十八、大脳表面ニ血管ノ過剰ヲ示スニ多少著變ヲ呈スル部アリ、此部ヲ切檢スルニ單ニ萎縮トナスノ他特變トナス能ハズシテ、恐ラク前項記載ノ動脈硬化ノ結果ニ基因スルモノト認ムルヲ適當トセン。

十九、腦腔諸臓器ノ諸部ハ精細ニ切檢セルモ特別記載ヲ要スベキ内眼ノ變化アルヲ認メズ、腦室内ニ於ケル腦液ハ幾分多量ノ滲アリシモ病的トナス程度ニハ非ズ。

二十、頭蓋底ニ骨折其他特變アルヲ認メズ。

頸胸部検査

二十一、頸部外傷、胸骨部上縁上正中ヨリ頸胸部ノ皮膚ヲ耻骨縫際上部迄一線ニ切開スルニ皮下脂肪層ノ發育ハ佳良ニシテ腹部最厚部ニ四層。

二十二、腹壁腹膜ヲ切り腹腔ヲ開クニ大網膜ハ脂肪ニ富ミ腸係ノ上半部ヲ捲ヒ、腸管ノ膨脹ハ著シカラズ。

二十三、腹腔内ニハ異常ノ液ヲ容レズ、腹膜ハ一般ニ滑澤鏡樣若白ナリ。

二十四、腸間膜及後腹腹膜ニ腫大其他ノ變化アルヲ認メズ、腹腔内各部ニ特別異常ナシ。

二十五、横膈膜ノ高さハ左第五肋骨ノ下縁、右第五肋骨ニ一致ス。

二十六、胸皮ヲ胸筋ト共ニ割離シ、胸骨ヲ助軟骨ト共ニ切除シ胸腔ヲ開ク、胸皮下諸組織、胸骨下及縱隔室内ニ變化アルヲ認メズ。

二十七、左右兩胸腔内ニハ異常ノ液ヲ容レズ、左右兩肺ハ共ニ其上葉ニ於テ胸壁ト粘着性著シナシ(肋膜炎著)、下葉ハ共ニ胸壁ヨリ游離セリ、癒着部以外ノ肋膜ハ一般ニ滑澤鏡樣若白ナリ。

胸腔臓器

二十八、胸腔ニ全ク脂肪織ニ化シ消滅シテ形跡ヲ止メズ。

二十九、心囊ニ表面ニ異常ナク、之レヲ切開スルニ内ニ透明心液液通常量ヲ容ル、内面著白滑澤鏡樣ナリ。

三十、心臓ニ大サ自己手拳ノ約一倍半、脂肪ノ沈著豐饒、右心房部ノ前面及後面ニ各一個不正形指頭大ノ腫斑アリ、心臓動脈ハ幾分彎曲ノ度強キモ硬化ハ著明ナラズ、心尖ハ左室ヨリナル、切開スルニ右心房及右心室内ニハ暗赤色流動性血液中等量以下ヲ容レ、左心房及左心室内ニモ同量血液少許ヲ容ル、心筋ハ左室幾分肥厚シ、(心臓肥厚)厚サ一八、且ツ褐色調著明ナリ(心筋ノ肥厚アリシガ又褐色萎縮ヲ來セシモノト推測スル)、左心室ハ幾分擴張性ナリ、左室壁ハ通常、心内腔、諸臓器裝置及大動脈起始部ハ健全。

三十一、左肺ニ表面ニ著變ナシ、上葉ハ結核織ノ肥厚アリ上下兩葉ノ接面ニ結核織ニ著シク膨脹シ、表面著シク血腫ニ乏シク之レヲ指壓スルニ血液ノ漏出極メテ僅カナリ(肺血腫)、微細氣泡ニ混ジ肺氣腫性大氣泡ヲ壓出ス、(肺氣腫)、何等結核其他ノ病變ヲ認メズ、氣管枝粘着若白、氣管枝腫大ニ異常ヲ認メズ。

三十二、右肺ニ表面ニ著變ナシ、左肺ト同様肺氣腫織ニ膨脹シ、上葉及中葉ハ殆ンド全部可ナリ高度ノ結核織肥厚アリテ各葉ノ接面ニ著シク結核織著シク膨脹シ、表面ノ所見左肺ニ一致スルモ左肺ニ比シ一層乏血性ニシテ之レヲ壓出スルモ全ク血液ノ漏出ナシト云フモノナルガ如キ状態ナリ、氣管枝ニ變化ナク、氣管枝腫大ニ一個葉大ノ者アリ之レヲ切開スルニ既ニ一部石灰化セル結核實ヲ認ム(氣管枝腫大)。

腹部臓器

三十三、脾臓ニ著シク大ニシテ長サ一三・五幅一〇・五厚サ三・四、被膜肥厚シ、表面破裂ヲ生ズ、質軟、暗赤褐色、割面血腫通常、脾臓ノ増殖アリ(脾腫)、濾胞及脾材モ著明ナリ。

口腔及咽部臓器

四十六、舌及扁桃腺ニ舌ハ白色ノ苔ヲ衣シ、乳頭其他ニ異常ナシ、扁桃腺モ通常。

四十七、咽頭及食道ニ特別變化アルヲ認メズ唯食道ハ第七項記載ノ割切ヨリ約中央部ニ於テ切斷サレタルノミ。

四十八、喉頭及氣管ニ氣管ハ項部割切ノタメ環狀軟骨下ニ於テ切斷サレ、喉頭及氣管粘膜ニ血液ヲ附着シ居ルノ他特變ナシ。

以上記載セル所見ノ他全身ニ内景検査上内眼ノ特別記載ヲ要スベキ變狀アルヲ認メズ。

解剖的診斷

一、項部ニ於ケル割切(第七項)

二、死斑發生不全(第九項)

三、暗赤色流動性血液(第三十項)

四、肺ノ乏血(第三十一及三十二項)

五、高度肺動脈硬化症(第十七項)

六、萎縮性肝硬脈症(第四十一項)

七、脾腫(第三十三項)

八、萎縮腎(第三十四項)

九、輕度腹部大動脈硬化症(第四十二項)

十、心臟肥大(第三十項)

十一、浸潤性角膜炎(第三及四項)

十二、肋膜炎著(第二十七項)

十三、氣管枝腫大(第三十二項)

十四、肺氣腫(第三十一項)

解剖終了午後十時二十分

(顯微鏡的検査所見ハ解剖的診斷ヲ確實ニセルニ過ギザルヲ以テ此處ニ詳記スルヲ略ス)

說明

一、損傷ハ項部ヲ殆ンド切斷セル割切ニシテ銳利ナル有及ノ兇器ニ依リテ來リシ創ナリ、而シテ創縁ニ突起ヲ有シ且脊椎骨ノ一部ハ楔形ニ切ラレ骨片トナリテ附着シ居ル點ヨリ觀レバ該創ハ兇器ノ單ニ一回ノ作用ノ下ニ形成サレシ創ニアラザルコト確實ニシテ少ナクモ二回ハ作用セルモノト判定サル、二回以上作用シ居ラズトハ斷

三十四、左腎ニ長サ一・二〇幅六・四厚サ三・八、脂肪層稍厚シ、富ミ、纖維膜ハ全部著シ、之レヲ割離スルニ腎表面ハ細顆粒狀ヲ呈シ粗顆粒トナル、質堅軟、割面血腫通常、皮質ハ所々微小且且潤滑、皮質兩質ノ境界ハ鮮明ナラズ、髓質及髓體モ短縮セルガ如ク、腎盂廣ク且ツ脂肪ニ富ム、腎盂内面ニ著變ナシ(萎縮腎)。

三十五、右腎ニ長サ一・二〇幅六・四厚サ三・八、諸所見全ク左腎ニ一致ス。

三十六、副腎及輸尿管ニ左右兩副腎及兩輸尿管ニ特別變化アルヲ認メズ。

三十七、胃ニ表面通常、之レヲ幽門部ヨリ大彎ニ沿ヒ切開スルニ内ニ半消化セル米粒稍多量ヲ容レ、粘膜ハ若白異常ヲ認メズ。

三十八、十二指腸ニ表面ニ異常ナク幽門部ヨリ之ヲ切開スルニ内ニ灰白色潤滑粘物通常量ヲ容レ粘膜健全、胆汁ノ流通モ佳良ナリ。

三十九、小腸、盲腸及大腸ニ表面通常、血管ノ適度ニ血液ヲ含ム、之レヲ連續的ニ切開スルニ内容ニ異常ヲ認メズ、粘膜モ一般健全ナリ、蟲樣突起モ健全。

四十、膀胱ニ表面及質通常、割面ニモ亦變化アルヲ認メズ。

四十一、肝臓ニ稍小ニシテ長サ二四・〇幅一三・〇厚サ六・〇、割面ニ細顆粒狀ヲ呈シ、質堅軟、割面稍血腫ニ乏シク、小葉間組織ノ陷凹ト小葉ノ隆起部ヲ認ム、黃疸ハ認メズ(萎縮性若クハレンネック氏肝硬脈症)。

四十二、膽嚢ニ表面通常、割面ニ亦膨脹シ、之レヲ切開スルニ内ニ黃褐色稍稠澤ナル胆汁中等量ヲ容レ、粘膜ハ健全。

四十三、大動脈ニ表面幾分膨大ノ感アルモ動脈瘤トナス程度ニ非ズ、之レヲ切開スルニ内ニ比較的多量ノ暗赤色流動性血液ニ極僅カノ凝血ヲ混ゼルモノヲ容レ、内臓ハ腹部ニ二三莖豆大程度ノ肥厚膨隆アリ、弾力ハ弱シ(輕度腹部大動脈硬化症)。

骨盤臓器

四十四、膀胱ニ表面通常、之レヲ切開スルニ僅カノ白色絮狀物ヲ混ゼル透明尿中等量ヲ容レ、粘膜ハ異常ナシ。

四十五、直腸ニ表面通常、之レヲ切開スルニ稍軟便ヲ滿タシ、粘膜ニ特變ナシ。

言シ得ザルモ令項部ヨリ右側頭部ニカケテ切リ付ケシ兎又ハ脊椎骨ヲ切リ右前方ノ創縁突起部ニ達シテ終リ、更ニ第二回目ノ作用ガ脊椎骨ノ今切リシ部ヨリ僅カニ活キテ更ニ切下ゲ其先ノ流レテ胸骨上縁ヨリ左前胸部ニ互ル創縁突起部ヲ形成セルモノトセバ、解剖検査所見第七項参照ノ合理的ニシテ、兎器ガ斯ノ如クニ作用セバ二回ノ作用ニヨリテ該創ハ充分形成セシメ得ル可能性アル創ナリ、即チ該創ハ兎器ガ二回以上作用セシモノニ非ズトハ斷言シ得ザルモノトシテ、作用ニテ充分形成セシメ得ベキ創ニシテ、一回ノ作用ニテハ形成セシメ得ザル創ナリトス、尙該創ハ自傷ニ非ザルコト確實ニシテ殊ニ兎器ガ項部ヨリ右側頭部ニカケテ作用セルモノナルコト確實ニシテ殊レ、今之レヲ兎器ガ項部ヨリ右側頭部ニカケテ作用セルガ爲メ起リシ創ナリトセバ、其創加害者ハ被害者ノ右方ニアリテ切付ケシモノト認ムルヲ適當トスルガ如キ性狀ヲ有ス、恐ラク被害者ハ頭部ヲ前ニ出シ若クハ前ニ垂レ居リシ際加害者ハ右側ヨリ兎器ハ上ヨリ下ノ方向ニ活キテ起リシカ、然ラザレバ初メノ一太刀ニヨリ首ヲ垂レタル處ヲ更ニ作用セシメテ起リシモノナラシ、而シテ此際被害者ハ臥位ニアリシ者トシテハ不適當ニシテ立位然ラザレバ座位ニアリシモノトナスヲ適當トス。今余ノ推測ノ如ク二回兎器ガ作用セルモノトシテモ其最初ノ作用ニヨリ既ニ脊椎及生存上最モ必要ナル延髄ニ血液ヲ供給スル脊椎動脈ヲ切斷シ居リテ其レノミニテモ致死の意義充分ナルニ拘ラズ該創々面ニ於ケル生的反應ハ全般ニ現ハレ居リ大差ナキ點ヨリ判定スレバ最初ノ作用後第二ノ作用ハ殆ンド隔斷ナク同時のニ活キシモノナルコトヲ窺ハスルニ足ル。

二、項部ノ創縁ヲ起因シタル兎器ニ關シテハ、創縁ノ正銳ナル點、側面ノ滑澤ナル點、殊ニ脊椎骨ヲ銳利ニ切斷シ居ル點等ヨリ觀テ、最モ銳利ナル兎器ナルヲ認ムル可カラズ、而シテ僅カニ二回位ノ作用ニヨリ斯ノ如ク項部ヲ殆ンド切斷スル迄ニ至リシ點、脊椎骨ノ體部ヲ見事切斷シ居ル點等推測セバ相當ナル且相當重量アル兎器ニシテ、相當大ナル力ヲ以テ切割セル者ト察セラル、從ツテ相當大ナル最モ銳利ナル日本刀ノ如キモノヲ最モ適當ト認ム。

本創ノ如キ創傷ニ對シ最モ適當ナル兎器ナリト察セラル。
三、死亡ノ原因ニ關シテハ、本屍體ハ解剖検査上心臓及血管内血液ノ暗赤色流動性ナル點ヨリ急性死ト判定サレ、而シテ他ニ急性死ヲ來セシ原因ノ認ムベキモノヲ發見シ得ザルヲ以テ、此急性死ヲ來セシ原因ハ項部ノ創ニ歸シシメザルベカラザル處ナリ、今此創創ニ就キテ觀ルニ該創ハ切斷セル諸組織ノ斷端ノ短縮シ居ル點、創面及創内ニ乾血及凝血ヲ含ミ且殊ニ肺ハ高度ノ乏血ヲ來シ居リ、死斑モ殆ンド現ハレ居ラズ心臓ノ含血量モ少量ナル點等ヨリ推シテ相當多量ノ出血アリシコト確實ナル點等即チ該創ノ諸生的反應ニ徴シテ該創ガ死後ニ受ケシ創ニ非ザルコト確實ナリ、而シテ該創ハ其骨髓及生存上最モ必要ナル延髄ニ血液ヲ供給スベキ脊椎動脈ヲ切斷シ居ル點ヨリ認ムルモ、其左右側頭部ノ如キ大且生存上重要ナル血管ヲ切斷シ居ル點ヨリ認ムルモ、亦迷走神經、交感神經等生存上寸時モ缺クベカラザル肺及心臓其他ノ運動ヲ支配シ居ル處ノ諸神經ガ切斷ナリテモ充分即死的意義ヲ有スル處ナリ、仍テ此際該創ヲ致命傷トナスニ他ヲ顧慮スルノ餘裕全然ナク、直チニ斷定シ得ル處トス、但シ該創ヲ致命傷トスルモ愈々死ヲ決定セル原因ハ果シテ何レニ歸着セシムベキカヲ決定スルハ此際困難ナル問題ナリ、前記ノ如ク即死的意義アルモノノ重複シ居リ且ツ是等ガ殆ンド同時のニ切斷ナシ居ルモノナレバ此際其何レカ一ト決定スルコトハ不可能ニシテ、サリトテ其一ニテ既ニ即死的意義アルモノヲ總合的ノモノトナシモ學問上適當ナリ是等ノモノ、切斷ハ何レモ即死的意義アリトハ謂ヘ若シ別々ナリセバ其切斷後愈々死ヲ決定スル迄ニハ多少ノ時間の差異アルモノト推測サル、モ、今其差ヲ識ルベキ根據ナク殊ニ之レガ合セル場合ニ於テハ一層複雜ニシテ到底之レヲ識ルコト不可能ナルモノアリ、仍テ學問上斯ル場合ニ於テハ各原因ガ競合ヒテ其何レカ早ク決定セルモノヲ(勿論同時のニ合スルコトモアリ得ベシ)死因トナスヲ適當ト認ムルモ、之レヲ識ル能ハザルヲ以テ法醫學上獨逸等ニ於テハ兎器ノ死因(此譯語稍不適當ノ感アルモ)トモ譯スガ如キ術語ヲ用キ居ル處ナリ、予ハ此際兎器ノ死因ト謂フガ如キ特別ノ譯ヲ用ユルハ專門家以外ノ人ノ了解ニ若シムヲ懼レ且混雜ヲ避ケテ尙本件ニ於テハ之レガ重大ナル關係ヲ及ボスモノト認メラザルヲ以テ

本件ノ死因ハ項部創ニヨリ脊椎、脊椎動脈、迷走神經、交感神經及頸動脈等項部ニ於ケル生存上重要ナル神經及血管ノ盡ク切斷セラレタル結果ナリトナシ置ク者ナリ。
本屍體ニ就テハ解剖的診斷ニ列舉セルガ如ク多數ノ病的變化ヲ有シ居リ此中、腦動脈硬化症、大動脈硬化症、萎縮腎、肺氣腫ノ如キハ老人性變化乃至酒精飲用ノ結果來リシ變化ト認ムルヲ適當トシ心臓肥大ハ是等ノ疾病ノ代價的變化ト認メラレ、脾腫ト萎縮性肝硬變症ハ相關連セル疾病ナリ、以上ハ本屍體ニ發見セル病變ノ病變ナルガ是等ノ病變ハ尙直チニ死ヲ意味スル變化ニ非ズ腦動脈硬化症ハ最モ高度ナルヲ以テ時ニ腦溢血等ヲ來シテ死ニ到ル恐レアルモ腦溢血ノ變化ヲ認メズ、其他假令此際相當死ヲ意味スルガ如キ相當高度ノ變化アリトスルモ項部ノ創ガ生前ニ起リシコト確實ナレバ死因ニ關シテハ他ヲ顧ルノ餘裕全クナキモノナリ、助脈管及氣管枝腺結核ノ如キモノハ特別何等障礙ヲ與ヘ得ベキ病變ニ非ズ、此處ニ唯參考トナリ得ルヤモ知レザルヲ以テ書加フベキハ本人ハ生前ニ於テ浸潤性角膜炎ノ爲メ左眼ハ失明シ居リ右眼モ多少ノ視力障礙アリシヤモ知レズ、且腦動脈硬化症及大動脈萎縮部ヲモ生ジ居リ尙萎縮腎モ合併シ居リシ者ナレバ多少乃至相當高度ナル神經障礙ヲ來シ居リシ者トナスモ不適當ニハ非ザルナリ。

ハ、刺

創

Stab, plaies causées par l'instruments piquants, Stichverletzungen.

刺創ハ細長キ有尖ノ兎器ヲ組織ニ刺入スル時ニ生ズルモノニシテ、之ヲ刺出入口ト創管トニ分ツ。刺出入口ハ皮膚ノ分裂方向ト萎縮度トニ關シ種々ノ形狀ヲ作り、兎器ノ斷面ト一致スルコト少シ。例ヘバ圓形ノ斷面ヲ有スル兎器ニテハ殆ンド線狀、三角形ノ斷面ヲ有スルモノニテハ三放線星形、四角形ノモノニテハ四放線星形、菱形ノモノニテハ稍太キ創縁ニ二三ノ凹凸アル線狀、多角形ノモノニテハハンノ角數ニ相當スル凹凸アル線狀、或ハ甚ダ多數ノ多角形ノモノニハ線狀ノ刺入口ヲ殘ス。小刀日本刀ニテ刺入セシ時ハ刀ヲ刺入スル時ト、之ヲ引き出ス時ト、刀ノ方向變化スル爲メ、分枝シタル刺入口ヲ作り、故ニソノ分枝

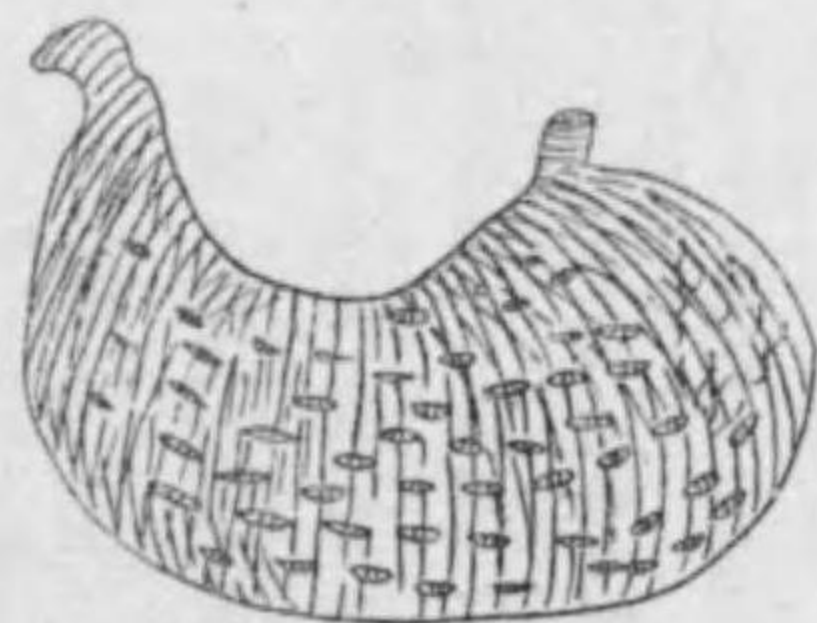
四、兎器ニ付被害者ガ抵抗シタル痕跡アリキ否ヤノ問題ニ關シテハ本屍體ニ就キテハ項部ノ創ニシテ殆ンド項部ヲ切斷セリ。抗ヲ立證スベキ何等痕跡ナシ、從ツテ本屍體ノ身體上ニハ何等抵抗シタル痕跡ト認ムベキ點ナキモノナリ。
鑑定
以上解剖所見及說明ニ記載セル理由ニ基キ鑑定スルコト左ノ如シ。
一、損傷ハ項部ニ於ケル創ニシテ殆ンド項部ヲ切斷セリ。
二、損傷ヲ起因シタル兎器ハ最モ銳利ナル又ハ有シ相當大且相當重量アル兎器ニシテ、最モ銳利ナル相當大ナル日本刀ノ如キハ此損傷ニ對シ最モ適當ナル兎器ナリ。
三、項部ノ創創ハ致命傷ニシテ、死因ハ此創創ニヨリ項部ニ於ケル生存上重要ナル神經及血管ノ盡ク切斷セラレタル結果ナリ。
四、本人ノ身體ニハ特別抵抗ノ跡ト認ムベキ何等痕跡ナシ。
本鑑定ハ大正〇〇年〇月〇日ヨリ
同年同月〇〇日ノ間ニ行フ
住 所 鑑定人 中田 篤 郎 團
大正〇〇年〇月〇日

圖一十八第



口入刺ト面斷ノ器刺

圖二十八第



口創刺ノ胃ルヨニ蝕圓

圖四十八第

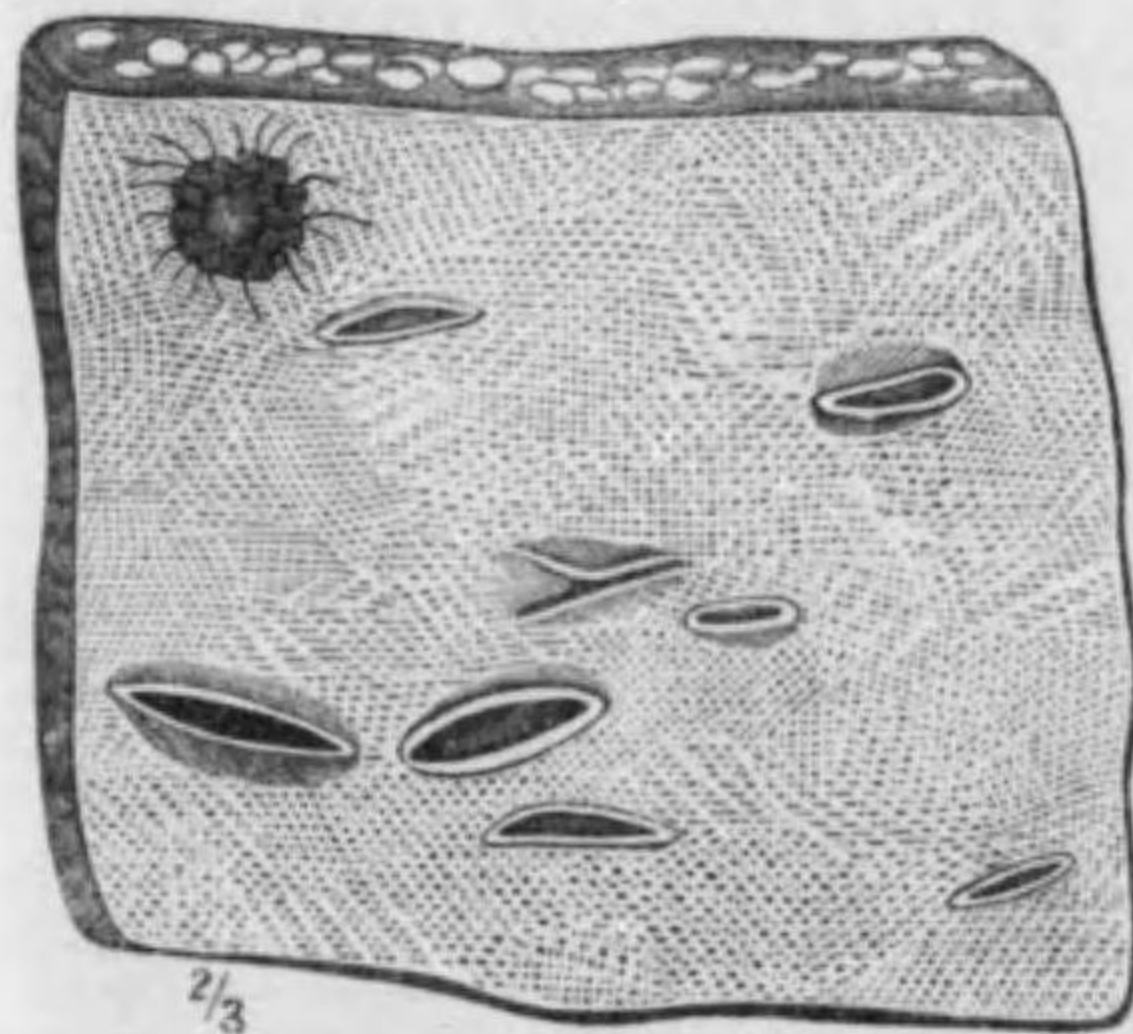


刺生器種八
創ジク性面
タ以ノ形
ルテ刺銳

其各箇
ニ一致裂皮箇
ルニ一致裂皮箇
ト移ノス性膚ハ

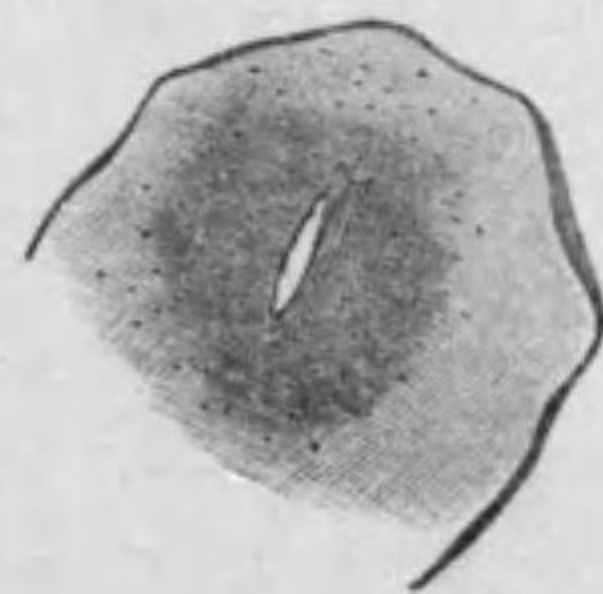
行線ルニ已
スルセ裂單一分ニ
スノンニ一一致裂皮箇
狀ト移ノス性膚ハ

圖三十八第



2/3

圖五十八第



ニ刃刀小ル有ヲ背刀ノ様刃
(大然自)口刺ルダシ生テ由

方向ヲ以テ、刀ノ右及ノ方ナリシト診定スルコトヲ得。刀ヲ刺入シ同時ニ牽引スル時ハ、刺切創ヲ生ズ、刺創ハ往々ニシテ體腔ニ達シ、骨或ハ内臓ヲ傷クルコトアリ、移動性ノ内臓ニ有リテハ、刺創ニヨリテ意外ノ位置ニアルモノヲ、傷害セシ例少ナカラズ。又胃ノ如キハ一刺ニヨリテ十字形ノ刺入口ヲ作ルコトアリ注意スベシ(第八十二圖參照)。予ハらんぶニ倒レカ、リ、ソノほヤノ破片ニヨリ頸動脈ヲ傷ケ出血死ニ至リシ一例ヲ實見セリ。

一般ニ銳器損傷ハ、多クハ第一期癒合ニテ治癒スルモノナレドモ、割創ノ如ク組織ヲ挫滅スル力強キ時ハソノ豫後不良ナリ。又刺創ノ如ク内臓ヲ傷ケ或ハ切創ニテ大血管ヲ破リタル時ノ如キハ往々失血ニ依リテ死ニ至ルモノナリ。

鑑定實例

鑑定書 市、區、町、目、番地 四〇〇〇 龜 〇

刺創鑑定實例

明治〇年〇月〇日〇〇地方裁判所判事〇〇〇〇ハ〇〇〇〇殺人被告事件ニ付被害者龜〇ノ死體ヲ解剖シテ

一、創傷ノ部位

二、兇器ノ種類

三、死因

ヲ鑑定スベキコトヲ同鑑ニ於テ予ニ命ゼラレタリ依テ同日午前十時四十分乃至午後零時廿分〇〇市〇〇區〇〇町〇〇〇方ニ於テ同判事及裁判所書記〇〇〇立會ノ上之ヲ剖檢セルニソノ所見左ノ如シ

甲 解剖検査記録

一、男屍、體格中等榮養可其、皮色ハ右前胸部淡紫赤色ニシテ其他

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 二、鈍器損傷

ニハ殆ンド變色部ヲ見ズ死體強直ハ咀嚼筋及四肢ノ諸關節ニ強ク存ス

二、頭皮ニ損傷ナク顔面右半ハ暗紫赤色ニシテ左半ハ蒼白ナリ左額骨突起部ニハ暗褐色ノ乾固部アリ不正三角形ニシテ尖端ハ下方ニ向ヒ前脚ノ長サ四・〇釐後脚ノ長四・五釐ヲ算ス此部ノ表皮ハ割脫シテ乾燥セル眞皮ヲ露出シ其周縁不正凹凸ニシテ幅兩脚共〇・五乃至一・四釐ナリ切開スルニ鷄卵大ノ出血アリ其他顔面ニハ損傷ナク眼閉チ結膜暗赤色ニシテ小粟粒大ノ顆粒數多アリ角膜斑紋狀ニ潤濕シ瞳孔ノ大サ左右同大ナリ鼻中ニハ汚灰色ノ粘稠物少許アリ口唇粘膜ハ暗紫色ヲ帶ビ口腔齒列前ニ異物ナシ

三、頸部ニ損傷異常ナク右胸鎖關節ノ上方ニ粟粒大ノ表皮割脫二個上下ニ併列シ淡褐色ヲ呈シ此部ヲ切開スルニ輕度ノ皮下出血アリ胸腹部ニハ損傷ナク上胸部扁平、腹部ハ稍膨滿緊張ス外陰部ニモ損傷ナク尿道口附近ニハ粘液樣物乾著ス

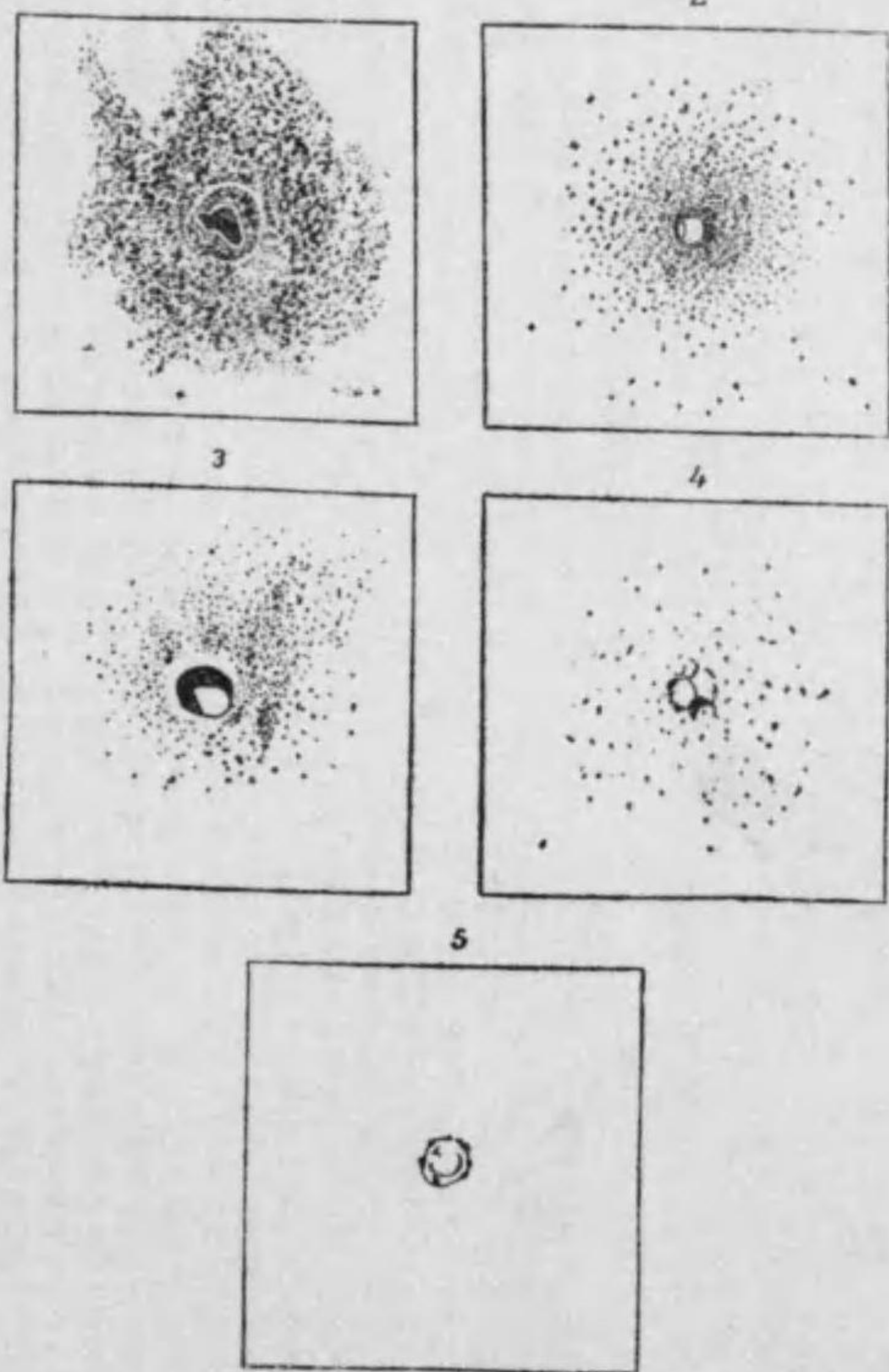
四、脊面ニ於テハ左肩胛骨下隅ヨリ下方一・〇釐ノ所ニ二・三釐長

作ル。而シテソガ時トシテ、全ク切創ト同様ノ外見ヲ見スルコトアレバ、注意シテ検査スベシ。

一般ニ云ヘバ彈丸ハ皮膚内ニ突入スルモノニシテ、ソノ射入口ノ形態ハ發火サレタル距離ノ遠近、火藥ノ性質、及銃器ノ種類ニ依リテ差アリ。近距離發射ノ際ハ射入口ハ圓形、不正形或ハ星形ニシテ、其周縁

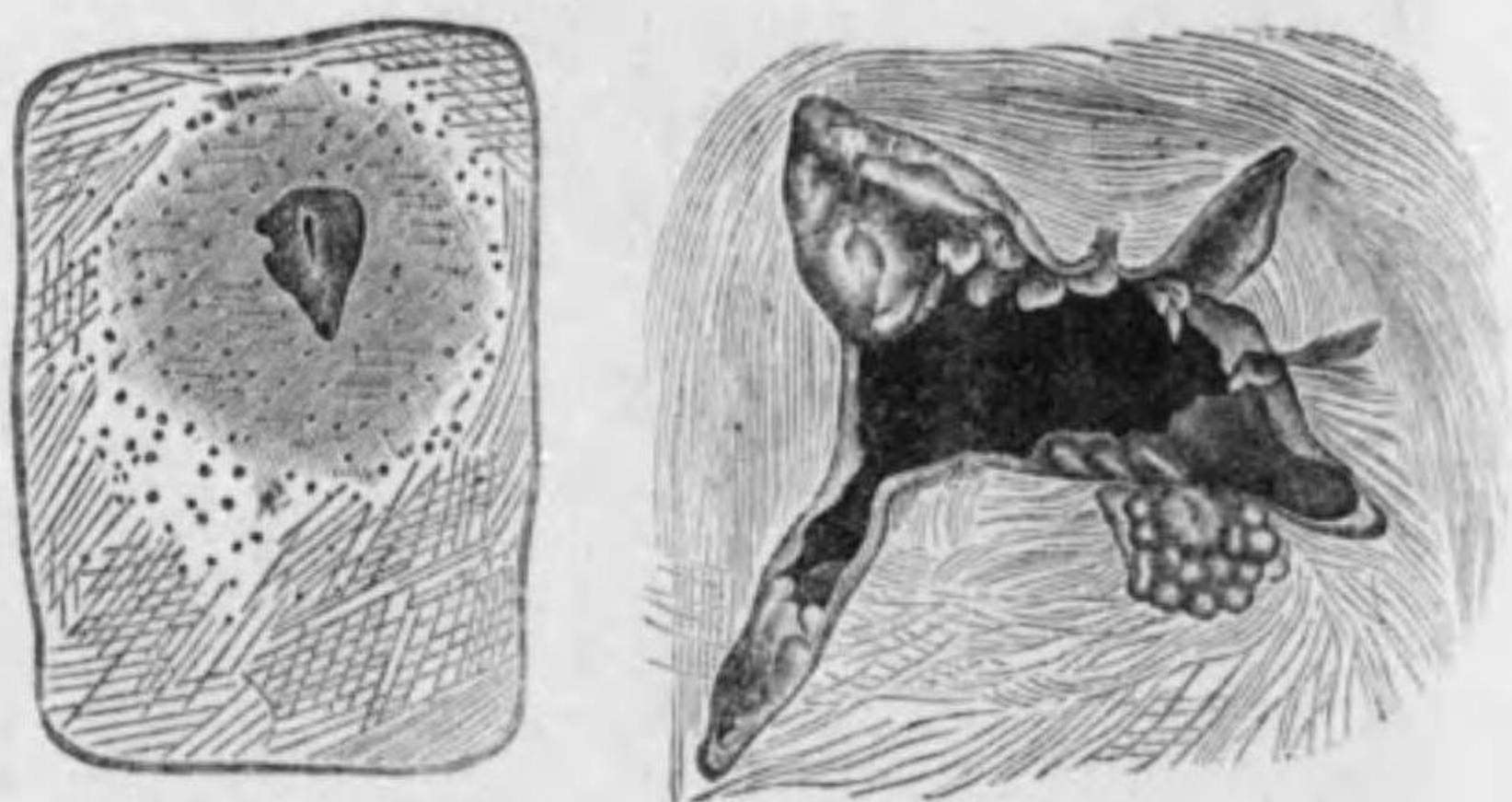
圖 六 十 八 第

口入射ルタジ生テニるとすびノ徑口耗八
ス示ヲルレナク遠距離ヒ從ニル至ニ方下



ハ極メテ狭キ赤褐色ノ挫傷又ハ火傷ニテ縁付ケラレ多クハ銃丸ヨリ餘程大ナリ、ソノ周圍ニハ黑色、淡黄色乃至褐色灰色ノ烟暈ヲ存シ、内ニ粉粒ノ黑點數多散在ス此烟暈ノ濃淡廣サ等ニヨリテ、發射サレタル火

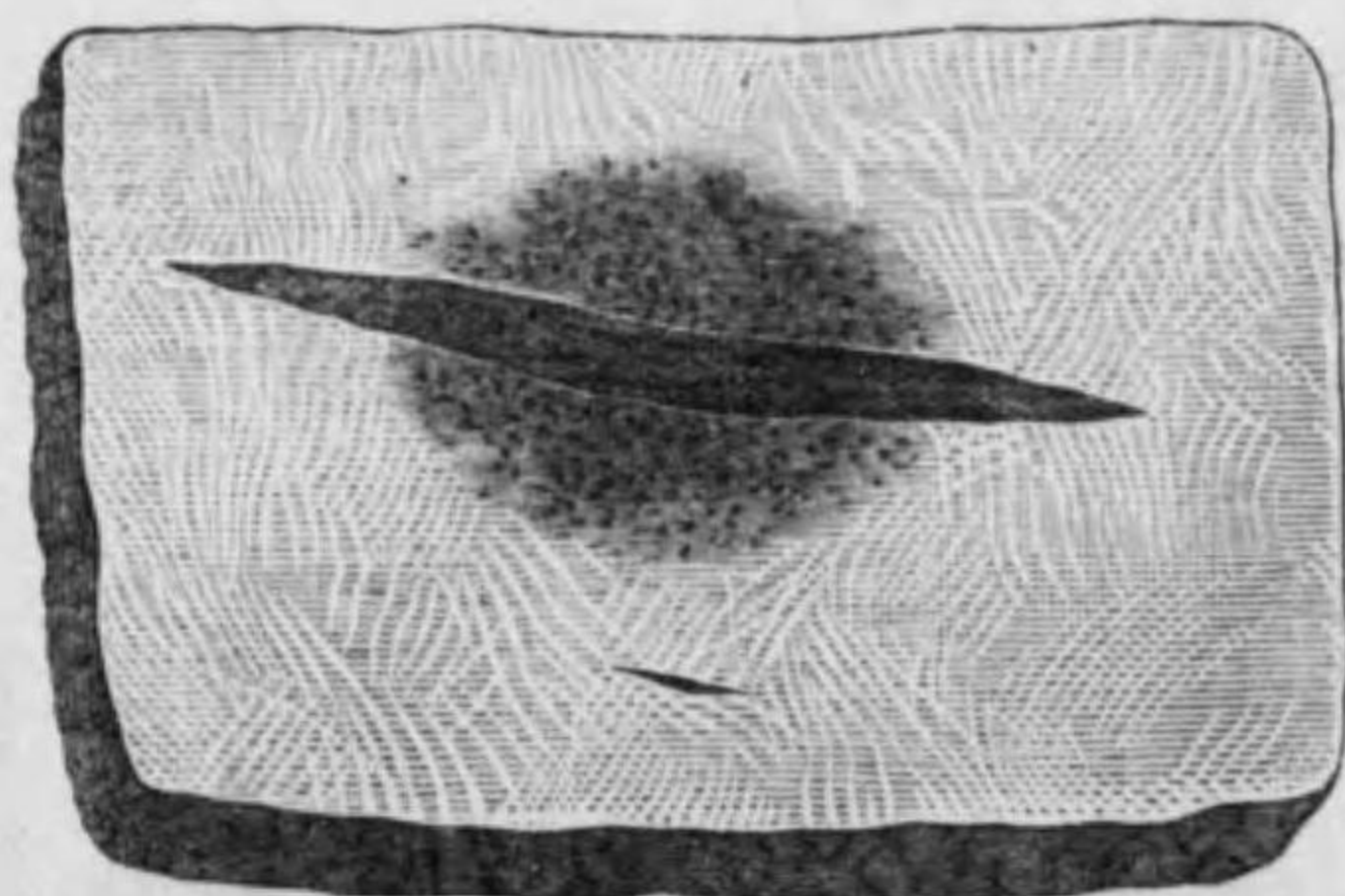
圖 七 十 八 第



拳銃射撃
(自殺)、星
芒狀ニ破裂
セル射入口
(三分二大)

拳銃射撃
(自殺)、星
芒狀ニ破裂
セル射入口
(三分二大)

圖 八 十 八 第



小短銃ヲ以テ心臟
ヲ射撃セル自殺者
ニ於ケル破裂狀銃
創、其下ニハ其後
圓錐形刺刀ヲ以テ
生ジタル破裂狀開
口アリテ之ト射撃
ニ由テ生起セル創
傷トノ並行ノ徑路
ハ此銃創ニ於テモ
皮膚ノ破開ガ其局
處的分裂方向ニ於
テ成リシコトヲ證
明スルモノナリ
(自然大)

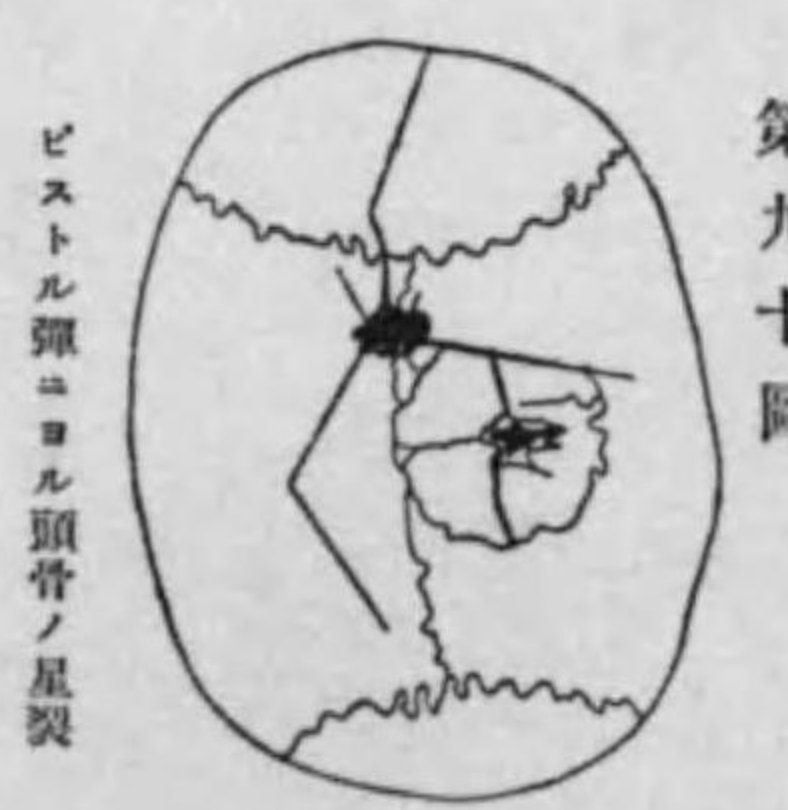
藥ノ種類乃至距離等ヲ知ルコトヲ得ルコトアリ。而シテ射入口ノ周圍ヲ注意シテ檢スレバ、表皮剝脫、挫傷、陷凹、火傷等ノ混在スルコトアリ。又射入口ノ周圍、或ハソノ中ニ黑焦グノ紙片、衣服片ヲ發見スルコトアリ。無烟火藥ヲ填充シテ發火セシ場合ニハ、烟暈ハ帶黃淡綠色、帶白淡黃色ニシテ拭除シ難ク、ソ

ノ中ニ無晶形ノモノヲ見ルモ粉粒ヲ見ルコトナシ。但シ通常使用セララル、護身用拳銃ニテ、無烟火藥ヲ裝填シタリト稱スルモノヲ發射シテソノ烟暈ヲ檢スルニ、銃口ト物體トノ距離五十種内外迄ハ明ニ淡灰色ノ輪暈中ニ粉粒ノ存スルヲ見レドモ、有烟火藥ノソレニ比シ甚ダ少數ニシテ且之ヲ一ベニテ檢スレバ、結晶

第九十圖



第九十圖

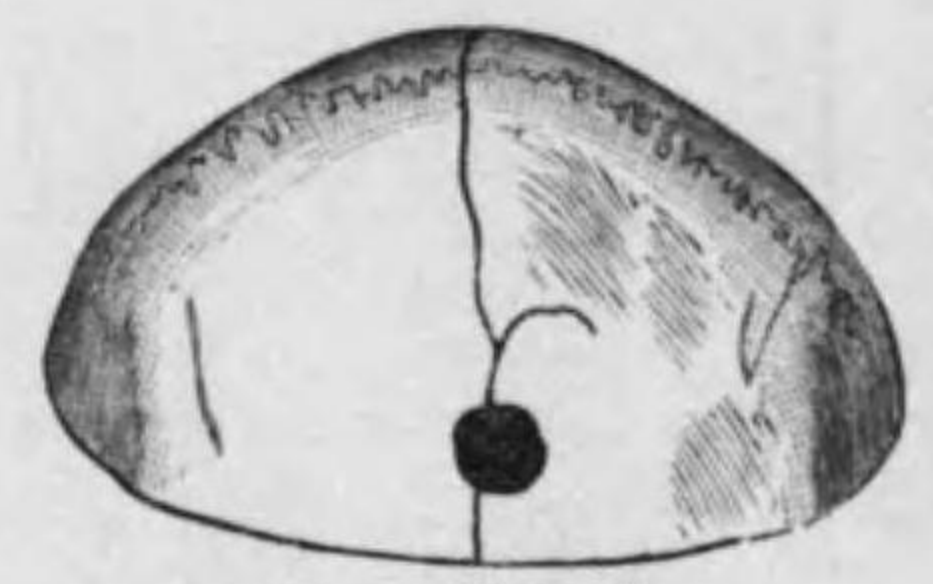


形ヲ有シ有烟火藥ノ粉粒ハ粉狀無晶形ナリ、但シ七十種以上ヲ隔タル時ハ無烟火藥ニテハ殆ンド粉粒ナク、有烟火藥ニテハ尙少許之ヲ發見ス。
遠距離ノ發射ニテハ、爆發瓦斯ノ作用少キ爲メ、射入口ノ形ハ重ニ彈丸ノ形ニ相當シ、圓形ノモノハ圓キ實質缺損ヲ生ジ、有尖彈丸ハ殆ンド切創ノ如キ裂隙狀

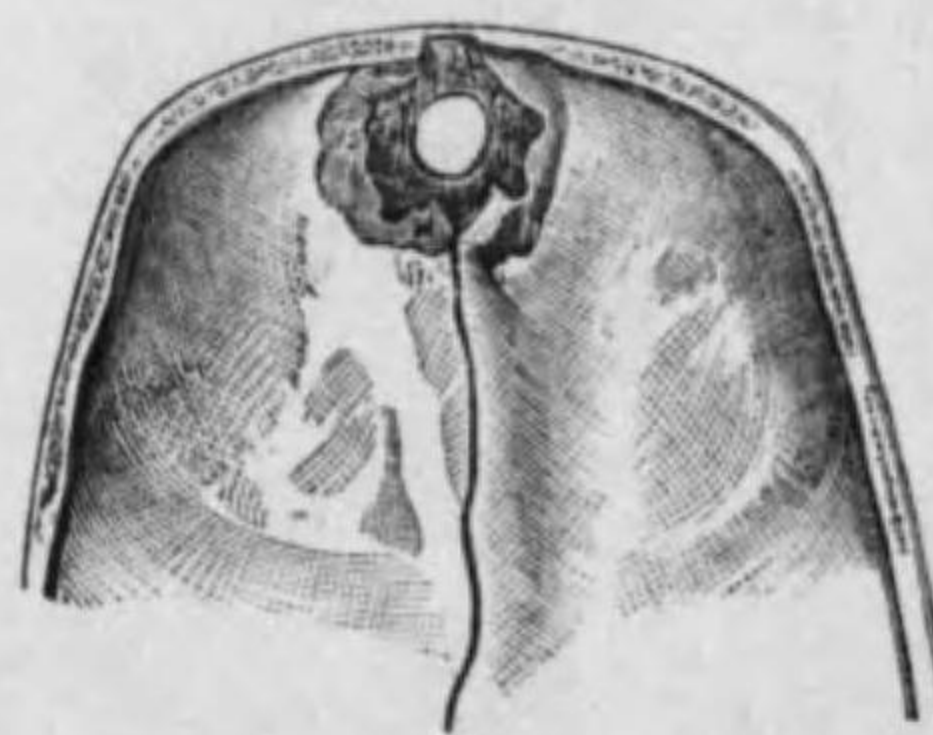
ノ銃創ヲ作り、最近用ユル圓柱形ノ銃丸ニテハ、圓キ挫滅少キ銃丸ノ大サト略同大ノ銃創ヲ作る、砲彈或ハ榴彈ノ破片ハ、種々大サ及形ノ實質缺損ヲ生ズ。

創管ハ近距離射撃ニテハ、爆發瓦斯ノ作用ニ依リテ、恐ロシキ慘狀ヲ呈シ、噴火口様トナリ爆發ニ隨伴セル異物、或ハ組織液等ニ依リテ高度ノ組織破碎ヲ來シ、發射方向ヲ決定シ能ハザルコトアリ、假令、近距離射撃ニテモ、必ずとるノ如キモノニテハ此ノ如キ慘狀トハナラズ。
遠距離射撃ニテハ、軟部ニ單一ナル創管ヲ作る、時トシテ創管ハ射出口ヲ作ラズ、盲管ニ終リ創底ニ銃

第十九圖



前頭骨ニ於ケル速發拳銃創ノ射入口



上圖ニ現ハシタル射入口ノ後側(三分一)

丸ヲ有スルコトアリ。若シ銃丸ガ骨質ニ衝突シ、骨片ヲ隨伴スル時ハ、創管ハ甚シク不正トナル、彈丸ガ骨質ヲ貫通スル際、骨質ヲ隨伴セザルコトハ非常ニ少キコトナリ、故ニ骨ニ於ケル射入口ハ小ニシテ、射出口ハ大ナルモノナリ。

創管ハ時トシテ直線ヲナサズ、種々ノ組織ニ衝突シテ其方向ヲ變ジ甚シキ場合ニハ輪狀ヲナセルコトアリ、之ヲ輪狀或ハ迴轉創管ト云フ。予ノ實見シタル一例ハ、三發ノびすとる彈丸ヲ受ケ即死セルモノニテ、一丸ハ前額部ニ當リテ頭骨ヲ貫クコト能ハズシテ、豐狀トナリ頭皮下ニ止マリ、一丸ハ左顳額部ヨリ頭腔内ニ入り、先ヅ頭蓋底ニ依リテ上後外方ニ方向ヲ變換シ、右大脳半球ニ入り、更ニ頭蓋ニ衝突シテ下後内方ニ反射シ、右後頭葉ノ後下部ニ至リテ盲管ニテ終レリ、此創管ハ一言ニシテ云ヘバ、腦質内ニテS

字ヲ描セルモノナリ、更ニ他ノ一丸ハ喉頭部ヲ貫キ、脊椎ノ間ニ符在セルヲ發見セリ。

彈丸ガ身體ヲ貫通シタル時ハ、射入口ト射出口ヲ鑑別セザルベカラズ、近距離發射ニテハ、射入口ニハ烟暈ナル特別所見アル故、射出口トノ鑑別容易ナレドモ、遠距離射撃ニ於テハ注意スベキ點アリ、一般ニ云ヘバ、射入口ハ挫傷ノ形ヲ有シ、射出口ハ裂傷ノ觀ヲ呈ス。彈丸ハ多ク體內ニ於テ變形シ、或ハ骨質ツノ他ノ組織片ヲ伴フテ出ヅル故、通常射出口ハ射入口ヨリ大ナリ、又往々人ノ主張スル射入口ハ陷凹シ射

圖二十九第



射入口

圖三十九第



射出口

出口ハ凸出ストノ所見ハ、確タル區別トナスコト能ハズ、之レ時トシテ皮下脂肪層及腐敗瓦斯等ニ依リテ其形態ヲ變ズルガ故ナリ。又射入口ノ内部ニハ衣服ノ纖維等ヲ容ルルモ、射出口ニハ此ノ如キコトナシ。已ニ述ベタルガ如ク、射出入口ノ鑑別ハ骨ニ於テ容易ニシテ、且ツ最モ著明ト云フベク、一般ニ射入口ハ小ニシテ邊緣銳薄トナリ射出口ハ大ニシテ鈍降ス。

着衣ニ於ケル射入口モ亦小ニシテ燃燒シ、射出口ハ大ニシテ裂開セリ。創内ニ在ル異物、例ヘバ紙片等ハ注意シテ保存スベシ、之ニヨリテ時トシテ加害者探求ノ端緒ヲ得ルコトアリ。

彈丸ノ代リニ液體ヲ裝填シタル爲メ 或ハ大砲彈、だいなまいと等ノ大發發ノ際起ル大損傷ハ、法醫學的ニハ殆ンド興味ヲ有セザルモノナリ。

銃器ニハ軍用銃、拳銃、獵銃等アリテ、其構造一ナラズ、近時文明諸國ニ用ユル軍用銃ハ、後裝連發銃

圖四十九第



彈丸ノ變形

ニシテ、銃身ノ内面ニハ綫條アリ、銃ノ口徑ハ六・五乃至八密米突ニシテ、彈丸ノ直徑ニ比スレバ稍小ナルヲ以テ、發彈ノ初速極メテ強ク、彈丸ニハ綫條ノ壓迫ヲ受ケタル螺旋狀痕ヲ留ム、獵銃ハ綫條ヲ有セズ通常發彈ヲ裝フ、但猛獸射撃用銃ハ軍用銃ト略同シ、拳

銃ニハ綫條ヲ具フ。

彈丸ハ銃ノ種類ニ隨ヒ其形狀及構成物質ヲ異ニス、軍用銃ニハ往時軟鉛彈ヲ用ヒタルモ輓近銅、白銅、或ハ鋼鐵等ヲ以テ被包セル硬鉛核所謂套皮彈ヲ用ユ、其形圓柱形ニシテ尖端椎實ノ如ク基底陷凹シテ藥莖ト接合ス、該彈ノ穿徹力ハ強大ニシテ二千五百米突ノ距離ニ於テモ能ク身體ヲ貫通シ、有效距離四千米突

ニ及ブ、其作用ハ二十迷突以内ノ距離ニ在リテハ甚シキ破壊作用ヲ現シ、頭蓋骨ノ如キハ全部粉砕セラ
ルコトアリ、蓋活力強大ナル彈丸ガ水分ニ富ミタル腦髓ニ其活力ヲ傳達シ、此部ニ發生シタル壓力ハ四方
ニ傳播シ、腦質之ガ爲メニ潰裂シテ四散セントシ、著ク骨及軟部ヲ破壊ス所謂水壓作用ノ發現ニ由ルナリ、
又長管狀骨幹部ヲ貫通スルトキハ、該部ノ緻密硬固ナルト圓筒狀ヲ爲スニ因リ、甚シク破壊シテ爆發作用
ヲ逞フス、長管狀骨々端部ニ於ケル套皮彈創ハ、之ニ反シテ單ニ之ヲ穿孔スルニ止マルカ、或ハ穿孔ノ周
圍ニ僅ニ氷裂骨傷ヲ生ズルニ過ギズ。

所謂だむむ彈ナル者ハ、曾テ英國人ガ印度地方ニ於ケル、土民鎮壓ノ際ニ用ヒタルモノニシテ、彈丸
ノ頭端ノミ套皮ナク、鉛核ヲ露ハスモノナリ、該彈ハ中等度ノ抵抗物ニ遭遇スルトキハ、頭端ノ變形スル
ニ從ヒ、全部破裂シテ身體各組織ヲ破壊スルコト甚シク、慘酷ノ創傷ヲ生ズルヲ以テ、文明諸國ニ於テハ
人道上之ヲ用フルコトヲ禁ジ、只猛獸ノ射撃用ニ供セラル、ノミ。

通常ノ獵銃ニ用ユル彈丸ハ圓形鉛彈ニシテ大小諸種アリ。
普通ノ拳銃用彈丸ハ圓柱軟鉛ナレドモ、軍用拳銃ニハ套皮彈ヲ裝フ。而シテ之ニ存スル壓痕ヲ精密ニ檢
スル時ハ、如何ナルビとするヨリソガ發射サレタルカヲ知ルヲ得ルコトアリ。

鑑定實例

鑑定書

熊本縣〇〇郡〇〇村大字
〇〇〇〇番地
平民〇〇業〇〇〇〇内藤妻
〇〇〇〇年

〇〇〇〇殺人被告事件ニ付大正〇〇年〇月〇〇日熊本地方裁判所豫審
列事〇〇〇〇〇〇〇〇熊本縣〇〇郡〇〇村字〇〇〇ニ於テ前記〇〇ノ屍
體ヲ解剖シ左ノ事項ヲ鑑定ス可キ旨命セラレタリ
一、創傷ノ部位、形狀又ビ種類
二、兇器ノ種類

三、若シ銃器ナリセバ受傷時ノ體位並ニ射撃距離ハ如何
四、死因
五、死後經過時間

依テ同月同日午前八時五十分ヨリ〇〇郡〇〇村大字〇〇〇〇
〇〇〇番地〇〇〇宅ニ於テ豫審列事〇〇〇〇裁判所書記〇〇〇
〇立會ノ上解剖スルニ其所見左ノ如ク

解剖記録

第一、外表検査

- 一、骨格中等榮養佳良ノ一女性屍身長一四四・五仙迷ヲ算ス仰臥位
ヲ取り身ニハ久留米耕ノ單衣並ニ白地「ネル」襦袢ヲ纏フ此等着衣
ニ三ヶ所ノ彈痕アリ即チ一ツハ該屍體ノ項部左側ニ一致シタル體
ニ於テ約五厘銅貨大ノ不正圓形ヲ呈スルモノニシテ其周圍ノ布片
ハ焦ケ且ツ著シク火燒痕ヲ附著ス爲メニ彈痕ノ周圍約二・〇仙迷
ハ黒褐色ノ暈輪ヲ形成ス他ノ二ヶ所ハ共ニ背部ニシテ豌豆大不正
圓形ニシテ周圍布片ニ火燒痕ノ暈輪ヲ認メズ但シ彈痕周圍ノ布片
ハ血液ヲ以テ汚染サル
- 二、衣服ヲ脱シ検査スルニ皮膚ハ一般ニ蒼白色ヲ呈シ背部ハ血液ヲ以
テ汚染サル屍斑ハ背部ハ中等度ニ發生ス死後強直ハ下頸並ニ四肢
ノ諸關節ニ強ク發生ス眼球ハ彈力ニ富ミ角膜ハ透明ニシテ瞳孔ハ
中等度ニ散大シ左右同大ナリ腹部ハ稍膨滿スルモ何等腐敗色ヲ呈
セズ外陰部ニ異常ナク肛門ハ能ク閉鎖ス
- 三、左項部第七頸椎棘狀突起ヲ距ル五・五仙迷ノ部ニ於テ徑約一・一
仙迷ノ不正圓形ノ創口アリ深部ニ於ケル創孔ハ約〇・六仙迷ニシ
テ不正圓形ヲ呈ス創縁ハ一般ニ不正ニシテ少シク火燒痕ヲ附著ス
探診スルニ該創管ハ稍前方右方ニ走ル
- 四、左肩胛間部ニ於テ第六胸椎棘狀突起ヲ距ル二・〇仙迷ノ處ニ徑
約一・〇仙迷ノ不正圓形ヲ呈ス創口アリ深部ノ創孔ハ徑約〇・五
仙迷ヲ算シ不正圓形ナリ創縁ハ一般ニ不正ニシテ少シク火燒痕ヲ
附著ス探診スルニ該創管ハ右前上方ニ走ル
- 五、左肩胛下部ニ於テ第十一胸椎棘狀突起ヲ距ル八・〇仙迷ノ處ニ
稍橢圓形ヲ呈ス創口アリ長サ〇・九仙迷幅〇・七仙迷ヲ算ス創縁
ハ一般ニ少シク不正ニシテ火燒痕ヲ附著ス探診スルニ該創管ハ右
前上方ニ走ル

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 二、銃創

六、右鎖骨下高ノ部ニ於テ皮下ニ細長キ彈丸ノ留マリ居ルヲ認ム

第二、内景検査

甲、頭蓋腔開檢

- 七、頭蓋軟部ヲ式ニ依リ皮切開スルニ異常ヲ認メズ
頭蓋骨ヲ鋸斷スルニ骨質ノ發育ハ佳良ニシテ骨傷其他異常ヲ認メ
ズ
- 八、硬腦膜ハ淡紅色ヲ呈シ異常ナシ軟腦膜ハ滑澤透明ニシテ異常ナ
ク其血管網ニ於ケル血液ハ少シ
- 九、大脳半球ハ左右同大ニシテ稍硬ク表面ハ稍血腫ニ乏シシ腦實質ニ
異常ナシ小脳延髄大脳脚等ハ其構造ニ異常ヲ認メズ腦脊液ハ
透明ナルモ赤色ニシテ著シク血性ヲ帶フ
- 十、頭蓋底ニ異常ヲ認メズ
- 十一、記録第三項ニ於ケル創傷ノ創管ハ第五頸椎ニ達シ其棘狀突
起、右棘突起及ビ椎骨體ノ一部ハ粉碎セラレ椎管ニ達シ脊髓膜
モ破綻ヲ蒙ル而シテ粉碎サレタル管腔内ニ於テ著シク變形セル彈
丸一個存在セルヲ認ム
- 十二、式ニ依リ頸胸腹部ヲ正中線ニ沿ヒ皮切スルニ胸腹部皮下脂肪
組織ノ發育ハ佳良ナリ腹腔内ニハ暗赤色ノ流動血液約三〇〇・〇
立方仙迷ヲ容ル腹膜ハ滑澤ニシテ顯著ナシ腹腔内臓ノ位置ニ異常
ナシ腸間膜隙ハ多數豌豆大ニ腫脹ス横膈膜ノ高サハ左第四肋骨右
第三肋間ニ一致ス
- 十三、胸骨ニ異常ナシ右第一肋間胸骨ノ右緣ニ於テ徑約〇・六仙迷
ノ圓形ヲ呈スル彈丸ノ痕跡アリ該彈丸ハ記録第六項ニ述ベタル如
ク右鎖骨下高ノ皮下ニ留マル該部ノ皮膚ニ著變ナキモ皮下結締織
紋ニ筋肉内ニハ著シク血液浸潤ス
- 十四、左胸腔内ニハ暗赤色ノ流動血液約八〇〇・〇立方仙迷ヲ容レ
右胸腔内ニハ同様ノ血液約六〇〇・〇立方仙迷ヲ容ル左右肋膜ノ
癒着ナシ
- 十五、心嚢内ニハ多量ノ暗赤色ヲ呈スル流動血液並ニ少許ノ凝血ヲ
容ル其量約一〇〇・〇立方仙迷ナリ心嚢内面ハ滑澤ニシテ其後面
上方ニ於テ豌豆大ノ圓形ヲ呈スル彈丸通過ノ創孔アリ

十六、心臓ハ木尻ノ手拳ヨリ稍大ニシテ縮期状態ニアリ外膜下脂肪ニ富ム冠狀動脈ノ蛇行ヲ認メズ右心房ヨリ大動脈起根部ニ向ヒ彈丸ノ穿通セル創孔アリ其大サ約豌豆大ニシテ不正圓形ヲ呈ス心臓内ニハ暗赤色ノ流動血液ニ少許ノ凝血ヲ收ル内膜ハ滑澤ニシテ各瓣膜ニ病變ヲ認メズ肉柱隆起等ニ異常ナシ心筋ハ硬ク淡紅色ヲ呈シ血量ニ乏シク貧血ノ状態ニアリ

十七、左肺ハ收縮シ赤灰色ヲ呈ス其後縁下隅ニ於テ後下方ヨリ右前上方ニ向テ彈丸ノ通過セル創管アリ其大サ約豌豆大ニシテ長サ四・〇仙速ヲ算ス周圍肺組織ニ血液ノ浸潤著シ後面ハ彈痕周圍ノ肺組織ヲ除キ他ハ一般ニ血量ニ乏シク著シク貧血状態ニアリ病變ヲ認メズ

十八、右肺モ亦收縮シ赤灰色ヲ呈ス其肺尖部後面ニ於テ左下方ヨリ右上方ニ向テ彈丸ノ通過ヲ爲メ生ジタル溝狀ノ組織損傷アリ長サ三・五仙速ヲ算ス周圍肺組織ニ血液ノ浸潤著シ後面ノ性状左肺ト同様ナリ

十九、右鎖骨ノ後面ニ於テ胸鎖關節ヲ距ル約二・〇仙速ノ處ニ少シク變形セル彈丸一個停留シ居ルヲ認ム喉頭ニ異常ナシ

二十、第六胸椎體竝ニ第五胸椎體ハ左下方ヨリ右上方ニ向テ彈丸ノ爲メ穿鑿サレ居ルヲ認ム

二十一、左第十一肋骨ニ於テ脊椎ヲ距ル約七・〇仙速ノ處ニ彈丸通過ノ爲メ粉砕骨折ヲ蒙レル部アリ

二十二、脾ハ表面紫黒ニ富ミ紫赤色ヲ呈ス長サ一・〇仙速幅六・〇仙速厚サ一・七仙速ナリ後面上部ハ彈丸ノ爲メ組織挫滅セル其長サ五・〇仙速幅三・〇仙速ヲ算ス周圍組織ハ血液ノ浸潤著シ後面ハ損傷附近ヲ除キ一般ニ血量ニ乏シク貧血状態ニアリ脾材ノ分界ハ著明ナリ

二十三、左腎ハ表面滑澤赤灰色ヲ呈シ著シク貧血状態ニアリ長サ一・五仙速幅六・二仙速厚サ三・二仙速ヲ算ス其前面上端ニ於テ左下方ヨリ右上方ニ向テ長サ三・五仙速幅約一・〇仙速ノ溝狀ヲ呈ス組織損傷アリ之レ彈丸通過ニシテモニシテ周圍組織ニ血液浸潤ヲ蒙ルハ一般ニ著シク血量ニ乏シク貧血状態ニアリ皮膚ノ分界ハ著明ナリ病變ヲ認メズ被創ハ割離シ易シ

二十四、右腎ハ表面滑澤赤灰色ヲ呈ス長サ一・五仙速幅六・〇仙速厚サ三・二仙速ナリ後面ハ血液ニ乏シク貧血状態ニアリ皮膚ノ分界ハ著明ナリ病變ヲ認メズ被創ハ割離シ易シ

二十五、左副腎ハ其前後彈丸ノ爲メ挫滅セラレ右副腎ニ異常ナシ

二十六、左右輸尿管ニ異常ヲ認メズ

二十七、膀胱ハ收縮シ内ニ尿管ヲ容レズ粘膜炎ハ顯著ニ富ミ淡紅色ヲ呈シ異常ヲ認メズ

二十八、左卵巣ハ梅實大ニシテ其邊縁ニ豌豆大ノ囊腫二個ヲ形成ス右卵巣ハ梅實大ニシテ異常ナシ

二十九、子宮ハ尋常大ニシテ内ニ灰白色ノ粘稠物ヲ容ル粘膜炎ハ異常ヲ認メズ

三十、離ハ廣潤ニシテ粘膜炎ハ異常ヲ認メズ

三十一、食道粘膜炎ハ異常ヲ認メズ

三十二、胃内ニハ汚穢灰白色ノ食片約一〇〇〇立方仙速ヲ容ル胃ノ後面胃底ノ部分ヨリ前小彎ノ噴門ニ近キ部分ニ彈丸ノ穿通セル創孔アリ其大サ約小指頭大ナリ粘膜炎ハ顯著ニ富ミ汚穢灰白色ヲ呈ス但シ創孔周圍ノ粘膜炎ハ顯著ニ富ミ汚穢灰白色ヲ呈ス

三十三、小腸内ニハ汚穢灰白色乃至褐色ノ粘稠物竝ニ蛔蟲五條ヲ容ル粘膜炎ハ顯著ニ富ミ灰白色ヲ呈シ異常ヲ認メズ大腸内ニハ汚穢褐色ノ軟便ヲ容レ粘膜炎ハ異常ヲ認メズ

三十四、肝ハ表面滑澤赤灰色ニシテ左右徑二五・〇仙速前後徑一五・〇仙速厚サ六・七仙速ヲ算ス後面ハ帶褐赤色ニシテ血量ニ乏シク貧血状態ニアリ小葉ノ分界ハ著明ナリ

三十五、膽囊内ニハ薄キ膽汁ヲ容レ粘膜炎ハ異常ヲ認メズ

三十六、膽管内ニハ薄キ膽汁ヲ容レ粘膜炎ハ異常ヲ認メズ

三十七、脾ハ淡紅ニシテ實質ニ異常ヲ認メズ

三十八、右ニテ解剖時同日午前十一時五分ナリ

彈丸検査

留彈シ居タル三個ノ彈丸ヲ取出シ檢スルニ頸椎部ニ於ケルモノ(記録第十一項)ハ變形著シク原形ヲ留メズ他ノ二個ハ僅ニ磨滅シタルノミニシテ原形ヲ保テ右鎖骨下高ノ皮下ニ於ケルモノ(記録第六項)ニ於テ然リ該彈丸ヲ精檢スルニ鉛ニシテ細長ク尖端鈍圓ナリ長サ一・七五仙速直徑〇・九仙速重サ九・三三ヲ算ス此等ノ所見ニヨ

力ニ富ミ角質ハ透明ナリ且ツ表面ハ稍膨脹スルモ何等腐敗色ヲ呈セズ(記録第二項)此等ノ死體現象ニヨリ死後約十四五時間ヲ經過セシモノト推定ス

鑑定

以上ノ說明ニヨリ鑑定スルコト左ノ如シ

一、創傷ノ部位形状ハ記録第三、四、五、項ニ記シタルガ如シ而シテ共ニ銃創ニシテ管銃創ナリ

二、兇器ハ銃器ニシテ「ピストル」ト推定ス

三、受傷時ノ體位ハ立位ト推定ス而シテ射撃距離ハ左項部ノモノハ(記録第三項)約一二尺左肩胛間部ノモノ(記録第四項)及ビ左肩胛部ノモノ(記録第五項)ハ五六尺ノモノト推定ス

四、死因ハ銃創ニ因スル急性失血死ニアリ

五、死後約十四五時間ヲ經過セシモノト推定ス

右鑑定ニ要セシ日數ハ大正〇年〇月〇日ヨリ同年同月〇日ニ至

大正〇年〇月〇日

熊本縣熊本市東坪井町六拾七番地

入 江 晃

力ニ富ミ角質ハ透明ナリ且ツ表面ハ稍膨脹スルモ何等腐敗色ヲ呈セズ(記録第二項)此等ノ死體現象ニヨリ死後約十四五時間ヲ經過セシモノト推定ス

リ「ピストル」ノ彈丸ト推定ス

一、木尻ニ於ケル銃創ハ共ニ射入口ノミニシテ射出口ナキヲ以テ管銃創ニ屬ス而シテ銃器ハ彈丸ノ所見ニヨリ「ピストル」ト推定ス

二、受傷時ノ體位ハ立位ト推定ス何トナレバ木尻横臥位ナルニ保ラズ彈丸ノ射入口何レモ背部ニシテ其創管著シテ前方ニ向テ射撃距離ニ於テハ左項部ノモノハ其射入口ニ於ケル衣服著シク焦ゲ且ツ火燄燃ノ附著著シキヨリ察スレバ著シク近距離ニシテ一二尺ノ處ヨリナル可シ背部ニ於ケル他ノ二ヶ所ノ射入口ニ於ケル衣服ノ彈痕ハ僅ニ彈丸ヲ通過シ得ルニ過ギズシテ周圍布片ハ血液ヲ以テ汚穢サルノ外異常ナシ而シテ彈丸ノ侵蝕力可成強大ナルヨリ察スレバ之レ亦近距離射撃ニシテ恐ラク五六尺ノ處ヨリ發射セラレタルモノナル可シ

三、本屍ノ死因ハ銃創ニ因スル急性失血死ニアリ心、肺、脾、左腎、胃ノ損傷(記録第十六、十七、十八、二十二、二十三、三十三項)竝ニ胸腹腔内ニ於ケル多量ノ血液(記録第十二、十四項)存在ハ明ラカニ之レヲ說明スルニ足ル然レドモ本屍ニ於ケル銃創ハ其何レト問ハズ單獨ニテモ死因タル可キ條件充分ナリ

一、死後經過時間ハ確定シ得ズト雖死後強直ノ發生著シク眼球ハ彈

爆彈若クハ大砲彈等、身體ノ近クニ於テ破裂シタル時ハ、全身的ニ大ナル振動ヲ與フルト共ニ、ソノ破片飛來シテ、皮膚ニ挫傷裂創、或ハ抉リ取りタルガ如キ創傷ヲ生シ、破裂ト同時ニ諸種ノ異物ヲ伴ヒ來ル。

散彈ハンノ力弱キガ爲メニ、貫通シテ射出口ヲ作ルコト殆ンドナク、盲管ニ終リ、ソノ盲端ニ變形セル彈丸ヲ容ル、此際ニハ射入口ノ集散ノ狀況、廣サ等ヲモ注意シテ記載スベシ、即チ之ニヨリテ時トシテソノ發射サレタル距離等ヲ知ルヲ得ルコトアリ。

傷 成、創傷ノ法醫學的觀察

Wound in medicolegal point of view.

Lesion au point de vue medico-legal.

Verletzung vom gerichtlich-medizinischen Standpunkte.

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 二、身體ニ於ケル損傷検査 三四九

創傷ガ單ニ人ヲ病床ニ伏セシメ、或ハ作業障害ヲ來シタルノミナル時ハ、已ニ本章ノ始メニ述ベタルガ如ク、刑法上ニテハ傷害ノ罪ニ問ハレ、民法上ニテハソノ損害ニ對シテハ之ヲ賠償スルノ責任アルモノナルガ、モシ受傷者ガ死ニ至リシナラバ、加害者ハ殺人若クハ傷害致死ノ罪ヲ課セラル、コハ刑法一九九條乃至二〇三條ニ規定スル所タリ。コノ際醫師ノ最モ注意スベキハ、受傷後間モナク死セシモノ、直接死因ハ、該創傷ニ基因セシヤ、若シ死因ガソレト確定スレバ、其傷ハ自傷ナルヤ將タ他爲ナルヤ、或ハ異厄ニ依レルモノナルヤヲ決定シ、必要ナル場合ニハ、ソガ生前ノ受傷ナルヤ、將タ死後ニ附加セラレシモノナルヤヲ鑑定スベシ。

イ、死因ト損傷トノ關係

Causality between death and injury.
Rapports entre la mort et la lésion.
Die ursächliche Zusammenhang zwischen Tod und Verletzung.

死因ト損傷

直接死因

人類ノ生存上缺クベカラザル臟器ヲ害セラレテ、間モナク死ニ至ル時ハ、此創傷ハ直接死因ニシテ、受傷後創傷傳染或ハ麻痺等ノ機能障害ニ依リ、相當ノ時日後死ニ至レバ、之ヲ間接死因ト云フ。損傷ニシテ直接死因トナリ得ルモノハ、全身ノ粉碎、或ハ生存ニ必須ノ臟器ニ於ケル傷害、若クハソノ機能障害ヲ來セシモノ、例ヘバ心臟、腦、肺、腎、肝等ヲ害セラレシカ、或ハ之ヲ害セラレズトモ臟器自身ノ出血ニアラズ、周圍ヨリノ出血ニ依リテ壓迫ヲ受ケ、ソノ機能充分ナラザル時ノ如キ、或ハ血管系統ヲ傷害シ、出血死ニ至ル時ノ如キ之レナリ。

出血死ハ通常二種ニ分ツ、一ハ外出血ト云ヒ、體外ニ多量ノ出血アリシ場合、他ハ内出血ト云ヒ、體腔内或ハ臟器内ニ多量ノ出血アリシ場合ヲ云フ、通常人類ニ在リテハ、一五〇〇珉ノ出血アレバ生命危險ナ

出血死

リト云フ。一般ニ小兒ハ出血ニ耐エ難ク、女子ハ之ニ抵抗強シ。出血死ナル診斷ヲ下スニハ、多量ノ出血アルコトヲ確定シ、死體ニハ死斑少ク、又多クノ臟器ガ血量ニ乏シク、且失血スベキ損傷ヲ見出シタル時ニ下スベキモノニシテ、單ニ體内ニ血液少キノミヲ以テ出血死ト云フコト能ハズ、何トナレバ自然死ニモ貧血病死、營養不良死アリ、各臟器ノ血量非常ニ少クナリ、又死體腐敗ノ爲メ、血液ガ血管外ニ滲透逸出スルコトアレバナリ。損傷後ノ直接死因トシテ出血ニ次グモノハ、種々ナル栓塞性循環障礙、即チ空氣栓塞、脂肪栓塞及血栓々塞ナリ。

空氣栓塞

空氣栓塞ハ頸部、腋窩及妊娠子宮損傷ノ場合ニ來リ、該部ノ靜脈管傷ケラル、ガ爲メ、外界ノ空氣之ニ進入シテ右心室ニ達シ、器械的ニソノ收縮運動ヲ妨害シ腦栓塞ヲ作り、忽然死ニ至ラシム。

脂肪栓塞

脂肪栓塞ハ脂肪ニ富有ナル組織ノ損傷ヨル來ルモノニシテ、就中、管狀骨々折或ハ皮下脂肪織ノ廣大ナル損傷ノ際ニハ、骨髓乃至皮下脂肪損傷離脱セラル、ヲ以テ、其脂肪ハ破綻セル靜脈管内ニ入り、血流ト共ニ右心室次デ肺或ハ腦ニ達シテ、之ヲ閉塞シ、高度ノ循環障礙ヲ來タシテ、窒息死ニ至ラシム、時トシテ肝、脾等ノ臟器片栓塞ニ依リテ、同様ノ結果ヲ來スコトアリ、血栓々塞ハ損傷部ノ血管内ニ形成セラレタル血栓離脱シ、血流ト共ニ肺腦等ニ達シテ之ヲ栓塞シ、其作用ヲ障礙シテ死ニ至ラシムルコトアリ。

しよつく

しよつくモ亦已述ノ如ク、直接死因トナルコトヲ得ルモノニシテ、一ツノ大ナル或ハ小ナル數多ノ暴力ニヨリテ、知覺神經ノ末端ヲ強ク刺戟シ、肺心ガ反射的ニ突然停止シテ死ニ至ルモノニシテ、解剖上損傷以外ニハ何等ノ異常所見ナク、而モソノ損傷ハ何等暴力ノ痕跡ヲ殘サマルカ、或ハ甚ダ輕微ナルモノナリ。

故ニしよつくナル診断ヲ下スハ、甚ダ注意スベキモノニシテ、被害後二時間以上ヲ經過シテ死亡セシモノハ、最早ソノ受傷ト關係アルしよつくトハ思惟サレズ、寧ロ他ノ續發症ノ爲メ死ニ至リタリトスルヲ適當トスト云フ。しよつくノ本體ニツイテハ、ごるつ、ふつしゑる氏(Goltz, Fischer)等ハ、知覺神經ノ挫傷若クハ震盪ニ由テ發スル、延髓ニ於ケル血管運動神經中樞ノ反射的麻痺ナリト云ヒ、ちきしゑる氏(Henry)等ハ本症ハ外傷ニ由リ、最初末梢ノ血管ニ反射的麻痺ヲ起シ、次デ腦及延髓ノ血壓減少スルニ因ル、即彼ごるつ氏ノ敲打試験ニ徵スルニ、蝦蟇ノ腹部ヲ頻回敲打スルニ由リ、反射的ニ血管神經及中樞神經系ノ機能減弱、若クハ麻痺スルヲ以テ、血管壁麻痺シ血行緩慢トナリ血壓減少シ、且全身血液ノ分配平衡ヲ失ヒ、動脈系ハ益空虛トナリ、肺及腦ニ貧血ヲ來スモ、靜脈殊ニ下腹ノ靜脈内ニハ反テ血液ノ鬱滯ヲ來シ、斯クテ血行障害甚ク、遂ニ心臟ハ開張期靜止ニ由テ墮ルルヲ見ルト云フ、要スルニ震盪症ハほふまん氏ノ説ノ如ク、末梢知覺神經ノ強大ナル刺激ニ由リ、反射的ニ心臟靜止スル者ナリトスルヲ適切ナリト信ズ。其症候ハ皮膚及粘膜著ク蒼白トナリ厥冷シ、顔貌憔悴シ、眼球光澤ヲ失ヒ凝視シ、瞳孔散大シ、反應遲鈍トナリ、心動著ク緩徐不正、脈搏微細絲ノ如ク屢結代ス、呼吸モ亦不正、深長淺短交來リ、神識昏惰、呼ベドモ答ヘズ、又、反問ヲ忘ム者ノ如シ、皮膚ノ知覺鈍麻シ、筋力減衰シ、時トシテ惡心嘔吐ヲ來シ、體溫ハ平溫ヨリ降ルコト一乃至一・五度ナリ、以上ノ諸症候ハ鈍性震盪症ニ於テ見ル所ナリ、之ニ反シテ精神興奮シ、轉輾反側、苦悶呻吟シ、須臾モ安靜ナラズ、其狀恰モ躁狂者ノ如キモノナリ、之ヲ過敏性震盪症ト名ク。時トシテ精神病者等ヲ制縛シテ放置スル時、急ニしよつく死ニ陥ルコトアリ、之ヲ制縛致死ト云フ、コハ制縛部ノ皮下組織等ノ蛋白、機械的ニ變化ヲ被リ分解吸收サレテ、しよつくヲ來スト云フモノ

制縛致死

アリ。しよつくニヨリ往々失神ニ陥リ死ヲ致ス者アリ、就中神經衰弱ノ者及貧血者ニ於テ然リ、然レドモ如斯症候ハ多ク高度ノ失血ヲ兼ネタル複雑ノ外傷ニ來リ、重キ内臟器官ノ外傷ニ於テ見ル所ニシテ、單純ナル震盪症ニ於テハ多クハ暫時ノ後ニ醒覺ス。但シ醒覺後暫ク精神ノ變調ヲ貽スコトアルモ、是亦終ニ全癒スルモノナリ、故ニ本症ノ豫後ハ概不良ナラザルモ、呼吸不正ニシテ吃逆ヲ發スルモノハ不良ノ徵トナス。

次ニ創傷ニヨリテ、呼吸器障礙ヲ起シ死ニ至ルコトアリ。例ヘバ出血氣道ニ入りテ窒息シ、或ハ胸部開カレ、呼吸スベク肺ノ開張シ能ハヌ場合ノ如キ之レナリ。受傷後間接死因トナリ得ルモノハ、傷害ノ爲メ二次的ニ起リシ生存上必須臟器ノ炎衝、敗血性創傷傳染病、敗血症、營養不良及衰弱等ナリ、コハ刑法上傷害致死ノ罪ニ問ハル。

鑑定實例

創傷が間接死
因トナレル
鑑定實例

鑑定書
大正〇年〇月〇日〇地方裁判所豫審判事〇〇〇〇ハ〇〇〇〇
〇幸〇郎、同〇〇〇、傷害致死被告事件ニ付一件記録ヲ参照
シ
一、亡者〇松〇〇ノ創傷(記録第六十四丁乃至六十五丁)ハ同人ノ死
(大正六年八月二十二日死亡)ニ對シ直接又ハ間接ノ原因ト爲リタ
ルヤ否ヤ
ヲ鑑定スベキ旨ヲ同豫審官ニ於テ命ゼリ依テ同日及十二月八
日及十二日ノ三回同裁判所ニ於テ一件記録ヲ査閱シ且若〇松〇〇ガ
〇〇府立病院ニ入院中ノ病牀日誌ヲ參考シ彼是ヲ綜合シテ此鑑定書
ヲ作ル

甲、病歴及經過
〇〇府〇〇郡〇〇村第〇〇百〇〇番戸

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 二、身體ニ於ケル損傷検査

若〇松〇〇
明治廿四年四月三日生
右者ハ大正〇年七月三十日午後六時頃被告〇〇〇〇〇〇等數名ト喧嘩
争闘シ左記大正〇年八月〇日付醫師〇〇〇〇ガ診断書ニ記載セルガ
如キ創傷ヲ被リ〇〇府立病院ニ入院治療ヲ受ケタリ該診断書ハ左ノ
如シ

診断書
〇〇府〇〇郡〇〇村字〇〇
土木業 若〇松〇〇
二十七歳
病名、右側上膊ノ切創、頭部顔面ニ於ケル五箇ノ挫傷
一、右側背部ノ打撲傷、身體所々ノ擦過傷
現症、

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

三五四

- 一、右大腿ノ後面ニテ關節ヨリ上方ニ向ヒ約十五厘米、即上膊中央ニ達スル幅約八厘米ノ創面アリ創縁銳シシテ創底ニ凝血ヲ附著シ創ノ深サ筋ニ達ス創面上端ニテ此創面ノ大サニ一致スル皮膚斷アリ筋ノ一部ヲ附著ス
- 二、前頭部髮際間ノ中央ノ稍右側ヨリ、内上方ニ在ル長サ約三厘米、創縁鈍、深サ骨膜ニ達スル創面アリ凝血ヲ附著ス
- 三、右側頭頂部トノ界ニテ約前後ニ在ル長サ七厘米ノ創縁鈍ナル創面アリ凝血ヲ附著シ深サ骨膜ニ達ス
- 四、後頭部ノ約中央ニ於テ水平ニ走ル長サ約三厘米ノ細長ナル創面アリ創縁鈍凝血ヲ附著シ深サ骨膜ニ達ス
- 五、左側額部ノ上部ニ於テ長サ約一厘米ノ小傷面アリ深サ皮下ニ達シ創縁鈍、凝血ヲ附著ス
- 六、右眉毛ノ内端ヨリ下方ニ至ル長サ約一五厘米創縁鈍凝血ヲ附著シ深サ皮下ニ達スル創面アリ
- 七、右側小指ノ基部ニ於テ長サ一厘米、深サ皮下ニ達スル約三角形ノ創面アリ凝血ヲ附著ス
- 八、其他左側肩胛部、右側上膊外上部、右側腰部、右側胸部、左側肩胛骨下角部、右側下腕ノ末端ニ表皮剝離アリ
- 九、右背部中央ニ水平ニ走ル長サ約十二厘米幅約七厘米ノ皮下流血及膨隆アリ之ニ腫ルルニ發シテ腫痛アリ

各創ノ治療ニハ約一ヶ月ヲ要スルモノト認ム
但右側上肢ニ於テ多少運動障礙ヲ殘スコトアルベシ
大正〇年七月三十日檢創

右記ノ如キ數多ノ創傷ヲ被リテ即日〇〇府立病院ニ入院セル被害者ノ疾病經過ハ同院ヨリ提供セル病歴ニ依レバ
被害者ニハ何等特記スベキ遺傳關係ナク、先年淋疾ヲ患ヒ、又約一ヶ月ノ前風邪ニ罹レルコトアリ七月三十日來院當時ノ談ニヨレバ多數人ト喧嘩ノ爲メ右側上膊ヲ切テ其他頭部等ニ挫創、身體所々ニ擦過傷ヲ受ケタリ特ニ棒ニテ背部ヲ撲グラタル爲メ呼吸困難ヲ來セリト云フ

ラズ皮膚温皮下脂肪層中等、脈搏整ニシテ、呼吸運動ハ胸膈式正整ナリ眼、鼻、耳、口及頸部等ニ異常ナク胸膈ニ於テ理學的診斷上特記スベキ所見ヲ見出サズ腹部ニ異常ノ壓痛硬結等ヲ觸ルルコトナク肝腎腫等ハ觸知スルコト能ハズ外陰部下腿ニ異常ナシ

創傷ニ於ケル所見——前記〇〇醫師ノ診斷書ノ通り——
次ニ入院後熱型及治療ノ大要ヲ示セバ別表ノ如シ(表ハ略ス)
即チ七月三十日夜入院後松〇〇ハ前記創傷ノ他身體ニハ特記スベキ異常ナク八月六日迄ハ多少ノ熱發アリ翌七日ヨリ殆ンド解熱セリト雖未ダ全ク常溫ニ復セズ受持醫師ノ語ル所ニヨレバ右側上膊ノ切創ハ最モ重創ニシテ他ハ輕傷疼痛ヲ訴フルコトナク創傷治療ノ經過ハ其好ニシテ且入院後一同モ内出血ノアリタルガ如キ徵候ヲ呈セザリシト云フ(大正〇年〇〇月〇〇日付證人〇〇〇〇調書參照然ルニ八月十六日午前ニ至リ突然四十度一、二ノ熱發アリ食慾少ク胃痛ヲ訴ヘ嘔氣アリ同十八日ニ至リ腎臟部ニ多少ノ疼痛ヲ訴ヘシト雖解熱シ十九日ニ又々體温三十九度五分以上ヲ示シ尿ニハ蛋白ヲ證明セリ二十一日ニハ少許ノ鼻出血アリ眼結膜及皮膚ニ黃疸ヲ來シ尿ニモ膽汁色素ヲ出スニ至リ又々此等ノ症狀ニヨリ主治醫ハ膽囊炎ト決定セシモ萬一ヲ慮リ二十二日ニ至リグイダル氏反應ヲ試ミシモノ結果陰性ニシテ腸チブスニ非ラザルコト確定セリ彼是スル中次第ニ患者ノ衰弱加ハリシヲ以テ同日夕ヨリ廿二、三日ニ互リカンフル注射食鹽水ヲ注入等種々ノ手當ヲ施セシモ其效ナク遂ニ二十三日午後三時頃死亡シタリ

斯クノ如クニシテ松〇〇ハ急性膽囊炎ナル診斷ノ下ニ死亡シ關係者モ亦解剖ニヨリテ斷ヲ確ムルコトナクシテソガ遺骸ノ始末ヲ了セリ

乙、說明

本鑑定ヲ爲スニ當リ吾人ガ先ヅ以テ決定セザルベカラザルハ亡松〇〇ガ受ケタル創傷ト死因トノ關係ナリトス彼ハ前記ノ如ク七月三十日夕争闘ノ後右側上膊ニ一大皮切、頭部ニ於ケル數個ノ挫創、全身諸所ニ於ケル表皮剝離、及右背部中央ニ存スル一大皮下流血(八月一日付)〇〇ガ作成セル診斷書參照)ヲ得直ニ〇〇府立病院ニ入りテ治療ヲ受ケシガ創傷ノ經過良好ニシテ右背部ノ受ケタル暴力ノ爲メ一層呼吸困難ヲ來セリト雖ソノ後入院後一週間ニシテ發熱少クモ寧ろ彼ノ死因ヲ敗血症ト云フヲ妥當ナリトス即チ八月十六日以後腎臟部ニ疼痛ヲ訴ヘ尿ニ蛋白ヲ出セシハ敗血症(或ハ膽囊炎)ニ依ルモノナルベク黃疸ノ發來モ亦此方面ヨリ說明スルコトヲ得

吾人ハ茲ニ於テ松〇〇ノ罹レル敗血症乃至膽囊炎ト被ノ創傷トノ關係ヲ考究セザルベカラズ元來人身ハ甚ダ複雜ナル有機體ナルヲ以テ此有機體内ニ起ル諸種ノ變動ハ彼是必ズ因果ノ關係アルベキモノナリ松〇〇ガモシ創傷ヲ被ラズニシテ健康體ナリシナラバ彼ノ敗血症ヲ起セシ徵生物ガ假令彼ノ身體内ニ侵入シ來リシトモ充分防禦シ得タリシニ微生物ガ假令此時ニ當リ受傷ノ爲メ就牀スルコト二週日原創傷ハ幸ニ治療ニ赴キツツアリシト云ヘソノ身體ハ幾分衰弱シ侵襲物ニ對スル抵抗力ハ何程力減殺サレ居リシガ故ニ彼ハ比較的容易ニ敗血症或ハ膽囊炎ニ犯サレ遂ニソノ爲メニ死ニ至リシナルベシ故ニ松〇〇ガ受ケタル數多ノ創傷ガ合同シテ此結果ニ至リシモノニシテ其中ノ一創ヲ取りテ死因ニ特ニ重キ意味ヲ附スルコト能ハズカカル意味ニ於テ松〇〇ノ創傷トソノ敗血症延イテ膽囊炎ハソノ死因ト間接ノ關係アリト云フベシ

定

上記ノ理由ニ依リ鑑定スルコト左ノ如シ
一、亡松〇〇ガ七月三十日ニ受ケタル創傷ハ同人ノ死(同年八月二日)ニ對シ直接ノ關係ナシト雖間接ニハ多少原因上因果ノ關係アリト云フベシ

此鑑定ハ大正〇年〇〇月〇〇日着手
同年同月〇〇日終了

鑑定人醫師 宿 所 小南又一郎

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

三五五

ナリ別ニ疼痛或ハ動作障礙ヲ訴ヘシ部等ハナク平靜ニシテ更ニ九日間ヲ經過セリ即チ之ハ亡松〇〇ノ死因ガ直接此創傷ト關係ヲ有セザルノ證左ニシテ彼ノ死ガ該傷ヨリノ出血ニ依ルニモアラズ或ハ創傷ノ爲メニ來レル腸器ノ作用障礙ニヨルニモアラズコト明ナリ亡松〇〇ノ死ガ創傷ト直接關係ナシト決定シタル上ハ吾人ハ更ニ進シテソノ死因ヲ確定シテ後ソノ死ト創傷トノ因果ノ關係ヲ決定セザルベカラズ

入院後松〇〇ノ創傷ハ比較的良好ニ經過シツツアリシガ俄然八月十六日ニ至リ四十度内外ノ熱發ヲ來シ胃痛アリ食慾少ク嘔氣ヲ感ジ且腎臟部ニ疼痛ヲ訴ヘ尿ニ蛋白ヲ出シ此ノ如キ狀態ニテ、三日ヲ經過シ同日二十一日鼻出血ヲ見同時ニ皮膚及粘膜ニ黃疸ヲ來シ肝臟腫大シ且該部ニ疼痛ヲ訴ヘ(大正〇年〇〇月〇〇日〇〇〇〇調書參照)夫ヨリ次第ニ衰弱ノ度ヲ加ヘ翌々二十三日體温下降ト共ニ種々ノ手當ヲ受ケタルニ係ラズ死亡セリ

此等ノ症狀ヲ見テ吾人ノ最モ疑フ置クベキハ肝臟ノ破裂、敗血症若クハ膽道炎乃至膽囊炎ナリ松〇〇ガ爭闘ノ際右背部中央ニ水平ニ走ル長サ約一二・〇厘米幅約七・〇厘米ノ一大皮下流血ヲ得タリ此部ニ此ノ如キ皮下流血ヲ來スニ足ル暴力ハソノ働キ方ニ依リテハ内臟中最モ破裂シ易キ肝臟ヲ破裂セシムルコトヲ得ルコトヲ得ルモノナリ況ンヤソノ爲メニ一時呼吸困難ヲ感ゼシニ於テ増々ソノ疑ヲ深クスルモノナレドモモシ實際肝臟ガ大破裂ヲ來シ居ラバ松〇〇ハ受傷ノ際直ニ「ショック」ニ陥ルカ或ハ内出血ニ由來スル種々ノ障害ヲ受ケタルナルベシ然ルニ彼ニハ著モ内出血ノ徵候ナク又假令此ノ如キ大破裂ヲ來サズニシテ肝臟ノ被膜下破裂或ハ中心出血ヲ來シ居ラバ入院後數日ニシテ肝臟ノ作用障害例ヘバ黃疸ヲ見或ハ肝部ヨリ肩胛部ニ放射スル疼痛ヲ訴フベキ筈ナルニ彼ハ此ノ如キ訴ヘヲナシタルコト著モ之ヲ黃疸モ亦受傷後二十三日ニ初メ出現セリ故ニ彼ハ少クモモ生命ニ危害ヲ來ス程度ノ肝臟破裂ヲ有セザルコトヲ知ルニ足ル此ノ如ク松〇〇ガ八月十六日ニ於ケル俄然タル發熱ハ肝臟ノ破裂ニ由來セルニ非ラズトセバ彼ノ死因ハ就牀中ニ侵入セル病原菌ノ爲メニ起レル敗血症或ハソレニ續發セル膽道炎若クハ膽囊炎ト見做サザルベカラズ主治醫ガ松〇〇ノ死因ヲ膽囊炎ト記載セシハ故アリト雖

ロ、受傷ハ生前ナリヤ死後ナリヤ

Examination of vital and postmortem Injury,
Examen des lésion vitales et postmortelles
Die Untersuchung vitaler und postmortaler
Verletzung.

受傷ハ生前ナ
リヤ死後ナリ
ヤ

生活反應

霜傷

受傷ガ生前ナリヤ、將又死後ナリヤヲ決定スルハ、法醫學上極メテ大切ナルコトニシテ、死後ニモ動物ノ咬傷、死體取扱等ニ依リテハ、種々ノ損傷ヲ受クルコトアリ。受傷ノ生前ナルカ死後ナルカヲ區別スルニハ、所謂創傷ノ生活反應ニ依ルモノニシテ、生前受傷ニハ之ヲ見、死後受傷ニハ之ヲ見ズ、但シ生活反應類似ノ所見ハ、死後受傷ニモ來ルコトアレバ注意ノ必要アルモノトス。

以下生活反應ニ就テ略述セン。
生前ニ生ジタル表皮剝脫ニハ乳嘴出血アリ、痂皮ヲ以テ掩ハル。然ルニ死後ニ生ジタル表皮剝脫ニハ出血ナク、又羊皮紙様トナリ褐色ニ乾固ス。コハ死體ガ棺側ト摩擦シテ生ズル、棺傷ノ如キモノニヨク見ル所ナリ。生前ニ生ジタル皮下溢血ハ、組織間ニ凝血アリ容易ニ拭除スルコト能ハズ、死後ニ生ジタルモノハ組織ハ單ニ血色素ニテ染色スルノミナルカ、或ハ血液存在ストモ之ヲ拭除スルコトヲ得、死斑ハ切檢スレバ皮下組織ニ異狀ヲ來シ居ラズ。

次ニ生前ニ生ジタル創傷ハ、筋肉ノ退縮ニ依リテ廣ク哆開シ、切斷セラレタル血管ヨリ出血ヲ見、創縁ハ腫脹スルカ、或ハ種々炎衝性若クハ治癒性傾向ヲ示シ、モシ創傷大ナル時ハ全身症狀トシテ貧血、血液吸入或ハ諸種ノ栓塞ヲ見ルコトアリ、然ルニ死後ニ生ジタル創傷ニテハ上記ノ如キ徵標ヲ見出サズ。

骨及筋肉ハ生前ヨリモ、死後暴力ニ對スル抵抗強シ、コレ一定ノ張力ヲ失フニ依リ、鈍器ノ襲來ニ對シヨク適從シ、損傷ヲ被ルニ至ラザルガ故ナリ。

死戰期、或ハ心臟衰弱シテ死亡セルモノノ死直前ニ於ケル損傷ハ、生活反應一般ニ少シ。反之、死後ニ受ケタル損傷ニテモ、死體ガ血液ニ富ミ、且血液流動性ニシテ、損傷部位ガ垂下ノ位置ニアル時ハ、生活反應ト類似ノ所見ヲ呈スルコトアリ、又死後ニモ時トシテ諸種ノ遠隔臟器ニ栓塞ヲ作ルコトアリ、故ニ受傷ノ生前ナルカ、死後ナルカヲ鑑別スルニハ充分ノ注意ヲ要スルモノナリ。

ハ、何レガ死因ナリヤ
Which is the cause of death?
Quel est la cause de la mort?
Die eigentliche Todesursache.

死因ノ決定

一死體ニ、多クノ人ニ依リテ數多ノ大損傷ガ附加セラレタル時、或ハ損傷以外ニ尙死因トナリ得ベキ病變等存シ、而モノノ何レモガ死因ノ如ク見エ、其中ヨリ眞ノ死因ヲ撰出スベキ必要アル時ハ、之ヲ死因ノ競合ト云フ。或ハ人ニヨリテ之ヲ死因ノ併存(片山)、死因ノ集合(平賀、田中)、死因ノ競存(高田) *Priorität des Todes*(Casper), *Priorität der Todesart*(Liman) *Concurrierende Todesursache* (Hofmann, Kratter) 等ノ文字ヲ用ヒ居レリ、予ハ大林ト共ニ、競存及集合ヲ併セ稱シテ、競合ト稱スルヲ適當ト考フ。一般ニ死體ニ於ケル唯一ノ死因ノ決定スラ、非常ニ困難ナルモノナルニ、一死體ニ外見上致死的ニ見ユル、二或ハ二以上ノ異常所見アリシ場合、其眞ノ死因ヲ決定スルコトハ、甚シク困難ヲ加フルモノナリ、而シテ其一般的方法トシテハ、出來得ル限リノ手段ヲ盡クシ、眞ノ死因トナスニハ、幾分ナリトモ、輕キ意味ヲ有スルモノヲ次第ニ除外シ、最後ニ殘レル唯一ノモノヲ眞ノ死因ト見做スニアリ。而シテ此ノ如ク死因ノ競合スル際、先ヅノ死前ノ症狀、傍況、性、年齢、體質並ニ平常ノ健康狀態等ヲ考慮シツ、發見サレタル各異常所見ヲ、個々ニ考究セザルベカラズ。

一般ニ云ハ、死因ノ競合ノ際ハ、時間的ニ最早ク、其程度最も強ク、而モ生命ニ對シ、最も重要ナル意義ヲ有スル臟器ヲ害シタルモノヲ、真ノ死因ト決定スベキモノナレドモ、之レトモ常ニ一概ニ論ジ去ルコト能ハズ。

若シ夫レ同一臟器ニ、略同時ニ、程度ヲ異ニスル、死因ノ如ク見ユル數多ノ障礙ヲ發見セシ場合アラバ、其内ヨリ真ノ死因ヲ撰出スルコトハ、比較的容易ナルモ、或ハ臟器ヲ異ニシ、更ニ附加サレタル時間ニ前後アル如キ際ニハ、單ニ障礙ノ程度ノミヲ以テ、真ノ死因ヲ決定スルコト能ハズ、理論的ニ云ハ、性質ヲ異ニシタルモノヲ、相互ニ比較スルコトナレバ、ソノ結論ヲ得ルコトハ、殆ンド不能ニシテ、非常ナル懸隔アル場合ニノミ、之ヲ決定スルコトヲ得ベシ。

而シテ死因ノ競合ノ種々ナル場合ヲ考フルニ、或ハ外見上何レモ死因トナリ得ルガ如キ、二或ハ二以上ノ障礙ガ相共同シテ真ノ死因トナルコトモアラン、或ハ其内ノ一ツハ二次的ニ真ノ死因ヲ補助スルニ過ギザルコトモアラン、或ハ相對立シテ真ノ死因ヲ形成スルコトモアラン、今之ヲ表示スレバ左ノ如シ。

死因ノ競合

- 死因ノ集合
 - 死因ノ共同 (二以上ノ致死の所見ガ相共同シテ一死因ヲナス場合)
 - 死因ノ連合 (二以上ノ致死の所見ガ二次的ニ相關シテ一死因ヲナス場合)
- 死因ノ競存 (二以上ノ致死の所見中ヨリ一ツノ真ノ死因ヲ撰出シ得ベキ場合)
- 死因ノ聯立 (二以上ノ致死の所見ガ同時ニ相對立シテ共ニ死因トナレル場合)

例ヘバ、數多ノ損傷ヨリセル、各略同程度ノ出血ノ合同ニヨリ、出血死ニ陥リシ如キハ、死因ノ共同ニシテ、頭腔内出血ニヨリ呼吸中樞ヲ麻痺セシメ、窒息急死セシ際ノ如キハ、死因ノ連合ト見做スベク、略同程度ノ損傷アルモ、ソノ内ノ一ツハ大ナル動脈ヲ傷ケ、出血甚シク、ソノ爲メ遂ニ出血死ニ陥リシナラバ、ソハ死因ノ競存ト云フベク、損傷モ亦絞頸モ、略同時ニ作用シ、急死ニ陥リシ際ノ如キハ、死因ノ聯立ト名ヅクベキナリ。

真ノ死因ヲ決定スルコトハ、刑法上ニハ殺人主犯ヲ決定スルコトニシテ、民法上ニハ損害賠償ノ容體ヲ定ムルコトナレバ、慎重ナル態度ヲ持シ、熟慮考究ノ上、之ヲ判定スベシ、若シソノ判定困難乃至不能ノ場合ニハ、率直ニ之ヲ記載シ、敢テ種々ナル憶測モシクハ想像ヲ附記シテ、司法官ヲ迷ハシムベカラズ。

二、自他傷及災厄傷並ニ自他殺ノ鑑別

Differentiation of injuries homicidal, suicidal or accidental.
Distinction des lésions d'homicide de suicide, ou accidentelles.
Die Unterscheidung ob die Verletzung durch Mord, Selbstmord oder Unfall verursacht sind.

自他傷ノ別

コハ一般ニ常識ニ訴ヘテ鑑別スベキモノニシテ、即チ現場、衣服ノ状態、創傷ノ有様、抵抗ノ痕跡ノ有無等ニ注意スベシ。例ヘバモシ抵抗ノ痕跡アラバ多クハ他傷ナリ。着衣亂レズ、胸押開キテノ負傷ナレバ、自傷ナルコト多シ。現場ニ他人ノ痕跡アレバ考慮ノ内ニ置クベク、例ヘバ自殺ヲ装ハシメタルモノ、右手ニ、尙右手ノ指痕附着スレバ、他傷ノ疑ヲ抱クガ如キコレナリ。

單ニ創傷ノ状態ノミニ就テ云フ時ハ自傷ハ、多ク自己ノ手工合ヨキ所ニ附加シアリ。即右利キノ人ガ頭部ヲ切ル時ハ、創傷ハ左上方ヨリ右下方ニ向ヒ居リ、且切傷ノ始部ニ多クノ小切痕アル等ノ如キ之レナリ。

茲ニ注意スベキハ精神異常者ニ在リテハ、時トシテ甚ダ奇抜ナル傷ノ付ケ方ヲナシ、自他傷ノ區別困難ナルコトアリ。他傷ハ遠慮會釋ナク、隨意ノ所ニ附シアリ、又創傷ノ形態モ、決シテ狐疑躊躇シタルノ痕ナキモノナリ。

一般ニ疑問死體ノ自他殺ヲ鑑別スルニハ、廣キ法醫學的乃至犯罪搜索學的知識ト、圓滿ナル常識ヲ必要トス、單ニ法醫學的智識ノミニテハ、世事ニ關スル複雑ナル狀況ヲ、到底十分ニ解決スルコト能ハズ、特ニ必要ナルハ、死者ノ生前ニ於ケル精神狀態ナリトス、即チ自殺者ノ多クハ、多少ナリトモ精神ニ異常アルモノニシテ、全ク精神健全ナルモノガ、自殺スルコトハ極メテ稀有ナルコトナリ。

次ニ他殺死體ニ種々ノ裝置ヲナシテ、自殺ヲ裝ハシムルコトアレバ、鑑定者ハ常ニ此方面ニモ注意セザルベカラズ、如何ニ落付キタル犯人ナリト雖、殺人ノ如キ大犯罪ヲナス際ニハ、大抵ハ狼狽シ居ルモノナレバ、如何ニ自殺シタルガ如ク裝置ストモ、之ヲ丁寧ニ檢スレバ、何處ニカソヲ自殺ト見做スベク、不合理ノ所アルモノナレバ、多クハソノ惡計ヲ觀破スルコトヲ得ルモノナリ。

尙動機ノ方面ニ眼ヲ注グバ、他殺ハ怨恨、強盜、或ハ姦淫等ノ目的ニ行ハル、カ、此動機明カナラザル時ハ、精神異常者ノ行爲ナリ、然ルニ自殺ハ多ク失望、厭世、困却等ヲ動機トスルモノナレバ、此點ニ注意セバ、自他殺ノ鑑別ニ大イニ資スル所アルベシ。

ホ、自殺ト損傷トノ關係

Injuries and suicide, Lesions et suicide, Beziehung zwischen Verletzung und Selbstmord.

輓近文明ノ躍進ト共ニ、生存競争激甚ナルニ從ヒ、自殺者次第ニ増加スルニ至リ、常ニ此點ニ注意セザ

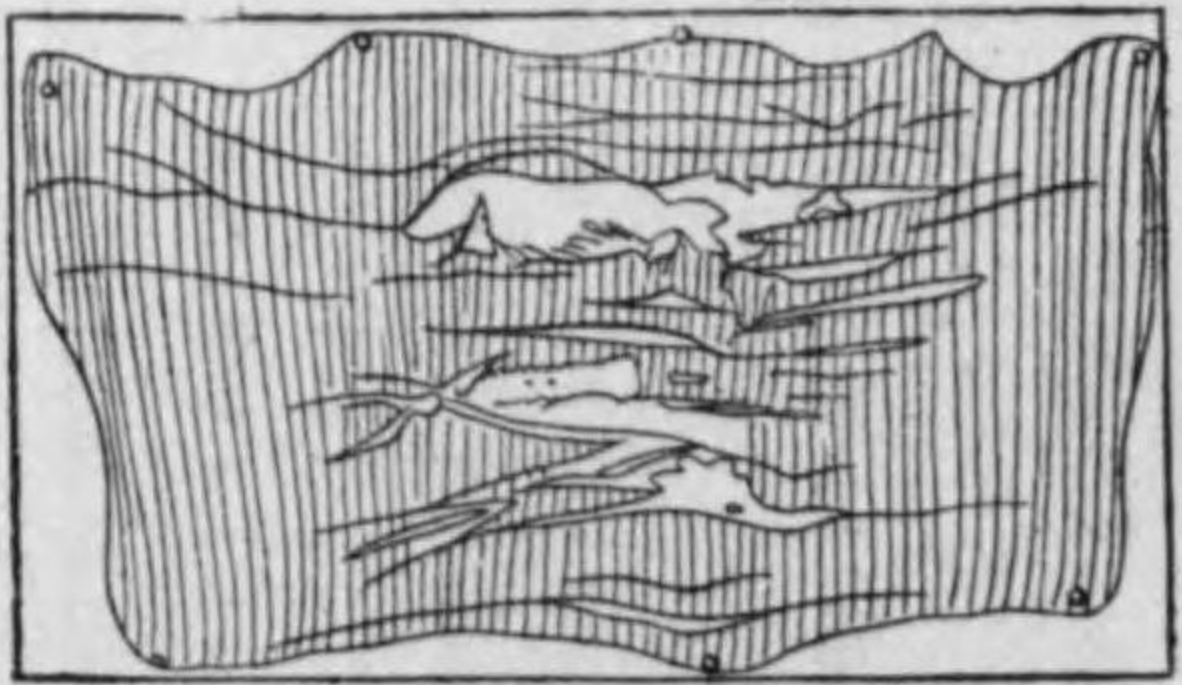
レバ、意外ノ失敗ヲ招クコトアラシ。

元來吾人々類ハ生物ノ常トシテ、其生命ニ非常ナル愛着ヲ有スルモノニシテ、健全ナル人ニテ自殺ヲ企ツルハ、之ニ甚大ナル理由ノ存スルモノナラズンバアラズ、例ヘバ、再起スベカラザル財産上、身體上乃至精神上ノ大打撃ニヨリテ、死ヲ決スルガ如キ之レナリ。然ルニ多數ノ自殺者ニ就テ見ルニ、シカク大ナル原因ナクシテ、或ハ憤激ノ餘リ、或ハ突發的衝動ニ死ヲ企ツルモノアリ、コハ多ク精神缺陷アルモノニ見ル處ニシテ、すてつねる氏が伯林しやりて病院ニ於ケル検査ニヨレバ、二百人ノ自殺企圖者ノ精神狀態ヲ檢シテ、僅々三十一人ノ精神的健全者ヲ見、かうぶ氏モ亦同様ノ研究ヲナシ、其百二十四人中、精神健全者三十一名ヲ發見シ、三田、ろつしゆ、あるれんどるふ氏等モ多數ノ自殺者剖檢所見ヨリ、略、同様ノ結論ニ到達セリ。

我帝國統計年鑑ニヨルニ、大正十四年我國ノ死亡總人員、一二一〇七〇六人中、自殺者一二二四九人ニシテ、即チ毎月約千人ノ自殺者ヲ出セリ、之ヲ大正四年乃至同十五年ニ於ケル既往十ヶ年ノ總死亡人員ニ對スル自殺者ノ比六・八乃至九・三%ニナルニ比スルモ、ソノ増加ノ著シキヲ見ル。

歐米ニ於テモ自殺者ノ漸増ハ、一八九三年けーにひすべるひニ於テ、總死亡人員ノ自殺者ニ對スル比六・二%ナリシモ、一九一

第九十五圖



自殺者ノ頭部皮膚切

三年ニハ一七・七%トナリシヲ見ルモ之ヲ知ルニ足ル、而シテ此増加ノ原因若クハ誘因ハ、多々アルベシト雖、一般ニ文化ノ増進ト相並行シ、社會ノ複雜化ト共ニ、生存競争激甚トナリ、生計困難、精神ノ過勞、疾病苦等相加ハルニヨル、而シテ生殖年期ノ男女、孤獨者等ニ自殺者多キモ、亦之ヲ證スルモノナリト云フベシ。

斯ル有様ナルヲ以テ自殺ニモ一種ノ傳染性流行アリテ、或美人ガ猫イラサヲ攝取シテ、自殺セリトノ報道アレバ、忽チニシテ猫イラサ自殺ヲ企ツルモノ増加シ、一年少哲學者華嚴ノ瀧ニ投身自殺セリト云ヘバ、之ニ倣ヒ此所ニテ自殺スルモノ多クナリ、鐵條網ノ必要ヲ生ジ來ルガ如キ之レナリ。

又自殺ノ年齢、性、時期及方法ニモ面白キ關係アリ、夏ニハ投水自殺スルモノ多ク、婦人ハ毒藥ニテ自殺シ、男子ハ縊死スルコト多シ、是等ノ關係ハ、第二十五表ヲ見ナバ自ラ明瞭ナラム。

此ノ如ク自殺ハ甚ダ多キモノニシテ、切創ニ依リ自殺スル場合ニハ頸部ヲ切り、切腹ヲナシ、泰西ニテハ關節部ヲ切りテ、出血死ニ至ルコトアリト云フ。死者ノソノ他ノ部ニ在ル切創ハ、先ヅ他傷ノ疑ヒヲ以テ検査スベシ、割創ヲ以テ自殺スルコトハ甚ダ少シ。但シ精神病者ハ意外ノ割創ニテ自殺スルコトアリ、注意スベキモノトス。刺創ニ依リテ自殺スルコトハ往々遭遇スル所ニシテ、即頸部、心臓部、腹部ヲツキテ死ニ至ルガ如キ之レナリ、ソノ他ノ部ニアル刺創ハ先ヅ疑ノ眼ヲ以テ検査スベシ。

銃創ニ依リテ自殺スルコトハ往々アレドモ、ソガ自爲ナルカ他爲ナルカヲ鑑別スルコト甚ダ困難ニシテ自殺ノ時ハ多ク頭部、顔面、心臓部等ヲ近距離ニテ射撃スルヲ常トス。

高所ヨリノ墜落、或ハ縊死等ガ自爲ナルヤ否ヤハ、醫學上ニハ之ヲ鑑別スルコトヲ得ザルモノニシテ、

自殺ト創傷

第二十五表 (乙)

自殺ノ方法	實數		百分率	
	男	女	男	女
銃創	一八八	一五	二〇三	四三
窒息死	一六七	四一	二〇八	三三
中毒	二八	四二	七〇	二七
溺死	二八	四一	六九	二七
切創	一一	三	一四	三
墜落死	九	八	一七	二
縊死	五	一	五	一
諸法復合	五	二	七	一
其他ノ方法	二	二	一	一
計	四四三	一五二	五九五	一〇〇

(横太利 三田氏)

第二十五表 (甲)

自殺年齢	男%		女%		平均%
	男	女	男	女	
十五—二十歳	九	十三	—	—	十
二十一—三十歳	廿二	廿九	—	—	廿四
三十一—四十歳	十七	十七	—	—	十七
四十一—五十歳	十七	十七	—	—	十七
五十一—六十歳	十七	七	—	—	十四
六十一—七十歳	九	五	—	—	八
七十一—八十歳	三	五	—	—	四
八十歳以上	—	—	—	—	—

第二十五表 (丙) 本邦ニ於ケル自殺ノ統計

月	縊レテ		入水シテ		刃物ニテ		銃砲ニテ		毒藥ニテ		其他ノ方		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
一月	三、四九六	一、三三八	八八	一、〇〇	三九	三九	一三〇	一四七	四	三	四〇〇	一七	五、三三四
二月	三、〇四四	一、二八	八四	一、二八	三六	三六	一〇九	一五	一〇	一〇	三三	一七	四、九八

計	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月
四七・五二五	三・二五五	三・一八五	三・六四四	四・〇五七	四・六五一	四・八三一	四・四〇三	四・七三三	四・四三三	三・七六六
三二・〇四三	一・五七四	一・四〇三	一・五二四	一・八四四	二・一九一	二・二五五	二・〇〇六	二・二五三	一・九七九	一・七三三
一五・九九八	八六二	八八三	一・一三七	一・三六〇	一・六六七	一・九一九	一・六六六	一・七五五	四・四一四	一・二五五
三・五九六	一・〇二六	一・三二九	一・四四九	一・九二五	二・三九九	二・五八二	二・三三三	二・三六九	二・〇〇六	一・六六二
三・六四四	三三九	三三七	三三三	三二八	二八五	三三六	三二六	三三七	三〇六	三六六
一・六八二	二七	一三	二五	一九	二五	一五	二二	一七	二〇	一七
一・六八四	三三	二五	九〇	九三	一三	一〇	二七	一八	一七	一七
一七三	七	三	四	九	六	三	三	二	二	二
一・二九九	一一三	九九	九七	一〇二	一一三	一二六	一二九	一五七	二七	一一三
六五四	四三	五	五	四	五七	七〇	七〇	八四	六	四七
五・四四三	三六	三六	三六	四三	五九	五二	四六	五〇	四三	四七
二・二二七	一八〇	一五三	一五九	一七九	一九二	二二五	一八三	二〇九	一八	一六三
七・三三三	四・九六六	四・五三九	五・五九八	六・三三二	七・六六六	七・九一〇	七・二一七	七・六六一	六・九七九	六・〇〇九
四七・三〇六	二・九四六	二・六六三	三・四四三	四・一三〇	四・九九五	五・三〇〇	四・六六八	五・一三三	四・五〇六	三・八一七

(英文職氏著、實際統計學ニ依ル)

多クハ周圍ノ事情ニ依リテ自ラ明カトナルモノナリ。

茲ニ注意スベキハ、他殺ノ死體ヲシテ自殺ヲ裝ハシメントシ、種々ノ方法ヲ取ルコトアリ。例ヘバ絞殺死體ヲ切腹シタルカノ如ク裝置スルガ如キ之レナリ。是等ノ場合常識及醫學的智識ヲ以テ、十分ニ検査スル時ハ、必ズ何處ニカ不合理ナル點ヲ發見シテ、ソノ惡計ヲ觀破スルコトヲ得。例ヘバ前例ニ於テモ切腹シタルガ如ク見ユル腹部ノ傷ヲ檢スレバ、所謂生活反應ナク、全身剖檢ヲナスニ於テハ、明ニ頸部ニ絞頸ノ痕跡ヲ發見シ、且全身ニハ窒息死ノ所見アリ、出血死ノ所見ナキヲ以テ此惡計ヲ觀破シ得ルガ如シ。

巳、瘻痕 検査

Examination of scars, Examen des cicatrices, Die Beurteilung von Narben.

瘻痕ヲ検査スル場合、先ヅ第一ニ問題トナルハ、該瘻痕ハ如何ナル創傷ヨリ由來セシモノナルカヲ知ルニアリ。一般ニ切創ハ線狀ノ瘻痕ヲ殘シ、下層ト癒着スルコトナシ、モシ該傷ガ化膿後治療セシモノナレバ、新瘻痕ハ多クハ廣ク諸所ニ豐隆、或ハ陷凹シタル部アリ、古來ノ經驗ニヨレバ、瘻痕ノ收縮度ハ凡ソ原傷ノ大サノ半バニ達スト云フ、小ナル表面的ノ小切創ハ、殆ンド見得ベカラザル瘻痕ヲ殘スモノナリ、之ヲ見易クセン爲メニハ、ソノ部ヲ手掌ニテ輕打スルカ、或ハ輕ク摩擦スル時ハ皮膚ハ引赤シ、瘻痕ハ白ク見エ來ルコトアリ、又紫外線ニテ照射セバ、瘻痕ハ皮膚ノ他ノ部ト明ニ鑑別スルコトヲ得。

輕キ挫傷及裂傷ヨリ生ジタル瘻痕ハ、多クハ直線的ナラズト云ヘドモ、繊細ナル瘻痕ヲ殘シ大ナル挫傷、咬傷或ハ有齒ノ兇器ニヨリ生ジタル創傷ハ、咬傷ヲ明ニ認メ得ル瘻痕ヲ殘スコト多シ。

有尖彈丸ヨリ成ル銃創ハ小ナル線狀瘻痕ヲ殘シ、ソノ他ノ彈丸ヨリナルモノハ、最初生ジタル實質缺損ニ相當シタル瘻痕ヲ生ズ、射入口ニハ往々火藥粉治入シ居レバ、之ヲ鑑別スルコト容易ナルコトアリ。散彈ヨリ生ジタル創傷ハ、數多ノ小ナル瘻痕ヲ殘ス。

火傷瘻痕ハ最モ特徴ヲ有スルモノニシテ、放線狀トナリ所々豐隆シ、硬ニシテ多クハ淡赤色ヲ呈ス、湯潑傷ニ於テハ、往々液體ノ流下シタル方向ヲ示スコトアリ。

微毒或ハ皮膚結核ヨリ生ジタル瘻痕ハ、多ク鼠蹊部、外陰部、下腿等特有ナル部位ニ在リ、潰瘍ノ存在シタルコトヲ示スニ足ル瘻痕ヲ生ズ。

瘻痕検査

火傷瘻痕

